

# 夜明けと晴天

まみむ衛門

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

二〇一八年六月。神奈川某所の私立高校に通っている二年生・成宮咲来なりみやさくらは、珍しい転校生だが、転校してきてから一年弱経ち、新たな生活になじんでいた。

そんな暑いある日、特殊な事情を持つ彼女は、放課後の校内パトロールを終えた直後、化け物に今にも襲われそうな、一人の男性を見つけた。

呪術師である七海建人は、任務のために神奈川某所の私立高校を訪れていた。そこで呪霊が襲おうとしてきたので、とりあえず祓おうとする。その瞬間、後ろから少女の叫び声が聞こえてくると同時に、目の前の呪霊が爆発して祓われた。

彼が正体を問いかけると、少女は言いにくそうに、「『元』呪術師」だと答えた。これは成宮咲来と七海建人の、主人公・虎杖悠二たちから離れた物語。

※一部残酷な描写がございますので、ご注意ください

※原作のネタバレを大きく含みますのでご了承ください

# 目次

1 話・邂逅	1	設定・解説・裏話等	447
2 話・過去	24	じゅじゅさんぽ・もしまた日が昇ったら	467
3 話・迷いと登山	47	1	
4 話・想いと爆散	80	じゅじゅさんぽ・もしまた日が昇ったら	490
5 話・真夏を迎えた中	115	2	
6 話・トンネルを抜けた先	147	じゅじゅさんぽ・もしまた日が昇ったら	527
7 話・元呪術師と、元・元呪術師	209	3	
8 話・独りの死闘	247	じゅじゅさんぽ・もしまた日が昇ったら	569
9 話・二人の共闘	265	4	
10 話・夜明けと晴天	323		
最終話・後悔	402		

## 1話・邂逅

二〇一八年六月某日、神奈川県某所。

暑さが増してくる中、ややお洒落ながらも派手ではない夏服を着た高校二年生の少女が、彼女が通う高校へと続く長い坂道を登っていた。

黒い髪は肩甲骨のあたりまで伸びていて、校則に合わせて二つ結びのおさげ縛りで、前髪はやや目線が隠れがちな長さだ。落ち着いたデザインの眼鏡をかけていて、大人しい印象を受ける。

しかしながら、彼女が急勾配の長い坂道を登る足取りは、周囲に比べて軽かった。汗も季節相応にかいてはいるものの周囲の生徒に比べたら少なく、顔にも疲労の色は見られず平然としている。大人しそうな見た目に反して、この坂道を苦にしている様子は見られない。

「おはよー、ふう、疲れた」

そうして、周囲の生徒に比べてすらすらと坂道を登り切った彼女は、そこにあるいたって普通の学校の教室に入る。おだやかで控えめながらも、不思議と聞こえやすい声でのあいさつは、まだ登校者が少ない教室に、やや目立つ形で響いた。

「なーにが疲れたなの、成宮さん……平然としてるくせに」

「いや、この暑さであの坂は流石にキツイって」

席に着いた彼女——成宮<sup>なりみや</sup>咲来<sup>さくら</sup>に、クラスメイトの女子が声をかける。実際、咲来としてはそれなりに疲れているつもりだが、大して汗もかいておらず、息も切れていないのは、他の生徒から見たら明らかにおかしかった。大きな声で「あー！」と叫びながら咲来に遅れてたった今教室に入ってきた体力自慢の男子の顔色が疲労困憊で、汗だくなのを見たら、咲来の平然とした様子は、浮いているように見える。

カバンから勉強道具を取り出し机にしまいながら、全開だというのに風が全く入ってこない窓の外をぼんやりと眺める。

(……もうすぐ一年かあ、だいぶ慣れてきたかなあ)

季節のわりに、空には雲が少ない。もう少し空を覆ってくれればいくらか日差しを遮ってくれたはずだが、あいにくながらの晴天だ。

義務教育の小学校・中学校に比べて、入学に試験が必要となる高校において、転校生は少ない。ましてやこの高校は、地域では少しだけ有名な、私立の進学校だ。とびぬけて頭が良いわけではないが、入学試験の難度も倍率もそれなりにある。転校のハードルは高いはずだが——咲来は、去年の九月に、ここに転校してきた、珍しい転校生だった。

「——っ！」

そして突然、右膝と左肘に、鈍い痛みが走る。彼女の言うような急勾配の坂道が原因ではない。これといって怪我をしているわけでも疲れているわけでもなく、その痛みは、幻覚に近いものだ。

「ん？ どうしたの？」

「え、あ、いや、なんでもないよ、ごめんね？」

声をかけられ、曖昧に笑いながら誤魔化す。口では何でもないと言いつつ、幻みたいなものだというのに、痛みはだんだんと現実感を伴って激しくなってくる。咲来は周囲に気づかれないよう、深呼吸をしてなんとか心を落ち着かせ、その痛みをこらえた。

「なーなー成宮あ、最近すげえ体が重いんだけどよお、治してくれねえか？」

「わ、私はお医者さんじゃないよ？」

四コマ分の授業が終わった休み時間。咲来に少し遅れて登校してきた例の男子が、軽い調子ながらも少し深刻そうに話しかけてくる。咲来は急に声をかけられたことにびっくりしながらも、「お決まり」となった返事をした。

「えー、でも、浅井は成宮に相談したら嘘みたいになつたって言ってたぜ？」

「それは偶然でしょ？」

「あー、私も成宮さんに相談したら、肩こりが治ったんだよね！」

「それも単に寝不足が原因だったじゃん……」



別のクラスメイトの女子も話に参加してくる。咲来は少し慌てながらも、ばれないようにしながら、さりげなく男子の身体を「凝視」する。そこには、なんらかの異常が見られなかった。

こうだと、咲来に出来ることは、「先ほどの女子の相談に乗った時と違って」何も無い。適当に、長風呂や整体通いを勧め、話を終わらせる。

もとより、控え目で弱気な彼女は、目立つことは苦手だ。ちよつとした善意でやったことが、ずいぶんと広まってしまった。

——それでも、「もうやめよう」、とは、一切思わなかった。



放課後。定期テストが迫る「テスト期間」と呼ばれる時期なので、部活動やその他放課後活動は原則禁止され、生徒たちはこれ幸いと、ホームルームが終わると我先にと教室から出ていく。

この学校は住宅地からだいぶ離れた山の上にあるため、登校時は皆等しくそれなりの

距離を移動することになり、最後には急勾配かつ長い坂道が待ち構えているため、生徒たちの足取りは重い。しかし、帰り道は下り坂のため、大した負担にはならず、帰る生徒の足取りは軽いのだ。その差は、「登校」「下校」の差だけではなく、この学校の立地も大きく関係していた。

そんな中、咲来は不自然にならない程度にスローペースで帰りの準備をして、周囲からあえて遅れる。そうして人気があらかたなくなつたところで向かったのは、下校のための校門ではなかつた。

「なんか最近、多くなつた気がするなあ……」

ぼけーつと気の抜けた声で独り言をこぼしながら向かつたのは、校舎の裏手にある、持て余して空き地となつているスペースだ。立地上地価が安く、調子に乗つて無駄に広い敷地を確保した結果、こうして余つてしまつたらしい。緑化という名目で木が生えっぱなしであり、高校生が遊ぶにはあまりにも不自由なため、誰も寄り付かない。体育倉庫に入りきらなかつた、多少野晒しでも問題ない道具が置かれているのと、あとは百葉箱や理科で使う花壇がある程度である。

そんな林の中に、彼女は制服とパンプスのまま、迷いのない足取りで入っていく。外側は柵で区切られているので、迷う心配はない。

学校と言う場の特性、さらには敷地内に人目につかない林がある状態。こうした立地

上、ここには、他の場所に比べて、「あるもの」が現れやすい。彼女はそれを探す目的で、たまにここへと足を運んでいて、最近はやや「あるもの」が増えてきた気がするので、日課にすらなっている。

ふらふらと十数分、所詮校内の一角にある林のため、すぐに探索し終わる。

今日はいなかったみたいだ。

咲来はそう安心しながら、戻ってすぐ家に帰ろうとする。それなりの学校なだけあって、定期テストの競争は激しいし、四か月分ぐらいの「遅れ」も取り戻さなければならぬ。

（今日やるお勉強は、えーつと、とりあえず数学Bと……）

ぼんやりと考え事をしながら歩いているうちに、林を抜けて——快晴の昼間ということもあって、一気に視界が開ける。

そして、知らない男の目の前に、「化け物」がいた。

金髪で白いスーツを着た男。見たことないが、スーツを着て学校にいるということには教師だろう。金髪で身長が高く筋肉質に見えることから、外国人のALTかもしれない。顔は後ろ姿なので分からないが。

問題は、その少し向こう、男の正面、数歩の距離にいる、「化け物」。

縦に2メートルはあろうかと言う巨体に、同じく横幅も大きい巨体。ぶよぶよとうごめいていて、紫とも濃い青とも言い難い本能的に不気味さを覚える色だ。そしてそこか

ら、血色の悪い手足がいくつも生えている。頭と見られる部分には、子供程度なら丸呑みできそうな大きな口が二つあり、その歯は肉食動物のように鋭い。

そしてその化け物は、ぼんやりと立っている男をその視線に捉えて——片方の口の端を吊り上げて、ニイ、と笑いながら、もう一つの口を開けて、男に飛びかかった。

「危ない!!!」



白い肌に、整った金髪。その男はクォーターであり、特にデンマーク人である祖父の特徴を受け継いでいた。

「ここが最後の場所ですか」

大人数の生徒の波に逆らって、初夏の長く険しい坂を「汗一つなく」登り切ったその男は、目的地である校舎を見上げる。

その姿は——あまりにも「浮いていた」。

クォーターであるがゆえの見た目の問題だけではない。

その男は長身で体格が良く、また、妙なサングラスと、派手なネクタイとシャツに白いスーツを着ていた。

金髪サングラスで派手なスーツを着た体格の良い男——はつきり言って、「カタギ」には見えない。控え目に言ってホスト、ありていに言ってしまうばヤクザだ。

そんな男が、学校の正面で、校舎を見上げている。

「そこあなた、何か御用ですか？」

校門から出る、少し遅れた生徒たちが、彼を避けるようにおびえながら去っていく。まあまああの進学校だからかそうじて大人しそうであり、そんな彼らに、この男は刺激が



強い。

それを見とがめたのが、門番の役割も果たしている、これまた男に負けない体格の体育教師だ。

「ああ、失礼しました。私、先日許可を取った者です」

男の返事は、見た目に似合わず、礼儀正しい。しかしどこか平坦で棒読みであり、敬語は上つ面だけで、へりくだっているようには聞こえなかった。

男が懐から取り出したのは、「入校許可書」と書かれたカードだ。それを見て、体育教師は少しだけ驚いて目を見開く。

彼が普段見る、保護者向けの、色紙に大量印刷してハンコを適当に押しただけのものではない。自治体の教育委員会の長、学園長、そして学校を運営するグループの会長、と、お偉方のハンコが勢ぞろいしている。カードのデザインや材質も豪華で、どこか格調高い。

「これは失礼いたしました。して、どのような御用で？」

「学園長との相談に参りました。設備についてのお話です」

なるほど、そういうことか。体育教師は納得して、男を招き入れた。その男も、平然と中に入り、校門の正面にある校舎入口へと入っていく。

そうして校舎に入り、体育教師からの死角になると——男は、学園長室へと向かうこ

となく、裏口からまた「屋外」へと出る。

そうして向かうのが、およそ「設備の相談」をしにきた外部の人間が一人でいくはずがない、校舎の裏手。その歩みは、初めてくる場所のはずなのに、迷いが無い。

ついたのは、目の前には小さな林が広がり、周囲に花壇や百葉箱がある空きスペースだ。

その光景をぼんやりと眺めたのち——男は、ふう、と、疲れたような、いや、面倒なことになったとでもいうような、重いため息をつき——振り返る。

そこには、化け物がいた。

「やはり、学校は多いですね」

サングラスをかけているから、この呪霊は、自分が「見えている」ことが、視線から分からない。すっかり油断しきって、喜悦の笑みを浮かべなら、その大口を開けた。

さっさと対処するか。

男が腰から何かを取り出そうとしたとき――

「危ない!!!」

——目の前の化け物が、「爆ぜた」。

ポツ！ と鈍い爆発音とともに、化け物の分厚い肉体がはじけ飛ぶ。どうやら化け物の背中側が爆発したようで、化け物の体が盾になって、男にさほどの爆風はない。

直後、次々と化け物の体の各所が爆ぜていく。その急なダメージに化け物は身もだえして抵抗するが——そのまま瞬間に、消しとばされてしまった。

「大丈夫ですか!？」

大人しそうな女の子が、控えめながらも焦ったような声で話しかけてきながら、背後から駆け寄ってくる。

制服からして、この学校の生徒だ。なぜこの時間にこんなところにいるかは不明だが、男にとっては、それよりも不可解なことがあった。

「今のは？」

「え!? あ、えーと、は、蜂が！ 大きな蜂がすごい勢いでそちらに飛んでいったので！」

お怪我とかありませんか？」

問いかけると、慌てたように声を出し、目を逸らしながら、理由を説明する。嘘をついているのは、この快晴の青空よりも明らかだ。

「ええ、平気です」

「よかったあ」

とりあえず心配されているらしいので、大丈夫であることを告げると、その大人しそうな少女は、気の抜けた笑みを浮かべて、ため息をついた。

「それよりも、今のは？」

「えっと、だから、すごく大きな蜂が——」

「それはもう結構です、今のは何をしたんですか？」

「——飛んできて……え？」

言い訳を遮り、問いたです。

今の化け物が爆ぜたのは、明らかに、目の前の人畜無害そうで優しそうな少女によるものだ。

数秒の、沈黙。いくらなんでも気が早すぎるセミの声と、夕方が近づいてきたからかようやく吹き始めた風の音がよく聞こえるが、二人とも、そちらに耳を傾けてはいなかった。

「えーっと、その……何をみました？」

震える声で、口を曲げながら、誤魔化すように笑いながら、少女は問い返す。

「『呪霊』が内側から爆発しました」

「じゅ!?!」

少女の声が裏返り、その顔が驚きに満ちる。

「私は七海建人、呪術師です」



「あー、な、なるほどお」

自分からこう名乗った方が話は早いだろう。男——七海は、自分から自己紹介する。それに対して少女は、色々想うところがある、複雑な顔で、中身のない返事をした。

「それで、あなたは？」

そして、改めて問いかける。

この少女にも、「見えている」。そして、少女は、あの呪霊を「祓った」。

これは、「ちよつとした」では済まない事態だ。七海は判断し、場合によっては、対応を考える必要がある。

「そ、そのう……」

気弱で大人しい性格なのだろう。色々とハプニングが過ぎると、派手なスーツを着た金髪サングラスの体格が良い知らない男に問い詰められているという状況が、少女を委縮させていた。そして、そんな「普通の」機微に対し、七海は、「普通に比べたら」、やや鈍感なきらいがあつて、それには気づかない。

ただ仮に自覚があっても、彼女の答えが遅いのは、彼の見た目以外にあることが容易に分かる。

委縮して怯えている以外にも、単純に、答えにくそうだ。

「成宮咲来、です……その、『今は』、ここの生徒で……元、高専生、です」

これが、七海健人と、成宮咲来の、出会いだった。

## 2話・過去

物心ついた時から、「変なもの」が見えていた。

それらに対して、酷く恐怖していたのを覚えている。

なにせ「それら」は、人の負の感情から自然と生まれた、悪意の塊。

つまり、人間が、本能的に嫌悪感を覚える存在に他ならなかった。

赤ちゃんの頃は、よく泣いていたらしい。今思うと、「そういうの」がそのころから見えていたのだろう。

——転換点は、小学校低学年のころ。

「お化け」とは、本能で目を合わせないようにしていたが、ふとした時に目が合つて、相手に「見えている」と悟られてしまった。

小さい女の子は格好の餌だ。嬉々として襲われた。

当然、何もできるはずがない。頭を抱えてうずくまる事しかできなかった。

もう終わり、そう思った時――

――「お化け」が、爆発して、死んだ。

鈍く弾ける音が、何の音なのか、最初は分からなかった。

ただ音にびつくりして顔を上げると、爆発してより醜くなった「お化け」が悶絶しながら、消えていくありさまだった。

「お化け」がいると意識すると、それらが爆発し、死んでいくようになったのは、それからだった。

訳が分からなかったが、いくつかわかることもある。

「お化け」は、自分にしか見えない。

その「お化け」は、悪いことをたくさんする。

そして——「お化け」を倒す力が、自分にある。

幼い心で理解した咲来は——そこから、「人助け」を始めた。

「お化け」を見つけたら、爆発させる。怖いこともたくさんあったが、自分がそうしたおかげで、困っていた人たちが喜んでいるのを何回か見た。まさか咲来が解決したなんて思うはずもないため、感謝されることこそなかったが、彼女にとっては、それで十分だった。

そんな日々——といっても遭遇することは稀だったが——が続いて成長し、中学二年生。二回目の転換が、訪れた。

「逃げていったのは、このあたりかな……」

中学二年生の冬場。地元・広島某所のいたって普通の公立高校に志望校を絞り始めたころだ。

季節柄元気がなさそうな木が立ち並ぶ山の中を、学校の帰り道で制服姿だというのに、長めの髪を縛った二つ結びのおさげを揺らしながら、スイスイと進んでいた。

そんな彼女が、自慢の視力で見上げながら登る道は、決して整っていない。

舗装されていないのももちろんの事、泥がむき出しな上に前日の小雨のせいで少しぬかるんでおり、枝や石などの障害物がそこかしこにあり、でこぼこしている。人が通ることが想定されているため獣道というほどではないが、現代の女子中学生には酷な道だ。

それでも彼女は、少し登りにくいと思う程度で、順調に登っていく。昔から、体育では男子すらも抜かして圧倒的に一番だった。運動は好きではないし目立つのも嫌なので習い事や運動部所属などはしていないが、彼女が気付かないところで、ひそかに話題に出ることが多かった。

そうして登っているうちに、ぬかるんだ山道が、急に開けた。

「……そ、それっぽい、かな？」

目の前に急に現れたのは、石段だった。その途中には鳥居があり、さらにその向こうには、廃屋同然のこぢんまりとした建物がある。恐らく神社だろうが、すっかり人が訪れず、荒れ果てている。



こんなところが地元にあるなんて知らなかった。「お化け」が逃げ込むにはぴったリだ。

とはいえ、こんなところに来るのは初めてだ。ましてや、気弱な女子中学生が、しかも一人で。

思わずしり込みする。しばしの逡巡。すると、口をきゅつと結び、意を決して、彼女は石段を登り始めた。

逃げてきた「お化け」は、特に質が悪かった。彼女の目の前で運転中のトラック運転手に憑りつこうとしていたのだ。恐らく、暴走させて事故を起こすつもりだったのだろう。

幸い、憑りつく直前に、「爆発」させた。だがそれでは倒しきれず、そのままここまで逃げられてしまったのだ。

これまでで分かったことがある。

まず「お化け」は、全部、相当悪いことをする。嫌がらせをする、困らせる、程度ならまだ良い。ある程度強い「お化け」は人を食べようとする。そして今回ののは、悪いことに、食事ではなく、単なる「遊び」で、人を殺そうとしていた。

(私がやらなきゃ……)

自分だけが見えて、自分だけが倒せる。

その責任感が、彼女の背中を押していた。

急な石段を、一段一段登っていく。その足取りは、足元の悪い山道を登ってきたとは思えないほどにしつかりとしていた。

そうして、鳥居をくぐった瞬間——空気が、変わった。

天気が変わりやすい山中で、冬だから。そんな理由が通用しない。

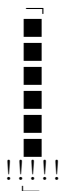
激しい寒気がする。気温とかではない。気持ちの問題でもない。

明らかに、鳥居をくぐった瞬間に——まるで「空間が変わった」ように、怖気がするようになった。

戻ろうか。

一瞬よぎるが、それでも責任感が、彼女の歩みを進める。

そうして続きの石段を登り切り、ポロポロの小さな神社と、相對する。



その賽銭箱の残骸の上に、先ほど自分から逃げた「お化け」が、仁王立ちしていた。

あらん限りの敵意をこちらに向けて、およそ言葉で表せない声で、叫んでいる。

きつと、罵詈雑言の限りを叫んでいるに違いない。自分を爆発させただけでなく、ナワバリまで追いかけて踏み入ってきたのだから。

その迫力に、咲来は三度目のしり込みをする。

それでも、震える右手を左手で抑えて無理やり引つ張り上げ、右人差し指で、賽銭箱の上から動かない「お化け」を、指さす。

瞬間——「お化け」が、爆発した。

そして、コントロールを失敗したのだろうか、その爆風が、賽銭箱どころか、ボロボロの神社すらも、まるでトランプタワーを風が壊すように、たやすく吹っ飛ばしてしまった。

「……………ど、どうしよう……………」

たつぷり数十秒、呆けてしまう。

思わずしりもちをついてしまった。壊れるさまを、見上げることしかできなかつた。「お化け」はどうやら物体ではないらしい。壁をすり抜けることができるなど、物理的障壁の干渉を受けない。だが、ある程度、影響することがある。「お化け」が暴れたら、周囲のものが壊れたりすることもあるのだ。

だからこそ、爆発には気を遣っていたのだが——今回は精神的動揺でコントロールがきかなかつただけでなく、神社そのものがあまりにもボロボロだったのもあって、大変なことになってしまった。

どうしよう。

彼女の脳裏によぎるのは、警察に捕まりニュースになる自分の姿だ。中学生が山の中の神社に勝手に入り大破壊。ヤンチャな不良集団のやりそうなことを、自分一人でやってしまったのだ。

そう、「そんなこと」を気にする余裕が、いつの間にかできていた。

「お化け」が死んだことで、空間が元通りになった。異常な怖気はなくなり、代わりに「やってしまった、どうしよう」という一般的な恐怖による怖気に代わっている。

「お」

「ひいひい!!!! ごめんなさい!!!! ごめんなさい!!!!」

急に後ろから、険が強い低めの女性の声をかけられた。

反射的に悲鳴を上げ、謝罪する。「わざとじゃないんです!」という言い訳が口をついででなかったあたりに、咲来の人良さが現れている。

平身低頭。しりもちから、土下座に近い形で、声がしたほうに頭を下げる。

「とりあえず、顔を上げろ」

まだ謝罪の意思が心からあるが、そういわれては仕方ない。逆らうわけにはいかない。い。

いったいこれからどうなっちゃうんだろう。そんな不安から、恐る恐る、ゆつくりと、顔を上げて——声をかけてきた女性を見上げた。

(わ、み、巫女さん!?)

そこにいたのは、テレビや漫画でしか見たことない、これぞと言わんばかりの「巫女」だった。

長い黒髪を白いリボンでポニーテールにまとめ、巫女服を着ている。

(き、綺麗……)

そして思わず、見惚れてしまった。

身長はすらりと高く、長い黒髪も艶やかだ。巫女服が似合っていて、その立ち姿は優



雅。和風美人のお手本と言ったいで立ちだが、大きな純白のリボンがあか抜けたおしゃれさも演出している。その顔は凜々しいながらも可愛らしさと綺麗さを両立させている。顔についた大きな痛ましい傷跡が目立つが、それが気にならないほどだった。

「あれはお前がやったのか？」

「は、はい！ ごめんなさい!!! すいません!!!」

そんな夢のような一瞬も、この問いかけで砕け散る。すぐさま認め、また頭を下げた。あれ、とは、この神社をただの木くずに変えてしまったことだろう。この状況を見れば、真実の通り、自分がやったのは明らかだった。

格好からして、この神社の巫女さんなのかもしれない。後ろから——つまり石段を登ってきたということは、巻き込まれていなかったのは幸いだ。

すつごく怒られる。お父さんとお母さんにも連絡がいく。ニュースに取り上げられ、パトカーで運ばれる姿がたくさんのカメラに映され、学校や友達には連日熱狂したマスコミが——テレビの見過ぎな感がある嫌な想像が、次々と思いつかんでくる。

「何を謝ってるのよ？」

そんな咄来にとつて、巫女の女性が発した問いかけは、予想外だった。

「はい？ えーと、その……あの、神社を壊しちやったこと……ごめんなさい……」

「あ、あー、なるほど、そういうことね」

巫女の女性は、廃材と化した神社を見て、納得がいったような声を出す。これのせいで、咲来には訳が分からなくなった。

「そっちはこの際どうでもいいわ。どうせポロ神社だし、ご神体も運ばれてるでしょ」「ど、どう?」

「どうでもいいって?」の言葉は、動揺のせいで言いきれなかった。状況的にこの神社の巫女さんであることは間違いないはず。それなのに、なんでこの神社を壊されて、「どうでもいい」で済ませるのか。

「そっちじゃなくて、あの『呪霊』のほうよー」

「じゅ、じゅれい?」れい、霊……あの、『お化け』のことですか?」

「え、知らないのか……えーっと、そう、そのお化けよ」

「それも、えっと、はい……」

「大人しそうな子なのにエグい術式ね……」

じゅつしき、とは? と聴くことはできなかった。「どうでもいい」とは言われたが、神社を壊した罪の意識と、予想される未来で、咲来の思考は乱れに乱れていたのだ。

「ちよつとそこで待ってなさい」

「は、はい!」

言われたことには素直に従う。地面に正座して背筋をピンと伸ばしていると、巫女の

女性は、袂からスマートホン——服装にミスマッチだ——を取り出し、電話をかけ始めた。

「ええ、そう、追いかけていたら、一般人の女の子が」

自分のことを話しているのだろう。多分、通話相手は警察だ。

「で、その子がね、呪霊を倒したのよ。多分術式、よくわからないけど、爆発で」

いや、その話は警察にしないでだろう。まず神社を壊した話をするはずだ。

となると——誰に電話をかけている？

そう考えているうちに話が終わったのか、巫女の女性は、通話を切って、こっちに向き直った。

「あなた、名前は？」

「な、成宮咲来です……」

「歳は？」

「えっと、14……中学二年生です……」

「そう……」

聞くだけ聞いて、女性はスマートホンをまた操作し始める。何か、どこかにメッセージを送っているようだ。

「そ、そのう……巫女のお姉さんも、『見える』んですか？」

「え？ まあね」

巫女さんとか神主さんって、本物だったんだ。今度から「お化け」を見たら相談しよう。

そんな抜けた感想が、心によぎる。

「ねえ貴方、呪術師？」

「え？」

「まあ、そういう反応になるわよね」

じゅじゅつし……呪術師？

「えーつと、ゲームとかの呪術師ですか？ それとも、アフリカの部族のお祭りやってるあれみたいな……」

「そうと言えばそうだけど、とりあえず知らないし貴方が呪術師じゃないってことはわかったわ」

そう言いながら、彼女はしゃがみ、目線を合わせて、咲来の顔を、真剣なまなざしで、じつ、と見る。

「紹介が遅れたわ。私は庵歌姫」

和風でみやびだが古臭くもなく、可愛い名前だ。彼女……歌姫にぴったりだと、咲来は思った。

「ねえ、貴方、呪術師にならない？」

これが、成宮咲来が、「呪術師」となったきっかけだった。

†††

「なるほど、先輩が」

「はい、歌姫先生に誘われて、呪術高専の京都校に入学しました」

日本には、呪術を学ぶ高専が、東京と京都にある。広島に住んでいた彼女は、このス

カウトがきつかけで、志望していた地元の普通科高校ではなく、呪術高専京都校に入学したのだ。

ここは、近所の喫茶店。立ち話もなんだということで、七海の提案で移動した。制服姿の女子高生とあの見た目の七海では「いかがわしい」関係に見えそうなので、一応一度帰宅して、簡素な私服に着替えている。

それにしても、今、彼は歌姫を「先輩」と呼んだ。見た目に反して年下らしい。

「学年と年齢からして、今の二年生と同級生でしたか？」

「はい、霞ちゃんと真依ちゃん、メカ丸君と同級生でした」

同級生の名前を出すときの咲来の声と表情は、明るかった。どうやら、良い関係だったらしい。

「メカ丸君はすつごく強かったからほとんど一緒に任務には出なかつたんですけど……」

霞ちゃんと真依ちゃん、それに桃先輩とは、よく一緒に行っていました」

「仲はよろしかったのですか？」

「はい。霞ちゃんとはすぐ気が合って、真依ちゃんは……その、怖かったし、向こうからも最初は嫌われていたんですけど、最初の任務で仲良くなつて……桃先輩には、何かとお世話になっていました」

話はまとまっているとはいえない。だからこそ、仲の良い友達の話をしている、い

たつて普通の女子高生の様だ。

そうなつてくると、七海はやはり、自分の経歴もあつて、気になつてしまう。踏み込むべきではないのかもしれない。

それでも、今回の任務に影響することもあるかもしれないということもあり、私情半分・仕事半分で、本人に聞かざるを得なかつた。

「ではなぜ……高専を中退したのですか？」



瞬間、和やかだった空気が霧散し、硬直する。

そう、彼女は今、神奈川のやや学力が高い、一般の私立高校に通っている。彼女自身も、「三元」高専生だと名乗っていた。

時間にして数十秒。長い、長い沈黙だった。

咲来は急に暗い顔になって、俯く。長い前髪が、眼鏡とその奥にある逸らしがちな視線の目を隠してしまうが、一方で体は小刻みに揺れていて、感情を雄弁に語っている。

「……………怖くなって、逃げちゃったんです」

ようやく口を開いた彼女は、そう震える声で言つて、自嘲の笑みを浮かべた。

## 3話・迷いと登山

「す、す……」

呪術高专京都校に入学するにあたり、入寮準備などの都合で、三月の段階で訪問することになった。

ついこの間中学校の卒業式を終え、友達と涙の別れをした彼女は、高专敷地内に数多くある立派な寺社仏閣群を見上げて、圧倒されていた。

表向きは宗教系の私立高专扱いだが、実際は公立だ。表向きの体裁を整え、それでいて公立ゆえの潤沢な資金で、こうして同じ京都府内にある大規模なものに負けない寺社がずらりと並んでいる。自慢の視力でも、その全てを見渡すことができないほどに広大だ。

来るのは二度目だというのに、新しい生活がこれから始まる緊張もあつてか、一度目と同じ反応をしてしまった。

そんな彼女のいでたちは以前からはずいぶんと変わっていた。服装は高专指定の全身真っ黒な制服。形が可愛かったからと言うことで、膝上になるかならないか程度の長さのスカートのワンピースタイプだ。また髪形も、以前の二つ結びのおさげから、低め

の位置で結んだポニーテールに変わっている。新環境と言うことで、ちよつとした高校デビューのつもりだった。大人しくて派手好きではないが、こういったところは、普通の年頃の女の子と変わらない。

「驚くのは分かるが、その重い荷物をとつとと下ろしたいだろ？　早く寮に行くぞ？」

「は、はい！」

ほほえましそうに笑う付き添いの歌姫に促され、咲来は慌ててまた歩き出す。大きな荷物はおおむね業者に頼んだが、それでも彼女が持つている引つ越し荷物はとても重いものだ。およそ、ひ弱そうな見た目の彼女には過ぎたものである。ただし彼女は、重いとは思いつながら、そこまで気になつてもいなかった。

身体の組成——骨格や筋肉量——自体は女子平均からやや弱い程度なのに、身体は人一倍丈夫だったし、運動能力も体力もパワーも、男子にすら負けなかった。ずっと不思議だったが、歌姫から「無意識に呪力で強化している」と説明されて、納得できた。

呪力なるものの存在自体初めて聞いたが、それ以来、自分の中に「流れて」いるものを意識するようになると、だんだんと実感が湧くようになった。それ以来は意識的にコントロールできるようになり、よりパワフルになつたのは余談である。

そうしてしばらく歩いてたどり着いた寮は、居並ぶ寺社に反して、一般的な学生寮に近かった。部屋の間取りや写真自体は引つ越しの荷物を決める際に事前に見ていたの

で知っていたが、どうしてもギャップを感じざるを得ない。

「今日からここが成宮の家だ。何か困ったことがあったら、寮母さんもいるし、私や他の先生、なんなら学長にも遠慮なく言ってくれ。いろいろ相談に乗るわよ」

「あ、ありがとうございます」

部屋に案内され、荷物を置く。業者に頼んだ荷物は明日届くらしく、とりあえず今日のうちは、手荷物さえ荷解きすれば、あとは何もすることはない。広島から大きな荷物を抱えての旅だったので、呪力強化もあるとはいえ、精神的に疲れた。

「——呪術師、かあ」

一年と少し前、あの山の神社で歌姫と出会った日から、咲来の人生は、大きく変わった。

呪術師。呪力を扱える変わった人間で、その中でも呪霊や呪詛師——悪い呪術師らしい——と戦い問題解決することを生業とする者たち。「呪力を扱える」という時点で圧倒的少数らしく、万年人手不足がどうのと歌姫から愚痴を聞いたことがある。少数と言うことは、一学年に一クラス分ぐらいだろうか、と予想している。

この高専は、そうした呪術師を育てるための学び舎だ。あくまでも学業面では「普通」と言っても差し支えない道を進む予定だったが、大きく変わったものだ。

そうなる、色々変わってくる。先生や両親を説得にまず苦勞した。

歌姫が立ち会ってくれて——巫女服で来そうだった所をスーツに変えさせたのは我ながら良い判断だった——はいたものの、話すこと全てが異常の塊でしかない。両親はまだ咲来が変なものが見えていると昔から主張し続けていたこともあつて意外とすんなりいったが、中学校の先生にはどう説明したものか本当に迷った。その割には引き留められなかったが。歌姫曰く、人材確保に国が必至だから圧力があつたらしい。自分ごときにそんな力が働いてよいものか。

それと、友達にはどんな高校に行くのか説明を誤魔化すのも苦勞した。京都にある宗教法系系の高校、という説明が精いっぱいだ。

そしてその次にあつたのが、入学試験だった。

内容は、学長との面接のみ。学力などは度外視らしい。

「……すごかったなあ、学長」

今思い出しても、この京都校の学長・楽巖寺のビジュアルはすさまじい。

ぬらりひよんや仙人を思わせる特徴的な形の禿頭に、立派に蓄えられた白いひげと、深い深い皺が刻まれた、和服の老人。それだけでも呪術師然としていて驚きだが、そんな彼の顔には、なんと大きなピアスがいくつもついていた。和風の仙人・妖怪風なのに、その大量のピアスは、アフリカの呪術師シャーマンを連想させる。

正直、とんでもなく恐ろしかった。

見た目で言えば、呪霊の方がはるかに悍ましいし恐ろしいはずだ。だというのに、暗いお堂の中という場の雰囲気も相まって、楽巖寺の方が何倍も恐ろしく感じた。

『ほほっ、その子が歌姫が見つけた一般人かい？』

そして脳内に、見た目に反して、朗らかで優しそうな好々爺風の第一声が蘇ってくる。とはいえ、当時の咲来はそれを聞いても、今思えば失礼極まりないが、老獺・狸爺的な印象はぬぐえなかった。そのせいで、やたらと緊張したし、怯えていた。

『ふむ、なに、君の思うことを、素直に話してくれば、それでよい』

そんな彼女の様子を見てか、緊張をほぐすように笑いながら声をかけてくれたのも覚えていいる。そのあとの面接も終始和やかで、終わるころには、咲来も少しだけ笑顔を見せていた。

面接内容は、名前、出身校、呪力に気づいたきっかけ、今まで呪霊にどう対応したか、など、通り一遍のものだった。

ただ一つ——最後の質問だけは、場の空気が固くなったのも覚えている。

『して……呪術師になろうと思った理由は？』

この時、咲来は、楽巖寺から、睨みつけられているような錯覚をした。核心ともいえる質問だからか、声も一段低く、真剣みが増していた。

「人助け、か……」



寝転がって、寮の自室の天井をぼんやりと見ながら、その時の自分の答えを呟く。人を助けたいから。

これは、彼女の偽らざる本音だった。

今まで呪霊を積極的に退治——界限では「祓う」と言うらしい——してきたのも、人が助けが理由だ。

それをできる仕事がある。

あの真冬の神社で歌姫から説明を聞いた時、心が躍ったのが分かった。

だからこそ、少し怖気づいたが、その険しくなった目を見つめ返して、胸を張って答えた。

『ふむ……………よかろう、合格じゃ』

長いあごひげを撫でながら考え込んで、楽巖寺が出した答えは、合格だった。

——そんなことを思い出しながら、咲来は、身体を流れる呪力をコントロールする。指先に少しだけ集めて塊にし、弾丸のようにして、ゆっくりと射出。

その直後——天井に届く直前に、その呪力が、弾けた。

ほんの少しの呪力だから、発した衝撃は、少し髪を揺らす程度。

これが、自分だけの、特別な術式<sup>ちから</sup>。

その様子を見てみると、ふつつつと、胸の奥から熱いものがこみあげてくる。

「私……呪術師に、なるんだ」

この自分だけの術式を使って、これからたくさん、人助けができる。

それが彼女には、たまらなく嬉しかった。

「あれ？

新しい方ですか？」

†  
†  
†

夕食の時間になって食堂に呼ばれると、そこには先客がいた。

「あ、えっと、初めまして！」

気弱なこともあつてか人見知りの気がある咲来は、うろたえながら挨拶をする。

まず特徴的なのは、水色の長い髪だ。少し離れたところから見ただけでも、さらりと絹のような質なのがわかる。顔つきも可愛らしく、人のよさそうな笑みを浮かべている。

「いやー、私一人で心細かったんですよ！先輩方も今日はいないしー！」

席を立てて、こちらに向かつてきて、にこにここと笑いながら、緊張でうつむきがちだった咲来に目線を合わせてくる。咲来と違って、人懐っこい性格の様だ。

「えーっと、ここの生徒さん、ですか？」

「うーん、一応そうなるんですかね。まだ三月なので入学はしてないですけどー！」

ということば、咲来と同じ、新一年生だ。多分、咲来よりも早く、事前に入寮していたのだろう。

つまり、これから四年間一緒に過ごす同級生と言うことだ。優しそうな人だと、咲来は胸をなでおろす。

「申し遅れました！私は三輪霞です！これからよろしくお願いしますね！」

「えっと、成宮咲来、です。よろしくお願いします！」

咲来も自己紹介をすると、彼女——霞は、咲来の手を取って両手で握って握手のようなものを見ると、そのまま手を引いて、元居た席の隣へと誘導してくれる。そしてちやうどそこに、今日の晩御飯が配膳された。

この後、咲来は霞から彼女の部屋に呼ばれて、おしやべりをするようになる。当初は「三輪さん」「成宮さん」だったが、「霞ちゃん」「咲来」と呼び合うようになるのに、その時間はかからなかった。

「えっと、今回の任務は……」

入学してから一か月ほどが経った。基本は高専内で座学——高校生と同じ内容の「教科」と、呪術や呪術師について学ぶ「呪術」の二つがある——か訓練、一週間に一度ほど、呪術師が行うことが望ましい簡単な任務をこなすという日々だ。最初のうちは慣れないことの連続だったのでヘロヘロだったが、今は少しだけ慣れてきた。

咲来がぎこちない操作をしながらタブレットで見ているのは、今回の任務の概要だ。今いるのは、任務地に向かう車の中。市街地のため、いつものような物々しい車ではなく、あくまでも黒い軽自動車である。

「あなた、それ確認するの何回目よ。脳味噌ついてるの?」

そんな彼女に、霞を挟んだ向こう側に座っているロボカットの長身の少女が、心底呆れ果てた目で見下しながら罵倒してきた。

「まあまあ真依さん、確認する分にはタダですから」

そんなロボカットの少女——禪院真依を、二人の間にいる霞が困ったように苦笑いしながら宥める。

「え、えへへ、ごめんね」

「チツ」

癪に触らないわけでもないが、人と争うぐらいならその場を誤魔化すことを選び続けてきた咲来は、霞のものよりもさらに困ったような苦笑いを浮かべて謝り、誤魔化す。そんな彼女に真依は、相当腹が立ったようで、その鋭さで人を切り裂けそうなほどに目を吊り上げ、腕を組んで聞こえよがしに大きな舌打ちをした。

「三輪の言う通りだ。何度も見て確認するに越したことはない」

そんな彼女に低くくぐもった声をかけたのが、助手席に座っているロボット、アルティメット究極メカ丸だ。

——この四人が、今年の京都校の新入生。

少ないと聞くから一クラス分程度か、と予想していた咲来は、まずこの人数の少なさ

に度肝を抜かれた。

そしてさらに、この入学初日に初顔合わせした同級生二人にも、驚かされた。

まずわかりやすい驚きは、メカ丸だ。

なにせ、ロボットである。

え、ロボット？ 同級生？ サポートAIではなく???

と咲来の内はクエスチョンマークで埋め尽くされ、それこそ壊れたロボットのよう  
に動けなくなったのも、今では良い思い出だ。

詳しいことは聞かなかったが、曰く、身体が弱くて動けないので呪力による遠隔操作  
ロボットで活動しているらしい。呪力は、そんなこともできるようだ。

そして、真依については、驚きもあるが、困惑の方が強い。

まず第一印象は、カッコイイ美人だった。歌姫とはまた違った麗しさがあって、「孤高」  
とでもいふべき美しさを感じた。

その一方で、困惑もある。

——今のやり取りの通り、咲来は、真依に嫌われている。

咲来は他者との衝突を望まないの、何か悪いことをした覚えはない。寮の部屋も少  
し離れているので、物音がうるさいということもないだろう。

そもそも、「初対面」の時点で、相当に嫌われていた。それも、蛇蝎のごとくを通り越



して、食べ物に湧く虫のような嫌われようだ。こうなつてくると、お互いにメリツトがないので、関わらないようにするのが咲来なりの知恵である。ところが残念なことに、同じ新入生として、授業はいつも一緒だし、今回は任務ですらも一緒だ。霞という癒しがいなければ、咲来の胃には穴があいていただろう。

——そんなやり取りがありつつ、目的地に到着した。

京都のお隣、奈良県某所の、何の変哲もない山。さほど深くも険しくもないが、ここで救助を要する出来事が続出しているらしい。幸い全員その日のうちにで救助隊に見つかっているので、死者は出ていないが、奇妙なのが、その証言だった。

この山はハイキングと呼ぶのも言い過ぎとなる程の、緩やかな山だ。道もしつかり整備されていて、意図的でなければ、およそ木々の中に迷うこともない。地元の散歩コースの定番である。

被害者も全員、地元住民だ。

共通しているのが、「いつもの道を通っているつもりだったのに、いつの間にか木々の深くまで迷い込んでいた」というものだった。そこから自力で脱出しようとするもの、どうにも同じ場所に戻つてしまう。幸い携帯電話の電波は届いていたので地元警察や家族に連絡をして事なきを得ているが、これが急に続出していると、奇妙なことだと、話題になり始めている。

「山道で迷わせるのは、呪霊のやり口の定番ね」

「大したことない山で幸いでしたね。これが大きな山つてなると、大事ですよ」

山中の舗装された道を同級生・補助監督の五人で進みながら、口を開く。真依は呪術の大御所一家らしい禪院家出身らしく、呪霊のやり口を知っているようだ。それに対して霞は、善人な彼女らしく、被害者の無事を喜んでいる。

「真依さん、どういう風に迷わせていると思う？」

色々知っているらしい真依に、咲来が問いかける。真依はよほど自分の苗字が嫌いらしく、咲来にすら名前呼びを強要している。

「この前授業でやったでしょう、今時幼稚園生でももつと記憶力いいわよ」

そして咲来は、おそらく苗字の次ぐらいに、真依に嫌われている。

「授業でやったのハ、舗装されていない山道の例ばかりダ。今回はこれほどわかりやすい道だゾ。また別の術式の可能性を考え口」

「あーはいはい、高性能ロボット君は賢いわね」

メカ丸の言葉は、真依にとっても凶星だったようで、露骨に不機嫌になる。

咲来の問いかけも、メカ丸の言ったことを考慮してのことだ。険しい山道で迷わせるのは簡単だが、こうも開けた道だと、いくら一般人相手と言えど迷わせるのは難しいだろう。被害の規模のわりに、強力な術式の可能性もある。

こんなことは、真依にもすぐに分かるはずだ。どうやらいつにも増して不機嫌らしく、冷静さを欠いている。

「方向感覚を狂わせる、というレベルじゃないのは間違いないでしょうね。慣れた道で迷ったということも考えると……幻覚か、洗脳、あたりでしょうか」

霞の出した結論に、全員が無言で同意する。今ある情報では、一番妥当な判断だろう。そんな四人の後ろをついていきながら、加藤——補助監督の女性——はタブレットに何やら入力している。この任務も授業の一環だ。評価のようなものを記入しているのかもしれない。

そうこうしているうちに、頂上についてしまった。簡易的なベンチと水飲み場が置かれていただけで、景色もさほど良くはない。なんともイマイチな山だ。

「今のところ異変は見られないナ」  
「そうだね」

簡素なベンチの周りに集まり、また話し合いをする。ちなみにベンチが小さいせいで二人しか座れず、呪力が弱くて体力強化すらできないレベルらしい加藤と、今回の資料を表示している大型タブレットを持つ霞が、腰を掛けている。

「迷子だから、『このあたりで迷った』っていうピンポイントの情報が無いのが困りものね」

「いくらこんな山だと言っても、全部回ったらさすがに結構時間がかかりますよねー」  
今回の任務は、資料が揃っているとは言えない。呪霊の仕業の可能性自体は高いが、それ以上のものが見えてこないのだ。

「手分けして探すことを提案す。まとまって動いては埒が開かない」

「あまり戦力は分散するものじゃないけど、仕方ないわね」

呪術界限にいた時間が長いため、四人の中ではメカ丸と真依の意見が必ず最初に出るし、そして妥当であるがゆえによく通る。咲来や霞としても不安ではあるが、今までの被害状況から察するに、ハプニングがあってもそう悪いことにはならないだろう。

「それで、どう分かれますか？」

少し疲労気味の加藤が問いかけてくる。

「俺が一人で、そちらは四人で行動し口」

「さすがメカ丸、頼りになりますね！」

提案に、霞が明るい笑みを浮かべて即座に同意する。なんならサムズアップすらしていた。そんな彼女を、ロボットであるがゆえにどんな感情を抱いているのか定かではないが、メカ丸はぼんやりと見つめている。咲来の見立てでは、多分、呆れている。

メカ丸は新入生の中では圧倒的な戦力だ。呪術師には4級く特級のランクがあり、咲来と真依と霞は新米な上に経験も少なく、さらに言うところ「弱い」ので、4級である。

一方メカ丸は入学前から前線で活動していて経験豊富であり、しかも呪力も莫大で、ロボット特有の性能もあって、すでに準2級だ。同じ女子寮に住んでいて一つ上の先輩でもある西宮桃が3級、男子の先輩の加茂憲紀が2級であることを考えると、その強さがわかるだろう。ちなみにまだ会ったことは無いが、東堂葵と言う先輩はすでに準1級らしい。

そういうわけで、アンバランスにも見えるこの分かれ方は、実はベストな選択だ。メカ丸は三人が束になってかかっても敵わないほど強いし、また経験の浅い咲来と霞がいるグループに補助監督がつくという点でもベストである。

ちなみに霞が喜んでいる理由だが、メカ丸と離れるのが嬉しいとか、咲来と一緒にのが嬉しいとかいう話ではなく、「二手に分かれなきやなのは分かっているけど少人数は不安だなーイヤだなー」とか思っていたからである。

「足は引つ張らないで頂戴ね」

そうした中で発せられた真依のイヤミは、間違いなく、咲来だけに対して向けられたものだった。

[.....]

+

+

+

气まずい。

咲来と真依は、お互いに何もしやべらず、黙々と森の中を、時折木に目立つ傷をつけながら、周囲を見回しつつ進んでいた。

とんでもなく情けないことに、二手に分かれてからしばらく、メカ丸が元来た道の反対側の道路を調査すると言うので、元来た道に戻る方向に調査をしていた四人は、見事にはぐれていた。

(もー！ 霞ちゃんに加藤さんのバカ！)

一応四人とも呪術師ではあるはずだが、実力は最底辺クラスだ。呪術に対する「耐性」ともいうべきものがまだ弱い。

そういうわけで、四人で行動していたはずなのに、霞と加藤がはぐれてしまった。

咲来と真依が二人がいらないことに気づいたのは、舗装された開けた山道の中腹あたり。こんな開けた道で霞と加藤がいらないということは、二人がどこか脇道の藪の中に逸れてしまったのだろう。自分たちが実は迷子になった可能性も考えたが、ただ一本道を下っていただけで、こちらが迷子と言われるのは心外である。

そういうわけで、自分のことを嫌っている真依と二人きりになってしまった。しかも状況は芳しくない。そのせいで真依は一層不機嫌になっている。

(メカ丸君、早く反応してー！)

緊急事態——二重の意味で——なので、咲来はスマートフォンで何度も電話をかける。だが一向に出る気配がない。

「ねえ」

「はい！」

そんな中でいきなり声をかけられ、咲来は上ずった声で返事をする。

「メカ丸はまだ反応しないの？」

「う、うん……圏外にはなっていないんだけどなあ……」

「そう……」

不思議なこともあるものだ。画面に出ている電波表示はいたって正常だ。真依の方も霞や加藤に何度も電話をかけているようだが、この様子だと反応がないのだろう。

「あの二人はまだしも、メカ丸はスマートフォンと機体をリンクさせて、手動操作なしで通話に反応することができてるわ。仮に戦闘中だとしても、よほどの場面じゃない限り電話に出れるはずよ」

「だよねえ」

口には出さないが、二人の間に、共通の認識が出来上がり始める。

「こういう異常なことが起こるといふことは——」



——呪霊の、手のひらの上にいる。

結界。呪霊が根城にしている「場」は、呪霊の意図のあるなしに違いはあれど、呪力が影響して、異常な現象が起こる。例えば二年前に咲来が山の上のすたれた神社で感じた怖気は、結界の内側に入ったことが影響している。そうした結界の作用の一つが、外界との断絶だ。

入った瞬間に気づかないということは、楽観的に見れば、呪霊が強力ではない、ということになる。悲観的に見れば、わざと気づかせないようにしているということだ。呪霊の知性や呪力が高いということだ。

緊張が走る。被害規模は小さいが、思ったよりも厄介な事件なのかもしれない。

「一日道に戻りましょう。私たちまで迷子になりかねないわ」

真依が提案する。咲来も賛成だ。

「うん、そうしたいところだけど、でも……」

「何よ、二人が心配なの？　じゃあ置いていくわよ？」

真依が明らかに苛立っている。

確かに二人のことは心配だ。だが、咲来が言いたいのはそのではない。

「マーキングが……」

真依が来た道を慌てて振り返る。

ここまで迷わないように、通り道の木には目立つように傷をつけていた。

だが、それらが——消えている。

被害者たちは、「迷い込んだ」。あんな開けた道を歩いていたらいつの間にか森の中、というのは異常事態だ。

だからこそ、「迷い込む」ことばかりに気を取られてしまっていた。

この山は、深くもないし険しくもないし広くもない。多少迷い込んでも、人通りのある道に出るのは造作もないはずだ。

だが、被害者たちは——いつの間にか元の場所に戻ってしまい、迷い続けた。

それもまた、呪霊の仕業に違いない。

自分たちは「迷い込まされた」わけではなく、自分たちから入り込んだ。だがそれも、「出られなくする」分には十分だ。

「……………サイアクね」

真依が懐に隠していたシリンドラー式拳銃を取り出し、警戒態勢に入る。それとほぼ同時に、咲来も身構え始める。

二人はついさつき、マーキングが無くなっていることに気づいたあたりから、チリチリとひりつくような痛みを感じていた。

呪力を持つ呪術師は、第六感、シックスセンスとでもいべきものが発達している。

被害者たちは、しばらくすると携帯が通じるようになって、外に出られた。

おそらくだが、「迷い込ませる」「出られなくする」効果がメインで、外界との断絶には時間制限がある。

迷い込まされたのは全員一般人だ。だが彼らは全員脱出できている。

そう——彼らは、見逃された。

だからこそ、放置されたのだ。

呪霊は人を好んで食べ、呪力を成長させる。大概の呪霊は雑食で、人間であれば目についた分だけ食べようとする。

だが、中には——

「私たち、餌場に迷い込んだみたいよ」

——呪力を持つ呪術師のみを狙って、一気に力をつけようとする呪霊もいるのだ。

直後、甲高い笑い声とともに、「真っ赤な馬」が飛び出してきた。

「そっ！」

「つー！」

真依が呪力を籠めた弾丸を、少し反応が遅れて咲来が呪力を固めた小さな球を、その赤い何かに放つ。木々が生い茂る中だというのに、その真つ赤な馬は即座に横ステツプで、その二つを避けた。

「それー！」

だが、咲来が放った呪力の球が——爆発する。

その急激な膨張は予想外だったようで、爆風がその馬の体勢を崩した。

すかさず真依が追撃の弾丸を放つが、それも、器用にバランスを取って立て直した馬が回避する。

そうして、両者は相対した。

「……相変わらず呪霊って、悪趣味ね」

真依が銃口を向けながら吐き捨てるように呟く。

それは、馬のように見えたが、違った。

角こそ生えていないが——頭の出っ張りをみるに、鹿なのだ。

ただしその全身は——皮が全て剥がされたかのように、肉が露出して、血が滴っている。

そして、そんな痛々しい見た目だというのに——そのグロテスクな貌にある耳のあた

りまで裂けた大きな口は、「嗤って」いる。

おそらくだが、これがこの山に現れた呪霊だろう。そして、四人を迷わせた正体だ。

咲来は、今まで見た呪霊とは違うべくトルの、生々しいグロテスクな姿に吐き気を覚える。しかしすぐに気を持ち直して、その不気味な嗤い貌の、口元を注視する。

体表から血が垂れているのに、口からは垂れていない。恐らくだが、まだ霞と加藤は食われていないようだ。

「スマートホンは、自動で電話をかけ続ける設定にしてあるよ。時間を稼げば、大丈夫だと思う」

咲来は警戒をしながらも、真依に提案する。

この呪霊はどうにも、自分たちの手に余りそうだ。森の中と言うこともあって、彼我のスピードも段違いだ。それならば、おそらく「迷い込ませる」「出られなくする」術式強化のための、外界との断絶についている時間制限の縛りを利用して、時間稼ぎをするのが良い。

直後——呪霊とは関係なしに、二人の間の空気が、一気に冷たくなる。

「……何言ってるの？」

真依は、底冷えするような声で、咲来に聞き返す。

「私は呪術師よ。呪霊を払わなきゃ、意味がないじゃない！」

呪霊から視線と銃口は逸らさない。だが、彼女の敵意は、呪霊以上に、睨来に対して向いていた。

「逃げたいなら、一人で逃げなさい!!!」

叫ぶと同時に、それを合図とするかのように、二発の弾丸が放たれ、呪霊はまた横にステップして回避する。銃弾は亜音速で襲い掛かるため、それが放たれてから避けるのも、音速で動く必要がある。できるかどうかは別として、普通の生物でそんなことをすれば、身体が持たないだろう。それを可能にするのが、超科学的存在である呪霊であり、呪術で体を強化できる呪術師だ。



呪霊の大きな口が開き、真つ赤な血の塊のようなものが放たれる。真依はそれらを連続で回避しながら反撃するが、弾切れを起こし、すかさず木の裏に隠れて銃弾を籠め始める。何度も何度も練習したのだろう、その動きはよどみなく、そして速い。

だが呪霊はそれを見逃さず飛び掛かる。真依はリロードを終えシンダーを戻しながら横に転がって回避するが、すれ違いざまに——呪霊の「脇腹に口が開いて」そこから血の塊が放たれた。

(至近距離、避けきれない！)

真依は被弾を覚悟した。

直後、爆風が、両者の間を駆け抜け、血の塊を吹き飛ばす。

「大丈夫!？」

咲来は、心配しながら叫ぶ。今のは急いでいたし必要な威力も大きかったから、手加減が効かなかつた。

真依を守るつもりだったが、今の行動で傷ついてしまった可能性もある。

「ええ、残念ながらね」

真依はそう吐き捨てるように言いながらも立ち上がり、呪霊に牽制の弾丸を打ち込みながらも距離を取って、咲来の横に並ぶ。

「どうしたの? 逃げたいんじゃないの?」

真依は冷ややかな笑みを浮かべ、鼻で笑うように問いかける。

それに対して咲来は——いつも罵倒されたときに浮かべるものとは違う、穏やかな笑みで、答えた。

「真依さんを置いていくわけにはいかないよ。助けたいもん」

## 4話・想いと爆散

「迷子の迷子の霞ちゃん、貴方の友達どこですか、あははは……」

「み、三輪さん、しつかりしてください！」

咲来たちが呪霊に遭遇する少し前、自分たちがまんまと術式に引っかかって山奥に迷い込んで出られなくなってしまうことに気づいた霞たちは、御覧のありさまだった。（参ったなあ、これじゃあ本当に足手まといじゃん。マーキングも付けてないし、まんまと術式に引っかかるし。あ、タピオカ飲んでみたいな。奈良だし和風のドリンクとかあるかなあ）

「三輪さん！ 三輪さんってば！」

「はい、役立たず三輪です」

シヨックのあまり放心して変なことを考えていたが、大声で呼びかけられて、自虐も交えた返事をする。

「は、はやく戻って合流しましょう！ 二人が心配ですよ！」

弱いから四人で固まっているのに、それが二分割された。それも、呪霊の手によって、呪霊の住処で。

霞の術式は、こと身を守るといふ点では、4級術師と言えど強力だ。有名な術式なので、加藤も知っている。その場を凌ぐだけなら心配はない。

「確かに、あのお二人はあまり仲がよろしくないのです、喧嘩しないか心配ですね」

「そうではなく！ 呪霊に襲われでもしたら大変ですよ！」

だが、霞からの返答はズレたものだった。

加藤が心配しているのは、二人の戦闘力だ。彼女はまず二人の術式を知らないので、入学したての4級という認識ではない。

「うーん、それはそうですけど……」

霞も同意する面があるのか、どちらに行けばよいかは分からないが、とりあえず歩き出す。

「真依は術式は使いにくいですけど、直接戦闘や応用力がありますし……」

そんな彼女の声には、いまいち緊張感がない。

代わりに——二人への信頼が、込められていた。

「咲来は、とびっきりの術式を持つてるので、あまり心配いらなと思いますよ」

†  
†  
†

呪霊の足元が、爆ぜる。

踏み出そうとした足元が急に爆発したせいでバランスを崩した呪霊は、その胴体に呪力を籠めた弾丸二発をモロに食らう。呪霊故に体は即修復されるが、それでもダメージは残る。

「今まで秘密にしたほうがいいって聞いたから隠してたけど、真依さんも傷つけちゃうから、術式の説明するね！」

戦闘中だからか、声は抑えられず、叫ぶような形で、咲来はまくしたてるように説明を始める。

「私の術式の名前は《爆散》！」

咲来が呪力で作った球が、呪霊の目の前で爆発する。それによって目をくらまされ、近くにいた真依から横つ腹へと蹴りを食らった。

「呪力が固まっているのを、呪力同士の結びつきを解いて、ただの呪力にする術式！」  
その叫ぶような説明は、呪霊の耳にも入る。意図せずして、説明と言う縛りによって、

彼女の呪力は、少しだけ上昇していた。

「結びつきが解けた呪力は、一瞬で膨張して、爆発するの！」

水蒸気爆発と言う現象がある。

水が、超高熱のもの——例えばマグマ——に触れると、一瞬で加熱され、蒸発する。物質は、液体から気体へと変わった場合、その体積は膨れ上がる。

通常の蒸発ではさほどの衝撃にならないが——一瞬で多量の液体が気化したら、その膨張量と速度はすさまじく、爆発のように衝撃をまき散らすのだ。

咲来の術式は、その呪力版。

呪力でできたもの——呪霊の体や呪力で作った球——の呪力同士の結びつきを解き、ただの呪力の粒子にする。液体から気体どころか、言わば固体から分子レベルへと一瞬で変化するようなものなので、体積の膨張量と速度は、まさに「爆発的」なものになる。元々なんとなく使っていたが、あの神社での出来事から入学までの間に、歌姫の指導によって、自身の術式ちからの正体を知った。

呪霊が爆発するのは、この《爆散》の術式によるものだったのだ。

このように、彼女の《爆散》は、必要呪力や呪力消費のわりに、高い威力を発揮することができる、強力な術式だ。

歌姫や楽巖寺によると、この術式は、長い呪術師の歴史でも記録すら残っていない、珍



しいものらしい。そんな、分かる限りでは唯一無二でいて、強力な術式が、咲来に刻まれていたのだ。

ただし、ある程度限界がある。

まず《爆散》できるのは一度に一か所または一つだけ。一度に《爆散》できる呪力の質量とでもいうべきものは頑張ってもせいぜいスマートホン程度。呪霊の体、術師に流れている呪力のような、強力にコントロールされているものは、相手より明確に強い呪力でないと全く通用しない。例えば今相手にしている呪霊と咲来は、おそらく同格か、多少相手が格上だ。その体を直接《爆散》することはできない。

また、一度結びつきを解いた後の呪力はコントロールできず、体積膨張の衝撃はただただ放射状に広がるのみだ。そのため、自身や仲間、周囲のものを巻き込んでしまう恐れがある。さらに、術式の行使は短い間隔で行うことができず、数秒のインターバルが必要となる。

「そんなのとづくに知ってるわよ!!!」

「ええええっ!?!」

だが真依からの返答は、咲来の予想外のものだった。

まだ同級生だと霞にしか話していないのに。歌姫先生あたりから聞いたのだろうか。



ら、幼い咲来は、死体すら残らなかつただろう。

こうした幻術への対策は簡単だ。目に呪力を籠めれば、景色を変えるタイプの幻術だった場合は、無効化できる。

言われたとおりになると、元の場所に戻っていた。脳や認識や精神に働きかける強力なものではなかつたようだ。

「呪霊としてはせいぜい3級程度ね」

「でも術式は持つてるよー」

目に呪力を籠めながらとなると、それ以外へのリソースが落ちてしまう。必然的に戦闘能力が落ちた二人は先ほどと比べて拮抗した戦いに歯噛みしながらも、情報の交換をする。

呪霊の等級はある程度の目安がある。

「普通の武器が効く」という仮定での話になるが、4級は「木製バットで余裕」、3級は「拳銃があればある程度安心」だ。真依のリボルバーが効いていることから考えるに、この呪霊はせいぜいが3級だ。

だが、術式を持っているとなれば話は別。呪霊の中でも術式を有するものは別格で、準1級以上は固いだろう。そのちぐはぐさが、咲来には疑問だった。

「さつき話したでしょう！　ここは呪霊のホームグラウンドだし、それ以外にも色々『縛

り」をかけているのよ！」

縛りとは、色々な制限を施すことで、その反動として呪力を高める技術だ。恐らくだが、この呪霊の幻術は、意外と不便なモノなのだろう。

真依は叫びながら弾丸を連射し、正確に呪霊の両前脚を打ち抜く。このプロ顔負けの射撃能力が、彼女の持ち味だ。呪力で筋力を上げ反動を抑えているとはいえ、並々ならぬ努力のたまものである。最初は当たらなかつたが、だんだんと照準が定まってきた、少しずつ形勢を盛り返しつつあった。

とはいえ、彼女の弾丸の手持ちにも、底が見えてきた。そもそも今回は調査任務であり、戦闘はそこまで想定されておらず、あまり持つてきていない。呪霊は今だ当初と変わらず機敏な動きを続けている。

今の連射で弾切れを起こした。真依はすかさず身を隠してリロードをする。どうやら等級のわりに賢いようで、呪霊はその隙を見つけるや否や飛び掛かりながら血の塊を連射する。

しかし、その血の塊は、放たれた直後、呪霊の眼前で爆発した。あれは呪力の弾丸のようであり、放たれた時点で、コントロールの外だ。あまりにも速度があつて認識できず今まで出来なかつたが、咲来はようやく、それを爆発させられるようになった。

眼前で急に爆発したため、後発の弾丸も衝撃で撃ち落とされ、飛び掛かりも中断され、

無様に地面に打ち付けられる。そこを見逃さず即座にリロードを終えた真依が弾丸を連射するが、二発ほどは胴に命中したものの、三発目・四発目は即座に起き上がってて回避した。

そして呪霊は学習したのか、今度は真依の傍を離れないで、近接主体での攻撃に取り掛かる。この距離ではリボルバーは活かせず、リロードの暇もない。

「くそ、しつこい女は嫌われるわよー」

真依が悪態をつきながら、角が無いゆえに——性別をあえて判断するとすればの話だが——メスであろう呪霊との格闘戦に入る。真依の長い手足を活かした運動能力は中々のもので少なくとも睨来よりも格段に強いが、あまり得意ではない。

「う、うう、どうしよう」

そして睨来は、それに手が出せないでいた。雑魚呪霊を見つけては爆発させてきた以外は平凡な女の子だったため、反射神経などは鍛えられていないし、センスもあるわけではない。呪力強化のおかげで一般人よりは上だが、呪術師の中では体力・反射神経などは最底辺なのだ。

しかも、《爆散》も、ああも近距離では、絶対真依を巻き込むので使えない。呪霊にダメージを与えるほどの攻撃となれば、それよりもずっと脆い人間の体には致命傷なのだ。

「あーもう役立たず！ 木の棒に呪力籠めて殴りなさい！」

いくら呪力を籠めても、木の棒ではたかが知れている。それでもないよりはマシかと思いを決した咲来は手ごろな棒を拾って参戦しようとする。

だがその前に、戦況が動いた。

真依の渾身の回し蹴りが、呪霊の横つ面にクリーンヒットした。呪霊の顔が歪む程の衝撃で、その体は木へと叩きつけられる。

「これで終わりよー！」

リロードできないままだった残弾の五・六発目をその頭に叩き込んで追撃しようとする。それを見た咲来はトドメになるよう、いつもよりも多く呪力を固めて、弾を形成した。

（やった、なんとかかなっ——!?)

だが、直撃すると思われた真依の弾丸は、「呪霊の顔に突然空いた穴を通り抜ける」。

当然、呪霊を足止めはできない。恐ろしい速度で起き上がった呪霊は、口角を吊り上げながら、真正面から最短距離で、真依を殺そうとする。

これを見て、咲来は失敗を悟った。

呪霊はこれを狙っていたのだ。真依がだんだん狙いが定まり、咲来が血の塊に反応できなくなったように——リボルバーと弾丸の性質を、学習していた。

銃弾は、自らの体を呪力操作して通り抜けさせれば、なんら脅威ではない。

リボルバーはその見た目の通り装弾数が六発で、マガジンもないためリロードに時間がかかる。

そのため呪霊は、あの吹き飛ばされた後の一瞬で、ここまでの作戦を立てた。

連射によって残弾数が少なくなったところを、接近戦に持ち込むことで、リロードをさせない。そして程よく隙を見せて残り二発をわざと撃たせて、近い距離の状態で弾数をゼロにし、二発はすり抜けさせることで回避する。

そうすれば、ただの鉄の塊を持った人間が、近くにいただけ。

もう一人いる人間・咲来は、同士討ちの危険性が強い術式を使うから、この状況で横やりは入れられない。

呪霊は——確実に、真依を喰える、殺せる。

「真依さん！ 危ない！」

真依は回避やリロードに移らず、リボルバーを構えたままだ。すり抜けさせられたことに驚いて、動けないのかもしれない。



「舐めるんじゃないわよ!!!」

瞬間、真依に、強力な呪力があふれ出す。

その口の端が、誇らしげに、そして呪霊を見下しあざ笑うように、吊り上がる。強力な呪力は、空っぽのシリンダーの中に収束していき――

――呪霊の胴体に、叩き込まれた。

呪霊は撃ち落とされ、攻撃は失敗する。すかさず真依はリロードして、その頭に六発、弾丸を打ち込んで、止めを刺した。

「呪霊にしては賢いわね。まあ、所詮鹿だし、馬鹿だったけどね」

咲来はポカンと、その様子を見ているだけだった。

そんな彼女の様子に気づいた真依は、座って木にもたれかかり、身体を弛緩させながら、口を開いた。

「訳が分からないって顔してるわね。それじゃあ呪霊と同じよ」

イヤミは健在だが、幾分か険が少ない。呪霊を出し抜いて倒したからか、機嫌が良いようだ。ただしその声には、覇気がなかった。

「《構築術式》。それが私の術式よ」

《構築術式》。通常、呪力で作ったものは、コントロールを失ってしばらくしたら、自然にただの呪力へと戻る。

だが、《構築術式》は違う。呪力で「物体そのものをこの世に生み出す」のだ。その物体は、実際の物体と同じように、そのあとに残り続ける。まるで造物主のごとき、神の御業ともいえる術式だ。

しかし、当然ながら、呪力消費は大きい。

《構築術式》には、二つの目的で呪力が必要となる。

まずは、物体の材料となる呪力。物体の質量、精密さ、性質などによって必要呪力は違うが、この世に新たな物質を生み出すだけあって、ちよつとしたものでも通常の術式とは比べ物にならない呪力が必要となる。

もう一つが、それらの呪力を固めて物体を生成する「術式」に使う呪力だ。こちらもまた、無から有を生み出すに等しい神業のごとき行為であり、呪力消費が大きい。

真依はなぜ、細身の女性にとつて反動が少ないというわけでもなく、残弾数が少ない上に分かりやすく、リロードに時間がかかるリボルバーを使っているのか。

それは、整備が楽で比較的安価と言うだけではない。

先述の「デメリットを相手に見せつける」ためだ。

相手は当然、先ほどの呪霊のように、こちらの残弾の様子を見て攻撃してくる。そこに、不意の「七発目」を《構築術式》で作り出し、油断した相手にぶち込むのだ。

この作戦に、呪霊はまんまと引つかかった。真依の作戦勝ちだった。

「ゲホゲホッ」

「真依さん!？」

説明し終えるや否や、真依は咳き込む。慌てて近寄って背中を撫でてあげるのが緩和はせず、四つん這いになってえずく。その口から、大量の赤黒い液体が、びちゃびちゃとあふれ出した。

「ええ、ち、血が!」

慌てながらも、咲来はすぐさま真つ先に授業で習うことになる応急処置を施す。とはいえ体内の事なので、安定姿勢を取らせることしかできない。

「……私はね、生まれつき……持つてる呪力が少ない……の」

苦しそうに深く呼吸をしながら、真依は、自嘲するように話し始める。

「私の呪力では……一日弾丸一発、が……限界……」

咲来は愕然とした。

一日一発が限界。

そんな術式を、すでに呪力を籠めた弾丸を何発も放った状態で使って、さらにその後、六発打ち込んでいる。限界まで呪力を使い切った身体は弱り、さらに術式の負担に耐えられない。彼女の体は、もうポロポロだ。

「大丈夫だよ、待ってて! メカ丸君たちがすぐ来てくれるから」

呪霊が払われたなら、結界の効果は切れている。自動的に連絡が飛ぶようになってい  
るから、近いうちにメカ丸がくるだろう。

これだけ時間が経っているのに、返信が届いていない？

二人はハツとし、血の気が引く。

首筋がチリチリとひりつく「嫌な予感」が、また膨れ上がってきている。返信があつても良いはずだ。でも、ない。

なぜ？

結界が、残っている。

まだ呪霊が、生きている。

「う、そ、でしょ……」

真依が驚愕に目を見開く。安定姿勢で寝転がって動けない彼女の視線の先では……トドメを刺したと思われた呪霊が、フラフラと揺れ、プルプルと震え、弱弱しく唸りながらも、立ち上がろうとしている。

そしてその全身から——憎しみを、怒りを、恨みを——「呪い」を湧き出させながら。「逃げよう！」

咲来は長身の真依を即座に抱えて、がむしやらに走り出す。



呪霊は弱っている。今なら逃げられる。

「手持ちの、弾は……もうないわ。私は……これで、足手まといよつ！ 置いていきなさいつ——！」

木々の中を走っている咲来に抱えられてるため、酷く痛むだろう。途切れ途切れの声で、それでも強く、自分を囮にするように命令する。あの呪霊は、出し抜いた自分を狙っている。十分な時間稼ぎになるはずだ。

「嫌！ 絶対に、真依さんを『助ける』！」

後方に滅茶苦茶に呪力の塊を飛ばし爆発させて目くらましと牽制をしながら、咲来は叫ぶ。ここで置いていったら、今までの戦いが、何の意味もない。

「馬鹿つ……！ そんなこと、したって、なん、の、意味もな、いでしょー！」

真依が反論してくるが、それを無視して、一心不乱に前を見て、逃げようとする。だが恐ろしいことに、咲来は、「元居た場所に戻ってきてしまった」。

咲来は山駆けは一度もやったことが無い。今は焦っているし、冷静ではないし、体力的にも精神的にも弱っている。それでも、この状況で、元の場所に戻る程に、方向感覚が狂うわけではない。

目に呪力は宿し続けている。幻術にハマったわけではないだろう。

つまり、あの呪霊は——幻術だけでなく、方向感覚を狂わせる程度の、弱い術式も持つ

ていたのだ。

「くっ！」

一直線に走っていたはずなのに、目の前で呪霊が待ち構えている。呪力の球の爆発で牽制しながらUターンしてまた駆けだすが、その先でもまた同じ場所に戻り、目前に呪霊がいる。

そんなことを繰り返しながら、咲来はなんとか考えを巡らせる。

目前に待ち構えていた呪霊は、これまで見たことないほどに、冷酷に、侮蔑に、快樂に、そして喜悦に、嗤っていた。

自分を散々痛めつけた憎き人間を、いたぶり、なぶり、絶望させて殺し、そして喰うつもりだ。

(どうしよう、どうしよう！ どうしよう!!!)

必死に考える。何も浮かばない。

恐怖と情けなさで、涙が出てくる。

呪霊が待ち構えている。修復が間に合わないのか、穴が塞がってない。顔面に六つ、正面から胴体に打ち込まれた《構築術式》による銃創が一つ。

Uターンする。走る。まだ思い浮かばない。脚が痛い。息が乱れる。真依を抱え、慣れない山の中を、極限状態でずっと全力疾走。呪力で強化していても、限界が近い。

呪霊がニタニタと嗤っている。《爆散》で時間を稼ぎながらまた逃げる。

(私に呪力がもつとあれば！)

入学前みたいに、呪霊の体を直接爆発させれば、全て解決するはずだった。

甘かった。運よく弱い呪霊ばかりだった。現実には、こんなにも苦しい。

呪霊がまた待ち構えている。その体の銃創は、むき出しの肉と滴る血もあつてか、なお痛ましい。

(——銃創?)

頭に打ち込まれた弾丸は、おそらく貫通した。

だが《構築術式》による銃弾は、正面から胴体に打ち込まれた。四つん這いの動物の体を正面から貫くほどの力は、リボルバーにはない。おそらく、体内に残っている。

《構築術式》。「呪力で」新たなものを作る。

「……真依ちゃん、ありがとう、あと、ごめんね」

「え？ 何をいきなり——」

瞬間、ひとときわ大きな爆発が、呪霊の身体を消しとばし、祓った。



結界が解け、駆け付けた霞たちに保護された二人は、奈良県内の呪術界の息がかかった病院で検査を受けている。咲来に大きな怪我は無し、真依は重体目前の重傷で、本格的な処置を終えたが、これから《反転術式》なる、回復魔法みたいなものでの治療が必要らしい。そんなことまでできるとは、呪力と言うのは不思議なものだ。

「どう、『真依ちゃん』」

「『咲来』に揺らされたせいで痛いことこの上ないわ」

「あ、はは、ごめんごめん」

真依のイヤミに、咲来は苦笑いで誤魔化しながら謝る。今までと同じやり取りだが、二人の間に、緊張感はない。あの出来事以来、二人の仲は、急速に深まっていた。

真依が安静しているベッドの横に座っている咲来は、あの直後意識を失った真依に、何が起きたのか説明をする。

「鹿さんの胴体は縦に長いから、正面から撃ったら、体内に弾丸が残るよね。それを《爆散》したの」

《構築術式》で作った弾丸は、もはや普通の弾丸と全く同一と言える。しかし、あくまでも呪力で作ったものであり、その結びつきは強固だが、コントロールからは離れているため、咲来の《爆散》が使える。

銃弾は小さいが、鉛などの金属でできており、大きさの割には重い。つまり、密度が高いのだ。たつた一発作るだけで死にかけられるほどの呪力を消費する理由も分かる。

故にそこに詰まっている呪力は莫大だ。その結びつきを解いてやれば——無秩序になった呪力の粒子は、恐ろしい速度で、恐ろしい大きさに膨張する。とてつもない大爆発になるのだ。

そんな大爆発を体内で起こされた。3級呪霊には、ひとたまりもないだろう。

「あの……………ぐめんね」

説明を終えた咲来が、唐突に、謝ってくる。

「……………何がよ」

真依にだって、分かっている。何せ、それこそが、真依が咲来を嫌っていた理由なのだから。

「真依ちゃんが頑張って作ったのを、壊しちやっただから」

そう、咲来は、ある意味で、真依の術式の否定者だ。

体に負担をかけ、大量の呪力を消費し、やっと一つ創造できる。

だが咲来はと言うと、呪力の塊をただの呪力へと変え、爆発させ、壊し、無へと帰す。穏やかで気弱だが、その術式は、狂暴極まりない、破壊に他ならない。

しかもその効果は、消費量が少ない割には強力だ。



つくづく、真依の苦勞を踏みにじっている術式なのである。

入学前に、同級生の紹介を歌姫からされて、咲来の術式を聞いた時。怒りと憎しみから、目の前が真っ赤になった。脳の血管が切れたような錯覚すら覚えた。

それ以来真依にとって、咲来は、禪院家と姉の次に、大嫌いな存在になったのだ。

「別に、いいわよ」

真依はそっぽを向きながら、そっけなく、許す。

そもそも、術式は選べないものだ。もし選べるなら、真依は、もっと強い術式か――

いや、呪力も術式も全くないことを望む。

そんなことで一方的に嫌うのが、そもそもお門違いだ。それもずっと分かっていたが、それでも憎しみは収まらず、そんな自分に苛立ち、さらに咲来への怒りが増す……ずいぶんと情けなくて、理不尽なサイクルが出来上がっていた。

「そもそも銃弾なんてね、一発撃つたらもう使い物にならないの。そんなの、壊されたつて、何とも思わないわ」

真依は、禪院家であるがゆえに、呪術師の「現実」を知っている。

常に人手不足で、調査も情報も足りず、危険に挑まざるを得ない。いわば、使い捨てのようになっている現状がある。どうしても真依は、呪術師に、弾丸を重ねてしまう。

咲来はまだ知らないだろう。霞も恐らくまだ実感していない。口で言っても、きつとわからない。咲来と霞はこれから、この現実には直面した時、どうなるだろうか。

「それにね……」

そんな暗い考えとともに、心に温かいものが湧き上がってくる。

真依は、自分の術式が嫌いだった。

禪院家に女として生まれた。呪力が中途半端にあった。術式は呪力消費が膨大で負

担が大きい割にはあまり役に立たない。それらのせいで、禪院家では落ちこぼれ。しかも姉が家出し、挑戦状めいたものまで叩きつけて残していったので、そんな役に立たない呪力と術式があるせいで、呪術師にならざるを得なかった。

——大っ嫌いな姉と一緒にいられれば、呪力も術式もいらぬ。

——痛いのも苦しいのも、嫌いだ。

だが、そんなものがあつたために、こんなことになっている。

そんな中で必死に編み出したのが、リボルバーによるブラフだ。呪霊はほぼ知性が無いので役に立たない。対人、つまり表向きは、対呪詛師の戦術。だが、実際は姉を負すことだけを意識したものだ。

対呪霊では役に立つはずがない。今回も役に立ったかと思われたが、役にも立たなかった。

悔しかった。悲しかった。

それを救ってくれたのが、咲来だった。

あの爆発を、今でも覚えている。

ただただ呪力が膨れ上がり、暴力的に呪霊や木々を吹き飛ばしていくのを。あれは、咲来だけが成し遂げたものではない。

真依のコンプレックスであった、《構築術式》真依自身が、あの爆発の源なのだ。咲来は、真依を、「昇華」させてくれる。まるで固体が《爆散》するように。

「ん、何？」  
「なんでもないわよ」

ただそれを伝えるのは、まだどうしても、無理だった。

——こうして咲来は、真依にとって、かけがえのない存在となった。

そんな咲来が呪術界を去ったのは、三か月後のことである。

## 5話・真夏を迎えた中

入学してから三か月ほど経った。

授業・訓練の内容も本格的になりつつあり、任務も少しずつ厳しくなってきた。とはいえ、あの山で遭遇した鹿の呪霊以上に厄介な案件には出くわしていない。

その鹿の呪霊は、報告を踏まえた結果、3級呪霊だと認定された。あの時はそれはそれはもう必死で、偶然に近い勝利に感じたが、4級術師二人がかりでなら倒せて当然、というレベルだったらしい。

ただし後に歌姫から聞いた話によると、判定は準2級すれすれだったそう。色々と縛りを科している割に効果が弱いとはいえ、術式を持っている。そのうえ、真依の銃撃を何発も食らっても生きていた。「拳銃があればまあ安心」と例えられる3級呪霊にしては、少しばかり強すぎる。身体能力自体は3級の平均未満らしく、そのせいでギリギリ3級扱い、ということらしい。

そんなことがありつつも、呪術高専生としての生活が当たり前になりつつあった頃――  
| 咲来は、すっかり親友となった霞・真依と一緒に、校内のロビーで、女子トークに花を咲かせていた。

「モツテモテじゃないですか」

「咲来はパツと見なら大人しそうで呪術師には珍しいものねえ。術式はお転婆だけど」

「も、もー」

にやにや笑う霞が肘で咲来をつつき、その反対サイドから真依が指で肩をつつく。その間に挟まれてからかわれている咲来は、少し恥ずかしそうだが、まんざらでもなさそうだった。

三人が向かう大きな机の上に並んでいるのは、いわば「お見合い写真」だった。

咲来は4級術師で、さらにその中でも最底辺クラスである。しかしながら、あの山の一件で見せた大爆発は、3級を通り越して準2級相当の威力があるらしい。

狭い界限である呪術界で、そのことが少しばかり、話題になっているのだ。

一般人出身の新入生の女の子で、強くて珍しい術式を使う子がいる。

咲来は、そう噂されているのだ。

「あれは真依ちゃんのおかげなんだけどなあ」

咲来としては、自分には過ぎた扱いであり、身が縮む思いだった。何せ自分一人ではあの威力はまず出せない。真依の《構築術式》があつてこそだ。

《構築術式》で生み出した銃弾は、咲来の《爆散》を用いた「爆弾」として、これ以上ないものだ。コントロールからは外れているので術式効果は出せるし、小さいながら



も鉛ゆえに質量はあるので持ち運びに便利な上に威力はしつかり出る。

一方で咲来一人だと、自分で作った呪力の塊を爆発させるのが精いっぱいだ。それでも呪力の割にかなりの威力が出るが、3級呪霊の中でも頑丈な方らしいあの鹿の呪霊レベルまでくると、妨害する程度が関の山である。爆発のコントロールも効かないので、なんとも扱いにくい。

「はーあ、それにしても、呪術師つてのは本当クズばつかね。高校一年生の女の子に大人の人が『ケツコンシテクダサーイ』よ？ 変態よ変態」

そんな彼女に届いた「お見合い写真」について、真依の意見は辛辣だ。

学生に手出しはさせまいと張り切つて事前に「検閲」してくれた歌姫が、お見合い写真とともに、その目的を教えてください。

まず一つは、青田買的的なコネクション目的だ。結婚とはいかずとも、何かしらの良い関係になれば、珍しい上に強力な術式を持つ咲来が、仲間もしくは身内ということになる。

そしてもう一つが、産んだ子供にその術式が受け継がれること。御三家を筆頭に、呪術の名家には相伝の術式がある。つまり術式は、仕組みは不明だが、遺伝によつて受け継ぐことが確認されているのだ。もし咲来が嫁入りして産んだ子供にその術式が遺伝すれば、代々引き継ぐ強力な術式を手に入れることになるのである。

そう、はつきり言つて、咲来を、「都合の良いオンナ」としか見ていないのである。

關係を築くためには安直に結婚をもちかける。そして術式の遺伝目的の方は、もはや咲来は「産む機械」扱いでしかない。

呪術界は保守的であり、また代々男性術師が強い場合が多かつたこともあり、男尊女卑が当たり前となつてゐる。真依が嫌悪感を示しているのは、そういう部分だ。

当然咲来もあまり良い気はしないが、それはそれとして、年頃の女の子らしく、モテモテなのはまんざらでもない。見もしないというのは「検閲」してくれた歌姫にも悪いので、親友二人をアドバイザーとして、こうして一つ一つ確かめてみることにした。

「ふーん、これは白川家ね」

最初に手ごろなところに手を付けて真依が開いたのは、神道で有名な白川家——明治時代に本家は断絶したが分家が隠れて細々と続いている——の、次期当主候補らしい男だ。歳は三十。

「論外ね。いちおう名の通つた家の次期当主の癖に今まで独身つて時点でもろくでもないのは確定よ。しかもオッサンじゃない」

ポイ、とそれなりに立派な装丁の写真を、真依は放り投げる。

「これは金城家、ですか。沖繩の方なんですかね？」

「沖繩のシャーマンの系列ね。一応尚氏の血も入つてゐるらしいわよ」

霞が開いたのは、二十五歳の男の写真だ。見た目に地域性を当てはめるのはナンセンスなのも承知だが、「沖繩らしい」濃い顔立ちである。五歳ほど若いのが、先ほどの白川家の男よりも年上に見えそうだ。

真依は御三家出身だけあって、有名な家の事情には詳しいようだ。アドバイザートして選んで正解だった。ちなみに霞は、常識人枠としての参加である。

真依は解説しながらその写真を取り上げ、また雑に放り捨てた。

「その家は琉球系の中でもオワコン最前線。論外ね」

咲来は、なんだか、お見合い写真を送ってくる魂胆を散々罵っておいて、一番ノリノリなのは真依な気がしてきた。娘の恋人をいちいちチエツクする母親だろうか。まあ確かに、咲来は彼女を頼りにすることが多いので、姉妹通り越して母娘のようだと言っても間違いではないかもしれないが。

「おー、この人、中タイケメンですよー!」

「え? わーホントだ!」

次に霞が開いた写真を見て、二人のテンションが上がる。

身なりがよく顔立ちは鋭くクールなハンサムで、金髪だというのに和装がきつちりハマっている。しかも家の格もお墨付きで、なんと御三家たる禪院家の、次期当主筆頭らしい。

## 名前は、禪院直――

「――っ  
!!!!!!」

写真を見た真依が、それを今までになく乱暴に奪って、特に立派な装丁でかなりしつかりした冊子になつていて、呪力で強化した腕力でベコベコに折り曲げ、破り、ゴミ箱に叩き込む。その一連の流れを、二人はポカンと見上げるだけだった。

「……このクズのごとは忘れなさい？ いいわね？」

「あ、あのどんな人……」

「ちよつと説明するだけでも口と耳が腐るほどのカスよ」

あの鹿の呪霊と戦っていた時よりも、よつほど迫力がある。

同じ禪院だからか、「色々」あるらしい。ただ、「同じ禪院」なんて言おうものならあの写真のようになりそうなので、二人は口が裂けても言わないことを決意した。

「ずいぶん騒がしいな、何をやっている?」

そんな騒いでいる三人に、低い男性の声がかげられた。

「あ、すみません、加茂先輩」

確かに騒ぎすぎた。注意してくれた一つ上の先輩である加茂憲紀に、咲来は慌てて立ち上がった。謝る。

霞も同じく一応謝っているが、真依はムスツとして無視している。特に謝らないのは、先ほどのお見合い写真の主がよほど気に入らなくて不機嫌なのもあるが、別の理由もある。加茂の言葉こそ咎めるような言い回しだが、実際は単に何しているか気になったから通りすがりに声をかけただけで、特に迷惑には思っていないのがわかるからだ。こんな言い回しなのは、天然で人の神経を逆なでしがちな彼の性質である。

近づいてきた彼は、机に並べられたお見合い写真から一つ取って開いて眺め、何をやってたのかを察する。彼も御三家出身で、しかも次期当主だと言う。呪術界の性質がよく分かっているのだろう。

「成宮も大変なようだな」

そう言いながら手に持った冊子を雑に机に放り投げると、先ほどの禪院何某のものにも劣らない立派で格調高い装丁のものを手に取って開く。

「……それは加茂家ね？」

ゴミ箱に叩き込んですつきりしたからか少し機嫌を戻した真依が、遠目だというのにすぐ気づく。言われてみれば、表紙に書いてあるマークは、加茂が普段使っているあれこれにたまについているものと同じだ。恐らく家紋なのだろう。

「へー、加茂家からも来てるんですね。どんな人なんですか？」

霞がひよこつと加茂の後ろから写真を覗き込む。年頃は大学生ごろに見える。顔つきは悪くはない。

「ふむ、そうだな……加茂家次期当主としては、ぜひ一度会ってよい関係になつて欲しい、と言うべきだ」

加茂の表情から、感情は読み取れない。彼はこのようにたびたび自身が「次期当主」であると言っているが、いまいちそれを自慢に思っている感じもなく、咲来から見て謎が多い。

だが、そんな彼の顔に、明らかに不穏な色が浮かんでくる。先ほどの冊子に比べて明らかに乱雑に放り捨てながら、吐き捨てるように口を開いた。

「だが、あえて先輩として言わせてもらえば、こいつは真正のクズなので、写真を見るのすらやめたほうがいい」

「あー、えっと、はい……」

そのあまりの威圧感に、咲来は曖昧な返事を絞り出すのが精いっぱいだった。

「ちなみに、どれぐらい酷いのかしら？」

そんな中でも臆さず質問をできるのが、真依という女だ。心なしか、少し面白がつているように思える。先の禪院何某とどちらが酷いか比べようという魂胆なのだろう。

「そうだな……方向性は違うが、厄介さは東堂以上と言えば分かりやすいだろう」

「どこにでもそんなのいるのね」

「なんとなくわかりました」

どうやら真依と加茂に加えて霞も、その例えでどれほど酷いかが分かったようだ。東堂葵——咲来たちの一つ上の先輩で加茂の同級生——は、控え目に言っても「癖が強い」。特に加茂は彼のせいでだいぶストレスをためているらしい。

「あ、あははは……」

それを見て、咲来は困ったように苦笑して誤魔化する。彼女も何回か東堂と会ったが、それはそれはもう「癖が強い」ことこの上ない。しかも、初見で早々つまらないやつ扱いされたのだ。第一印象のインパクトで言ったら、いきなり蛇蝎のごとく嫌ってきた真

依よりも悪いかもしれない。

(そんな悪い人でもないと思うんだけどなあ)

とはいえ、咲来は特に嫌ってはいなかった。

東堂の行動は、ただ自分勝手かつ気ままなだけ——やることなすこと滅茶苦茶なので「ただ・だけ」と言うのものはばかられるが——で、悪意は全くない。それにああ見えて東堂は呪力や体力だけでなく学力も相当なものな上、恐ろしいことに教えるのもうまいので、実は咲来も何回かお世話になってる。おかげで、呪力と体力もそうだが、学力がグンと伸びた。傍に近寄ると主張しすぎない程度に良い匂いがするのが逆に気持ちわるいとは感じるが。

「ちなみに」

東堂のことを考えてるとストレスが加速するからか、加茂は話題を切り替える。その顔には、先ほどまでと違って笑みが浮かんでいる。

「ええ、ちよつ」

そして彼は話題を切り替えながら、咲来に歩み寄ってきて、ぐつ、と顔を寄せてくる。すぐ間近に、平たいながらも端正な顔立ちのイケメンと言っても差し支えのない先輩のめつたに見せない笑顔がある。

「私も、家の方から、成宮を口説くように言われていてね」



真面目一徹に見えるが、意外とこういうのもいけるらしい。咲来は混乱と恥ずかしさ  
とで、頭が回らなくなり、あわあわするしかない。それを見ている霞もなんだが乙女顔  
だ。ちなみに真依は何が面白いのかケラケラ笑っている。

「次期当主としても成宮が加茂家に来てくれるならそれ——グボツ!!!」

そんな整った顔が、眼前でいきなり歪み、横へと吹っ飛んだ。

「加茂オ！ 咲来ちゃんになりて色目使ってんのドスケベ!!!」

強い怒気を孕んだ高いアニメ声、ロビーの入り口から聞こえてくる。

そちらに目を向けると、「非常に」をつけても足りないほどに金髪を特徴的にセットし  
た、身長が低い少女がいた。

吹っ飛ばされた加茂の元から、箒が宙を浮いて彼女——西宮桃——の元に戻ってくる。

見た目は小さく中学生、下手したら小学生にも見えるが、こう見えても加茂や東堂と同じく、一つ上の先輩だ。ちなみに、この浮いている箒は、彼女の術式《付喪操術》による操作である。見とがめた桃が、加茂の横つ面に箒を思い切りぶつけたのだろう。あの吹っ飛び方から察するに、割と手加減はしていない。普段「加茂君」と呼んでいるはずなのに今は呼び捨てな当たり、だいぶご立腹だ。

「咲来ちゃん大丈夫？ あののっぺらぼうに酷いことされなかつた？」  
「と、特には……」

外国人とのハーフとはいえ、日本人から見ても平たく見えはするものの、加茂のことを「のっぺらぼう」とは酷い言い様である。

桃は同性の一つ上の先輩ということで、よく咲来たちと任務をしている。一年生女子たちをとてかわいがってくれていて、とてもお世話になっている先輩だ。

「……安心しろ。ちよつとした冗談だ。恋愛事なんかにうつつを抜かすつもりは全くない」

「鉄面皮がたまに冗談やると大体シャレにならないことやらかすものよ」

腫れあがった頬をさすりながら立ち上がった加茂の言葉に、桃はつつけんどんに言い

返す。これに関しては、咲来も同意せざるを得なかった。とはいえ、別に悪い気分だったわけではないので、あまり責める気はない。

彼は「加茂家次期当主として」と自分に言い聞かせてるフシがある。家から言われてる以上、口説こうとするのは義務感からして仕方ないのかもしれない。真依もそうだが、呪術界の大御所と言うのは、色々しがらみがありそうだ。

(個性的な人ばかりだなあ)

ぎゃーぎゃー怒鳴ってる桃と、いつも通り天然で神経を逆なでする加茂。それを見て呆れながらも愉快そうに笑っている真依と、苦笑している霞。そんな彼女たちをぼんやりと見ながら、咲来は改めて実感した。

呪術界は、一癖も二癖もあるらしい。

——結局、元々いた三人よりも先輩二人のせいでもちらのほうが騒がしくなってしまう、お見合い写真の方は面倒くさくなつて「ロクなのがいない」という結論を出して、半分も見ることなく放置されることとなつた。



「夏休みにも任務かあ」

八月に入った。世間の高校生どころか高専生も含めて、夏休み期間である。しかしながら呪術師は常に人手不足であり、学業は休みでも、任務に定期的な長期休みはない。

「いいじゃないですか、お小遣い稼ぎだと思えば」

「休み明けの鈍った身体で任務行くよりはいいでしょう？」

咲来と違って、霞と真依はそこに違和感を覚えてはいないようだ。真依はやはり呪術師のことをよく知っているから、本音はともかくとして覚悟はできている。

ちなみに霞はと言うと、任務で出る給料が目当てだ。家が貧乏で幼い弟も二人いて、高校生ぐらいの年齢になったら風俗行くか呪術師になるかぐらいしか道が無かったらしく、長期休みがなく収入が途絶えないのはむしろありがたいようだ。

霞の境遇は、本人の善性や明るさとは裏腹に、苦しいものだ。一般家庭でのほほんど育ち何も事情を抱えていないのは、咲来ぐらいのものである。御三家次期当主の加茂はもちろん、呪術界では珍しいハーフである桃や、天与呪縛によって不自由を強いられるメカ丸、それと一般出身だが小さいころから暴れっぱなしだった東堂など、色々抱えているものがある。せいぜい呪霊——4級や蠅頭ばかりだった——をたまに狩っていた程度の咲来は、どこまでも一般人だ。歌姫からは「それも十分異常だ」と言われたが、周囲がこれでは霞むだろう。

「さ、張り切って可愛くいくわよ！」

そんな彼女たちを引率するのは、今回は桃だ。二年生で、ついこの間等級が上がって準2級術師。《付喪操術》による、呪術師としても珍しい安定的な飛行能力と遠距離攻

撃を持つ彼女は、4級術師三人と言うあまりにも不安な一年生女子を遠目からサポートするのにぴったりの人材だ。同性と言うこともあり、危険度の少ない簡単な任務ではよく一緒になる。

「可愛く」というのは、彼女の呪術師としての矜持で、東堂の「高田ちゃん」ほどではないが、加茂の「次期当主として」と同じぐらいの頻度で現れる口癖だ。男尊女卑の呪術界において、女性呪術師は強さだけでなく、可愛くあること、つまり「完璧」が求められるというのが、彼女の主張だ。真依は思うところがあるらしく同感していたが、霞と咲来にはよくわからなかった。ただ、今まで見た女性呪術師は、みんな綺麗か可愛い、という印象がある人ばかりなので、的外れと言うわけではないのかもしれない。

そんなわけで、補助監督——今回はメカ丸のような武闘派がいないためベテランの女性だ——の運転で向かうのは、京都府の中でも比較的小さな町だ。京都である以上、伝統あるスポットがいくつもある観光地ではあるが、どうしてもメインストリートの陰に隠れがちになっている。何かしら特別な目的がないとわざわざここに観光に来ない、という程度のレベルだ。

「今回の案件は、心霊スポットになっているトンネルね」

車内で内容を改めて確認する。音頭を取るのは桃ではなく、経験を積ませるためにもあえて真依だ。咲来と霞にはリーダーシップが無く、堂々と自分から喋る性格でもない

ので、三人の中で彼女がリーダーになるのは自然な流れだった。

タブレットに映し出されるのは、コンクリート製の古いトンネルだ。昭和期に造られたが開発やらなんやらで使われなくなり、山道でひっそりとさびれている。藁やら何やらが絡みついていて、「いかにも」な雰囲気だ。

得てしてこういうところは、その「いかにも」な見た目だけでスポットになる。山の深いところにあるトンネルなのでどちらかといえば心霊よりも動物や不良、誰も通らないだろうと油断している自動車のほうがよっぽど怖いだろうに。

しかしながら、「呪い」は人々の負の感情が集積して生まれるものだ。心霊スポットして名が通れば、そこに呪霊が発生してもおかしくはない。

「う、うわあ……」

一般人の感性が全く抜けない咲来と霞は、揃って嫌そうな声を上げる。

呪術とか関係なく、こんなところ、絶対行きたくない。

「呪いの仕業の可能性がある被害内容は、ここ半年の間にここに行つたと思われのうち  
の三人が行方不明、ねえ」

次に映し出されるのが、行方不明者のプロフィールだ。

その内容は、こう言うては何だが「ろくでもなさそう」な者ばかりである。

人通りのない場所に真夜中に集まる不良、真夏の肝試しに来た「飲みサー」の軽薄そ

うな大学生、近道しようとかこんな危ない道を通った違反歴がいくつかある一般ドライバー。

なるほど、こんなところにわざわざ来るだけのことはある。

「なんだかありがちな感じね」

傍で見ている桃がつまらなさそうに呟く。ホラー映画で最初に犠牲になるような面子だった。

そして、呪いの仕業ではなく普通に行方不明になりそうな人物たちでもある。不良は勝手にほっつき歩いてるだろうし、このチャラそうな大学生も遊び歩いているだろう。一般ドライバーも長いこと無職で一人暮らしなので、気ままなドライブとしゃれこんである可能性もある。

咲来も霞も、「呪いの仕業ではなさそう」とまず考えた。

「奇妙なのがここからね」

そんな二人の様子を見て、真依が話を進める。

「二人目。二〇一七年三月、不良グループは夜中に行方不明者を含む六人でここに来て、いい年して『探検』したみたいね。三人二組に分かれて、トンネル内と周辺山中をそれぞれ騒ぎながらぶらつく。しばらくするとトンネル組から連絡が入って、一人がいつの間にかいなくなっていた、と騒ぎになったそうね」



なるほど、確かに奇妙だ。咲来はうなずくことで話の続きを促す。

「二人目。二〇一七年六月、このチャラついた女は、活動実態が無い大学サークルのメンバー八人と、夜中にきた。二人四組に分かれて、トンネルを往復して入り口に戻ってくる、という肝試しを実行。三つ目のグループだった行方不明者が、帰りでいなくなる。残されたもう一人が、半狂乱になりながら出てきて、急に隣からいなくなつたと証言したそうよ」

奇妙さは、そこに見いだされる共通点によつて確信が変わる。

「複数人いたうちで一人だけトンネル内で行方不明、ですか」

「トンネルそのものに影響があるなら、全員いなくなつてもおかしくないよね？」

呪霊は、理性が無いため基本節操なしだ。無力な人間が複数来たなら、全員が犠牲になるはずである。

「そうね。問題は三人目。七月頭、友人によると、これからその友人宅に車で向かう約束をしていた、いい近道を見つけたからそこを通つてみると話していた、とのことね。時間は昼間。いつまでも来ないので警察に相談してもらつて、その捜査の過程でトンネル内にて、壁に突つ込んでいた行方不明者の車を発見。コントロールが失われていたらしく酷いありさまだったけど、中には血痕や人体が衝突したあとのようなものはなし、と奇妙な状況だったと記録が残っているわ」

確かにこれは問題だ。

一人目と二人目は、グループで来た中で一人だけが行方不明、かつ呪霊が活発になる夜という共通点があった。だが三人目はもともと一人だし、通った時間も恐らく昼間。性質が真逆だ。

「時間や人数に縛られない……ということは、行方不明者三人そのものに共通点があるってことですかね？」

「失踪しなかった他の人……一緒に来ていた人や、一応道だし他に通った人もいるだろうから、その人たちとの比較もほしいね」

「そうね。あと、暗いトンネルとはいえ一緒にいたはずなのに、いなくなった瞬間に気づかなかつたのも不自然だし、三人目の状況も気になるわ」

咲来と霞が思い当ったことはすでに情報整理の段階で補助監督たちが分かっていたようで、データにまとまっている。行方不明者とその同行者、捜査した警察関係者、依頼された呪術関係者を含め、ここを利用したのは最低でも四十五名。行方不明者の割合は、呪霊が介在しているにしては少ない。三人の間に、他利用者とは違う共通点はこれといって見いだせない。

それと真依が気にしている点は、警察の現場検証資料にヒントがある。

これだけの盛大な事故なのに、中でヒトがぶつかった痕跡がないのだ。まるで「誰も

乗っていない車が動いて」壁にぶつかったかのようなのである。車に標準搭載されている運転記録によると、事故当時はかなりの制限速度オーバーをしていたそうだ。ドライブレコーダーの類を装備しておらず映像記録がないのが不満点だ。

とはいえ、これらの要素を加味すれば、ある程度理由が見えてくる。

「神隠し、だよな？」

呪霊による被害としては、比較的メジャーなものだ。

先日の奈良の山のような「遭難・迷子」にとの違いは、被害者の移動による行方不明・遭難ではなく、まるで瞬間移動したかのようにその場からいなくなる点である。

一緒にいたのにいなくなった瞬間に気が付かなかつた。よくあるパターンだ。

ドライバーについては、「運転中にどこかに攫われ車だけが残った」と考えれば、筋が通る。

これらが呪霊の仕業だった場合、手口はおおよそ一つに絞られる。

——呪霊自身によって一瞬で攫われた。

呪霊は一般人には見えず、超自然的な動きが可能で、そして物体に縛られない。

例えば、悲鳴を上げる暇もないほどに一瞬のうちに口を塞いで攫ってしまえば、神隠しの完成だ。

またこれを応用して、悲鳴も上げられないほど一瞬のうちに丸のみにして捕食する手口もある。車をすり抜けられるとはいえ、抱えて攫うのは、人間が車に接触するので基本不可能だ。だが、丸呑みして呪術次元に取り込めば、すり抜けることはできる。

当然、事情が無ければ、攫うよりも丸呑みの方が手っ取り早いので、この丸呑みする手口が主流だ。体積もある程度自由なので、非術師相手なら、赤子の手をひねる様なも

のだ。

「仮にそうだとしたら、あまり強い呪霊ではなさそうですね！」

霞は安心したのか、実に嬉しそうだ。

仮に丸呑みするとしても、同行者もどんどん食べてしまえばよいはず。それをしないということは、おそらく捕食から「消化」まで時間がかかるか、はたまた捕食そのものが重労働なほどに、活動力が弱いということである。それも、半年で三人しか食べず、わらわら集まった警察にも手を出さない。「食事」の頻度が少なくて済む程に活発ではなくエネルギーを必要としない。つまり、4級クラスだ。

「まあ、そんなところよね」

ここまでの予想は、桃も補助監督も同感のようで、頷いている。この二人は最初から勘づいていたし、それは情報整理の段階でも同じだったからこそ、弱いこの三人に案件が回ってきたのだろう。

とはいえ、それでも死人が出ている事件だ。安全のため、咲来たちの任務はあくまでも祓霊ではなく調査。直接戦闘は積極的に行わず、呪力の弱い補助監督では追いきれない残穢の確認等で、呪霊や呪術師の仕業かどうかの判断、どのような性質の呪霊か、を調べればよい。仮に遭遇して祓えそうなら祓う、ぐらいの気楽さだ。

ポイントは、人間を悲鳴も上げさせず丸呑みする程度のパワーはあるので、不意打ち

で大怪我するのを警戒するべき、ぐらいだ。

「さあ、つきましたよ」

そんな話をしているうちに、目的地に着いた。

止まったのは、トンネル入り口手前。

「……………なるほどねえ」

真依が正面のトンネルを、低く眩く。

——その入り口には、うつすらとだが、それでも確かに、残穢がこびりついていた。



「びやああああああああああああ!!!」

トンネルに足を踏み入れて早々、咲来と霞の素っ頓狂な悲鳴が酷く反響した。

「何が起きたの!?!」

「いきなり敵襲!?!」

先行していた真依が振り返り、しんがりの桃は臨戦態勢に入る。

「む、むしがあああ!!!」

だが二人が叫んだのは、全く関係ない理由だった。

人通りの少ない山奥で、真夏。しかもほどほどに風通しがよく日陰で温度変化が少ないトンネルは、まさしく、虫たちの楽園なのだ。

しかし、いくら一般的な女の子とはいえ、二人は虫に慣れていないわけではない。咲来は歌姫に会う前からしばしば呪霊退治のために一人で山に向かっているし、霞も貧乏暮らしなので家に虫が湧くのも普通だし幼いころはゲームもないので山の中で遊ぶこと



も多々ある。また、高専内でも任務でも山林での行動はよくある。虫には強い方だ。

だがここは、これまでの比ではない。「天国」とはその通りで、まず虫の数が桁違い。しかも人の手が行き届いていないからか自然豊富であり、なんだか大きさが人が暮らす場所で見えるものの比ではない。

つまり、普段見ないほど大きな虫が、ものすごい密度でわらわらという。二人が騒ぐのも無理なかった。

「……もう置いて先いこうかしら」

「なんならここに放置で先帰っててもいいんじゃない？」

そんな二人を見て、呪術師として覚悟が決まっている二人はあきれ顔だ。

というかそもそも、虫けらよりも数百倍グロテスクで恐ろしい呪霊を何回も相手にしているのに、二人は今更何をそこまで怖がるのだろうか。彼女たちには理解できなかった。

咲来と霞は、感性が一般人から未だに歪んでいかない。

真依と桃はそれに呆れはしたが——一方で、どこか眩しさも感じていた。



資料を見た限りでは、何の変哲もない、怪談にありがちなトンネルという印象だった。しかしながら、中に入ってみると、その異様さに気づく。

「落書きがすごいね」

壁一面は、乱雑な落書きの山だ。スプレーで、ペンキで、何か硬いもので掘って、好き勝手に文字や絵を刻みつけている。

この手の落書きは、人が訪れない場所では、むしろ定番だ。不良のたまり場になっていて、不思議と中々上手な落書きを残していく。

だが、ここの落書きは——ドラマで見るような不良が書くようなものに、異質なものも混ざっていた。

カエセ！

崇りが起きるぞ！

地獄に落ちろ!!!

デザインが凝った不良の落書きに比べ、それらは書きなぐったような形になっている。それだからこそ、内容も相まって、執念めいたものを感じた。

「この変な落書きはなにかしらね」

「ホラースポットだし、不良が誰かを脅かすために書いたんじゃない？」

桃の予想には説得力がある。赤のペンキで書かれているあたり、そういわれれば「それっぽさ」を追求したようにも見える。彼女は一年間のキャリアがあるから、そのような現場も幾度か見てきたのだろう。

「古いのから新しいのまで、いっぱいありますね」

昼間とはいえ薄暗い中、霞が目ざとく特徴を見つける。顔に近寄ってきた虫を払いながらだったので格好はつかないが。

「じゃあ、結構長い間、人が来ているのね」

「でも、被害はここ数か月だよ？ 呪霊が活動を始めたのは、最近つてことかな？」

その可能性は高い。真依と咲来が立てた予想に、桃は及第点をつける。その可能性は高いだろう。

この任務は、やはり楽に終わりそうだ。例外はいくらでもあるが、呪霊は、基本的に生まれたてほど弱い。人を食らう、呪術師を食らって呪力を奪う、人々の感情が集まって呪力が増す、などで呪霊は成長する。人間の感情から生まれただけあって、そこは人間と同じようだ。

そうして見渡しながら、トンネルの半ばほどまで来た。目に呪力を籠めての警戒は怠っていない。だが、呪力や呪霊の気配どころか、残穢すら、入り口以上のものが見つ

からない。

もしかして、トンネルの中ではなく、入り口にヒントがあるのでは？

そう思い始めて、咲来はポケットからスマホを取り出す。

予定では、トンネルの向こう側まで調査したら、来たトンネルを戻りながらも一回調査する、という手筈になっている。それを変えるつもりはないが、もし入り口が重要だとしたら、外で待機している補助監督が危ない。一応連絡を入れておくべきだろう。

「うそ、圏外だ」

咲来の驚き声が、トンネルに反響する。さほど大きな声ではなかったが、トンネル半ばとゆうことでセミの鳴き声も届かなくなりかなり静かだったので、反響も相まって、三人を驚かせてしまう。

「なにそれ、ポンコツじゃないの？」

真依の言うことは最もだ。いくらトンネル内と言っても、高速道路や新幹線のトンネルのように長い、というわけではない。これぐらいならば、今時なら電波が届いて当然だ。

それならば仕方ないと霞が自分のスマホを取り出すが、こちらも圏外だった。それも当然で、貧乏な彼女は、機械に関心が薄い咲来以上に古くて性能が低い機種を使っているし、電波が安定しないといううわさもある格安SIMだ。

「あら……」

「あーこっちも」

そして、不思議なことに、真依と桃のもまた、圏外を示していた。

本格的ではないとはいえトンネルの半ばというのものもあるし、そういうえばここは山の中だ。仕方がないのかもしれない。

もしもの時に備えて、電波がもつと安定する端末を経費で支給してもらえないだろうか。

四人とも、そう同時に考えながら、仕方なく、予定通り、トンネルを進むことにした。

## 6話・トンネルを抜けた先

時を同じくして。

呪術高专京都校の職員室で、歌姫は事務作業をしていた。

呪術師は常に人手不足。そんな人手不足を救ってくれる未来ある生徒たちを育てる機関だというのに、結局人手不足が祟って、教員の仕事は多い。東京校のバカ目隠しのように親しい補助監督に丸投げパワハラすれば楽をできるのだろうか、あいにくというべきか、歌姫はそのようなことをする性格ではなかった。

今作っているのは、一年生たちの前期の様子をまとめる報告書だ。本来彼女は二年生の担任で、これは一年生の担任がやるべき仕事なのだが、先日とある任務で怪我をしてしまい、彼女が代行している。こういったところにも人手不足が響いてくるのだ。

そういうわけでやらされているのだが、モチベーションは無くはない。今日は、普段は東京にいる家人硝子がたまたまこちらに仕事で来ているため、業務が終わった後は久しぶりに親友との食事——と表現するには酒が多いが——なのだ。それを楽しみに、この作業も順調に進んでいる。もともと、家人が来ている理由と言うのが、この作業の原因でもある一年生担任の治療のためなのだが。

粗暴な口調とは裏腹にそれなりに几帳面な彼女は、自分が担当する二年生たちの分は終わらせている。三人とも呪術師として見ても性格に難あり——特に一人——だが、実力で言えば粒ぞろいだ。特に手間はかからなかった。

一年生の分も、霞、真依、メカ丸の報告書はもう終わらせている。これから取り掛かるのは、咲来のものだ。

顔写真付きの資料を眺めながら、ふつ、と歌姫は笑う。初めて会った時から、もう一年半だ。時の流れが速く感じる、から連想される悍ましい事実——自分の年齢——から目を逸らしつつ、なつかしさに浸る。

呪力と術式を持っていて、幼いころから自分の意思で呪霊を祓っていた、ただの女の子。

その動機は、「人助け」。そこに、咲来は、確固たるやりがいを感じていた。いくら力を持っていても、あのグロテスクな呪霊と、ただの女の子が自分から戦おうとするのは、中々ないことだ。その動機が人助けとなれば、なんとも頼もしいと思つたものである。強力な術式も持っていたので、あのポロ神社と弱り切つた呪霊を吹っ飛ばすのを見た瞬間、歌姫は、人手不足である呪術界の未来を任せられると思つて、スカウトすることにした。

一方で、そこに危うさも感じていた。



まずは、分かりやすい危険。

当時の彼女は、術式こそ強力だが、あらゆる点で未熟だった。これまで運が良かっただけで、ほんの少し本格的な——4級上位クラス——呪霊に出会えば、むごたらしく死んでいただろう。歌姫がスカウトしたのは、そんな彼女を保護する意味もある。

それともう一つ。

頼もしさの裏返しだ。

彼女の動機は「人助け」。それ自体は立派なことではあるが、この「呪いの世界」において、それがモチベーションと言うのは、不安定さを感じる。

そもそも、「呪い」は人が負の感情から生み出したものだ。それによって起こることに、良いことなんて一つもない。

呪術師の使命は非術師を守ることだが、「守れたら幸運」であるのが現実。人助けをしようとしても、助けられないことの方が多い。

それに、人の負の感情に嫌でも直面し続けるため、「人を助ける」ことそのものに、疑念が生じることすらあるだろう。

——とても強い後輩が、そのせいで呪詛師に身を落とした。

非術師を助けるのが使命だ、という、お手本のような呪術師だったが、醜い現実には直視し続けて、それが、裏返った。

言つてしまえば、咲来の動機は、大きな不安定さを絡んでいる。

もし、助ける対象への嫌悪感が募つたら。

もし、助けられなかつたら。

もし、助けるどころか自分のせいで傷つけてしまつたら。

——咲来は、どうなってしまうのか。

そうして頭によぎるのは、東京校の学長の方針と、その教師である憎たらしいバカ目隠しから言われたこと。

「……いや」

首を振る。

色々不安はあるが、咲来が頼もしい呪術師の卵であることは間違いない。それに、不安定さを孕むからこそ、スカウトして保護する意義がある。厳しい現実を乗り越えた呪術師の先輩がいるほうが、彼女が折れる可能性を減らせるからだ。

——呪詛師になった後輩のリベンジを、あの子に仮託しているだけじゃないか？

一瞬、嫌な自認がよぎるが、それも首を振って払う。

そしてそんな不安を消し去るように、彼女は総合評価欄にもともと書こうと思っていたことを入力しはじめた——

「なんだ、こんな時に」

——直後、作業に使っているパソコンに、メールが入ってきた。

いつもなら後回しにするが、目についた件名が、それを許さなかった。

【注意】、とついている。

メールには通常の他に、注意、警戒、緊急、非常事態、などの段階がある。

緊急・非常事態は、電話や校内放送、警報が使われるレベルの出来事が起こった時であり、メールはその付随資料だ。

一方、注意・警戒はその前段階で、今すぐ危急に動くほどではないが、すぐに目にしておくべき内容だ。似たようなものとして「至急」もあるが、そちらは事務的な意味での急ぎである。

【注意】である以上、今すぐ読まなければならない。歌姫は作業を中断し、それを開く。そしてその中身を一瞬で読み終えると同時に——

「おい！ 今すぐ出せる車はあるか!？」

——嫌な予感が駆け巡った。

すぐに立ち上がり、自分も準備をしながら、職員室にいる補助監督に声をかける。

「今日は東堂と加茂とメカ丸も非番だったはずだ！ すぐに呼び出せ！」

自分一人では足りないかもしれない。三人のうち、誰か一人でも来てくれればありがたい。

にわかにあわただしくなる。1級術師が揃う教師陣の中では劣るとはいえ、彼女も準1級術師だ。そんな彼女がここまで慌てるからには、とんでもないことが起きる可能性が高い。周囲も焦らずとも急いで、冷静に指示に従い、動いていく。

——セキュリティ上危ない話だが、慌てていた歌姫は、パソコンをログアウトどころか、画面すら付けっぱなしであった。

——そこには、送られてきたメールの内容が、映し出されたままになっている。

件名：【注意】西宮桃、禪院真依、三輪霞、成宮咲来の任務先について

調査の結果、新たな事実がわかりました。

ホラースポットになった原因は、トンネル工事までの経緯にもありそうです。

元々予定地にはさびれた寺があり、管理者こそすでにいななくなっていました。近隣集落で親しまれていました。工事の話が入ると近隣住民は反対しましたが、工事は強行されました。

その工事の途中、ずさんな管理のせいで落盤事故が起き、作業員一名が死亡しています。近隣住民から崇りと脅されましたが、その後は対策をしたこともあって無事に完成しました。

・寺を潰して無理やりトンネルを作った点

・落盤事故で死者が出ている点

この二点が、ホラースポットとなった原因になっていそうです。

ただの雰囲気によるホラースポットと比べ、人々の負の感情が集まりやすい状況です。

これにより、もし呪霊が発生していた場合、予想よりも強力なものである可能性もあります。

同内容の連絡を、現地の四人および補助監督にも送っています。

準備をしながら、スマートホンを取り出し、咲来たちに電話をかける。

山中の、しかもトンネル内を調査しているからか、電話がつながることはなかった。恐らく、メールも届いていないだろう。

「……………今時、あの程度のトンネルで繋がらないなんてことがあるか!？」



歌姫は叫ぶ。

——すでに彼女たちは、呪いの領域に引き込まれている。

†  
†  
†

「危ない！」

霞がとっさに、咲来に向かって鋭く踏み込みながら、居合切りを放った。

「ちよっ!？」

訳も分からず、咲来はとっさに避ける。そのせいでバランスを崩し転んでしまった。直後、激しい衝突音が鳴る。金属と金属がぶつかり合う音だ。

咲来が見上げる先では、霞の刀とツルハシが、お互いに押し合っていた。

「呪霊!?!」

「咲来ちゃんはこつち!」

パニックになった咲来を、桃が無理やり引つ張って回収し、自分が乗ってる箒の後ろに乱暴に乗せ、宙に飛び上がって一時離脱する。

「わ、きやあ!?!」

「いい加減慣れてよね!」

かろうじて掴まって振り落とされなかつた咲来に、桃が苛立たし気に叫ぶ。

真依の銃と違って狙いをつける必要が少ないタイプの遠距離型の咲来は、桃の箒に乗って後方上空から戦うことができる。その相性の良さから二人はこうして組むことが何度かあったが、未だに細い棒一本で宙を飛ぶこの感覚に、咲来が慣れることはなかった。可愛い後輩ではあるが、毎度毎度すぐ後ろで叫ぶのは勘弁してほしいものだ。とはいえ今声を荒げているのは、急な非常事態であるからと言うのが大きい。

「離れなさい、霞！」

咲来と違いすぐに対処に移れた真依が、霞とつばぜり合いめいたことをし続けているツルハシに呪力を籠めた弾丸を放つ。金属同士の衝突なので近くにいた霞に跳弾が当たる危険はあるように見えて、それはない。むしろ跳弾する先は、呪霊の口の中だ。

そう、ツルハシは、呪霊が持っているものではない。

呪霊の全体像が、暗いトンネルの中でもようやく見えてくる。

その体躯は巨大で、ワンボックスカーと同程度のサイズだ。暗い紫と深緑の中間のような形容しがたい汚らしい色をしていて、ぶよぶよとうごめいている。手足のようなのは無く、巨大な球体が宙に浮いているような格好だ。身体の各所からはまるで大きな石で殴られたように潰れた人間の頭が生えていて、それらはグロテスクな見た目とはアンマツチに、人工的な黄色いヘルメットをかぶっている。

そして特徴的なのが、ツルハシだ。

なんと、それは呪霊の歯。大きく開けた口には、まるで鋭い牙のように、上下に鈍く光るツルハシが無数に生えているのだ。

「ヤっつきまで気配はしなかったのに！」

跳弾を口の中に放り込まれても効いた様子はない。それでも追撃をかけるべく、桃が箒を操って突風を発生させる。大きく開けた口にもろに風を受けてしまい押された呪

霊は少し怯むが、それでも気にせず、目の前の霞を食らおうとする。

「シン・陰流、《抜刀》！」

霞はそれを持ち前の瞬発力では避けず、正面から受けて立つ。ただしツルハシと打ち合つては日本刀の刃は負けてしまうため、峰で受けている。

「霞ちゃんはそのまま下がつて！」

ようやく状況を受け止められた咲来が、呪霊の背後に、上空から、腰のポーチから取り出した金属球を投げる。それと同時に、霞はぶつかり合つた勢いを利用して大きく後ろに跳び、距離を取った。

——直後、トンネル内に、爆発音が響き渡る。

咲来の《爆散》が発動した。今投げた金属球は、任務が無い日に毎日一個ずつ、真依が《構築術式》でこつこつと作ってきたものだ。弾丸と違って構造が複雑ではない

め、以前奈良の山で鹿の呪霊に放った鉛玉よりも質量が大きく、爆発の規模が大きい。「……………これでもダメみたい」

咲来が小さく漏らす。さすがに少しは効いているように見えなくもないが、その呪霊は無傷だった。3級どころか2級でもあの爆発は相当に痛いはず。巨体にふさわしく、タフなのだろう。

「想像よりも大物が出てきたわね」

「だとしたら、もっと被害が大きくてもいいはずなんですけど」

真依の眩きに、霞が震えた声で反応をする。楽な任務で終わると思ったら、こちらが現状出せる最大火力の一角を余裕で耐えられてしまった。霞の声音は、そのことに驚きと不満を抱いている証だ。

一方真依はと言うと、もっと深いことを考えている。数か月かけて襲ったのは三人だけと言うのは、この強さにしてはおかしい。呪霊は欲望に忠実なので、もっと無差別に人を喰っているはずだ。

考えられるのは、それが呪霊にとっての何かしらの「縛り」になっていること。

とはいえ、それを考えている暇はないし、分かったところでどうしようもない。今はとりあえず、逃げるのが先決だ。

そう思って、真依は出口の方を振り返る。方向感覚と距離感覚はばつちりで、今は

入ってきた方とは反対側の方がトンネルを出るうえでは近いはずだ。

——しかしそこに、トンネルの続きは無かった。

いや、もはやここは、「トンネルではない」。

周囲を見回しても、ぱつと見は普通のトンネルだ。

だが、元々のトンネルとは違う。

人工的なすべすべした壁や天井は、まるで工事途中のようにごつごつとしていて土が露出している。落書きもない。また、入り口や出口のようなものは無く、進んできた道にも、これから進もうとしていた道にも、大量のがれきが落ちていて、塞がっている。

「嘘!? 生得領域!」

経験豊富な桃が、この異常事態の正体を即座に看破した。

生得領域。生まれながらに持つ「心の中」ともいうべきものが、現実に具現化した領域。

並の呪霊や術師では、これを展開させることはできない。京都校最高戦力の術師である東堂や楽巖寺ですら不可能だろう。

それを展開しているということは、つまり——なんらかの術式を持っているうえに、1級術師である楽巖寺よりも同格以上である、ということだ。

「◆◆●▼▲——!!」

呪霊が咆えて、霞や真依を無視し、宙を飛ぶ咲来たちに一直線に向かってくる。巨体だというのにその速度はすさまじく、さながら砲弾だ。

「当たるわけないでしょ!」

桃は即座に箒を操って回避し、すれ違いざまにその体へと蹴りを叩き込む。踏ん張りがきかず姿勢も良くなくまた小柄な女の子の細い足だが、呪力で強化されたその蹴りの威力は強く、呪霊の体にめり込む。それでも少し体勢が崩れる程度にしかならなかったが、メインの目的であったその反動によって、距離を取ることに成功した。

「( )は相性悪すぎるでしょ、桃!」



「そもそもこんなところに派遣されたのが不思議なぐらいにね！」

真依と桃が軽口を叩きあいながら、弾丸と突風を呪霊に浴びせる。桃の本領は自由に浮遊できることを活かした高所からの一方的な戦闘や索敵であり、こうした閉鎖空間には弱い。仮に生得領域が無くて、トンネルでも發揮できなかつただろう。それでも派遣された理由は、トンネルがほぼ直線なので、障害物が無く離脱が最速でできるからだった。

だがそんな利点も、逃げ道が塞がれた今は全く意味がない。咲来たちは、完全に、呪霊に閉じ込められたのだ。

突風も弾丸も、やはりそこまで効果は無い。呪霊はUターンして、また咲来と桃に向かって突っ込んでくる。どうやら、今のところ最大火力を見せている咲来に狙いを定めているらしい。だが、この距離と速度なら、桃は余裕で躲せ——

「も、桃先輩？」

——しかしいつまでたっても、桃は動こうとしない。呪霊の巨体が、みるみる迫ってくる。

「!!!」

咲来は声にならない悲鳴を上げた。なぜだかわからないが、桃は動けないようだ。死の恐怖が、咲来の心を覆いつくす。

——直後、景色が変わった。

「びっ!」

ものすごい勢いで引つ張られ、情けない悲鳴が漏れる。桃が、急に箒をこれまでにない速度で発進させたのだ。

これにより、ギリギリながらも呪霊の突撃を回避することができた。勢いを殺すことができず、呪霊は地面に激突し、爆音とともにクレーターを作る。すさまじい勢いで砂礫が飛び散るが、咲来と桃はその圏内からはとつくに脱出できている。

「これならどう!」

桃が急旋回して呪霊に向き直り、箒を操って突風を巻き起こす。今度はただの風ではなく、咲来の爆発と呪霊の突撃による砂礫がそれに乗せられ、鋭い刃と弾丸となって襲い掛かった。

桃はあえて直前まで引きつけることで、呪霊の激突によるダメージと、それによって発生する砂礫を狙っていたのだ。どうやらこの呪霊、1級クラスのフィジカルと呪力を持つているが、そこまで賢くはないらしい。

「まだまだ!」

さらに反対側から、霞が斬りかかる。呪霊の体が盾になって、砂礫が当たることはない。先ほどのように居合の強い一撃ではなくただの袈裟斬りで威力は低い、今はこれ

で十分。まるで斬首するかのようになり、呪霊から生えるヘルメットがついた潰れた頭を切り落とす。

「こつちもあるわよー！」

さらに真依が弾丸を一気に三発放つ。それらは寸分たがわず同じヘルメットの同じ場所に当たり、一発目でひび割れを起こさせ、二発目でさらに罅を拡大させ、三発目で完全に破壊する。

霞と真依は、この短時間である程度の方針を立てた。ぶよぶよした見た目通り、本体は衝撃には強いが固くはない。とびきり厄介なのがツルハシの牙で、こちらは対処不可能。だがヘルメットは斬り落としたり破壊したりすることで剥がすことができる。そうして本体が露出している部分を増やし、攻撃を通しやすくする作戦だ。

「私だってー！」

そして咲来もようやく動き出す。砂礫に乗じて金属球を放り投げ、呪霊の口の中に放り込む。そして霞が距離を取ったタイミングで、それをまた爆発させた。



呪霊が、岩同士がこすれ合うような独特の不快な声で叫びながら悶える。体内で起きた大きな爆発は、さしもの1級相当の呪霊にも響いたようだ。大口が開いていたため爆風の大部分が逃げてしまったが、それでも絶大。その隙を見逃さず、霞と真依がさらに追い打ちをかけ、ヘルメットをはがしていく。

(いけそう！)

最初は絶望したが、目に見えて効き始めている。こちらが一方的に攻めている形だ。咲来は少しだけ口角を上げて頷く。これなら、このまま祓えそうだ。



そしてそんな希望を吹き飛ばすように、呪霊が咆えた。

先ほどの岩同士がこすれ合うような声ではない。遠くから人が泣き叫んでいるような、それでいてトンネル中に響き渡る、本能的に不快な声。

直後、天井が崩れた。

「危ない！」

無数の瓦礫が降り注いでくる。まず最初に、空中を飛ぶ咲来と桃に襲い掛かる。嘩然として頭が真っ白になった咲来を、桃が箒を思い切り振るうことで投げ飛ばし、迫る瓦



礫から離れさせる。投げ出された咲来は、塞がっている端のギリギリまで飛ばされる。その衝撃で丈夫なはずの制服はボロボロだし、呪力でできた金属球やその他道具を入れていたポーチも壊れて外れかけている。それでも、瓦礫の雨から逃れることができた。

だが、彼女を助けたせいで桃自身の避難が遅れる。それでもすさまじい反射神経で身体への直撃は避けたが、箒には当たってしまった。瓦礫に押された箒の後ろ部分は、グン、と一気に下へと押し込まれる。その反動で、桃の乗る部分はまるでシーソーのように勢いよく持ち上がり、彼女はそれで投げ出されてしまった。そして不幸なことに、降り注いでいる途中の別の別の瓦礫に強く衝突してしまい、一緒に力なく墜落する。それと同時に箒も制御を失って力なく地面にポトリと落ちて、次々落ちてくる瓦礫にへし折られてしまった。

また、真依と霞も深刻だ。二人とも走って逃れようとするが間に合わず、呪力で全身を強化し、さらに頭を腕でガードしてうずくまる。そこへと容赦なく、無数の瓦礫が降り注いだ。

「みんなっ!?!」

咲来が悲痛な悲鳴を漏らす、全く意味をなさぬ。瓦礫が降り注ぐ爆音と、かすかに聞こえる霞たちの悲鳴。腰を抜かしたまま立ち上がることもできない彼女は、全くの無力だった。

これこそが、この呪霊の術式。トンネルと言う閉鎖空間で、天井から無数の瓦礫を降らせる。呪霊自身は一番頑丈な歯で受けるべく上を向き、また自分の周辺を薄くすることで制御して、無傷だ。

やはり、1級相当の呪霊だ。満足げに嗤って追撃しようとしないうその姿に高い知性こそ感じないが、先ほどまで突撃だけしかなかったのは、そのフィジカルだけで十分だと思っただけに過ぎなかった。奥の手であろう術式はかなり強力だ。呪力ガード込みでも、広範囲の多人数を戦闘不能、もしくは即死や瀕死に一瞬で追い込むことができる。術式があるというだけで準1級扱いが基本だというのに、これほどの規模だ。1級の中でも上の方だろう。

「そん、な……」

身体が、声が、震える。目からは涙がこぼれ落ち、悲惨な光景が滲んでいく。人助け。

呪術師となる前からの理由であり、呪術師になった理由であり、呪術師となった後の理由でもある。

しかし、彼女は今、どうあがいても、それをすることができない。

力不足。彼女は、人を助けると豪語するには——あまりにも、弱かった。

多くの人を助けたい。

だが、真の脅威の前では、身近な親友や先輩すら助けることができない。ひとしきり嗤って満足した呪霊が、こちらを向く。目のようなものは無いが、その口の形から、嘲るように見下しているのが分かった。だが、それがわかったところで、どうしようもない。

死ぬ。

何よりも根源的な恐怖が、思考を覆いつくした。

絶望と恐怖が、さらに全身の力を奪い、震えを強くする。もはや咲来は立ち上がら

ころか、体を起こしていることすら精いっぱいだ。  
そんな咲来の眼前で、呪霊がまた天井を見上げる。

そこには、ひときわ大きな瓦礫が三つ、浮かんでいた。

咲来は分かってしまう。悲惨な先ほどの光景は、脳と目にこびりついていた。

あの巨大な瓦礫の真下には、霞たちが埋もれている。

呪霊はあれを落として、三人に止めを刺すつもりだ。咲来の目の前で、咲来に見せつけるように。

「だ、だめ……」

力のない声が口から洩れる。手を伸ばし、ふらふらと立ち上がり、おぼつかない足取りで歩きだす。

一歩、二歩、三歩……四歩、五歩……六歩。

ゆっくり、ゆっくり、咲来は、何ができるわけでもないのに、呪霊に向かって歩くことしかできない。

そんな彼女を、あえて瓦礫を落とさないで待ちながら、ニタニタ笑いながら見下す。

そして、ついに呪霊に手が届こうかと言う直前。

「——っ！」

呪霊が少し体を動かし、足元の瓦礫を咲来に飛ばした。ほんの小突く程度の勢いだったが、今の力が抜けた咲来には避けることもできないし、耐えることもできない。声にならない悲鳴を漏らし、倒れる。

「いや……だめ、おねがい……」

情けなく懇願する。

——親友二人が。

こんなこと、意味がないことも分かっている。

——可愛がってくれた先輩が。

それでも、こうすることしかできない。

——死んでしまう。

彼女は、あまりにも弱かった。

——助けられない。



呪霊が大口開けて、嗤う。

それと同時に、空中の大きな瓦礫が、ほんの少し、持ち上がった。  
もうすぐ、落とされる。

霞が、真依が、桃が、殺される。  
助けられない。

「いやあああああああああああああ  
!!!!!!  
」



甲高い悲鳴を上げる。

そしてとつさに、落下の衝撃で外れかけていたポーチを腰から外し、呪霊に投げつけた。

落とすのに夢中な呪霊はそれに気づかない。

啜うために開いた大口に、何本も並んだツルハシの隙間を通って、ポーチが入り込む。

「!!!」

先ほどの呪霊もかくやと言うほどの、意味をなさない金切り声で悲鳴を上げながら、ギョツと目をつむり、全身に力を籠める。



世界が、  
弾けた。

視界が真っ黒に染まる。黒と緑が混ざった衝撃の奔流が、トンネル中を覆いつくす。呪霊を、瓦礫を、壁を、天井を、咲来を、霞を、真依を、桃を。無差別に、暴力的な爆風が、全てを吹き飛ばした。



八月半ばのうだるようなうんざりする暑さ。

だが、呪術高専の職員室はクーラーが効いている。

それでも庵歌姫は、あまりの憂鬱さに、深い、深い、ため息をついた。

今まででも屈指の気乗りしない仕事だ。

八月初旬。京都校一年生の4級術師である咲来、霞、真依と、二年生の桃が、京都府内のトンネルへと調査に向かった。

今書いているのは、その詳しい事後報告書だ。

あのトンネルには、予想外の強い呪霊がいた。

1級相当。それも術式もフィジカルも呪力も強力で、しかも遭遇したのはその呪霊のホームグラウンドであるトンネル内。

当然、勝てるわけがない。

実際、東堂、加茂、メカ丸を連れて歌姫が現場についた時は、酷いありさまだった。

目についたのは、大量の瓦礫と、その中で倒れる、ボロボロの四人。

西宮桃、重傷。全身に軽度の骨折、内臓損傷、無数の打撲と切り傷。

一番軽傷だった桃ですらこのありさま。一年生三人は、もつとひどかった。

禪院真依、重体。全身裂傷、内臓損傷、数か所重度の骨折。左足首から先は潰れていった。

三輪霞、重体。全身裂傷、内臓破裂、全身に重度の骨折。右足が根元からちぎれていった。

成宮咲来、重体。全身裂傷・打撲、内臓破裂、全身に重度の骨折。右膝から先と左肘から先がちぎれていた。

桃以外は瀕死で、まだ生きているのが不思議なほどだった。

幸い、医療と治療に使える《反転術式》のエキスパートである家入硝子が京都に来ていたため、迅速な治療が間に合い、全員一命をとりとめた。それどころか、今は全員が五体満足であり、傷もほとんどない。治療を早く済ませ、また家人が過去これ以上ないほどに頑張ってくれたおかげだ。療養とりハビリが必要だが、今後も家人によるケアもあれば、夏休み終了となる九月半ばまでには復帰が可能だ。



それでも、歌姫の気分は、これ以上ないほど沈んでいる。  
身体上は、復帰可能。

これ自体は、喜ばしいことだ。

それでも、「心」は、そうはいかないものである。

成宮咲来が、自主退学を申し出てきたのは、つい先ほどの事だった。

†  
†  
†

一番軽傷だった桃が最初に目覚め、最後の最後まで意識を保っていた彼女が、起きたことを証言してくれた。

入り口にだけ残穢を感じたこと。トンネル内で気配もなくいきなり襲われ、さらにはつのままにか生得領域に取り込まれていたこと。急に強力な術式を発動し、全員が戦闘不能になったこと。

そして、咲来が、呪力を暴走させたこと。

生物はだれしも、限界を超えて無理が出ないよう、無意識に力をセーブしている。呪力に關しても同じで、特に呪術師は、術式が暴走しないよう、無意識を超えてさらに意識的にセーブすることを求められる。

例えば咲来の場合。本人の能力の限界と言う面が強いが、制御範囲内に収めるとしたら、《爆散》できるのは一度に一つまで、呪力質量はせいぜいスマートホン程度、連発は出来ず数秒のタイムラグがある。

だが、あの時。限界まで追い込まれた咲来は、呪力を暴走させてしまった。

ポーチの中に入っていた金属球は二十七個。それらが一気に、呪霊の体内で爆発した。一個だけでもかなりの爆発だが、それが一気に二十七個。

しかし、それだけに収まらない。

なんと咲来は、自身の限界をはるかに超え——呪霊が生み出した瓦礫すらも、《爆散》させた。

そう、あの瓦礫は、術式によって天井から崩れてきたものではなかった。仕組みとしては真依の《構築術式》と同じで、呪力によって大量の瓦礫を生成していたのだ。真依の《構築術式》は呪力の範囲でなら何でも作れるが、あの呪霊の場合は、瓦礫しか作れない代わりに、一瞬で大量に作れるのだろう。

当然、《構築術式》と同じく、もはやコントロールから外れたものだ。咲来の《爆散

》の対象になりうる。

暴走した咲来の呪力と術式はそれらをも《爆散》させ、甚大な爆発を生み出した。規模から逆算するに、呪霊のそばにあった、拳大から顔面大ほどの瓦礫を十数個。結果、その大爆発によって呪霊は消し飛んで、祓われた。

だがその爆発は、咲来自身、そして霞たちも巻き込んだ。

こうした証言や家入の検証を合わせると——四人の大怪我の原因の大半は、咲来の《爆散》によるものだ。

呪力でガードしていたから、瓦礫によるダメージは、せいぜい全身裂傷と打撲、軽度の骨折程度。

だが、暴走した《爆散》による爆発の威力は、すさまじいものだった。

内臓損傷・破裂、重度の骨折、身体欠損。

こうした瀕死の重傷は——呪霊ではなく、咲来が負わせたものだった。

目が覚めた咲来は、それを知り、酷くショックを受けた。このことは本人のためを思つて知らせなかつた。それでも、起きた当初は混濁していた記憶も、徐々に鮮明になつてくる。賢い彼女は、瓦礫ではそこまでの怪我にならないこと、その原因が爆発であること、それを起こしたのが自分であることを、すぐに分かつた。つまり――

——助ける助けないどころか、自分が酷く傷つけてしまったと、理解してしまつたのだ。

それに気づいた直後の錯乱状態は酷いものだった。精神安定剤と鎮静剤で辛うじて落ち着いたが、それでも、ずっと、泣きじやくっていた。

その姿を見るのは、酷く辛かった。それでも歌姫は、自分が彼女から尊敬されていたのを知っているため、彼女のためを思って、毎日お見舞いに行った。それは、呪術の世界に咲来を誘ってしまった、つまりこんな事態を招いてしまった、自分の責任を少しでも果たすためでもある。



そして、先ほどお見舞いに行ったとき。病室で、咲来から、自主退学の意味を告げられたのだ。

「くそっ」

何が教師だ。

こんな世界に誘ってしまって、心優しい女の子の体と心を、深く傷つけてしまった。その結果、入学四か月と言う早さで退学を決意させてしまった。

酷い自己嫌悪から、悪態をつきながら、思わず机を殴る。職員室に激しい音が響き渡ったが、周囲も分かっているため、何も反応しなかった。

今書いている報告書は、事件の詳細だけではない。

咲来の退学と、それにまつわる諸々の書類もある。

怒り、悲しみ、自己嫌悪、トラウマ、後悔……いろいろなものが押し寄せてくる。

そしてそれと同時に、虚しさもあった。

彼女のパソコンのデスクトップの端。そこには、あの日書いていた、作りかけの、前期の報告書がある。

メールが来て、中断してしまった、咲来の報告書。

そこに書こうとしていた言葉。

『まだまだ未熟だが、後期には3級術師へと昇格可能。』

咲来は、自分をずっと弱いと思っていた。自信が無かった。それでも、担任や歌姫の目から見て、彼女は、順調に成長していた。

「まだまだこれからだったのに……」

呪術師としての、明るいこれから。

それは、咲来が歩むはずだった、闇のない、普通の女の子としての人生——あるかもしれないなかった「これから」を、犠牲にさせた上でのものだ。

だが、それも、断たれた。

咲来にあった、二つの「これから」。

そのどちらも、歌姫が奪ってしまった。

——呪術師はクソ。

かつての後輩が言っていた言葉が、歌姫の脳裏に、ふと、よぎった。

†  
†  
†

咲来が退学することを、霞たちにどう伝えるか。歌姫の口からすぐに伝える方法、または辞めた後に事後的に歌姫が伝える方法、この二つのうち、後者を歌姫が勧めた。これならば、咲来は引き留められることもなく、退学できるからだ。

しかし彼女は、あくまでも自分の口で伝えることを選んだ。四か月と言う早さで辞めること、呪力を暴走させ重体にさせてしまったことを、直接謝りたかったからと言うのもある。

三人に伝えた時、彼女たちは酷くショックを受けた。霞どころか、真依や桃ですら、泣きながら彼女を引き留めた。

もし彼女があそこで呪力を暴走させなければ、全員が呪霊に殺されていただろう。それなのに、彼女が責任を感じて辞めることに、納得ができなかった。

呪術について何も知らない同士で奇跡的に出会った、気が合う普通の女の子同士の親友。

嫌いだった自分の術式ちからの新たな可能性を見出してくれた親友。

甘いところもあるが、誇り高い意志で呪術師になることを選んだ、可愛い後輩。

そんな咲来が離れていくことが、三人はどうしても受け入れられなかった。

しかしそれでも咲来の決意は固い。咲来自身も色々想うところがあつて酷く泣いてしまったが、それでも退学の意味は曲げなかった。

そして、八月の末。

咲来が呪術高专を去る日となった。

「二人とも、わざわざありがとね」

突き抜けるような真夏の青空の下。高专の入り口。咲来が去るこの瞬間、それぞれ大きな紙袋を持った霞と真依が、そこで待ち構えていた。

それを見た咲来は、嬉しそうに、申し訳なさそうに、そして悲しそうに、苦笑する。

そんな咲来の姿は、いつもとは違った。

真つ黒なのにごこ可愛らしさを感じたワンピースタイプの高専指定制服は、ただの私服に。低めの位置で結んでいたポニーテールは、二つ結びのおさげに。

その姿を見て、霞と真依は、改めて、彼女がここを去るのだと実感した。

二人は、咲来のポニーテール姿しか知らない。本人曰く、あれは、高専入学に当たつて気分を変えるためのものだったらしい。それが、元のおさげに戻っている——呪術師

から、一般人に戻るといふことの象徴に他ならない。

「ねえ、今ならまだ間に合うわ。考え直す気はない？」

真依が睨むように見つめてきながら、問いかけてくる。その目つきは怒っているようだが、瞳は揺れているし、声を振るえている。

最初は、やたらと嫌われていた。

どんな心変わりがあったかは知らないが、あの奈良県での出来事以来、一気に仲が深まった。理由は恥ずかしらしく話してくれなかったが、今では、大切な親友だ。

「そうですよ！ せっかく、ここまでやってきたんです。まだまだこれからじゃないですか!？」

霞が、涙を流しながら、縋り付くように引き留めてくれる。いつもの底抜けに明るい彼女が嘘みたいだ。そんな彼女の顔を曇らせてしまっていることに、咲来は申し訳なきを覚える。

咲来は少し人見知りをするタイプだが、霞とはすぐに仲良くなれた。性根が、どこまでも合っていたのだろう。彼女がいたからこそ、短いながらも呪術高専生としての生活は、最高の思い出と言えた。彼女もまた、大切な親友だ。

「……ううん、ごめんね」

それに対し咲来は、明確ではないものの、拒絶をする。

「……………私、もう、怖くなっちゃって」

そんな彼女の声は、別れの哀しみによるもの以上に、酷く震えている。

その姿を見て、二人は、改めて愕然とした。

咲来は、控え目ではあるが、いつもやる気に溢れていた。まるで光が漏れるようにすら見えるほどだった。人を助けることが、本当に好きだったのだろう。

だが、今は——その覇氣とでも言うべきものが、一切、感じられない。嫌でもわかつてしまう。

咲来は——完全に、折れてしまったのだ。

あのトンネルでの出来事で、残酷なほどに突きつけられた。

甘さ、油断、弱さ。人を助けることができるほど強くない。自分が生きることすらできないほどに弱い。それどころか、人を傷つけてしまう。

呪術師として戦うこと。それそのものに、耐えられないほどの恐怖を覚えてしまったのだ。

もし、こんな状態で、無理に呪術師を続けたら。

近いうち、彼女は死んでしまうだろう。

呆けてしまう二人の目の前で、咲来が一步、二歩と、二人に近づくと、彼女が「呪術師を辞める」瞬間に、近づいていく。



「……………受け取りなさい」

そして、すれ違いざま。真依が、その手に持っていた紙袋を差し出してきた。

「これは、せめてもの饞別です。みんなで、咲来のために用意しました」

霞も少し遅れて渡す。

そんな彼女の言葉に、咲来は驚くと同時に、嬉しさと申し訳なさで、胸がいつぱいになった。

霞や真依、桃といった、特に仲が良かったメンバーだけではない。加茂やメカ丸、そしてなんと、東堂までもが、彼女のために、この二週ほどの間に、贈り物を用意してくれていたようだ。

「……………あり、がとう」

泣きそうになるのをこらえながら、咲来は受け取った。

そして、表情筋を総動員して、無理に笑顔を作る。

別に今生の別れと言うわけではない。連絡先は交換してあるからいつでもチャットや通話はできるし、休みが合えば会うこともあるだろう。

だからせめて——二人が、この真夏の晴天のように、少しでも明るくなれるように、笑ってお別れしたい。

口を開いたら、堰を切ったように泣き声が漏れてしまいそうだった。笑顔だけ見せる

と、咲来はそのまま足早に、入り口に停まっている黒い車の後部座席に乗り込む。補助監督が運転するこの車で、これから彼女は、一時的に故郷の広島に帰る予定だ。

「また会いましょう！　これからも、何回も！」

エンジン音を鳴らして、車が出発する。それを追いかけるように、霞が叫ぶ。真依も何か言おうとしたが、嗚咽ばかりが漏れて、何も言えなかった。

——そして、車が見えなくなってしばらく。

呪術高専京都校の入り口には、真依のすすり泣きだけが、響いていた。

それに釣られて、ついに霞も泣き出す。二人で抱き合い、声を上げて号泣した。

そして、泣きながら、二人は願う。

呪術師としての咲来は、もういない。

だけどせめて、輝くような志を持った彼女が、普通の女の子として幸せになれるように、祈る。

咲来の未来が——この晴天のように、明るいことを。

車が発進するときのエンジンの奥に聞こえた、咲来の泣き声が、二人の耳に、しばらく木霊していた。

## 7話・元呪術師と、元・元呪術師

「なるほど、そんなことが……」

時は戻って、二〇一八年六月某日。

咲来が高専を辞めた理由となった出来事を聞いた七海は、かろうじて声を絞り出した。

正直言ってしまうと、呪術界ではよくあるとは言えないが、それなりに起こりうることだった。七海自身、呪術界隈をしばらく離れていたため実際に対面したわけではないが、そういった話を何度か聞いている。

しかし、それでも、一人女の子が背負うには、あまりにも苦しすぎる過去だった。

特徴的な形の小さなサングラスの間の眉間に、自然と皺が寄る。ストレスを抱えがいでよく寄ってはいるが、その皺は一層濃い。

「……それで今は、高専に斡旋してもらって、この高校に通っているんです」

咲来は視線を落とし、震えた声で、説明を続ける。

呪術高専を辞めるにあたって、たった四か月の学生とはいえ、これまで苦しい世界で貢献してくれたということ、様々な便宜が図られた。その一つが、一般の高校への編

入試験の斡旋だ。元々そこそこ勉強ができて、高専ではさらに東堂に教わった結果、彼女の学力はそれなりのものになっていた。高専の授業では普通なら一般の高校に後れを取るが、彼女は無事に合格し、この高校に通っている。

場所が神奈川なのは、編入試験を受けさせてくれる高校らが全て地元広島から遠く、それなら一番校風が大人しめということを選んでからだ。呪術高専東京校とも都道府県がお隣であるため、呪術界からのアフターケアも受けやすいのもメリットである。

今の咲来の立ち位置は、ほぼ一般人も同然だ。極端に言えば、呪術や呪霊の存在を知っている非術師とさほど変わらない。

高専を去った呪術師には、その呪力を活かして、補助監督や、外部から呪術現象を感じ知して連絡する「窓」の役割も宛がわれることもある。咲来もそのスカウトを受けたが、当時も、そして今も、あの出来事を思い出してしまつて辛いので断つて、一般人として生活することになっている。

「結局、自惚れていたんですよ」

眼鏡の奥の目線が、真下から、斜め下になる。その声には、多分に自嘲が含まれていた。

「自分だけが持っている特別な力。実際、そんな大したことないのに……」  
何が「人を助けたい」だ。

呪術師になることを選んだ自分が、心底情けない。ただ幸運にも弱い呪霊にしか会っていないなかっただけで、少し世界が広がれば、もう何にもできず、大事な親友と先輩を殺しかけてしまった。

順を追って話しているうちに、咲来の気分はすっかり沈んでしまっていた。七海としても、ここまでの話ならば、無理に話さなくても、と止めたかもしれない。

(少しお人よしすぎますね)

話したくないだろうに、彼が聞いたから無理をしても話した。呪術師らしからぬお人よしさだ。かつての同級生の顔を思わず脳裏に浮かべてしまいがら、七海は小さく顔をしかめた。人助けが理由で呪術師になり、挫折して去った。そんな過去が納得できってしまう性格だ。

「……………それで、あの林では何を？」

あいにくながら、気の利いた慰めの言葉は出てこない。沈黙も辛いだろうと思って、話を進める。

今話を聞くに、咲来があんな林にいるのは不自然だ。何せ、もう呪術には関わりたくないはずで、あんな呪霊が湧きやすい場所に、近づくわけがない。

「えっと、その……パトロール、みたいなもの、ですな」

咲来が言いにくそうに答える。

「あそこは、あんな状態だから前々から呪霊が出やすくて……といっても、二か月に一回あれば多い方で、出現するのも蠅頭程度なんですけれど。でも最近、ほんの少し、出る数が多くなっていたんです」

なんだそれは。

七海は理解できなかった。

呪術師としてのトラウマを抱えて去り、「窓」にすらならなかったのに、その身一つで、呪霊が出やすい場所を、呪霊を見つげるためにパトロールする。

自分もあまり人のことを言えないが、行動が矛盾している。

「その、あのう……変なのは分かっているんですけど、放っておけなくて……何かあったら、霞ちゃんたちや歌姫先生を通して連絡できれば大事にもなりませんか……」

彼女も、おかしい自覚はあるようだ。前髪とレンズの奥の目線が酷く泳いでいる。

「同級生や先生とは今も連絡を取り合っているのですか？」

「は、はい。あっちが忙しくてあれ以来会ってはいないんですけど、LINEとかで……」

答えが返ってきてから、七海は内心で渋い顔をする。

連絡を取り合っているか否かの確認は、職務上大事だ。場合によっては、歌姬たちにも聞いて彼女についてもろもろの確認が必要になるかもしれない。今も連絡を取り



合っているならば、詳しいことが聞けるだろう。

一方で、今の質問は、七海の個人的な心情も混ざってしまっていた。

挫折して去っても、友好関係は続いたまま。酷い出来事に遭って去ってしまったはいが、全く良い影響がないというわけではないようだ。

私情を挟みすぎてしまう。

自身も学生時代、様々な挫折を経験した。そして、「呪術師はクソ」と判断し、呪術師を辞めて一般大学へと進学し、一般企業に勤めていたこともある。経緯は違えど、咲来は、自分と重なって見えてしまう。

七海は小さく深呼吸をして、心を落ち着かせる。

「なるほど、話は分かりました。ありがとうございます」

「は、はい、どうも……」

この話題を続けると、両方にとってよくなさそうだ。

とりあえず、疑問は解消した。

元呪術高専の生徒で、偶然あの高校に居て、七海が呪霊に襲われているのを見つけたから自分の術式で助けた。

これだけ分かれば十分だ。

「そ、そのう……」

そう判断したところで、咲来が言い出しにくそうに、まごまごとしている。顔の向きからして上目遣いになっていそうに見えるが、その視線は、少しだけ七海の顔からずれている。

「それで、七海さんは、なんでうちの高校に？」

咲来からすれば、七海もまた、不思議な存在だ。

呪術師が学校に来たとなれば、まず理由として思いつくのが、うぬぼれでもなんでもなく、自分の存在だ。何か自分がやらかしたか——身に覚えはある——過去の何かを聞きに来た可能性はある。

だが、今の七海の反応を見るに、自分について知らなかった。呪術師のミツシヨンが情報不足なのはいつも通り——あのトンネルの出来事だつてその一種だ——ではあるが、いくらなんでも、自分が目的なら、自分について知らないということはあるまい。そうなると、何か呪術師が出るようなトラブルがあったのだろうか。とはいえ、休み時間などに善意で校内パトロールをしている中では、異常は見当たらない。呪霊の頻度がほんの少し増えたのも、季節柄やテスト前というのが関係しているとすれば自然であり、呪術師が出張るとは思えない。呪霊を疑うような事件すら、起きたというのは聞いたことが無かった。

それについては七海も同感だったようで、質問に驚くことはない。ただ、少しばかり

黙り込んでいる。話すべきかどうか、考えているのだろう。

「……本来は機密ですが、元呪術師だというのなら、お伝えしてもいいでしょう」

呪術の話は一般人に対しては重要機密だ。だが呪術師間ならば、別に話しても問題ないこともある。

「私の今回の任務は、あの学校に置かれている呪物の確認です」

「じゅ!?!」

咲来の口から素つ頓狂な声が漏れる。それは、二人以外客がない喫茶店に、よく響いた。咲来は恥ずかしそうにしながら、即座に口を押える。大人しそうな子ではあるが、動きは意外とコミカルだ、と七海はどうでもよい印象を抱く。

「毒を以て毒を制す、という言葉をご存知ですか？」

「それは、まあ」

ことわざとしては有名だ。

「これは、呪術に関しても同じことが言えます」

「それも、えつと、はい……」

呪力の根源は、言ってしまうえば負の感情だ。当然よくないものであり、それによって呪霊は生まれ、人に害をなす。

だがそんな呪霊を祓うのも、呪力を操る呪術師だ。毒を以て毒を制す、を体現していると言える。

咲来 of 返事はそれを念頭に置いたものであったが、七海が話そうとしているのは、別のことだ。

「呪物が放つ呪力は、呪霊を牽制することができます。学校のように、人々の感情が集まる、呪霊が発生しやすい場所には、発生を防ぐために、呪物をあえて置いておく場合があります」

「は、はあ……」

知らなかった。

思わず、唾然としてしまう。

まさか、呪術師から離れた先の一般の高校に、呪物が置かれていたなんて。一応目に呪力を籠めて校内パトロールは一通りしたはずだが、気づくことはなかった。

「当然、呪物そのものは嚴重に封印し、生半可な呪術師では感知できない程度にしか呪力を放ちません。ですが呪力そのものである呪霊はそれを察知し、そこに近づくことを避けるのです」

理屈としては間違っていない、のだろう。

学校は呪霊が発生しやすく、それでいて一般人の子供たちが多く集まる場所だ。危険が発生する確率も、それが大人数に影響する確率も、隠ぺいのしにくさも、無視できないほど大きい。それを予防できる手段があるならば、人手不足も相まって、採用しない手はないだろう。

だがそれにしたって、呪物を置いておくというのは、危険が過ぎる。多分そうそう手

出できない場所に保管されているのだろうが、悪戯好きな生徒が触ったりしたら大惨事だろう。また、うっかり封印が解けようものなら、何があるか分からない。

手段としては有効だが、あまりにもリスクが高すぎる。

咲来は複雑な感情を抱いた。たった四か月しか呪術界にいなかったから、そんなことをしていたなんて知らなかった。

「あなたが通うあの高校は、呪物が置かれている施設の一つです。私は、その状況を確認しに来ました」

「な、なるほど……な、なんかごめんなさい……」

その矢先に、呪霊と遭遇し、そして予想外の呪術師に会ってしまったわけだ。あの呪霊はサイズこそ大型だったが、咲来でも簡単に倒せたことから、そう強くない。七海も対処できただろう。あの出会いからすぐにここに来たため、咲来は余計なおせっかいで、仕事を邪魔してしまっただけらしい。

「いえ、それは構いません。それにもう、調査は完了したと言えます」  
「へ？」

そんな咲来の心配は、杞憂だった。

「貴方の話と私の見た現場を総合すれば、大体の状況がわかりました。結論から言えば、対象呪物の封印は解けかけているようなので、一旦高専に持ち帰って封印しなおす必要

があります」

『見た現場』……?』

七海の話に、咲来は疑問を呈する。咲来の話から何かわかったというのも今一つピンとこないし、七海が現場を見たというのも分からなかった。

「貴方がパトロールしていた林の近くに百葉箱がありますよね?」

「は、はい……」

「あの百葉箱の中に、その呪物が封印されています」

咲来は言葉が出なかった。

まさかの、人の監視が行き届きにくい上に屋外だ。それも百葉箱となると、生徒が触ることもあるだろう。

学長室の隠し金庫とかそのレベルを想像してただけに、そのとんでもない隠し場所に驚愕するしかない。

「せ、セキュリティとかは大丈夫なんですか?」

「まず、呪力や呪術、呪霊の存在自体を一般人に知られるわけにはいけないことは知っていますよね?」

「……はい」

「では、一般人が圧倒的多数となる学校に、嚴重に保管してあるものがあるとしましょ

う。だというのに、ほとんどの人間がその中身を知らないし、聞いても機密扱いとなる。そうだとしたら、はたしてどんなことになるでしょうか」

「……………なるほど」

秘密がここにありますがと暴露しているようなものだし、気になって仕方のない人が出てきて手出しをする可能性もある。

それならば、なんの変哲もない百葉箱の中にも隠しておく方が安全なのかもしれない。

「実はあの高校の学長は、呪術師ではないものの、一般人の協力者です。成宮さんを急に受け入れられたのも、そうした事情があるのでしょう」

思わぬところで関連性が生まれてきた。

呪物が保管してある学校。その学長ならば、確かに呪術の存在を知っていてもおかしくはない。だから、あんな時期に来た自分を受け入れることもできる。

自分の知らないところで、離れたはずなのに、呪術界が深いところまで入り込んできている。なまじ自分が「入り込んできている」恩恵を受けて任務をこなしていた過去もあるため、背筋に冷たいものが走った。

それと同時に、疑問も浮かんでくる。

あの林の傍にあった百葉箱に、呪霊を牽制するための呪物が安置されているとした



ら。

「——じゃあ、なんでむしろ呪霊が増えているんですか……う？」

咲来の——ぼろっとこぼした最近少し呪霊が増えているという——話が、ここに関わってきているのは分かった。だが、その筋が見えてこない。

その質問は分かり切っていたようで、七海はすぐに答えた。

「それを分かるためには、あの百葉箱に封印されている呪物について教える必要があります」

なるほど、一口に呪物と言っても、性質は様々だ。生まれる経緯からして、異常なものなのだから、一つとして同じものはないだろう。

ただ、あんな何の変哲もない学校の屋外に置かれているようなものだ。大したことない低級の呪物であることは確かである。大抵の呪物は危険極まりないから破壊されるが、破壊するにも値しないレベルで、それで利用法があるから置いてみた、というところだろう。

「あの呪物は、特級呪物《獅子蟲》です」

「……………はい？」

そんな油断をしていたから、想像のはるか上を行く答えが返ってきて、意識が飛びかけた。

たっぷり十数秒の沈黙を経て、咲来が呆けた声で聞き返す。

「特級呪物《獅子蟲》です」

聞き間違いではないらしい。

## 特級。

1級の上に位置する、楽巖寺学長曰く、尺度の斜め上に外れた存在。

現代の呪術師において特級術師はたった四人だけ。特級呪霊で存在が確認されているものは十数体で、そのどれもが、現代兵器が効くとした場合で例えるならば「絨毯爆撃でトントン」が「最低ライン」となる。

咲来の知る特級は、術師のみだ。

五条悟。歌姫が「バカ目隠し」と呼んでいる、最強の呪術師。

乙骨憂太。名前だけしか知らず会ったことないが、咲来の元同級生らしい高専生。あの例えようもなく強い東堂含む頼りになる先輩たち全員を交流会でボコボコにしたらしい。

九十九由基。これまたあの途方もなく強い東堂の師匠だと、勉強を教わっている時にぼろつと聞いたことがある。

夏油傑。元高専生の特級術師で、呪詛師に身を落とした。咲来が高専を去った約四か月後に、「百鬼夜行」と呼ばれる事件を起こして、討伐された。数多の呪霊を操り、その中には1級呪霊や特級呪霊が何体もいたという。

咲来が直接遭遇した中だと、最強は、間違いなく、彼女を退学へと追い込んだ、あのトネルの呪霊だ。推定等級は1級。1級術師はそれを確実に破えるレベルが目安と

され、特級はその遙か斜め上の存在と言うことになる。

そんな等級を与えられた呪物が——呪術から逃げた先の、なんの変哲もない学校に置かれていた。

思わず吐き気を覚えて、口元を抑える。

あのトンネルの光景が、ふとフラツシユバックしてきた。

それなりになじめた学校だ。友達もできた。

そんな彼女・彼らが、あのトンネル以上の呪いでなすすべもなく惨殺される想像。

——だがすぐに、咲来は注文していたオレンジジュースで口の中を湿らせ、吐き気ごと飲み込む。

あれ以来、こうしたフラツシユバックは起きていた。未だに辛い、その対処には、悲しいことに徐々に慣れつつあった。

「……大丈夫ですか」

「へ、平気です。すみません」

七海には心配をかけてしまった。初対面から変わらず鉄面皮で平坦な声だが、なんとなく、本当に心配していることは分かる。まだ血の気が引いているのが自分でもわかるが、謝りながら、話の続きを促した。

「……安心してください。特級呪物と言っても、嚴重に封印されています」

さつき緩みかけていると言っていたのは、あえて無視することにした。今ここにいるということとは、緊急性が無いことは確かなのだから。

「特級呪物《獅子蟲》は、元々は江戸時代に生まれた特級呪霊でした。それが当時の術師によって祓われたものの、完全に祓いきることができず、呪物として残ってしまったものです」

そういえば真依が、咲来と霞を怖がらせてからかう目的で教えてくれたことがある。強力な呪霊は、無力化こそできて、完全に祓うことができず、いわば仮死状態で呪物として残り続けることがあるという。冗談だとは思ったが、本当の話だったようだ。怖がらせる目的でまさかの本当の話をしてきたのは実に趣味が悪いが、それはそれで彼女らしいだろう。

「《獅子蟲》そのものは、当初はさほど強力ではなかったそうです。しかし、別の呪霊にわざと取り込まれたうえでその体に乗っ取り、自身の力と合わせてより強大な呪霊へと成長していくことができる、厄介な性質を持っていた、と記録があります」

呪物もそうだが、呪霊もまた、千差万別だ。そんな性質を持っている呪霊も、いっても不思議ではないだろう。

それと同時に、この話を聞いて、咲来は《獅子蟲》というネーミングに納得した。

その由来は間違いなく、「獅子身中の虫」だ。猛獣である獅子を食らうのは、外敵では

なく、その内側から湧いてくる虫である。本来は仏教界での例え話で、仏教に真に仇を成すのは、悪意のある仏教徒である、ということを示す。転じて現在では、組織内の裏切り者や厄介者を指すことわざにもなっている。

宗教とのかかわりが深い呪術界らしいネーミングだ。

「《獅子蟲》は現代で言うフェロモンに似た呪力を放ち、呪霊を引き寄せることができます。今回、逆に呪霊が増えてしまっているのは、封印がわずかに緩んでいて、本来の呪力が漏れてしまっているからでしょう」

ここまで聞けば、納得がいく。

学校と言う呪霊の危険地帯に、呪霊を牽制するための特級呪物を置いた。その呪物がたまたま、本来は呪霊を引き寄せる力を持つ《獅子蟲》だったので、わずかながらも呪霊が増えた。

呪霊を減らすためのものなのに、転じれば増やしてしまうもの。それを外部に置いておく采配に疑問がないではないが、とりあえず、現在の状況に納得がいったのは確かだ。「幸い、あくまでわずかに緩んでいるだけに過ぎないため、仮に今の状態で呪霊に取り込まれたとしても、特に効果はありません。一度持ち帰り封印をかけなせば、問題ないでしょう」

わずかに浮かびかけていた不安も、この説明で納得がいった。咲来はこれで何も気に

せず、これまで通りの穏やかな日常を過ごせばよい。

「……それはよかったです」

いつのまにか夕方六時を超えている。三時過ぎに授業が終わって、紆余曲折あつてここに来て、話をしていた。これぐらい時間がたつても不思議ではないが、なぜだか、やけに早く感じてしまった。

同じタイミングで時計を見ていた七海が、やや疲れたようにため息を吐く。この時間は、企業によりけりではあるがいわば「定時」だ。呪術師に労働時間制限などあつて無きが如くだが、見た目に反して真面目そうな彼は、そういつたところが多少なりとも気になるのかもしれない。仏頂面で今一つ人格がつかめずとつきにくい、そう考えると、少しだけ親近感が湧いてくる。

「七海さんは、このあと呪物を回収して戻る感じですか？」

「いえ、今はこんな時間ですからね。……もう夕刻で、そのあとは夜です」

なるほど。夕刻——逢魔が時。不思議と呪霊の活動が活発になり始める。夜は夜で、闇への根源的な観念が呪いへと転じてしまう、化け物たちの時間だ。そんな時間に呪物の移動するのは危険だろう。

「ひとまず今日は近くのホテルに泊まり、明日の朝いちばんに回収して戻る予定です」

「そうですね」



七海の話は理路整然としていて、かつ端的に分かりやすく話す。それゆえに、一度話が終わってしまえば、気心の知れた仲以外では若干シャイな彼女は、話を続けることができず、やや気まずい沈黙が訪れた。

話は終わりだし、もう帰った方が良いだろうか。  
咲来がそう考え始めたころ。

「……あの」

「は、はい！」

七海の方が、長い沈黙を破って、声をかけた。その声音は先ほどまでと大して変わらないが、不思議と幾分か言い出しにくそうに見える。

「……………呪術師を辞めて、どうですか？」

「え、えつと……………」

まさかそれを蒸し返してくるとは思わなかった。咲来が驚いて固まっていると、七海もまた聞き方がまずかったかと顔を赤くして、訂正しようとする。だがそれを遮って、咲来は話し始めた。

「その、えーっと……少なくとも、呪術師をやっていたところに比べたら、安心して過ごせています。お友達も出来ましたし……」

「そうですか」

七海の感情は窺えない。ただ、それを聞いて、悪くは思っていない様子だ。

「霞ちゃんや歌姫先生とも連絡を取り合っていて、全く縁が切れたわけでもないですし、楽しくもやっています。確かに、あの時に比べて充実しているかと言うと、違いますけど……」

彼女の趣味は人助けた。それを任務としてやり続けていた生活は、厳しくはあったが、充実はしていた。のこのこ自分から入っておいて、散々迷惑かけたあげく怖くなつて逃げだしたことへの罪悪感もある。だからといって今の一般人生活が充実していないかと言うと、そうでもない。彼女は十分、満足している。少なくとも、もう一度呪術師に戻ることを、即断して拒否できるぐらいには。

それを聞いた七海は、たつぷり数秒、沈黙した。

「……………私も——」

短く話し始め、深く息を吸い込む。

そして、溜め込んだ息を吐き出すように、続ける。

「——私も、一度、呪術師を辞めています」

「え……」

そのカミングアウトに、少なからぬ衝撃を受けた。か細い声が漏れるだけで、それ以上の反応を返すことができない。そんな咲来が落ち着くのを待たず、七海は、まるで急ぐように、続きを話し出す。

「長くなるので話しませんが、私もかつて高専生でした。色々、色々あつて、高専卒業後、一般大学へと入学し、民間企業に就職しました」

その声音は相変わらず平坦だが、わずかながらに震えている。咲来では想像もつかないようなことがあつたのだろう。

「——呪術師はクソです」

吐き捨てるような言葉だった。一度呪術師を辞め、そして戻ってきた今、それでもなお、心の底からそう思っている。

「危険な任務に、経験の浅い学生を、まるで使い捨ての様に放り込む。ろくな情報もなく、人手不足だというのに、人が簡単に死んでいく。上層部はそれを放置して、権力と我欲にしか興味が無い」

後半はさておき、前半は、咲来にも身に覚えがありすぎる。あの後で聞いた話からす

るに、しっかりと情報を集めて早くに共有できていれば、防げたかもしれない事件だった。咲来は「しようがないこと」と思っただけでその点に禍根は残していない。むしろ同時並行で必死に情報を集めてすぐに共有してくれたおかげで、歌姫たちが駆けつけるのが早かったと感謝しているぐらいだ。

だが彼は、そうは思っていない。

もしかしたら、咲来よりも辛いことがあったのかもしれない。

「それに嫌気がさして、呪術師を辞めました。一般大学を経て、入社したのは、それなりに有名な証券会社です」

「え、すごいですね！」

真剣な話なのだが、咲来は素で明るい声を出してしまう。呪術高専は四年制とは言え、一般的な高専よりもさらに学業においては遅れがちだ。そして、世間の常識と隔絶した世界である。ゆえに一般大学に入り卒業するのも難しいし、一般社会にも馴染みにくく就職が厳しいとも聞いている。だが彼は、証券会社に入社できたのだ。

咲来の乏しいイメージ——情報源は主にテレビドラマ——では、バリバリのエリートが集まりだ。

はた目には、大成功と言っても良い。

「……しかしそこもまた、酷いところでした。拝金主義で、金と成果が全て。そのために

は他者を蹴落とし、客を詐欺まがいの手段で騙す。無理なノルマと業績に追われ、心身がすり減る日々でした」

思わず絶句する。明るい声で容易く「すごい」なんて言ったのを後悔した。

過重労働的な意味で使われることが多いが、その点もさることながら、犯罪まがいに手を染めている、いわば「ブラック企業」だったようだ。

「そこで思ったのです。サラリーマンもクソだと」

その声音に混ざる悪感情は、「呪術師はクソ」と言った時にも引けを取らない。咲来はその圧力に、すっかり飲まれていた。

「……それで、どうせ同じ『クソ』なら……やりがいや人に必要とされる、呪術師を選んだのです」

ここで一旦、七海は呼吸を整える。その深呼吸は、カミングアウトし始めた時に比べ少しだけ覇気があり、明るく感じる。

「……きつかけは、そうですね。見かけた低級呪霊を、なんとなく気分が向いて祓ったことです。『ありがとう』……そんな当たり前の言葉が、嬉しかったのでしょうね」

「それって……」

咲来は、その先を口に出すのを憚った。

だが、間違いなく、七海も同じことを考えている。

「……………話したいのは、それだけです。適当に聞き流しておいてください」

少しバツが悪そうにそういうと、七海は立ち上がる。

もう話は終わりだと、その態度が示していた。

咲来は慌てて財布を取り出そうとする。だがそれを七海が制した。

「支払いは結構です。もう済ませてありますから」

「ええっ!? そんな、悪いですよ!」

「貴方は子供で、私は大人です。そもそもこちらの都合で付き合わせたのですから、こちらが支払うのは当然でしょう」

「は、はい……………ありがとうございます……………」

そうまで言われたら、何も言い返せない。

店を出て、咲来は家まで送ってもらう。その後七海が向かった先を見るに、町内にある場違いながらも少し高級なホテルへと行くつもりなのだろう。

「……………」

自室に戻り、部屋着に着替えると、ベッドに飛び込む。ふかふかの心地よい布団に身を預けながら、咲来はぼんやりと、先ほどの話を思い出した。

(……………そつくりだ)

咲来と七海は、真逆の性質に見えて、よく似ている。

挫折を経験し、一度呪術師を辞めた。人を助けることにやりがいを感じている。卒業したか否か、呪術師に戻ったか否か、意志の強さ、本人の強さ、性格。

大きく違う部分はいくらでもある。

だが、行動の本質的な観念が、一緒なのだ。

なんで、あんな話をしてくれたのか。

確信が持てる。彼もまた、シンパシーを感じたのだろう。単に似ている彼女に話を聞いてほしかつた、というわけではない。何かしら、思うことがあったに違いない。

自分自身の話をして、呪術師に戻ることを促しているのだろうか。

それとも、自身と違って一般人としての生活に嫌気がさしていないなら、「クソ」である呪術師に戻らないほうが良いと示したのか。

はたまた、どちらを望んだわけでもなく、彼女の参考になるだろうと話したのか。枕から顔を上げ、部屋にある洋服ダンスの一つを、ぼんやりと眺める。



——それらのどれなのか、今の彼女には、分からなかった。

†  
†  
†

余計なことを話してしまっただろうか。

お節介だっただろうか。

深夜。明朝に呪物を回収しなければいけないというのに、七海は、ちよつと上等なホテルの一人がけソファで、物思いにふけていた。

彼女は、自分にそっくりだった。

だから、我慢できず、あんなことを話してしまった。

別に彼女からどう思われようと、もう会わないだろうから、そこは関係ない。ただ、彼女がこれで困ってしまうのは、少し心配だ。何かの参考になるかもしれないが、ならぬいかもしれない。もし後者なら、すぐにでも忘れてもらった方が有意義だろう。

『お待たせいたしました』

そんな彼の思考を、電話の向こうの声が遮る。穏やかで気弱そうで真面目そうな声だ。

「ありがとうございます、伊地知さん」

通話の相手は伊地知。信頼できる補助監督だ。

『成宮咲来さんについての資料が見つかりました』

残業が心の底から嫌いな彼がこんな時間に電話しているのは、咲来について調べなければならなかったからだ。特級呪物を置いている学校に元呪術師がいるというのは、少し気になる。話した感じ悪意は感じられなかったが、あの話は全て嘘っぱちかもしれないし、呪物の封印が緩んでいるのも彼女の仕業かもしれない。ほんの少しでも不穏な可能性が残っていて、それを潰せるなら、しない手はないだろう。

『私もつい先日のお事のように覚えていきます。真面目そうな良い子でしたね』

咲来の在学時、伊地知は一度会ったことがある。楽巖寺学長に極秘資料を届ける時、秘書的な役割として彼女が対応したのだ。

普段は、呪術師に珍しい常識人兼お金に困ってアルバイトがしたい霞がその役目を担っているのだが、その日は任務に出っていたので、頼まれた咲来が二つ返事で代行した。その時のことを、彼はよく覚えていた。

その後伊地知は、在学時の咲来について、資料に基づいて話し続ける。咲来から聞いた話と相違はない。あの学校にいたのも、七海が咲来に説明した理由の通りだった。

『それで、次は転校後の様子ですね』

呪術師界は最重要機密だ。たった四か月いただけの子供は、秘密を洩らしかねない。

ゆえに、彼女も当然承諾の上で、監視がついている。とはいえ、よほど呪術師界に仇成すことをしない限り、一切手出しはしないが。

『転校後は、大人しく健やかに過ごしていますね。呪力もコントロールして、目立ちすぎない程度にしか身体能力の補助に使っていません。とはいえ、油断することも多くて、注目はされていますね』

そこそのレベルの私立高校に、一年生の九月に転校生。不自然極まりなく、当然目立つが、彼女の性格上そう目立つことはないし目立とうともしない。転校生属性を持ち、見た目・性格に似合わぬ中々の身体能力を見せたら、本人の努力もむなしく目立つのは当然だ。これは問題ない。

『部活動には所属せず、放課後は家に帰るか、友達と遊ぶかで、夜遊びもしていません。休日は時折、ボランティア活動にいそしんでいるようです』

「それは感心ですね」

人助けが好きと言うのは、本当らしい。こればかりは、自身以上だ。

『京都校の方たちとは今もよく連絡を取り合っていますね。今日起きたことは……まだ話していないようです。いちおう機密だと思つて話していないのか、単に予定が合わなくて連絡が取れないだけなのかはわかりませんが』

「別に、話されてもそこは構いません」

だから、口止めはしなかった。呪物の管理は呪術師としてはメジャーな仕事だ。現代最強の呪術師である一つ上の先輩が今日担当しているようなレベルだと話は別だが。そういえば、まだ入学間もない教え子に任せるみたいなことを言っていたが、そちらが心配だ。

『それと……あんなことがあったというのに、校内や家周辺に呪霊が出没していないか、パトロールのようなこともしていますね』

これは伊地知も不思議がっている。七海も、いまいち理解できなかつた。

『中には実際に遭遇し、自分で祓ったことも何回かあります。あと、同級生に憑りついていた低級呪霊をそれとなく祓ってあげたりもししていましたね。これも校内で少し話題になっているようです』

この点について、伊地知の声音は真剣みが増している。睽來のやっていることは間違はなく善意だろうが、少し危険だ。呪術のことが知られてしまう危険性がある。とはいえ、彼女の様子を見るに、これといって咎められたことはないようだ。一応気にしておこう、程度なのだろう。

それはそれとして、七海は、こんなところまでそっくりなのかと、顔には出ないが心の中で苦笑する。脳裏に、あのパン屋の女性の笑顔が浮かんできた。

『一応これに関して過去に話題にはなつたのですが、対応としては、要監視かつ、緊急時

は手出しすべし、ということになっていきます。彼女の術式は格下呪霊を確実に祓う上では狗卷君よりも強力ですからね。それに呪霊と相対するときは、常にスマートホンでいつでも庵さんや三輪さんにつなげられるように本人がしていますから』

自分が対応できる雑魚なら自分で。無理そうなら「窓」的な役割をする。なるほど、分を弁えてはいるようだ。それなら、ひとまず問題ないだろう。

『……………まとめると、おおむね問題なし。見返りを求めず、自分から進んで人助けをしている、とても良い子ですね』

伊地知の声が柔らかくなる。彼女の人柄に、心底感心しているのだろう。

「……………ありがとうございます。では」

要件が終わり、二言三言話して、通話を切る。そのままスマートホンを充電器に差し込み、背もたれにぐったりと背中を預けた。

サングラスとネクタイを外し、上着は脱ぎ、首元を緩めている。だが、ワイシャツは来たままだし、ズボンも緩めていない。部屋についてから、ぼんやりとしてしまっていて、着替えるのがおっくうになっていたのだ。

伊地知の話を反芻する。

心配していたことはない。健やかに生活している。それどころか、出過ぎない範囲で、人助けも継続で来ているようだ。

——自分と違って、一般社会で、「クソ」と思うような経験をしていない。

喜ばしいことに彼女は、きつと、呪術師に戻ることはないだろう。一般人としての生活は、充実しているようだ。

そう、とても喜ばしい。心の底から思う。

未熟な子供が前線に出て傷つき、時には死ぬ。

そんな呪術界マジックにいる子供は、少ないに限るのだ。

素晴らしい人間性を持っている。彼女のような人は、これ以上、傷つかなくて良い。

ふと、二つの顔が浮かんだ。

とても強くて、真面目で、立派な志を持っていた先輩。そしてその性格ゆえに、呪術師に身を落とした。

妹想いで穏やかな、お人よしの同級生。七海を生かすために、彼は自ら身を犠牲にして、死んだ。

「——縁起悪い」

小さく虚空に吐き捨てる。

咲来には、そのどちらにも、そして当然自分のようにも、なって欲しくない。

だいぶん明かりの消えた窓の外を見やる。住宅街から離れた山がちな土地の上に、大きな建物が見える。

睽来たちが通う、呪物が置いてあるあの高校だ。こうしてみると、なんだか印象が違  
う。

そんな景色をぼんやりと見ていると――



——途端に、悍ましい気配が、一気に膨れ上がった。

「っ!？」

反射的に立ち上がり、得物を手に取り、スマートフォンで各所に緊急連絡を取りながら部屋を飛び出す。

今の呪力は、生半可なものではない。

去年の十二月、百鬼夜行で戦った1級呪霊たちよりも、濃密でかつ膨大だ。

ホテルを出て、脳内に最短ルートを構築する。1級術師でありその中でも随一の肉体を持つ彼が全力で走れば、風のような速さだ。

彼が向かう先。鋭敏な呪力感性が感じ取った、あの膨大な悍ましい呪力の発生源。

——ついで先ほどまで見ていた、咲来たちが通う、あの高校だ。

## 8話・独りの死闘

1級術師の中でも七海の身体能力は高い方だ。人目も人通りも少ない深夜なのを良いことに全力疾走をすれば、風すらも追い抜くほどの速さで駆けることができる。

幸いホテルと学校からの距離はそう遠くはない。事前に「念のため」と調査しておいた最短ルートを駆け抜けて、学校へ到着する。そのまま息も整えず、昼間に咲来と出会った、校舎の裏手へと向かっていった。

さしもの彼ですら一瞬気圧されるほどの呪力が、校舎の裏手の百葉箱からあふれ出ている。間違いなく、この中の《獅子蟲》が、この呪力の発生源だ。

《獅子蟲》は初期段階だと、他の呪霊に取り込まれなければ単体では力を発揮できない！これは特性からして、間違いなく呪霊を寄せ付ける呪力！)

百葉箱を乱暴に破壊し、中に巧妙に隠されている古びた小箱を取り出し、すぐにまた駆けだす。走りながら中を確認したら、封印に使われていた呪符が破けていた。

(油断した！ほんのわずかに緩んだところを起点に、一気に解放したのでしよう！)  
ここに来るまでの間に、興奮した数多の呪霊が、彼と同じ方向に急行していたのを見た。そのどれかを追い抜いて、真っ先に到着したのだ。

あと少しもしないうちに、ここには周辺、下手をすれば町中の呪霊が集まる地獄と化す。

ここに走ってくるまでの間に、ある程度作戦は立ててある。

最初に思いついたのが、呪物を回収して即座に呪術師複数が待機している基地のような場所に持ち込み、結界を張る事。

しかしそれは、この呪霊を寄せ集める特級呪物《獅子蟲》を、非術師が寝静まっているところで持ち運ぶことになる。広範囲に被害が及ぶだろう。

同じ理由で、次に思いついた、持ってひたすら逃げ回って時間稼ぎをするのもだめだ。ならばどうするか。

七海は校庭のど真ん中にたどり着くと、そこで脚を止め、《獅子蟲》を懐に入れる。360度、周囲には、数多の呪霊がこちらに向かってくるのが見えた。

「ハイハイで時間を稼ぎます！」

言霊に気合を籠めながら、得物を抜く。少し変わった形の鉞だ。

普段は力を抑える呪具でぐるぐる巻きにしてある。だが今は、最初から取り払ってある。

自身に課した縛り。

定時外の仕事は、したくない。

だからこそ——大嫌いな時間外労働に関しては、大幅にパワーアップする。

不幸なことに、今は深夜だ。ただでさえ今日は若干の時間外労働をしたというのに、さらに睡眠もなしに「夜勤」である。

今この絶望的な状況に置いて——悲しいかな、七海は絶好調になってしまっていた。

ここに来るまでの過程で、応援依頼はしてある。どうやら同時刻に各地で呪術師が必要な大小の事件が多発しているらしく、届くまでの時間は未定。《帳》すら自分で張らなければならぬほどだ。

やるしかない。

呪霊たちが一斉に迫りくる。

彼がそれに対して鉦を振るうと、呪霊は両断され、苦悶の断末魔をあげながら祓われる。

そうして、次々迫りくる興奮した様子の呪霊を、バツタバツタと一撃で両断し、祓っていく。

——彼が1級術師の中でもかなりの筋力を誇っているとしても、今祓った呪霊は、2級や準2級相当だ。一撃で次々と倒していくなんてことは、そうそうできることではない。

それを可能にしているのが、彼の術式——《とおかくじゅほう十劃呪法》だ。

7：3の比率の点に弱点を作り出す術式。対象は一切問わず、また弱点を作り出すことは基本的に防げない。

つまりは強制的に弱点を作り出すという単純な術式だが、その威力は絶大だ。強制的に作り出された弱点は、正確にヒットすれば、ちよつとした衝撃でも大ダメージとなる。そこに彼の強力な攻撃が加わるとなると——2級呪霊程度では、一撃すら耐えることができない。

ただし、欠点もある。7：3の点はとても狭く、その比率の中途半端さもあって、正確に狙うのが難しい。弱点を作り出したからと言って、ゲームのようにそこに何か目印が出るわけでもない。しかもそれでいて、正確にヒットさせなければ、ただの攻撃と全

く変わらない。

強力な術式ではあるが、それを使いこなすには、ハイレベルな実力が必要になる。

（——これで何体目だか）

数えるのも億劫なほどに、呪霊を一撃で沈めてきた。思わず内心で皮肉を吐き出す。集中力の乱れと疲れが見えてきた。

だがそれでも、正確に弱点にヒットさせ続け、数えるのを止めてからも、次々と一撃で倒していく。

七海は、たぐいまれなる才能と鍛錬で、7：3の弱点へ正確に当て続ける實力を持っているのだ。

これこそが、彼を1級術師足らしめている理由。最強の呪術師から信頼を置かれているのは、その実直な性格からのみではないのだ。

「次から次へと、どれだけいるのやら……」

七海は毒づく。数多の呪霊を使役する呪術《呪霊操術》を持つ呪詛師・夏油傑が、その呪術を駆使して大量の呪霊を暴れさせた近年まれにみる大事件「百鬼夜行」の時でも、これほどの数を相手にしたことはない。質で言えば2級がせいぜいの今回はかなり低い、量はあの時とは比較にならないだろう。

この町に数時間滞在した限り、近辺には呪霊が比較的少なかったはずだ。それでこれ

だけの数が集まっているとなると、おそらく、町を超えて、相当な範囲へとあの呪力を届かせていることになる。いくら呪物に堕ちたといえど、さすがは「特級」だ。

「キイイイイイイイイイ!!!」

「!!!」

「§Φ\$ε▽!」

そんなことを考えながら切り捨てているうちに、強大な気配を持った三つの影が現れる。

金切り声を上げながら空中だというのにピタンピタンと跳ねまわる、全身に目玉がついた熱帯に住む人食い魚のような呪霊。

空気が漏れるような声にならない声で叫ぶ、何人もの小腸をつなぎ合わせて丸めたような、グロテスクで悍ましい球体の呪霊。

およそ言語化できない言葉を確かな意思を持って叫ぶ、前後に潰れた頭が二つずつついている、少し理知的に見える犬型の呪霊。

「……これはまた厄介な」

先ほどまで相手にしていた雑魚とは違う。彼でもしんどいであろう、強力な呪霊だ。低く見積もって準一級は固い。それが同時に、三体だ。

それでも、やるしかない。背後から迫っていた蛇とウナギの中間のような低級呪霊二



匹を振り向きもせず両断して祓いながら、三体に相對する。これらに協力關係があるわけではないが、だからといってお互いに潰しあつてくれるようなことは期待できない。そんな「横道」に逸れる理由が全くないほどに、三体とも、ギラギラと七海が隠し持つ《獅子蟲》を狙っている。

「——シッ！」

数瞬にらみ合つたのち、七海から動き出す。にらみ合いは、他の呪霊が集まつてくるだけだから得策ではない。さつさと数を減らす事こそが最善手だ。

狙うは、一番的が大きそうな小腸球体呪霊だ。形的にも、7：3の位置がわかりやすい。その呪霊は攻撃をかわそうとするが間に合わず、見た目に反して中々粘り強いその体に鉦の一撃を受け、真つ赤な腸のはずなのに青黒い血のようなものを噴き出す。だが、わずかにずらされたせいで弱点には当たらず、致命傷にはなっていない。

そして反撃として、小腸の一部が伸びて、七海の首に襲い掛かる。それを七海は躲すことなく、むしろ部分的な7：3の弱点を作り出して切り払って返り討ちにして、また本体に切りかかる。またも躲そうとされるが、それは織り込み済み。先ほど延ばされた小腸を掴んで引つ張つて戻し、無理やり弱点を引き戻して直撃させる。

先ほどは手ごたえが無かったが、今回の効果は大きい。球体は両断され、そのまま風の中の塵のように消え去つた。

——その隙をついて、背後から魚呪霊と犬呪霊が襲い掛かってくる。

(休む間もない！)

予想通りの動きとはいえ、決して状況が良いわけではない。斬りかかった勢いをあえて殺さず前転することで背後からの攻撃を避けながら向き直り、左手のジャブを犬呪霊の顔面に食らわせる。しかし、それで怯んだかと思いきや、その口から真つ赤な針のようなもの飛ばしてきた。

正確に目玉を狙ったそれを避けることはできず、呪力で強化した鉈でガードする。しかしそのせいで視界が遮られてしまい、その隙に魚呪霊の接近を許して、鉈を回りこむように両サイドから、恐ろしい速度で骨製の鉈のようなものを放ってきた。

その片方は鉈を振るって払い、もう片方には、弱点を作り出したうえで、的が小さい上に高速だというのに、正確に狙って横から手刀を叩き込むことで落とす。

(術式の鋭さは中々、耐久は並ですか)

これはただ身体の一部や形成した呪力を飛ばしているわけではない。間違はなく術式だ。その術式は両方ともそれなりに厄介なものだった。針も鉈も、撃ちだすまでも弾速も速く、そして刺されれば致命傷になる鋭さを持っている。見た目通り脆くて防ぎやすいのは上々だが、複数敵がいる中では相手したくないタイプである。

耐久が並ならば、呪力強化だけでなんとかならないか。

一瞬希望的観測がよすぎるが、すぐに否定する。鉈の表面にはそれなりに深い傷がついていた。金属を呪力で強化してこれなのだから、人体では耐えられないだろう。それに小さな傷で済んだとしても、毒などがあれば最悪だ。

結局、鉈でガードするか回避、最悪の場合に不確定だが《十劃呪法》と手刀の組み合わせで落とすしかない。

そう決めるや否や、中遠距離戦は不利と見て、また接近する。先ほど小腸球体呪霊が一撃で祓われているのを見たからか、二体の呪霊は距離を取って先ほどの針や鉈を中心として戦っている。流石一級、賢さもあるようだ。

(ならこれはどうでしょう！)

足元の石を拾い、呪力を籠めて投げつける。大したフォームではないが、彼の筋力でそこそこの速度となった石は、見事犬呪霊の頭の一つに命中し——その頭を砕いた。

《十劃呪法》は、あくまで弱点を作り出す術式だ。こうした応用も可能である。

犬呪霊は一瞬たじろいだだが、すぐに前後を反転させ、反対側の二つの頭を向けて応戦してくる。その向こうでは、元から潰れていたのをさらに砕いた頭が、ボコボコとうごめいていた。

(時間はかかるようですが、再生することもできるみたいですね)

そうなれば、短期決戦で行くべきだ。

七海は、一回で小石を複数拾っていた。呪力を籠めつつ、身体で隠しながら指ではじく。投げた時ほどの速度は出なかったが、その不意打ちの攻撃は作り出した弱点にクリーンヒットし、犬呪霊の下あごを砕く。そして怯んだところに、もう一つの頭——ではなく、二つの頭が繋がる根元に向けて、鉈を振り下ろした。

「——え——!!!」

犬呪霊が悶える。何か叫ぼうとしているが、頭は一つしか残っていないため、発音にすらなっていない。そしてその追撃で、振り下ろした鉈をその胴体へと切り上げる。そこもまた作り出した弱点だ。

「分かっていますよー!」

そしてその切り上げの勢いのまま、鉈を真横に振って回転し、背後から迫っていた鉈をまとめて撃ち落としてつつ、また小石を指ではじいて少し時間差で放たれた鉈も撃ち落とす。背後からの奇襲に失敗した魚呪霊はうろたえずまた距離を取ろうとするが——間に合わない。七海に高速で接近され、一瞬の間に鉈の二連撃を加えられ、祓われる。

(とりあえずこれで一息——!)

とはいかないのが、今の現状だ。

この三体ほどではないが、今の間にまたわらわらと2級以下の呪霊が集まっている。

悲しいことに、七海はほぼ全てを一撃で祓うパワーを持っているが、複数への攻撃は

得意ではない。奥の手ならば今ここに居並ぶ呪霊たちを一撃で全部祓えるが、今の状況では一度しか使えないため、切り札にしておきたい。

呪霊たちが迫ってくる。その大小は様々で、小さいものだと子猫程度、大きいものだと洋服タンスほどのものもいる。

巨大な呪霊が真上から押しつぶそうとしてくるが、タイミングを合わせて鉈を振るって返り討ちにする。その間に四方八方から小型呪霊が殺到するが、しゃがんで呪霊たちをぶつからせたうえでまとめて両断する。まるで挟み込むように、大型呪霊が二体左右から迫ってくるが、それは転がることで回避し、すれ違いざまに呪力を籠めた蹴りでバランスを崩してやった。そして立ち上がると同時に、しゃがんでいる間に掴んでおいた砂に呪力を籠めて投げつけて視界を塞ぎ、その後ろから小石を投げて弱点に直撃させる。

(今、どれぐらい時間が経った！)

腕時計はしているが、見ている暇はない。体感時間はすでにかかりのものだが、実際はそこまで経っていないだろう。

焦り。応援は間違いなく遅れる。後何時間、常に生死の狭間で戦い続けなければならぬのか。

また呪霊が殺到する。かなりの数が集まっているみたいで、時代劇のように順番に來

ることもなく、四方八方から押し寄せてくる。これだけ数が多いと、《十劃呪法》でま  
とめて切り倒すことができない。

「一点突破です！」

修羅場を幾度も潜り抜けてきた頭脳が、最適解を導き出す。一番薄い場所を一瞬で判  
断し、そこに集中して全力で呪力を籠めたタックルでぶつかっていく。これによって、  
囲まれている状況から抜け出せた。

そのまま七海は全力で走り出す。呪霊たちは我先にと、追いかけて始めた。

校庭で、いい歳して鬼ごっこか。あの最強の呪術師ならそうからかってくるかもしれ  
ないが、今の彼にはそんなことを考えつく余裕すらない。広い校庭を全力で駆け抜け  
る。

これによって、呪霊たちは、囲むどころか、まるで列をなすようにして七海に追いつ  
がろうとする形になった。

「人間を舐めないことです!!」

七海は叫びながら、校庭隅にあつた本格的な鉄棒を、《十劃呪法》を併用した斬撃によつて折り、呪力を最大限に籠めたうえで全力で呪霊たちに投げる。

これにより、列をなしていた呪霊たちは、貫通した鉄棒によつて次々と祓われ、その数を半分に減らした。

有象無象の呪霊には知能が無い。経験を生かした戦い方だ。

急な反撃で呪霊たちが動揺している間に、七海はそこに飛び込み、走りながらすれ違いざまに次々と鉈で両断していく。

「……………ふう……………」

今度こそ、一段落着いた。

七海はまだ周囲を警戒しながら、少し息をつく。今ので相当数を一気に祓ったので、しばらくはこないだろう。はたまた、この憎らしい呪物《獅子蟲》の呪力が届く範囲の呪霊を、今ですべて祓いつくしたのかもしれない。

(一生分の呪霊を見ましたね……………)

呪術師は大抵短命だが、長生きする術師もいる。だが、そんな彼らが一生かけてみる数を、短時間のうちに一気に祓った。さしもの七海も、疲れてしまった。



——だからこそ。

——ほんの少し、緩んでしまった。

背後に強大な呪力が急に現れる。

振り返るとそこには、太くて鋭い円錐型の槍と腕が一体化した、3メートルほどの醜い巨人がいた。

その槍はすでに、七海を貫かんと閃いている。

(油断——！)

感覚からして1級相当。これほど強大な気配をさつきまで感じなかったのは、見た目に反してトリツキーな、自身を隠蔽する類の術式を使っていたのだろう。

振り返り、鉦を振るいながら、《十劃呪法》を発動する。対象はその腕と一体化した太い槍。鉦で弱点を切り払えば、たやすく破壊でき、防御になるはず。だが、間に合わない。

覚悟を決めた、その時——

「危ない!!!」

——彼の命を貫こうとした槍と呪霊が、同時に、爆ぜた。

## 9話・二人の共闘

「……………」

深夜。

いつもならとつくに夢の国に旅立っている頃だが、いつもの二つ結びのおさげを解いて下ろしている咲来は眠れず、ベッドの上で何度も寝返りを打っていた。

光が目には悪いのを承知でスマートホンを弄ってみても、いまいち落ち着かず、すぐに置いて目をつむって眠ろうとするものの、また手持ち無沙汰になって弄りだす。

理由は分かっている。

衝撃的な出会いをした、呪術師・七海建人の存在だ。

呪霊には無理にならない程度にうつつすらと関わり続けていたし、高専で出会った親友たちとも連絡は取り合っている。呪術界との関わり完全に断絶したわけではない。

だがそれでも、自分の目の前に呪術師が現れたということが、咲来の動揺を誘った。

「七海さんも、一度やめて、それで……」

静まった部屋に、か細い独り言が空しく響く。

彼は明日早朝にさっさと呪物を回収して去っていく。もう一生会うことはないだろ

うし、なんら気にする必要はない。極端なことを言えば、学校設備の修理に来た業者みたいなものだから。

だが、それでも、妙に気になってしまふ。

咲来と同じように、一度やめた彼は、それでも呪術師として今は立派に活動している。自分が呪術界に戻りたいかと言うと、否だ。迷う気持ちはないでもないが、自分がいとも足を引つ張るところか仲間を傷つけてしまうことは実証済みだし、何よりも、もうあの恐ろしい思いはしたくなかった。七海と違って、今のところは、一般人生活も楽しめている。

それはもちろん、こちらもきつと、彼の言うところの「クソ」などところもあるだろう。比較的充実しているであろう両親だつてげっそりして帰ってくることはあるし、毎日嫌なニュースがテレビに流れていて心を波立たせる。当事者ではない彼女ですらそうなのだから、その当事者たちは、間違いなく「クソ」とでも思っているだろう。

だがそれでも、呪術界に戻る気にはなれない。「クソ」とは思っていないが、自分のような弱者がいるには、あまりにも相応しくない世界なのだ。

ちなみに、と、部屋の一角にある、なんの変哲もない洋服ダンスに視線をやる。

そのダンスは、もう長いこと使っていない。なにせ、部屋に備え付けられている大きなクローゼットで十分だからだ。年相応の女の子らしくお洒落のために服や装飾品は

それなりに持つてはいるが、このクローゼットは十分すぎる容量がある。

タンスから視線を逸らす。

部屋に帰ってきてからずっと、意識的に見ないようにしていたのに、うっかり見てしまった。

「未練がましい、つていうのかな……」

咲来自身、あまり人を悪く言うような言葉は使わないが、常識としては知っているし、高専生のころは霞以外漏れなく全員口が悪かったので、自然に覚えてしまった。今はあえて、思いつく中で一番適当な言葉を当てて、自嘲する。

——そうこうしているうちに、いよいよ許容できない時間になってきた。

さすがにもう、寝なければならぬ。

咲来はそう決心して、あえてスマートホンの電源を落として弄れないようにしようとする。

その電源ボタンに手をかけた直後——

「  
——  
ッ!?  
」

——禍々しい気配が、一気に膨れ上がった。

電源ボタンに触れて押せないまま、固まってしまう。悲鳴を上げることすらできな



い。初夏とはいえ気温は高い。それでもクーラーは効かせている。それなのに、全身にドツと汗が噴き出してくる。

今のは分かる。少し性質が違う気もするが、今まで散々、苦しめられてきたものだ。

「じゅ、呪力……」

口の中が渴いて、まともに声を出すこともできない。喉風邪をひいた時でももつとはつきり喋れるだろうというぐらいのかすれた声で、その正体を口にする。

震える指でカーテンを開け、窓の外をのぞく。

都合がよいのか悪いのか、この部屋の窓は、その膨大な呪力の発生源の方向を向いている。

——咲来がいつも通っている、学校。

山の上だからか住宅街から離れているし、当然咲来の家からもそこそこ時間がかかる場所に建っている。

そんな距離ですら濃密に感じるほどの呪力が、そこから放たれている。

七海から聞いた話を思い出す。

特級呪物《獅子蟲》。特級呪霊を祓いきれず、呪物として無力化したもの。

そんな最大級の危険物が、咲来の学校に置かれている。

そしてその封印は——ほんのわずかに、緩んでいた。

七海は、安全の範囲だと言っていた。

だが、そう——呪術の世界で、予想外は付き物。

咲来もたった四か月の間に散々、苦しめられてきた。

脚が自然と、ドアへと向く。

だがすぐに、ぎゅつと瞼を閉じて、首を振った。

自分が出る幕ではない。

この距離でもこれほどの呪力を感じるのだ。特級呪物の暴走。4級術師で中退した自分の出る幕ではない。1級呪霊相手にすらあのザマだったのだから。

それに七海は、いかにも強そうだった。

朗らかで優しくてちよつとポンコツだが、刀を使うだけあって武道関連に知識がある親友・霞が言っていた。

人の強さは、立ち居振る舞いで大体わかるものらしい。

その観点で見ると、高専のメンバーには大体当てはまった。

先生たちや先輩たち、それにメカ丸は、具体的に説明できるわけでもないが、雰囲気

が違った。霞や真依はだいぶ身近に見えたし、ついでに言うところ、圧倒的弱者であった自分は、ずいぶんと情けなく見えたものだ。

そして七海は。

高専の時の記憶が確かなら、歌姫や東堂すら比較にならないほどに見えた。

きつと、1級術師だ。

自分たちが叩きのめされ、そして心を折られた呪霊が1級。そんな呪霊を、安定して祓える、圧倒的強者。

そんな七海が、対処してくれるだろう。

(だったら、そう……私が行っても、邪魔になるだけだから)

ベッドに戻り、消そうとしていたスマートホンを操作する。

往来ができることは一つ。彼女が知る呪術関係者——連絡先を交換している歌姫に、連絡をすることだ。

特級呪物が学校にあること。それが何やら暴走したらしきこと。すさまじい呪力を感ずること。すぐさま応援が欲しいこと。

若者らしい素早い手つきで、簡潔に要点だけをまとめてすぐに送信する。この連絡技術は、高専で身に着けたものだ。

そして送信が終わってすぐ、ふと気になって、窓の外を見る。

そこには、とてつもない数の呪霊が、ひしめき合っていた。

「ひっ」

小さく悲鳴が漏れる。空にも道路にも、おびただしい数の呪霊がいる。そしてその全員が、あの学校を目指していた。

間違いない。《獅子蟲》が呼び寄せているのだ。

これほどの数、見たことが無い。一体どこから湧いてきて、どこからまで集まってきたのか。

今年のクリスマスにやたらと街中の呪霊が増えて退治にでんてこ舞いになった時があつたが、それとは比べ物にならない。

嫌な想像がよぎる。

校内で、七海が、数多の呪霊に囲まれて、惨殺される姿。

——あれだけの数、一人で対処できるわけがない。

すくつ、と咲来は立ち上がり、真つすぐ洋服タンスの前に向かう。

そしてそこで、立ち止まってしまふ。

取っ手に手を伸ばそうとする。

そして、ひっこめる。

そんな動作を、何回も繰り返した。

だが——また瞼を強く閉じ、首を振り、両ほほを激しく叩く。  
そして、深呼吸をして——決心が鈍らないうちに、勢いよく洋服ダンスを開けた。

（——七海さんを、助けたい！）





「成宮さん!？」

急な爆発によって怯み止まってしまった巨人の呪霊を一撃で祓いながら、七海は大声を出す。

消え去っていく巨人の向こう側。そこには、いてはいけない人物・成宮咲来がいた。その格好は、昼間と全然違う。

前髪が目線を隠しがちなのは変わらないが、二つ結びのおさげで大人しそうな印象だった髪型は、運動しやすそうなポニーテールに。

ややお洒落な制服や簡素な私服は、可愛らしくもシックな真っ黒いワンピース型の制服に。

彼女から話を聞いていた七海は、すぐに理解した。

これは、高専の制服で、かつ呪術師として在籍していたころの髪型だ。

「七海さん、大丈夫ですか!?! すごくい数の呪霊が!」

咲来が駆け寄ってくる。その顔には、純粹に七海を心配する色が浮かんでいた。

——今の爆発は、彼女の術式《爆散》によるものだ。

「……………危ないところを助けて頂いたことは感謝します」

間違いない、死ぬところだった。たった今七海は、咲来に命を救われたのだ。しかし。

「ですが、もう帰ってください。ここは危険です。見ての通り、広範囲から大量の呪霊が集まってきています！ 逆に、ここ以外には手出しされないでしょう！」

彼女をこれ以上巻き込むわけにはいかない。

特級呪物を置いておいたこと、封印がわずかに緩んでいたこと、それをさほど問題視しなかったこと。

その全てが、呪術界の「大人たち」の責任だ。

それによって生じたこの災禍に、いくら元高専生とはいえ、今は一般人の「子ども」を、巻き込むわけにはいかない。

「で、でも、あれだけの量、七海さん一人では危険です！」

七海の語気は珍しく荒い。それに怯みながらも、咲来は逃げようとはしなかった。

「ここに来る間にもたくさん呪霊を見ました。通り道にいたのは全部被いましたけど、そこ以外からはたくさん来るはずです！」

そう言い争っている間に、次の集団が来た。

七海は咲来を庇うように戦闘態勢に入る。

だが、呪霊たちは近づく前に、全員が、爆発した。

「……………確かに、私は弱いです。強い呪霊を倒すことはできません」

啞然とする七海の背中に、咲来が低い声で語り続ける。

あくまでも彼女は、気弱は女の子だ。それは今この場でも、本質的には変わらない。  
「ですが、低級呪霊の露払いぐらいなら、お手伝いできます」

声から怯えは消えていない。わずかに震えている。この状況に恐怖しているのは明らかだ。

「——私の《爆散》じゅっしきは、それが得意ですから」

しかし、ただ弱弱しいだけではない。

彼女は、誇り高い志を持った、一人の「呪術師」として、そこに立っていた。



「次が来ますよ!」

「任せてください!」

結局、背に腹は代えられないということで、咲来も加えた、長い長い防衛戦が再開し

た。

幸い、咲来が道中の呪霊を全部祓ってきたからか、その方向からの呪霊は減っている。だがそれでも、次から次へと、波のように、おびただしい魑魅魍魎たちが、七海が持つ《獅子蟲》めがけて殺到していた。

「やらせないー！」

咲来が叫ぶと同時に、呪霊たちが次々と爆ぜる。しかもその爆風が後方の呪霊たちを妨害し、速度を落とさせる。そのほんの一瞬のスキができれば、咲来の照準は合う。一瞬怯んだ呪霊たちも皆、ただの呪力となつて爆発した。

だが、そんなものをもものともしない強力な呪霊が数体、突撃してくる。咲来の呪力では直接爆発させることはできない。

しかし、こちらにとつてはそれで充分。七海が身体能力を生かして突撃し、2級以上は固いであろう強者であるはずの呪霊たちが、次々と一撃で切り払われる。

(……明らかに楽になった)

低級呪霊と言えど油断はできない。不意打ちを食らえばただでは済まないだろう。しかもあれだけの数があると、常に赤信号と言つてもよい。

だが、咲来がそれら大量の低級呪霊を一瞬で祓ってくれるおかげで、七海は強い呪霊に集中できる。一人だった時に比べて、確実に安定感が増していた。

(それにしても、彼女は4級で中退したはずでは?)

そして少しだけ、戦闘以外のことを考える余裕も生まれた。

彼の見立てでは、咲来が《爆散》させた低級呪霊たちはほとんどが4・3級だ。しかし中には、準2級相当のものも混ざっていて、それでも彼女によつて一瞬で体をただの呪力にされ祓われている。

話によると、咲来の術式で呪霊を直接《爆散》させるには、呪力で明確に上回る必要があるとのことだ。身体は、ある意味で究極の結界だ。七海の《十劃呪法》のような例外を除いて、直接干渉する場合、ある程度呪力に差が無ければならない。彼女はその例に漏れないのだろう。

だが、現に彼女は、3級どころか、準2級レベルまで、直接《爆散》させている。

それに、彼女曰く、高専生だった当時は、一度に《爆散》できるのは一つまでで、かつ数秒間隔を置かないと連発できなかったはずだ。しかし今は、ほぼ同時に何体もの呪霊を一気に祓っている。

入学四か月で、4級術師のまま退学した。

いくらその後ボランティアで低級呪霊の相手をし続けていたとはいえ、これほどの成長はあり得ない。高専での訓練も、強者との戦いも、体系だった指導もされていないはずだ。

「こつちは任せてください！」

咲来の声が夜の校庭に響く。そこで七海の思考は中断された。

七海が、対して強くはないがすばしっこくて倒すのに時間がかかる1級相当の呪霊を相手している間に、咲来の方にも強力な呪霊が向かっていった。彼がまとめて対応しようとするものの、咲来が、おそらく時間稼ぎをするつもりのようなのだ。

黒い制服に仕込まれた隠しポケットから、五寸釘サイズの木製針のようなものを三本取り出して無造作に宙に放り投げる。すると、それらは急加速して別方向に飛んでいったかと思いきや、急カーブを描いて、三方向からその呪霊に突き刺さった。

——直後、それらが爆発する。

身体に直接刺さった三本の針が大爆発を起こしたその呪霊は、そのまま悶え苦しみながら、ただの呪力となつて消えていった。

(大丈夫、効いている！)

咲来は内心で力強くうなづく。

最初から信頼していた。

何せこれは——大切な親友と先輩からの贈り物なのだから。

(ありがとう、真依ちゃん！ 桃先輩！)

この木の針は、高専を去る際に、「餞別」として贈られた、桃お手製の呪具だ。



呪力を流し込むことで、この呪具に刻まれた《付喪操術》が発動し、自動で理想の起動を描いて対象に突き刺さる。《付喪操術》の達人である桃の能力を生かした、単純な呪具だ。

だが当然それだけでは、4級呪霊を倒すのがせいぜいである。実は木でできているのは表面だけ。その中心には、鉛製の、まさしく五寸釘が入っている。

その釘の作成者は真依だ。《構築術式》によって作られた呪力由来の鉛製五寸釘は、構造が複雑な弾丸や以前使っていた数重視の金属球とは比べ物にならない質量を持つ。これを表面の木に刻まれた《付喪操術》で相手の直接突き刺し、至近距離で《爆散》させることで、強力な呪霊すら一瞬で祓うことができるのである。

これによって咲来は、同格・格上相手への手札も持てるようになった。先ほど七海を貫こうとした呪霊とその槍を爆発させたのも、これによるものだ。あれだけのサイズなら相応にタフであろう、しかも1級呪霊を大きく怯ませたその威力は、三本同時に爆発させれば、準1級相当の呪霊も先ほどのように祓うことができる。

さて、これで一安心……とはいかないのが今の状況だ。

祓えたと思ったら、別の呪霊たちが正面から殺到してくる。その半分は普通の《爆散》で祓えたが、中には強力なものも混じっており、倒しきれない。

その呪霊たちが一齐に、それぞれが個性的な方法で呪力の弾丸を飛ばしてくる。一瞬で至近まで近づいてきたそれらを、咲来は自身を巻き込んでしまったために《爆散》で壊すことができない。

「成宮さん!?!」

ここまではか。七海がそう思った直後。

——咲来の目の前で、その呪力の弾丸は消し飛んだ。

すぐに咲来は先ほどの針を呪霊の数の分投げてそれぞれに一本ずつ突き刺して、すぐに《爆散》して祓う。だが、そんな正面を向いていた咲来の真横から、高速で鋭い爪を立てて猫型の呪霊が迫る。

正面を見る咲来の視界には入らない位置からの奇襲。本体は弱そうだが、賢い呪霊の様だ。

彼女の脇腹に、凶刃が突き刺さる——

——と思いきや、咲来は、そちらへと向くこともなく、ギリギリまで引きつけ、ぴったりのタイミングで、身をよじって回避した。

そしてすれ違いざまに、逆に横つ腹に、呪力を籠めた左裏拳を叩きつける。筋力が無い彼女のさほど力のこもってない打撃だが、宙に浮いていたその小型の猫呪霊を怯ませるには十分だ。右手で掴むと、身をよじって回転した遠心力を生かして、もう反対側から迫っていた呪霊に投げつけ、纏めて《爆散》させる。

窮地を脱した咲来の脳裏に、メカ丸と加茂の顔が浮かぶ。

まず呪力の弾丸を防いだのは、餞別としてメカ丸がくれた呪具《呪弾撃墜障壁》だ。

その本体は、メカ丸の顔を模したポケットティッシュサイズの端末である。これを体に仕込み、呪力を流し込むことで、正面に呪力製の不可視の障壁を展開することができる。

る。ただしお手軽な分制限が厳しく、一定以上の呪力的質量を持つものは防げない。呪霊本体による攻撃などは防げず、あくまでも、呪霊がよく使う呪力の弾丸を防ぐことを目的に造られている。

あまりにも残酷な天与呪縛によって、メカ丸は、当時一年生にして、呪具作成のスペシャリストとなっている。そんな彼による、渾身の傑作だ。

そして、なぜ咲来が、視界の外だったはずの真横からの攻撃を避けられたのか。

その理由は簡単だ。

咲来は、「そちらをしつかり見ていた」。

呪霊や七海からは、正面を見ていたようにしか見えない。だが実際は、咲来の目線は、横から迫る呪霊を捉えていたのである。

そのトリックは、彼女がつけている眼鏡だ。これも呪具の一種であり、自動で外から見た自分の目線を別方向に向いているように見せかけることができる。見せかけの目線は任意操作も可能であり、たった今、咲来は真横から来ている呪霊を騙すために、正面を見ているように見せかけていたので。

そもそも彼女の数少ない自慢が、視力である。この眼鏡も伊達眼鏡だ。高専を去るまでも、ずっと裸眼で過ごしてきた。

そんな彼女が高専を去る際、「呪霊が見えると視線で察知されて困るだろう」というこ

とで、加茂が用意してくれたのが、この伊達眼鏡だ。役に立つし、デザインもシンプルながらお洒落なので、咲来も愛用している。ただ、当初加茂が選んだデザインは相当「ダサかった」らしく、桃の口添えでこれに決まったらしい。退学後しばらくしてからチャットアプリの中で、そのような愚痴を聞いた。天然の加茂とその横でいきり立つ桃、実に目に浮かびやすい光景だ。

「……大丈夫そうですね」

「はい、なんとか……」

戦っていたすばしっこい呪霊をようやく倒して一息ついた七海が、次々迫りくる呪霊に向き合いながら背中を向けて話しかけると、咲来からも背中を向けての返事がくる。この状況で、自然と二人は、互いに背中を預け合っていた。

七海の方には大量の呪霊。気配からして、背後の咲来の前には、数こそ少ないが、強力な呪霊が複数いる。

——彼女は呪術師として、ここで戦うことを選んだ。

歓迎するべき事態ではない。

それでもこうなった以上、彼女の意思を尊重して——戦い抜くべきなのだ。

直後、お互いに何の合図もなく、両者の間を軸として一回転する。そして位置の交換が終わった瞬間、七海は鉈を構えて駆け出し、咲来は腕を振るう。

七海の鉦が、複数いる強力な呪霊の弱点を次々と両断する。睽来の術式が、数多の呪霊を次々と爆殺する。

強い呪霊は七海が、数多くいる低級呪霊は睽来が、戦うのに適正だ。故に、位置を交換した。

なんてことはないが、事前の打ち合わせを一切無しで、ここまでスムーズな連携ができた。

しかし、そう上手くはいかない。

睽来が倒した呪霊たちの奥から、次の一群がやってくる。

「なんとかできますか!？」

「ツ——やってみます!」

その群れはほとんどが低級呪霊だが、一匹だけ、1級は確実な呪霊がいる。電話ボックスサイズのやや縦に大きい、象のように瘡蓋だらけのガサガサな太い脚で直立する、大猿のミイラのような、奇妙な姿だ。今日現れた中では、間違いなく一番厄介であろう。また位置を交換したいところだが、七海の方にも、2級以上が複数体現れた。こちらを任せるわけにはいかない。

睽来の声に脅えが混じる。相対する呪霊が放つオーラは強大だ。七海ですら油断ならないであろう存在に、今から立ち向かわなければならぬ。

咲来は深呼吸をし、決死の覚悟でその呪霊を睨む。こちらに引きつけるために、あえて見える目線はずらさない。

それを受け取ったそのミイラ呪霊も、天を仰いで咆哮する。それに呼応するように、周囲の低級呪霊も咆哮した。

咲来と七海は察する。明確に統率の取れた「群れ」だ。呪霊はそれぞれが自分勝手に、集団行動はほぼしない。群れになっているとしたら、呪霊が好む・発生しやすい場所にたまたま集まっただけに過ぎない。

だが、この一群は違う。あのミイラ呪霊をボスとする、本当の意味での群れなのだ。「持ちこたえてください！」

他の呪霊を従えるほど強力なのは大前提。間違いなく、知力もあるし、術式もあるだろう。あの釘があっても、咲来には荷が重い。祓うのではなく、時間稼ぎが最適だ。

「はー」  
釘を取り出しながら、安心させるために、恐怖を吹き飛ばすように、大きく返事をする。  
「ここが正念場だ。」

ミイラ呪霊がまた咆える。直後、取り囲む低級呪霊たちが一斉に、まるで弾幕を張るように、呪力の弾丸を放ってくる。咲来はそれを、《呪弾撃墜障壁》<sup>メタバレット、バリア</sup>を展開して防いだ。

その弾幕は、途切れる気配が全くない。一体一体の装弾数と言うべきものは低級なだけあつて多くはないが、その分相手の数が多く、戦国時代の鉄砲の三段撃ちのように、途絶えることはない。

(どろろしよー！)

《呪弾撃墜障壁》はあくまでも携帯用の簡易・小型の呪具であり、展開できる時間に限りがある。背後の七海はまだ、片付く様子がない。

とりあえず、バリア越しに《爆散》で数を減らそうか。

そう思った矢先——視線の先で、恐ろしいものを目にする。

ボスであるミイラ呪霊が、弾幕を張る低級呪霊の後ろで、大口を開けてこちらを向いている。その口には、とんでもない密度・量の呪力が、急速に集まっていた。

「——!?」

あれはまずい。当然この簡易バリアで防げるものではないし、もし放たれたら、睽来どころかその後ろの七海まで消し飛ぶ。

あの塊を《爆散》させようにも、まだあの1級呪霊のコントロール下だから、通じない。

焦る。

全身からさらに汗が吹き出し、脳みそが茹で上がる程に、思考が回転する。



瞬間、  
咲来の脳にあふれ出す、  
「存在する」  
記憶——。



「思うんですけどお」

テレビの中で、アイドルと言う割には長身で、そこがむしろ人気になっている少女・高田ちゃんが、テレビの企画で遊んでいるゲーム画面を見ながら、何気なく呟く。

そのゲームの内容は、第二次世界大戦をモチーフとした無双ゲームだ。うら若きアイドルがやるにしても似合わないし、リアルさを追求したものでなく「雑兵を蹴散らす」タイプの無双ゲームはその戦争に駆り出された人々が未だ存命の世の中では不謹慎である。これはまだ彼女がデビューして間もないころで、仕事を選べなかったのだろう。

「あのボス、たくさんの人に守られてますよねえ？」

敵陣形の真ん中。三国志や戦国時代ではないはずなのに、敵軍の総大将が指揮をしている。近代の戦争ではありえない光景だし、それはゲームであることを差し引いてもアリテイがなく、場がすっかり冷え切っている。

だが、高田ちゃんが気にしているのはそこではなかった。

「でも、兵隊さんたちはみんなピストルや爆弾持っているんですよねえ？ 一人が暴発させちゃったら、誘爆とかあると思うんですけどお」

そんな素朴な疑問を聞いたゲストの壮年の男性が、苦笑いしながら答える。

「当然、現実ではそういうのに関してはやちゃんと対策をしているよ。実際の戦場でそうした事故が起こることはあまりないかな。武器庫みたいな火器が密集しているところならまだしも」

「なるほどお」

高田ちゃんは気のない相槌を打ちながら、男性の言うことをまるで無視して、守りが固い総大将へ直接ではなく、その傍に爆弾を投げ込む。

爆発。

ただ数人の雑魚が散るだけ。特に意味がないはずだった。

ただしこれが——クソゲーじゃなければ。

「あ、勝ちましたあ」

画面の中では次々と誘爆が起きて、それが敵総大将の周辺まで届き、一瞬で爆死させる。そして画面にはチープな効果音とともに、武骨な線には似合わないド派手な色とフォントで「ステージクリア！」と表示される。

——そのあまりにもあり得ない光景に、場が冷え切っていたが思ったがさらに冷えて

いく。

——そんな中でも高田ちゃんだけは、迷うことなく次のステージへと進んでいた。

†  
†  
†

この間、約二秒。

睽来は照準を合わせやすくするために、指先を向ける。

それが指すのは、あの1級呪霊——ではなく、その傍で弾幕を張っている数多の低級呪霊。

直後——数多の爆発が、同時に起きた。

《爆散》させたのは、低級呪霊たち。ただし闇雲にではなく、1級呪霊の近くにいた個体のみだ。

その効果は絶大。

急に周囲で数多の爆発を起こされた1級呪霊は相応のダメージを一気に食らい、動揺して溜め込んでいた呪力も霧散している。

そして、その隙を見逃さない。

咲来は五寸釘の最後の七本を取り出し、呪力を籠めて投げる。

それらは自動的に飛んで1級呪霊に突き刺さり——直後に、先ほどとは比べ物にならない大爆発を起こした。

（ありがとうございませう！ 東堂先輩！ 高田ちゃん！）

油断せず周囲の低級呪霊も次々と《爆散》させながら、咲来は心の中で、二人に頭を下げた。

——意外なことに、退学するにあたって、東堂からも餞別が送られた。ただしそれは他生徒のように、呪術関連ではない。

題して——『高田ちゃん名場面集』だ。

東堂が持っていたコレクションの中でも、「布教用」のものであ  
る。

その大きさをたや、分厚い辞書程のセットが五つ。饑別の大きな紙袋二つのうち、一袋はまるまるこれで埋まっていた。涙の別れの後にこれを見た時、おもわず涙が引つ込んでしまった。のちにメールで真依と桃が「あいつはカス」「人を何だと思ってるのか」「というか同じものを何個も持っているのはキモい」など、惜しみない罵倒を吐き出していたのは余談である。

だが、ここでは役に立った。

律義な咲来は、一応このDVDをすべて見た。ファンになったわけではないが、高田ちゃんの魅力がわかった。

魅力は色々あるが——一つを挙げると、「彼女の何気ない発言は、ふとしたところで役に立つ」ということである。

本人にその気はないだろうが、おそらく変わった視点を持っているのだろう。そういえば東堂が「高田ちゃんが言うには……」みたいなことをたまに言っていたのを、彼女はDVDを見ながら思い出した。当時は分からなかったが、DVDを見たことで、あ**ぶつ**飛んだ先輩の気持ち**が**少しだけ分かったのだ。



こうして、変わった先輩からの思わぬプレゼントによって、咲来は窮地を脱した。それと同時に七海も片付いたみたいで、こちらにゆっくりと歩いてくる。

「……………1級呪霊を祓ったのですか」

「その、たまたまです……………」

七海の声に、わずかな動揺が見える。それに対して咲来は、少し頬を染めながら、返事をした。

さらなる呪霊がもう集まってくる気配は、今のところない。ようやく、《獅子蟲》の呪力が届く範囲の呪霊が集まりきったようだった。

(……………これが、4級で中退した生徒なのですか……………)

照れて緩く笑っている少女を見つめながら、内心で七海は驚嘆する。

聞いていた話と違う。この戦闘で、彼女は4級どころか、3級や準2級呪霊すら、直接《爆散》させていた。話が確かなら、直接《爆散》させるには、明確に呪力を上回っている必要があるはずだ。つまり今の彼女は、準2級呪霊を明確に上回る程度の呪力を持っていることになる。

また、その戦闘力も、4級術師に収まるレベルではない。

身体能力は未だ4級術師程度だ。しかし、その判断力は高い。その場に応じて持って

いる手札を有効活用して、数多の呪霊を捌ききっていた。

また、直接《爆散》させずとも、攻撃力も高い。七海を救った時の異形の巨人然り、今の低級呪霊を率いていた呪霊然り、不思議な道具を巧みに操って有効打を与えていた。後者に至っては、多数の低級もろとも、短時間でまとめて祓った。

おおよそ、4級の枠に収まるレベルではない。

3級すらも温い。準2級、いや、2級相当の可能性すらある。

(暴走、だけではなかったのでしょうね)

呪霊の気配はない。周囲を警戒しつつも少し気を緩め、校庭のど真ん中で息を整えるためにしやがむ。七海以上に疲労している様子の咲来が先にしやがんだのを見て、見下ろすことがないようにと言う気づかいかいも、その行動にはあつた。

去年の八月に起きた、トンネルでの惨事。

その出来事を、咲来は「暴走」と表現した。

事実、高専側も状況から、「暴走」と判断している。

それらの判断は、間違っていない。絶対に正しい。

ただ、それだけではなかったのだ。

当時の咲来の呪力では、本来、それほどの《爆散》を起こすことはできない。

だが、その惨劇の間際——仲間を助けたいという感情の高ぶりが、咲来に、彼女自身

も自覚がない「成長」を与えた。

そう、あの瞬間——彼女の呪力は、暴走とともに、急成長もしていたのだ。

だからこそ、今は準2級呪霊程度ならば余裕で上回っているし、インターバルもはるかに短くなっている。戦術については、話を聞いた限りでは高専時代にこれといった呪具は使っていないかったことを加味すると、道具を使った戦いに適性があった、ということだろう。

——あの惨劇は、起こってはいけないことだった。

だが一方で——彼女に、素晴らしい成長ももたらしていたのだ。

(……私も、もしかしたら)

自分を守つてこの世を去つた同級生の顔がよぎる。

なにも良いことなどあるはずがないと思つていたあの出来事。

七海の中で、それに対する視点が、今、変わろうとしていた。

「……………とりあえず、簡易的な再封印処置を施しましょう」

だが、今は思考にふけるわけにはいかない。七海は自分を律するように、咲来への説明と言う体で、今からやろうとすることを口に出す。

懐から、《獅子蟲》が入っている小箱と、包帯とマスキングテープの中間程度の幅があるロール状の呪符を取り出す。

本来施されていた嚴重な封印に比べれば、ザルに等しい。呪物が持つ効果を抑えることができないからだ。ただ、外に漏れ出る呪力を大幅に弱めることができる。これを持ち歩くわけにはいかないのです、急遽臨時休校にしてみらい、ここに封印専門の呪術師がきて、本格的な封印をすることになるだろう。これは、それまでの時間稼ぎだ。

「へえ、そんなのもあるんですね」

咲来の声には疲労が滲んでいるが、明るくて楽し気だ。大仕事を終えた達成感で、高揚しているのだろう。その眼鏡——今思うに伊達眼鏡だ——の奥の目線は、もう隠す必

要がないからか、真っすぐに七海の手元を捉えている。その顔は、激しい戦闘の影響と先ほどの照れが残って、赤く上気している。

もう少し近くで見たいのか、咲来が身を乗り出してきた。

七海と咲来。二人の距離が、一気に縮まっていく。

その時――

——  
七海は急に、咲来を思い切り蹴飛ばした。

「きやつー！」

並外れた筋力で蹴飛ばされた小柄な彼女は、数メートル後ろに吹っ飛ぶ。呪力でのガードは本能で出来たが、受け身には失敗した。

どうして、なんで、いきなり。

咲来が、自分でも訳が分からない感情を抱きながら、ゆっくり顔を上げると――

——巨大なウツボの頭が、そびえたっていた。

「……………え？」

尻もちをついたまま、啞然と見上げる。

そのサイズは、十メートルは下らない。空を向いた、巨大な緑色のウツボ。そう表現するほかない、異様な光景だ。



呪霊。

それ以外あり得ない。

「……………あ……………ま……………」

ガタガタと、睨来は震える。

全く力が入らない。

声にならない声が漏れる。

涙で視界が歪む。

恐怖。

あのトンネルでの惨劇でも、つい先ほどまでの大戦闘でも、感じたことが無いほどの恐怖。

目の前の呪霊も、間違いなく強力だろう。

だが、それは、もはや関係ない。

どこに潜んでいた。油断した。自分が食われかけていた。

そんなものが「どうでもよくなる」ほどの恐怖が、咲来を支配する。

悍ましい呪力が、形作られる。  
そして大幅に密度を増して、膨れ上がる。

『ほう、中々悪くないやつだなあ』

耳ではなく頭に響くような、金切り声と唸り声が混ざったような声が聞こえる。

その声は、ボコボコと形を変え、次第に縮まり、いまいち輪郭が捉えられない黒い霧もやの塊のへと変化していく、呪霊から発せられていた。

「……………あ、や……………い……………」

逃げたい。

脚に力が入らない。

立ち上がれない。

ただ、見上げることしかできない。

悲鳴すら上げられない。

「成宮さん  
!!!!」

黒い霧の向こう、七海が叫びながら、こちらに走ってくる。

『とりあえず、朝餉だなく!!!』



だがそれよりも早く、靄が突撃してきて、咲来を飲み込むほうが早かった。



あまりにも冒流的な黒い霧が、眼前で咲来を飲み込む。

七海は助け出すべく、《十劃呪法》で弱点を作り出して鉦で斬りかかるが、手ごたえはない。まるで本当に、霧を切っているかのようだ。

「いやあああああ!!!」

「成宮さん!?!」

直後、甲高い悲鳴が、真夜中の学校に響き渡る。喉が割れんばかりに叫ぶ彼女の顔は、苦痛と恐怖に支配されていた。

『ほうほう、こつちもこつちでそこそこだなあ〜』

そんな張り詰めた場に、場違いな呑気なトーンの声が、靄の中から聞こえる。

（人語を話す呪霊?! 間違いない、特級だ!）

七海は、辛うじて無事だった右手で無駄だと分かりつつもなおも鉈を振るいながら、後悔に歯噛みする。

油断していた。

あのウツボの頭のような巨大な呪霊は、おそらく自分の術式で、じつと地面に潜んでいたのだ。そしてタイミングを見て、食らいついてきた。辛うじて手放して引いたのだ、これといった怪我はない。さらに、乱暴なのを承知で咲来を蹴飛ばして食われるのを防いだ。

だが、状況は、ほぼ最悪に等しい。

（《獅子蟲》が目覚めた!）

特級呪物《獅子蟲》。自ら呪霊に食われることで逆に乗っ取って力を増していく特級呪霊が封印された姿。

そしてたった今、呪霊に食われたことにより——特級呪霊《獅子蟲》として、復活し

てしまった。

「いや！ 痛い！ やめて！」

靄の中で咲来がもがいて暴れるが、まわりつく黒色はどんどん濃くなっていく。もはや七海からは、近くにいるというのに、その姿がほとんど見えていない。

(どうすればっ!?)

一心不乱に鉈を振るう。靄はほとんど咲来にまわりつくせいで、彼女を傷つけないように攻撃をしなければならない。よって自由な場所に攻撃できず、《十劃呪法》に限がかかる。仮に使えたとしてもこの手ごたえでは意味がなかっただろうが、それでも、焦りと無力感が膨らんでくる。

「助けて！ たすけ、ななみさ——アアアアアアアアアアアア!!!」

自分に助けを求める声が聞こえる。だが、助けることは叶わない。

ついに靄が完全に彼女を取り込み、その全身を完全に覆いつくした。

(また私は、何もできないのか！)

そのまま突っ込んで引つ張りだしたい。

だが、放つ呪力がより強大になっていくのを鋭敏な感性で察知して、本能で後ろに飛び退いてしまう。

咲来は命の恩人だ。だが、そんな彼女を、七海は助けることができなかった。

目の前で、咲来を飲み込んだ靄が、その漆黒の密度を維持したまま、大きく膨らんでいく。

形の定まらない、直径五メートルほどの、巨大な球体。

そしてそこに、真横まで裂けているのではないかと思うほどの口角が吊り上がった巨大な口と、ニタニタと嗤っているかのような形の目が、空洞で形作られる。

『カカカカカッ、悪くない食事だったなあ〜』

特級呪霊《獅子蟲》。

その真の姿が、今ここに、顕現した。

## 10話・夜明けと晴天

(おかしい)

怒りと、後悔と、自責と、悲嘆と、申し訳なさが、七海の中であふれている。頭に血が上り、鈍痛がする。

ただ、幸か不幸か、それは彼から、冷静さを奪い去ることはなかった。

冷静に、自分の情けなさとおふれ出る感情を自覚してしまいながら、疑問点を吟味する。

(《獅子蟲》は、呪霊に飲み込まれて活動を始めたら——「他の呪霊に乗り換えて力を増していく」はず)

信頼できる伊地知の調査によるものだ。間違いはない。外部の一般高校に置いておく程だから情報もある程度残っており、高専の蔵書室ですぐに過去の資料が見つかったと言っていた。

確かに最初は、あの呪霊に飲み込まれることで力を取り戻した。

最初から特級は間違いない呪力なのも、あの飲み込んだウツボ型呪霊が1級相当だったことから納得がいく。

だが——咲来を飲み込んだことで、その力がまた数段進化したのは、理解できない。まず咲来が呑み込まれたこと自体が理解したくないが、不幸なことに、その現実をすでに受け止めてしまった。もう次の行動に移ることができており、戦闘を開始している。

呪霊は、人間、特に呪術師を食らうことで、その呪力を増すことはできる。それは確かだが——《獅子蟲》の強化具合は、およそ、咲来の2級相当の呪力に見合っていない。元々が特級だったのだ。咲来を飲み込んだところで、その強化は誤差程度にしかないはずだ。

『んんん、なるほどなあ。こいつ、珍しい術式を持つているなあ。?』  
「だまれ」

ふざけきった喋り方に、マグマが噴き出すように怒りが湧き上がる。それを力に変え、七海は鉈で斬りかかった。

《十劃呪法》と、全力の斬撃。例え特級でも、ダメージにはなるはずだ。  
『何度やっても無駄だなあ。?』

だが、無意味。インパクトの直前、攻撃される部分のみあえて靄を引かせることで、七海の攻撃は毎回空を切るのみだ。不定形が多い呪霊の中でも、特に形を自由に変えられる。彼の攻撃は打撃・斬撃しかないため、相性としては最悪だ。



——こんなやり取りを、先ほどから、何度も繰り返していた。

七海の攻撃はほぼ無意味。《獅子蟲》のほうは、その足掻きを見るのがよほど楽しいらしく、あえてほぼ反撃せず、愉悦を満面の笑みで表現しているのみだ。

そして、そんな数少ない反撃が飛んでくる。

霽の一部を切り離して、七海に飛ばす。その速度たるや銃弾の様だが、かろうじて回避に成功した。

そして、その霽は「爆発」して、急激に体積を増やした。

「——っ！」

その衝撃はすさまじい。それに備えて呪力でガードし、吹き飛ばされた後も受け身は成功。無傷だ。

だが、この攻撃が、七海 of 精神と思考と、蝕んでいる。

「なぜお前が、成宮さんの術式を！」

考え続けてきたことを、怒りに任せて口に出す。

まさしく咲来を殺した仇がその術式を使うことが許せない。

だが、この叫びには、そのまま、疑問の意味もある。

——数少ない反撃は、咲来の術式である、《爆散》を用いている。

今日だけで何度も見たから、間違えようはない。

《獅子蟲》の術式がそれだとは聞いていない。術式が判明していたら、伊地知が見つめて教えてくれたはずだ。

それにそもそも。咲来は過去話の中で、記録には残っていない珍しい術式だと言っていた。七海も、似たような術式すら知らない。

しかし現に、《獅子蟲》は、《爆散》を使用している。

『カカツ、嫌だろうなあ、苦しいだろうなあ、憎らしいだろうなあ！ 人間のその

感情、最高だなあ〜!!!」

喜悅に浸りながら、はらわたが煮えくり返る程愉快そうに嗤う。そうした感情が好きなのは、いかにも呪霊らしい。

『冥途の土産に教えてやろうかなあ〜』

身体の一部を切り離し、今度は複数連射してくる。その軌道は複雑で、どのタイミングで爆発するか分からないこともあつて、七海は大きさに回避するほかない。元々意味をなしていないかった攻撃を、することすらできない。

『オレ様の術式は《吞害》<sup>どんがい</sup>！ 呪霊や呪術師を取り込むと、普通の呪霊よりも大幅にパワーアップするんだなあ〜！』

江戸時代から今まで封印されていたくせに、口癖こそ気になるものの、その言葉は実に現代的だ。それゆえに説明は分かりやすく、「縛り」として機能する。

『そしてその神髄はなあ〜、取り込んだ奴の術式全部と、その知識の一部を、奪うことができるんだなあ〜！』

呪力が爆発する向こう側で、受け入れがたい説明がなされる。

大したダメージは食らっていないのに、精神的には、頭を横殴りにされたかのような衝撃を覚えた。

(呪霊に取り込まれて力を増すのは、術式ではなかったのか！)

齒噛みする。呪霊に理屈や常識は通じない。それはその知性や精神性のみならず、本質そのものにも言えることだ。

（あくまでも、それは呪霊としての「性質」、いわば生態に近いものに過ぎなかった！  
食われないと力を発揮できないのは、「縛り」にもなっている！）

元々の素養もあつたのだろうが、そこに生まれ持つての性質が制限となり、天与呪縛めいた現象が起きて、強力な特級呪霊となったのだろう。

そんな性質を、超自然的現象であるがゆえに、術式だと勘違いしてしまった。

その末路がこれだ。

命の恩人は飲み込まれ、その術式が自身を殺そうとしている。

七海個人の話をするなら、憎たらしい因果で済む。

それよりも、咲来の術式が人を助けるのではなく悪意をもって傷つけるために使われているのが、七海の心を抉る。

——これ以上ないほどに、咲来が、冒瀆されていることに他ならない。

もはや自分はこの際死んでも構わない。どうせ咲来がいなければすでに消えていた命だ。ここで力尽きるのも仕方ないだろう。

だが、負けるわけにはいかない。

ここで止めなければ、咲来の術式が、多くの命を奪うことになる。

それだけは——それこそ、自分の命に代えてでも、防がなければならない。

「私の術式は、《十劃呪法》」

鉈を改めて構え、全身に呪力をみなぎらせる。

「対象を7:3に分割した時、その分かれ目に強制的に弱点を作り出す術式」

『カカカカツ、そつちも面白いなあ。使いにくそうだけど、攻撃力は高そうだなあ』  
術式を説明することで、呪力を強化する。それは分かっているだろうに、術式について興味深そうに反応する程に、《獅子蟲》は余裕そうだ。むしろ術式を聞いたからこそで、《獅子蟲》から見た相性の良さが、余裕の理由かもしれない。

今は時間外労働。術式の説明も終えた。

これだけ重ねてもまだ、祓えるビジョンが浮かばない。

それでもやるしかない。

『じゃあ、せっかくだからこれなんかどうかなあ〜?』

睨みつけられる中、霧の一部がもぞもぞと動き出す。それはだんだんと口の方へと集まっていき、その空洞の中から吐き出され——徐々に膨らんで、人の形を作っていく。

「たす、  
け、  
いた、  
や  
」



そして現れたのは、変わり果てた咲来の上半身だった。

「ッ!!!!」

目の前が真っ赤に染まる。もはや叫び声すら出ない。全身の力をフル稼働して、怒りに任せて斬りかかる。

『おっとお、危ないなあ〜』

しかし、その攻撃もまた、全身の力をフル動員して、止めなければならない。

「このゲスがっ！」

少し身をよじり、その攻撃の軌道上に、咲来を挟んだ。突然目前に、咲来の苦痛と恐怖にまみれた姿が現れ、七海は無理な体勢で急ブレーキをかけ、無様に転ぶ。

『カカカカカカカカカカカッ!!! 人間ってのは、いつも大馬鹿だなあ〜!!!』

そして靄の一部が伸びて、倒れる七海にぶつかり、まるで蹴飛ばして転がすように追撃した。

『偽物だと思ふなあよなあ〜? このガキはまだ生きているんだなあ〜。消化にちよつとばかり時間がかかるんだなあ〜』

余裕綽々の説明。それを聞きながらも、七海もただでは済まさない。転んだ際に拾った小石に呪力を籠め、咲来から離れた場所に弱点を作り出して、指の力で飛ばす。

『おっと』

だが当たる直前、その弱点が《爆散》した。



「痛い！ 痛いイイイイ!!」 いやアアアアアア！ たす、助けて！ 先生！ 霞ちゃん！ 真依ちゃん！ 先輩！ みんな！ いや、いや、助けて——七海さん!!」

「成宮さんに何をした!?!」

その尋常ではない様子を見て、七海はまた感情に任せて叫ぶ。それをニタニタとにやけて見ながら、おどけるように、《獅子蟲》は答えた。

『別になんてことはないなあ〜？ このガキの術式を、お前が狙った弱点に使ったんだなあ〜。爆発させて体積が変われば、弱点も無効だなあ〜？ 流星に当たると痛そうだからなあ〜。カカカカカカツ!!』

何かの虫の鳴き声のようである、それらのどれにも似ていない、不快極まりない哄笑。

『この身体のひとつは、オレ様からすれば操っている人形も同然でなあ〜。オレ様自身で操作できるが、ここのダメージ自体は、オレ様自身でどうこうする分には、オレ様にほとんど入らないんだなあ〜』

言い回しからして、外部からの呪力攻撃は、あの本体ではないらしき靄へのものである。《獅子蟲》そのものにもダメージがあるらしい。自分でやる分にはなんてことない理由は分からないが、それこそが、特級呪霊たる「常識外れ」だ。

『だがこのガキは、所詮操り人形と同じでなあ〜。ダメージや痛みは、ばっちり感じちまうんだなあ〜』

その説明は、七海が想像した最悪と、恐ろしいほどに合致していた。

《獅子蟲》への攻撃は、霧を無くして空を切らせるにせよ、《爆散》で体積を変えて弱点でなくするにせよ、ほぼ通らない。相手の反応を上回って攻撃を当てるしかない。

そして、攻撃が成功するにせよ、《爆散》によって失敗するにせよ——咲来には、多大な苦痛が与えられる。

命を救った相手であるはずの七海の攻撃で痛めつけられるか。

自身の術式であったはずの《爆散》で苦しめられるか。

咲来には、そのどちらかが襲い掛かる。

そして、そのどちらも——七海の攻撃が、その原因となる。

頭が真っ白になった。

人助けが好き。心優しく、穏やか。その身を犠牲にして人を助ける意志がある。多くの人を見返りも求めず助けてきた。自分の命も助けてくれた。

そんな咲来が——ただ生かされているだけの状態で、ひたすらに冒瀆され続ける。磔にされたように変わり果てた姿をさらされて。

その《爆散》<sup>じゅっしき</sup>は、助けたかったはずの人々を傷つけることに利用され。そして自身すらも痛めつけることに使われて。

命を助けたはずの自分の攻撃によって、苦痛を与えられる。悪意を持つてその状況を作っているのは、《獅子蟲》だ。

だが、こんな状況を作らせてしまったのは——自分に他ならない。

「成宮さん……………」

俯き、全身の力を抜く。

ダラリと腕も下げたことで、鉈が揺れる。それを十全に振るうために鍛えているはずなのに、やけに重く感じた。

「あ、あ、あ……」

目はうつろになり、口はだらしなく開いて、涎がこぼれている。

大人しそうで、年相応で、真面目そうで可愛らしかった咲来の顔は、乱れに乱れていた。

俯いているのに、嫌でも視界に入ってしまう。目をそらしてしまいたい。だが、それを、自分に許さなかった。

『なんだ、ついに諦めたかなあ？ 妹だか娘だか弟子だか恋人だか分からんが、苦しめたくはないよなあ？』

そのどれでもない。つい半日前に会っただけの、ただの大人と子供でしかないはずだ。

ただ、二人とも呪術師で、呪術界から去った経験があつて、そしてお互いに背中を預け合つて戦い合つた仲間でもある。

七海が咲来に抱く感情は、《獅子蟲》が言うどれかに似たような、そうでないような、特別なものに変わっていた。

「本当に、申し訳ございません」



瞬間、七海は急接近し、咲来の腕を掴んで、思い切り引っ張った。

「アツ!？」

『てめえ、何するつもりだなあゝ!!? そんなことしたつて引っ張り出せねえんだなあゝ  
!』

急な衝撃に咲来が悲鳴を上げ、くつついて引っ張られる《獅子蟲》も混乱しながら叫ぶ。

七海はそれに構うことはない。これで咲来が引つ張り出せれば、などという、希望すらない。

咲来を掴み、巨大な黒い靄の呪霊を引つ張り、校庭を疾走する。

その向かう先は——一般人に戻った咲来が日常を過ごした、少し洒落た校舎だ。

「ふんっ！」

全力を籠めて、七海は咲来と《獅子蟲》をその校舎に投げつける。あまりにも急でかつ意味がない行動に動揺して抵抗できない《獅子蟲》と咲来はそのまますすすべもなく壁面に叩きつけられ、クレーターめいたものができるほどの衝撃を受ける。

『気でも狂ったんだなあ〜?』

とはいえ、さほどダメージにはなっていない。痛みに悶える咲来と違い、《獅子蟲》は余裕そくだ。

衝撃で散った砂埃と粉塵を、身体の一部を切り離れた《爆散》で払って視界を確保する。

そうして見えたのは、七海がその鉞を、思い切り校舎に叩きつけている光景だった。

直後、影が視界いっぱいを覆った

巨大な校舎が崩壊し、ただの大きな瓦礫となつて次々と、雨のように降り注いでくる。硬質な大質量同士がぶつかり合う大音声が世界を支配する、世界そのものが壊れていくような光景。

そう、まさしく、《が瓦落が瓦落》と崩れ去っていくかの様だ。

七海の術式《十劃呪法》は、強力ではあるが、広範囲攻撃の手段がない。

だが、それはあくまでも術式本体のみの話。

周囲にあるものを利用すれば、どうとでもなる。

例えば、巨大建築物。そこに弱点を作り出し、全力で殴り飛ばせば、それらは一気に崩壊する。

その崩壊した瓦礫全てに呪力を籠めれば——多量の大質量物体落下攻撃となる。

これこそが、七海の拡張術式《瓦落瓦落》。

建物だけでなく、敵の想定も、そして敵自身も、全て壊しつくす、彼の必殺技だ。

これならば、《獅子蟲》全体まるごとを一気に破壊し尽くすことができる。切り離しや《爆散》による退避は間に合わない。

「……申し訳、うごきません」

自身は巻き込まれないよう、早々に退避した。

崩壊した校舎を見つめながら、七海は、今にも土下座しそうな気持ちで、《獅子蟲》ごと潰され死んだであろう咲来に、再び謝罪する。

気が落ち込み、視線も落ち込む。

——そんな彼の目に、ボロボロになった眼鏡が落ちて映った。

歩み寄り、緩慢な動作でそれを拾う。

咲来がつけていた、視線を誤魔化す術式が込められた伊達眼鏡。

《獅子蟲》に飲み込まれ、また出された後もかろうじてついたままだったが、先ほど引つ張られた衝撃で、ついに外れたのだろう。

手のひらのちっぽけなそれを見つめながら、七海は、深い、深い溜息を吐く。

結局最後の最後まで、彼女を苦しめ続けた。圧死するというのは、どれだけ苦しいのだろうか。この術式を使うのは初めてではないが、敵の死にざまを想像して、気分が毎度少し暗くなる。ましてや、咲来を殺してしまったのだから、心臓に焼きゴテを押し付けられたかのように、胸が痛い。

この校舎にも、咲来は思い入れがあつたはずだ。彼女の、優しく穏やかな日常の象徴。咲来がこの戦場に向かつてきたのは、七海を助けるためではなく、学校を守りたいという思いもあつたのだろう。だが、自分は、その学校をただの瓦礫にして、さらにはそれでもつて咲来を殺した。

それに、瓦礫に潰されるという結末。咲来に対しては、ことさら悪趣味だ。彼女が呪術師を辞め高専を中退するきっかけになつたのもまた、瓦礫の崩壊を起こす術式だった。今度はそれによつて、命を救つた相手に殺されるなど、あまりにも残酷である。

「……………ふう」

こうしていても仕方がない。

七海は重い足取りで、報告をするべく、一旦この場を離れようとした。

その時――



——  
背後で巨大な呪力が、  
再び膨れ上がった。

——巨大な爆発音とともに、瓦礫が吹き飛ぶ。

とつさに振り返って構えた七海の視界は、土煙で覆われている。

だが、その向こうにうつすらと見えるシルエットは、間違えようが無い。

『よくもやってくれたなああああああああ  
!!!!!!!  
』

地の底から湧いてくるような、濃密な憎しみと怨嗟が籠った叫び。

もはやそこには、先ほどまでの余裕が欠片もない。

ダメージによって不安定になっているのか、はたまた感情の発露なのか、靄は先ほどまでよりも形が定まらず、わらわらと、まるで蚊柱のように蠢いている。

そしてそこから生える咲来の上半身は瓦礫で各所が潰され、酷いありさまになっていた。そして恐ろしいことに、《獅子蟲》とつながっていてそれがまだ生きている以上、

あの咲来もまだ生きているし、意識も痛覚も残っているだろう。幸いにしてその目はうつろで、はつきりとした意識が残っているわけではなさそうだが。

(バカな、殺しきれなかった!)

《瓦落瓦落》は1級術師の中でも屈指の破壊力を持つ技だ。また全身を一気に押しつぶすため、体積の増減や一部を切り離すといった方法で防ぐこともできない。《獅子蟲》にはこれ以上ないダメージになるはずである。

これまでにないほどに、焦りが加速する。

普通の攻撃では有効打になり得ない。校舎を破壊してしまったので、周囲に建物は無い。全力でダッシュして逃げると見せかけて学校周辺の建物へと誘導することも考えたが、もう引つかかるとは思えない。それに、校舎クラスの建築物でダメだったとなると、せいぜいが少し大きい一軒家程度しかないこの周辺では、止めをさせなさそうだと、『あく、もう許さねえからなあああああ!!! お前も絶対に食って、このガキみたいにしてやるからなあああああ!!!』

靄が急激に膨らみ、幾本もの触手となって七海に高速で襲い掛かる。身体的・精神的に酷く疲労している中で、七海は駆けまわって回避する。

しかし——すぐに捕まってしまった。

脚に絡みついて動きを止められたのを皮切りに、四肢と首に不定形の触手が巻き付

き、《獅子蟲》の近くへと引つ張られる。その感触は、数えきれないほどの小さな虫にまわりつかれているようで、生理的な不快感を覚えた。

『——カカカカカツ、まあでも、術式のいい使い方は見せてもらつたなあ。お手本ご苦労さんだつたなあ？』

圧倒的優位に立ち、《獅子蟲》は余裕を取り戻した。それに対して七海は、絶望的な状況でも強がつて、「裸眼で」睨みつける。サングラスは、引つ張られたときの勢いで落ちてしまった。その目はうつすらと充血している。

食われる。

どうにか暴れてあがきながらも、彼我の戦力差・相性から、もう勝てないことが分かつてしまう。

このまま食われて、咲来共々邪悪な呪霊の大きな糧となつて、術式が好き放題使われる。

止められずに役に立たなかつたどころか、死んでも足を引つ張り続けるということだ。

呪術師は、満足に死ぬることは間違ひなくありえないが、考えうる中でも、これは最も屈辱的な死である。

『そんな貴様に、このオレ様が——お返しに、いいモン見せてやるんだなああああ

ああああ!!!  
』

そう《獅子蟲》が叫んだ直後。

その呪力が急速に膨れ上がり、周辺に満ちる。

黒い靄は手の形となり、複雑な形で組まれた。

(まさか——！)

七海はこれを知っている。

呪術の極致の一つ。

『領域展開・  
《蠕蝨蝕貌肚》』

瞬間、真夜中と《帳》による夜闇の景色が、悍ましい「肉」に塗りつぶされた。



「《領域展開》……!」

まさか使えたとは。

七海は湧き上がってくるありとあらゆる負の感情に任せて、奥歯を砕かんばかりに噛みしめながら、その正体を咭く。

生得領域は、具現化・展開するだけでも相当の呪力とコントロールを必要とする。それだけでなく、さらにその生得領域に、術式を付与した、究極の呪術。それがこの《領域展開》だ。

崩壊した校舎がある真夜中の校庭から、この領域は別世界となった。

地面も周りも空も、全てが、ピンクと赤黒が混じった、脈動する生々しいぬめぬめとした肉に覆われている。まるで内臓の中にいるようだ。それでいて、肉でできた地面の各所からは、何の種類かもわからないほどに食い荒らされ変わり果てた姿になった草花がまばらに生えていて、この上なく不釣り合いだ。

異界。そう呼ぶにふさわしい、理から外れた、呪いの空間。

人の負の感情から生まれた呪いが生まれながらに持つ心の中が顕現し、そこに七海は閉じ込められたのだ。

《領域展開》の恐ろしいところは、その対策が「ほぼない」ことである。

その領域に入った時点で、術式は必中。どんな抵抗も意味をなさない。

もし《領域展開》に飲み込まれたならば、その領域から脱出するか、より洗練された《領域展開》で上書きするしか、基本的には逃れられないのである。

領域からの脱出は不可能。少しでも逃げるそぶりを見せれば、即座に必中の術式に襲われ、その命を散らすことになる。

では、より洗練された《領域展開》はどうかというと、七海はそもそも《領域展開》ができない。

『「これこそが「呪い」の真髄なんだなあああああ!!!」』

自らの領域に七海を捕らえることができた《獅子蟲》は、気分がよさそうに高笑いしながら叫ぶ。

『「いつてもまだ不完全だから、あの時ほどのものではないけどなあああああ!!! 貴様を喰えば完全になるだろうが、見せられなくて残念だなああああああ! それでも「たかが」人間に、これは無理だろうなあああああ!!!」』

「ハッ、ほざけ」

悦に浸っている《獅子蟲》に、まさしくその肚はらの中にいる状態の七海は、それでも、心の底からあざ笑う。

「これよりも、もっとはるかに素晴らしく、そして恐ろしい《領域展開》をできる人間が

いる。ここで私が死ねば、その人が間違ひなくお前を見つけて、なんてことなく祓うだろう。ちようど蟲けらしく、羽虫を払うようにな」

『——カカカカツ、せいぜい強がつてるんだなああああ!!!』

絶望してる様を見せて喜ばせることなど、それこそ死んでもやってやるつもりはない。そんな七海の様子に苛立ちながらも、《獅子蟲》は圧倒的優位から、余裕を崩さなかつた。

（——頼みますよ、先輩）

軽薄な態度の目隠しをつけた男が、閉じた瞼の裏に浮かぶ。

彼ならば、自身を喰つてさらに力を増したこの特級呪霊も、祓つてくれるはずだ。

自分の術式はまだしも、咲来の術式がこれ以上人を傷つけることを、止めてくれる。

それならば——ここで果てるのは、もはや、運命として受け入れるしかなかった。

『それじゃああああ——ご馳走になるかなあああああ!!!』

舌なめずりせんばかりの《獅子蟲》が、逸る気持ちに任せて、呪力を開放する。

途端、周囲を覆う肉の壁を食い破つて、何千匹もの虫が、わらわらと湧き出てきた。

まるで黒い靄のような、小さな羽虫の群れ。

それだけではない。

それこそ獅子の肉を内側から食うような、蠕動する蛆虫や寄生虫の類。

山中で動物に吸い付き血を奪う、ヒルのような虫。

死肉に集まり食い荒らす、蟻やゴキブリのような虫。

様々な虫が、何千・何万と、競い合うように七海に殺到する。そしてその足先から頭まで、覆い尽くした。

靄に絡まれたときの比ではない。ありとあらゆる不快な虫にまわりつかれ、今から全身をじわじわと食い荒らされるのだ。それでも弱みを見せまいと、顔を顰めない。

(——ああ、本当に、本当に、申し訳ございませんでした)

だが代わりに、目の奥が熱くなり、涙が流れてくる。

死の恐怖や、不快感や、全身を食い荒らされる苦痛によるものではない。

浮かぶのは、たった半日弱見ただけの、成宮咲来の姿。

自分を慌てて助けてくれた時の顔。怪我がないか心配してくれた時の表情。誤魔化そうとしたときの困り顔。正体を尋ねた時の複雑そうな何とも言えない表情。過去の話をしてくれた時の、悲しそうだったり嬉しそうだったり懐かしそうだったり苦しそうだったりとコロコロ変わった表情。そして再び自分を助けてくれてさらに一緒に戦ってくれた時の真摯な顔つき。

そしてその果ての、どこまでも苦しそうな崩れた顔と、精神が耐えきれぬに虚ろになった表情、瓦礫に潰され血だらけの変わり果てた姿。

最後の最後に、あんな顔をさせてしまった。

その苦しみを生み出したのは自分だ。

そのあげく、こうして何もできずに死んでいく。

人の命を助けた彼女と比べ、自分のなんと卑小なことか。

一か所、虫が喰らいつく。

それを皮切りに、全身の虫が、ご馳走にありつこうと、活発に蠢き始めた。

た。直後、全ての虫が活動を停止し、ぼろぼろと全てが、「肉ではない空白の地面」に落ち









（霞、ちゃん？）

まるで永い眠りから覚めたように、はつきりとしないう意識だが、咲来はそれを感じ取った。

もう一年弱会っていないが、分からないはずがない。何度も自分を守ってくれた、頼りになる、無二の親友の呪力だ。それが周囲に広がっている。

直後、全身に激痛が蘇った。

咲来はそれに抵抗しようと悶えようとすが、弱り切っていて、もぞもぞと小さく緩慢に、矮小な虫のように身をよじるしかない。

そしてそのせいで、強制的に、意識が鮮明になった。

『貴様、何したんだなああああああ  
!!!!!!』

真後ろからなのか自分の体の内側からなのか分からない場所から、本能的に不快な怒りの叫び声が聞こえる。

少しずつ鮮明になっていく、伊達眼鏡越しではない裸眼の視界。そこには、異常な光景が映っていた。

外側を覆うのは、グロテスクな肉の壁。だが、自身と、黒い靄に拘束されている七海の周囲だけは、静謐な虚空となっている。

これを、何度も、何度も、一緒に戦って見てきた。

これは、霞の、《簡易領域》だ。

別名、弱者の領域。

《シン・陰流》が持つ技術《簡易領域》。特殊な修行をすることで一定以上の呪力を持つものは理論上誰もが使える呪術だ。《簡易領域》は効果も弱く範囲も狭くまた多くの制限があるが、自身とその周囲を、範囲型や直接干渉型の呪術から守ってくれる。

それが生み出された発端は、《領域展開》への弱者の対抗だった。

より洗練された《領域展開》が使えるわけでもなく、領域から脱出ができるわけでもない。そんな、呪術の極致に対抗できない呪術師のために編み出された。

その目的通り、《簡易領域》は、《領域展開》からその中にいる人を守ることができ  
る。

それが今この場で、不完全ながらも、展開されていた。

(霞ちゃんが助けに来てくれた?)

一瞬期待と心配が同時に起こるが、それはあり得ない。あのスタイルと姿勢が良くて綺麗な水色の長い髪と可愛く朗らかでよく変わる表情が特徴の無二の親友の姿は見えなかった。それに霞が未だ3級と言えど、もつとしっかりとした領域を張れるはずだ。

そして、咲来は気づく。

自分の目元から、伊達眼鏡が外れている。

そしてその裸眼で見る視線の先には、サングラスが外れて初めて見る七海の素顔と、彼が握るボロボロになった自身の伊達眼鏡があった。

——この伊達眼鏡に込められた呪術は、視線を誤魔化すものだけではない。



霞自身は、呪力に詳しくはなく、生得術式を持つてゐるわけでもない。

そんな彼女が、自分にできることはないかと、呪具作成の名手であるメカ丸を頼りながらも、なんとか形にしたのが、この伊達眼鏡に込められたもう一つの術式だ。

それこそが、この《簡易領域》。

攻撃力は高いが自分の身を守る術がない咲来のために、霞が必死に作り上げて、加茂が用意した伊達眼鏡に込めた、彼女の努力と友情の結晶だ。

《領域展開》や生得領域に飲み込まれ、術式の効果が身に及んだ直後に、《簡易領域》が発動する。呪具に込めたものであり、かつ未熟な霞が作ったものであるため、その領域は未完成だ。

せいぜい持って十秒かそこら。ある一定以上の洗練された領域には対抗することができない。

だが、確かにこの数秒の間。

咲来の大切な親友の想いの集大成が、七海を恐ろしい呪いから守っていた。

（——ありがとう、霞ちゃん！）

自然と涙が流れてくる。死にかけていた心が蘇り、感覚が鋭敏になり、思考がフル回転する。

全身を襲う激痛がより強く感じられて精神を蝕むが、それにも負けることはない。

この死から免れない状況だというのに、咲来は、今まで感じたことが無いほどの万能感が湧き出ていた。

このグロテスクな領域とその内側の静謐な領域を作り出しているそれぞれの呪力の構成、自身や自身とつながっている《獅子蟲》や七海のそれぞれの呪力の流れ、など、世界を構築する呪力が、より鮮明に感じられる。

——《獅子蟲》と咲来は今、繋がっている。

だからこそ《獅子蟲》へのダメージを咲来は感じるし、《獅子蟲》は咲来の術式を使

える。

咲来は今、《獅子蟲》の一部と言っても過言ではなかった。

つまり——彼女は今、この瞬間だけ、「特級呪霊並みの呪力を持っている」のである。

(本当にありがとう、霞ちゃん！)

七海を守ってくれている、微かな領域。これもまた、負の感情から生まれる呪力によつて成り立っているはずだ。

だがそれでも、そこには確かに、温かな想いを感じる。勘違いや感情論ではない。特级呪霊並となった呪力感性で、そうであると確信している。

しかし、そんな《簡易領域》も、ついに消えてしまった。また七海へと、虫がたかりはじめる。望みはもはや残っていないはず。

だが、それはあくまでも、「今まで通りの咲来」だったら、だ。

今の未来は——今までにない可能性の世界へと、足を踏み入れていた。

（  
《陽ようびやくこう白光》  
！  
）

魂の奥底から湧き上がった言葉を心の中で叫びながら、術式を発動する。

瞬間、グロテスクな世界も、蠢いていた虫も、全てが消え去った。





とてつもない、《領域展開》にも劣らないほどの、次元の違う術式の気配を感じたと同時に、《獅子蟲》の領域、《蠕蝨蝕<sup>ぜんしゆんしよくけいと</sup>猯肚》が消滅した。それによって付与された術式も無くなり、七海にまわりついていた虫は跡形もなく消え去る。

『ぐ、が、く——クソガキイイイイイイイイイイ!!!』

そんな必殺の領域を消された《獅子蟲》が激高し、暴れる。咲来が何度も激しく校庭

の地面に打ちつけられる。その顔は苦悶に歪んでいたが、その口元には、達成感からか、晴れやかな笑みが浮かんでいた。

七海には分かる。

あの地獄の領域を消しとばしたのは、咲来の術式だ。

そんなことができるなど、およそ考えられないが——今の咲来は、人間であり呪霊でもある、過去類を見ない状態。何かしらの異常が、あつたのだろう。

「……申し訳——」

またも咲来が、その身を挺して命を救ってくれた。

自分は大人で呪術師、彼女は子供で非術師。本来なら、自分が守るべきはずなのに。

何度も何度も、咲来は身を犠牲にして助けてくれたのだ。

何度目か分からない謝罪を口にしようとする。

そして、思いとどまった。

咲来は人助けが大好きなのだ。

そんな彼女に助けられたならば。

かけるべき言葉は、謝罪ではない。

「——本当に、ありがとうございます」

感情が高ぶる。全身の感覚が鋭敏になり、力がみなぎってくる。呪力の流れも活発になり、そしてその全てを完全にコントロールできる確信が湧き上がってきた。

「——なな、み、さん。あと、は、よろし、く、お願い——します！」

何度も打ちつけられながら、咲来が叫んだ。

これ以上、彼女を苦しめるわけにはいかない。

愛用の鉈を大きく振りかぶり、未だ激高する《獅子蟲》に、高速で接近した。

その体に作り出すは、7：3の境目の弱点。

『何度やっても無駄なんだなあああ!!』

《獅子蟲》が、人間ならば口角泡を飛ばしていたであろう勢いで叫びながら、自身の体に《爆散》を使う。体積が膨張して弱点は消滅し、咲来にその痛みが流れる。

そのはずだった。

術式が発動して体積が増える直前、その《爆散》が「消えた」。

それと同時に、消えることのなかった弱点へと、七海の鉈が振り下ろされる。

『がああああああああ!!』

「イツ——!!!!」

弱点を破壊された《獅子蟲》が悶え苦しみ、睽来も苦悶の表情になる。だが、唇から血がだらだらと流れるほどに噛みしめ、声を出すのはこらえた。

それを見て、胸にひどい痛みが走るが、七海はなおもためらわずに弱点を作り出し、そこに攻撃を叩き込む。

——  
黒い光が、閃いた。

『ごくあがるがあああああああああ!!!』  
「ツ——、ンツ——!」

その攻撃の破壊力は絶大。同じように生み出した弱点を殴ったとは思えないほど、先ほどの攻撃とは格が違うダメージが、《獅子蟲》と咲来へと入った。

それと同時に、七海の感覚はさらに深くなっていく。今や呪力粒子の一つ一つまでも

が、明確に分かる気がするほどだ。

——《黒閃》。

呪力を籠めた打撃と呪力の衝突がほぼ全く同時だった時に起こる現象だ。

その衝撃はすさまじく、空間は歪んで、呪力は黒く光って雷のごとく迸る。

通常の呪力を籠めた攻撃に比べて、その衝撃は正しく桁違いだ。

しかもそれが、強制的に作り出された弱点へと叩きこまれた。

《瓦落瓦落》によるダメージに加え、激しく呪力を消費する《領域展開》も使った。

《獅子蟲》は今、弱っている。そこに、弱点への《黒閃》が叩き込まれた。

——この時、《獅子蟲》は、生涯で二度目の、死への恐怖を感じた。



『おい、このガキがどうなつてもいいのか！　こんなに苦しんでるんだぞ！　まだ生き  
る可能性だつてあるんだ！　オレ様が死ぬば、このガキも死ぬんだぞ!!!』

強者としての余裕もプライドも、もはやない。咲来を人質にして七海をためらわせ、  
生存を図る。

だが七海は無言で、また弱点を作り出しながら、鉈を振るつた。その顔には、ただ目  
の前の敵を祓おうとする、呪術師としての覚悟が浮かんでいる。

(…いつ…)

それに恐怖を増しながら、また《爆散》で体積を増やして弱点を無効化しようとし  
た。

だが、またもや《爆散》は何かによつて消滅し、残つた弱点に、黒い光を伴う斬撃が  
また叩き込まれる。

この黒い光が発生する攻撃の正体は分からない。

だが、術式が消える原因は分かった。

『さつきから邪魔しやがって、うざったいなああああ!!!』

死んだも同然の「消化途中の餌」の仕業だ。繋がっているゆえに、そのことがよくわ

かる。繋がっているのを逆手にとって、《獅子蟲》の呪力を利用して、邪魔をしているのだ。

もう《爆散》では防げない。

逃げ方を模索しながら、当初使っていた靄を切り離す方法へとシフトする。これならば、邪魔されることはない。

そして七海の《黒閃》が、黒い靄ではなく、咲来へと叩き込まれた。

『ああああああがああああごおおおおおあああ!!!』

繋がっている以上、咲来への呪術的ダメージは、《獅子蟲》にも与えられる。当然のことだ。

《獅子蟲》は何の疑いもなく考えていた。七海は咲来に、何かしらの情を抱いている。だから、その体に攻撃しないだろう、と。

だが、違うのだ。

七海は、「咲来に情を抱いているからこそ」、迷わず攻撃をした。

「よろしく願います」と頼まれたから。

攻撃するのをためらわないよう、必死に声を出すのを我慢してくれたのを知っているから。

これ以上、苦しませないように。

これ以上、冒流されないように。

七海は少しでも早く、《獅子蟲》に——そして咲来に、止めを刺すことを決断した。咲来の血肉が飛び散る。その体が砕ける。靄が破壊される。黒い光が閃く。咲来の腕がちぎれ飛ぶ。骨が粉々になる。黒い光の向こうで、咲来の顔面がえぐり取られる。靄が暴れまわるが、どんどん小さくなっていく。

(まずい、こうなったら——！)  
死ぬ。

《獅子蟲》は直感した。

故に、方針を切り替える。

一度これで何とか生き残って、こうして活動再開できたのだ。

またいつか、長い時を経て、この世界で好き勝手に生きれば良い。

今はまた、前みたい——一切の活動を停止して自ら封印される「縛り」を得ることで、破壊できない呪物へと成り替わろうとしていた。

「やせな、いー」

七海が叫びながら、鉈を振り下ろす。それはついに、《獅子蟲》の「本体」ともいうべきところへと届いた。

——もし仮に、呪物の状態だったら。

随一の破壊力を誇る七海の攻撃、果ては最強の呪術師でさえ、これを破壊することは

できないだろう。

だが《獅子蟲》は、封印が解かれ、呪霊に食われることで——呪霊へと「蘇ってしまっ  
た」。

故に、本体部分は特級呪霊の中でも特に頑丈なのだが——

——呪術師によって祓うことが、可能な状態なのだ。

そこに叩き込まれる、強制的に作り出された弱点への《黒閃》。

その数、一瞬のうちに、四連発。

一度《黒閃》を決めたことにより、また七海の意志による集中力の増加もあつて、瞬間的に《黒閃》の確率が爆発的に上昇している。

連続記録は、自身が持つ、近年最大の危機である百鬼夜行の時に並び。

時間当たりの発動数は、その時のものをはるかに超えた。

特級呪霊《獅子蟲》。

人の負の感情により生み出された恐ろしい呪霊は——七海によって、完全に祓われ、消滅した。

「  
ク  
ソ  
!!!!  
」

直後、衝動的に、七海は鉈を校庭へと叩きつける。

つい先ほどまで、消滅していく《獅子蟲》の本体——ミミズと回虫を足したようなあまりにも矮小な姿——がいた地面に突き刺さった鉈は、その周囲にちよつとした地割れを起こす。怒りに任せた全力の八つ当たりもまた、皮肉なことに、《黒閃》になつていった。

しやがみ込み、額を抑えて、荒い息を沈める。暗くなつた視界には、咲来の顔が鮮明に浮かんでしまつた。

自分が攻撃をためらわないよう、死を超えるほどの苦しみを必死にこらえていた顔。咲来に《黒閃》を叩き込む直前に見えてしまつた、優し気な微笑み。

結局最後の最後まで咲来に助けられて、それでいて自分は、彼女ごと殺すほかなかつ



た。

——そして、  
視界がどんどん、  
明るくなってくる。

長い長い夜は明けた。六月と言う季節柄、実際に夜は長くはなく、日の出はどんどん早くなっている。

暎来と出会ってから半日以上が経ち、太陽は昇り、雲一つない空から降り注ぐ温かな光は、夜を越え、白い温かな世界にしていく。

七海はその様子に、暎来が最後に見せた術式を、重ねて見てしまった。

だがそれ以上に、今は、この光が、この上なく憎らしい。

六月の季節らしく、雨の一つでも降ってくれば、なんなら降らずとも曇りでいてくれれば。

自分の心や状況と重なって、少しは悲劇に浸り、現実から逃げることできただろう。深いため息をついてから、のろのろとした動作で立ち上がり、天を仰いで、呟く。

「やっぱり、呪術師は、クソだ」

何せ、彼女は、一度やめたにもかかわらず、呪術師に戻ったことによつて、助けた相

手に殺されたのだから。

見上げる目から流れる一筋の雨とは裏腹に。

その視線の先にある空は、雲一つない、気持ちの良い晴天だった。

## 最終話・後悔

神奈川県某所。住宅地から少し離れた山の上に、とある私立高校が「あった」。

それなりに立派な校舎は、一晩のうちに、人知れず、見るも無残に崩れ去ってしまつたのだ。

公式の発表によると、建築に欠陥があつたわけでもなければ老朽化があつたわけでもなく、ただただ不幸な事件——不発弾の爆発によるものだとされている。

そして不思議なことに、静かな深夜に発生したであろう、校舎が崩壊する音も爆発音も、周辺住民は誰一人聞こえなかつたという。

音同士がぶつかり合つたことで相殺され、そこに湿度や風向きと言つた気象条件も重なり、周辺に拡散する音が極端に小さくなる、ごくまれに起きる現象——と言う説明はなされている。

当然それに納得がいくはずもなく、周辺住民のみならず、この出来事は世間の注目を集めたが——数日もすれば、様々なニュースに圧されて世間で話題に上ることはなくなり、周辺住民の「ほぼ」全員にも、またいつもの日常が戻りつつあつた。



「ええ、補助監督や『窓』による隠ぺい工作は順調です。溜め込んでいた有名人や政治家の不祥事も開放して、おおむね全国的に話題に上がることは無くなりました」

呪術高専東京校の一角で、伊地知は、両手でキーボードを打ち事務作業をしながら、肩と頬で器用にスマートフォンを挟んで通話・報告をしていた。

あの事件から数日、国や自治体や呪術界は「いつもの通りに」協力して隠蔽工作を施し、奇妙な出来事は世間から忘れられつつある。あとはたまにインターネット上で話題に上がるだろうが、そこから大事になるのを防ぐのはたやすいことだ。

『そうですか。ご苦労様です』

「ありがとうございます」

スマートホンから、平坦な成人男性の声が聞こえる。それに対して伊地知は、対面しているわけでもないのに、小さく会釈しながらお礼をした。

「ところで、七海さんは順調ですか？」

『……はい、無理を言って許可を取っていただき、ありがとうございます』

通話の相手は、七海建人だ。彼もまた当事者の一人として、直後に出す簡易報告書のみならず、落ち着いてから出すことになって詳しい報告書の作成が義務付けられている。

七海がいるのは、高専にある蔵書室だ。古い本が、適切に保たれた湿度・室温の元、清潔さを保って厳重に管理されている。それでもどこか埃っぽい臭いがあるのは、ここがほぼ密室で、所狭しと古書が並んでいるからだろう。

「……………」

そんな七海の報告書作成は、順調とは言い難かった。机の上に開かれた二つの古びた



書物のうちの一つを、身動きもせず、じつ、と見つめている。

いや、そのサンングラスの奥の眼光は、もはや「睨みつけている」と表現するのが正しいほどに、煮えたぎる感情を孕んでいた。

彼が見ているこの本は、江戸時代に起きた奇々怪々な事件の、「裏の」報告書集、『呪い伝集』だ。

前近代の奇怪な事件は主に異聞・奇譚として面白おかしく、怪談や都市伝説として、きわめて表面的かつ誇張が多くなされた形で後世に伝わっている。それは、今にして考えれば、いくらでも科学的に説明がつくものや、勘違い、でっち上げや作り話と言えるものがほとんどだ。

しかしながら、その中にはごく少数、呪霊や呪詛師による事件もある。この本は、そうした事件の、表には出ない、それでいて「本物」の報告書である。

深い深いため息をつき、七海はページをめくっていく。そして、やけに歪んだ、どこか禍々しくも見える筆文字で「獅子蟲」と書かれたページで、彼の手と目は止まった。

内容は、先日彼が祓った呪霊《獅子蟲》が起こした事件の報告だ。

《獅子蟲》は単体では現代基準でいう特級と言えるほどの力を持たない呪霊だが、非常に賢く、また自分を取り込んだ相手を逆に支配して利用する力を持つ。「獅子身中の虫」がその名前の由来。理性のない呪霊が呪力を強化するために呪物の放つ呪力に吸い

寄せられその身に取り込もうとする性質を利用し、自ら呪霊が好む呪力を発しておびき寄せ、取り込ませて支配する。その後はどんだん力を持つ呪霊に乗り換えて、力を増していく。

ここまででは知っている。この呪物の調査をするにあたって、事前に報告を受けていた内容だ。

「……………やはり」

七海の口から、憎々し気な声が漏れる。

その続きは——彼が事前に報告を受けていない内容だった。

どんどん力を増した《獅子蟲》はついに当時の呪術師たちも放置できず、強力な術式を持つ手練れが、複人数で挑んだ。

しかし、被害は予想よりも大きくなってしまった。

《獅子蟲》はある程度以上——現代の基準で言うところと2級以上——の宿主を手に入れると、行動を変容する。乗り換えるのではなく、呪術師や呪霊を「取り込み」、自らの糧とする。しかも取り込まれた呪術師・呪霊の術式を、その場で扱えるようになる。手練れの呪術師たちの一部が呑み込まれて爆発的に力を増した《獅子蟲》は、破壊の限りを尽くした。

最終的には、参加した呪術師の一人である当時の加茂家当主が、その身を顧みず戦い、見事に退治した。しかしながらその多大な呪力と生命力の源にして存在の核である《獅子蟲》本体はどうしても破壊しきれず、やむなくその力のほとんどを封印し、呪物とすることで解決した。

七海が机に並べているもう一つは、彼が任務に行く段階で報告を受けた分の内容しか書かれていない書物だ。こちらは、最近伊地知に使われたこともあってか、比較的取り出しやすい表の方に置かれていた。

だが、いま彼が見ている、この『呪い伝集』——これは、蔵書室の中でも何重にもセキユリティがなされた「禁書」の棚にあったものだ。高専所属の呪術師ですら簡単に見ることができず、学長と司書と教員1名と補助監督1名の許可が最低でも必要となる禁書の一つが、この報告書集なのだ。

しかも不思議なことに、禁書の棚の中でも、絶妙に目につきにくい位置に配置されている。本のタイトルも、単に『呪い伝集』と抽象的なもので、所蔵データには、その中身の目次すら書いていない。

現代まで呪物として残る特級呪霊の起こした事件が書かれているとなれば、普通ならば、その危険性や性質を後世に伝えるべく、分かりやすい場所に置いてあるべきだろう。またアクセスがしやすいよう、所蔵データの特記事項として、『獅子蟲』のことが書かれている等の情報が載っていて然るべきである。

そう、まるで、この『獅子蟲』の報告が——

「私たちに、隠されていた」

——ように見えるのだ。

誰の耳があるかわからないので小声で、自分が抱いていた、しかしながら否定したかった予想を、口にする。いつもの彼には似つかわしくなく、その声は震えていた。

呪術界の体制が腐っているのは、よく分かっている。

当代どころか歴史上を探しても「最強」の呪術師と言っても間違いではない、彼の先輩でありこの教師でもある五条悟が、教師になった理由だ。

そして自分も、それに嫌気がさして、一時は呪術師から離れた。

隠されていた理由は分からない。もしかしたら、《獅子蟲》そのものを隠す意図はなかったのかもしれない。加茂家当主が出張ったにもかかわらず大事件になったから隠したのかもしれないし、この書物に載っている別の事件を隠したかったのかもしれない

い。

それでも七海は——今回の事件にまわりついでいるように思えてならない悪意に、心底、はらわたが煮えくり返っている。

「やっぱり、呪術師は、クソだ」

敬語が崩れたその独白が、清潔なのに埃っぽい蔵書室に、虚しく反響した。

†  
†  
†

「そうか、成宮が……」

咲来の死は、元在校生だったこともあって、事件当日に簡易報告書が作られた時点で、歌姫にも伝わっていた。まだ簡易的なものであるにもかかわらず、その戦いと死にざまが壮絶と言うのも生ぬるいことがわかる。それでいて、呪術界では「たまにある」程度のものでしかないとも同時に考えてしまい、彼女はそれを振り払うべく、首を激しく横に振った。

あの日の夜。歌姫は咲来からの連絡を、受け取ることができなかった。突如発生した強力な呪霊との戦いを強いられていたのだ。事が終わってからスマートフォンを見た時には、報告書から察するに、すでに飲み込まれて手遅れの段階だった。自分には何もできなかつただろうが、やるせなさを強く感じてしまう。

このことを、あの子生徒たちに知らせるべきかどうか、彼女は思い悩んだ。ほんの数か月だが、確かに同級生および先輩・後輩として親交があった。それゆえに、そんな彼女の死を、知らせるべきとも思うし、知らせないほうが良いとも思う。

そうして悩み悩んで数日、歌姫の元に、七海と伊地知が作った詳細な報告書が届いた。それを読み終わつたころには、彼女の決断は決まっていた。



「そうですか……………それは、残念です」

いまや京都校のリーダー的存在である加茂憲紀に、最初に知らせた。

反応はただそれだけで、そのまま背を向けて去ってしまった。しかしその声と背中  
は、わずかに震えていた。深い親交があつたわけではないが、それでも、思うところは  
たくさんあるのだろう。

「そんな、嘘でしょ!?!」　なんで咲来ちゃんが死ななきゃならないの!」

西宮桃は涙声で叫ぶ。

彼女も分かっている。報告書にある通り、咲来には逃げる選択肢があつたし、事実そ  
うするべきだった。それでも彼女は、自らの意思で戦うことを選び、それゆえに死んだ  
のだ。

一度呪いの世界から「逃げた」にも拘わらず、中途半端に、「逃げる」を選ばなかった。

高専に入学して二年が経つし、その前からのキャリアもある彼女には、咲来の死が、  
「当たり前」のものだと分かつてしまう。

それでもなお、その死を受け入れられない。

理不尽だと思つた。

一度完全に逃げ出すほどの恐怖を抱えていたのに、それでも一人の人間を助けるため

に身を挺した。彼女がいなければ、もう一人の呪術師は死んでいた可能性が高い。そのことが、報告書から、憎らしいほどに分かりやすくまとまっているがゆえに、理解できしてしまう。

そんな素晴らしい人間が、そのせいで死んでよいはずがないのだ。

彼女は、咲来のことを可愛がっていた。呪術師としてはあまりにも弱気なのでイライラすることもあるし、箒に乗せてる時は毎度毎度悲鳴を上げるからうるさく思うこともある。それでも、術式的に相性がよくてコンビを何回も組んだし、性格的には真逆なのに、どこか惹かれるところがあつた。今思うに、咲来の、痛ましくすら見える優しさが、眩しかったのだろう。

「成宮ハ……戦つたのだナ……」

機械を通しているため無機質に聞こえるはずだが、メカ丸の声には、深い感情が籠っているように聞こえた。

天与呪縛によつて強大な呪力と元来のセンスを持つ彼は、入学してすぐ等級が上がリ、咲来と同じ任務に向かうことはなかつた。それでも同学年としていくらかの交流があつたし、呪術師には珍しい彼女の一般的な感性は、生まれつき「異常」になることを強いられている彼にとって、得難いものだった。

ギシ、と不快な、機械がきしむ音が小さく響く。機体が壊れてしまいそうなほどに、無機物の拳が強く握られていた。

咲来は、逃げずに立ち向かうことを選んだ。

この事実にはメカ丸は、彼だけの、歌姫には今はまだうかがい知れない感情が湧き出ているように見えた。

「あの子はっ……こんな無茶をしてっ……バカ……っ！」

禪院真依は、前髪をぐしゃりと乱暴につかみながら、顔を伏せて、歯を砕かんばかりに噛みしめながら、宛先のない感情を声に出した。

特に仲が良い同級生だった。真依の《構築術式》は、彼女程度の呪力では呪霊相手にさほど効果があるわけではなく、人間相手にも一発の不意打ちにしかならない。家と姉のせいで呪術師になることを強いられた彼女に与えられた才能は、あまりにも残酷だった。

そんな彼女の術式こころに差し込んだ光が、咲来の《爆散》だった。

身体に多大な負担をかけて、一日一発の銃弾を作るのが精いっぱい。咲来の《爆散》は、そんな命を削るような成果を、一瞬で破壊してしまう術式だ。

最初は、姉や家にも匹敵する程に憎らしかった。

しかし、最初の合同任務でとっさに咲来が活用法を思いついてからは、その感情が180度変わった。

真依にとつての咲来は、《構築術式》を最も活かしてくれる存在だったのだ。

数か月で親友になったし、呪術のことを思い出すのも辛いだろうに、退学した後も連絡を取り合ってくれた。そんな彼女の死は、真依にとつてあまりにも重かった。

この世に「呪い」なんてなければ——今まで何度も思ったことだ。

そしてこの時は、今までの中で一番強く、そう思った。

「咲来っ——」

もう一人、特に仲が良い同級生がいた。彼女——三輪霞は、報告書を半ばまで読んだあたりで、顔をぐしゃぐしゃにゆがめ、紙のほとんどが涙で濡れてしまうほどに号泣した。

そして、時間をかけて最後まで読み切った霞の口からは、親友の名前がやっと絞り出されただけだった。

霞は呪術師として特異な性格だ。普通の感性を持ち、貧しい家族のために身を挺して

働く、根っからの善人。そんな彼女にとつても、また咲来にとつても、この呪術界で、「普通の善良な人」と同級生として出会ったのは、運命的と言えるほど幸運なことだった。

出会つてすぐに打ち解け、旧来の親友のようになった。お互いのおかげで、この薄汚れた呪術界でも、前を向いていられたのだ。

「……歌姫先生」

たつぷり数十分は泣いただろうか。ようやく落ち着いた霞は、それでもまだ肩と声を震わせながら、しかし芯の通つた声で、報告書を渡してから傍で付き添っていた歌姫を名前を呼ぶ。

彼女が上げた顔は、酷いものだった。涙と鼻水で汚れ、目は腫れている。人に好かれやすい可愛らしい顔が台無しだ。

しかし、その目には、確かな志が宿っている。口元は決意に満ちてキュツと引き締まり、歌姫の目を真っすぐに見ている。そんな彼女の顔は、いつもとは違う意味で、美しく見えた。

「咲来は、立派に戦いました。一人の人を、救ったんです。私たちも……咲来の方まで、頑張らなければなりません」

思わず歌姫は気圧された。

しかしすぐに、心の奥底から、嬉しさと感慨が、あふれ出してきた。

「ああ、そうだ」

笑って、その頭を撫でてあげて、抱きしめる。するとまた、霞は、大きな声を上げて泣き始めた。

(成長したんだな……)

可愛い生徒たちは、いつの間にか、ずいぶんとたくましくなったようだった。

呪術師としても、人間としても、強い心を持つようになっていた。

それは、たった数か月だけとはいえ歌姫にとつては可愛い生徒である咲来もまた、同じだ。だからこそ、その心が、こうして受け継がれていく。

そしてふと、思い出すことがある。

実は加茂と西宮の間に、もう一人の三年生、東堂葵にも、この報告書を見せた。

東堂は、咲来のことを全く評価していない。つまらないやつ、と言つてはばからなかった。それでも彼もまた彼女とかかわりがあった先輩であり、これを知らせるべきだ。これで酷いことを言うようだったら、例え敵わなくても、一発殴り飛ばしてやるつもりだった。

「最後は呪術師として戦い、呪術師として死んだ。その身を顧みず、一人の人間を助けるために」

読み終わった報告書を乱暴に投げ返しながら、いつもの調子で、東堂は話し始めた。「ならば、俺たちは、成宮の死と意志に、報いなければならぬ。それが、呪術師として、生きている俺たちの義務だ」

霞は、東堂と同じ結論にたどり着いていたのだ。そして同じことを、加茂も、メカ丸

も、西宮も、真依も、きつと想っている。

強くならなければならない。

自分の志を貫き通せるぐらい強くなれば——死んだ咲来の意志もまた、貫き通せるのだ。

この子たちはきつと、立派な<sup>にんげん</sup>呪術師になる。

霞を優しくなでながら、歌姫は、可愛い生徒たちが立派になったことを、心の底から喜んだ。



†  
†  
†

——どろりと湧き上がってくる後悔の鈍痛を、押し隠すように。

「お、歌姫じゃーん?」

それからさらに時が過ぎ、<sup>きた</sup>来る姉妹校交流戦の打ち合わせのために東京校を訪れていた歌姫は、たまたま通りがかかった特級術師である五条悟に声をかけられた。

「……五条か。今日は暇そうだな」

「仕事帰りだよーん」

げんなりとしながら、軽薄な目隠し男の方を見る。相変わらずしつかり立つことなくヘラヘラフラフラとしている。

「なーんか元気ないねー? どうしたの? 生理?」

「夜蛾学長にセクハラ報告しとくわ」

相変わらずデリカシーの欠片もない失礼の塊みたいなことを言われた歌姫は、適当に言い返しながら、彼から目を逸らす。しかし圧倒的な身体能力を持つ悟は彼女の前に一

瞬で回り込んできて、その顔を覗き込んできた。

「……成宮咲来の件は、残念だったね」

「……………ああ」

いつも通り無駄に察しが良い、とは思わない。今の自分は、客観的に見て、明らかに落ち込んでいる。

「……………なあ、五条」

自分が思う以上に、弱弱い声が出てしまった。こいつに弱みは見せたくない。いつもだったら、絶対に話題を打ち切る。

それでも、今回ばかりは、勝手に、自分の口から言葉が漏れる。

「お前の言う通り……………私は、咲来をスカウトするべきじゃなかったか……………？」

咲来を見出し高専に誘ったのは、歌姫だ。

そして野暮用があつて咲来入学直後に京都校に行った悟は、たまたま近くにいた咲来を見て、今すぐ退学させるべきだと、歌姫に言ったのだ。その時はいつものノリと対抗心で、意地でも育てると否定してしまった。

東京校と京都校では、生徒の受け入れ基準は違う。

どちらも教員や関係者の推薦と学長による面接が必要なのは変わらない。

しかし京都校は呪力や呪術に一定のレベルがあれば受け入れるのに対して、東京校は悟と夜蛾学長の方針から、その「心」を重視する。

呪術への向き合い方、入学動機、心の強さ、そして何よりも「イカれている」か。

呪術師は、過酷だの凄惨だのといった言葉ではまず言い表せないほどに、残酷と言う

のも生ぬるい仕事だ。そんな呪術師になるにあたっては、まず「イカれて」いないと、やってられない。いざという時には心が弱いとすぐに死ぬし、仮に生きても長くは続かないし、「呪い」から離れてもずっと苦しみが尾を引く。

今にして思うと、悟と夜蛾の方針は、これ以上ないほどに正しいとすら思える。

咲来は、あまりにも「普通」だ。「イカれて」いないし、気弱だし、臆病だった。

似たような「普通の善人」として霞がいるが、思うに、彼女もまた一年間呪術師をやつてこれだけあつて、「イカれて」いる。

呪術に関わりのなかった一般人が、貧しい家族のために呪術師になった。こんな状況は、まず普通の女子高生、いや大人だろうと、耐えられないはずだ。それほどに、呪術師の世界は厳しく、暗く、そして腐敗している。

それなのに彼女は明るく、真面目だがどこか能天気で、それなりに楽しそうに過ごしている。咲来が退学するきっかけとなったあの事件では霞も瀕死の傷を負ったのに、咲来と違って、呪術師を続けられているのだ。それも、なんとというか、いつもあまりストレスを、「なんにも」感じている様子がない。この感性に関しては、生まれながらに抱えるものが大きいはずで呪術界に「慣れている」はずのメカ丸のほうがよく「マトモ」とすら言える。彼はいつもストレスを抱えている様子だ。

そうなるとやはり、咲来は、全く「イカれて」いないのだ。

「そうだね、歌姫は間違っていたよ」

軽薄さが無い、いつになく真面目な声で、厳しいことを言われる。それを聞いただけで心が折れそうになるが、それでも自分の「罪」と向き合わなければならぬため、逃げることは許されない。

歌姫は——咲来とその未来を、殺してしまったのだ。

もし歌姫が咲来をスカウトしなければ。ちよつと変なものが見える、善良で優しい普通の女子高生としての未来があつたはずだ。事実、退学後の彼女は、その気質から、ひっそりと同級生たちに好かれて頼られていた。

だが、歌姫がスカウトしてしまったせいで、「呪い」に関わることになってしまった。結果、酷いトラウマを抱えることになってしまったのだ。

しかもその行く末は、せつかく退学して苦しみを抱えながらも普通の人生を歩もうとしていたのに、「呪い」を本格的に知ってしまったがゆえに、あまりにも凄惨な死だった。

もしスカウトしていなければ、もし悟の言う通りにすぐ退学させていれば——咲来は、死ななかつた。

「私が……咲来を、殺したんだっ……！」

歌姫は、自分が泣くことを許さなかつた。

爪が食い込んで手のひらを傷つけるほどに強く拳を握り、歯茎が沈むほどに歯を食いしぼり、涙をこらえる。それでも、その目からは、大粒の悲しみと後悔が、ぼろぼろとこぼれだしている。

これ以上、誰かといるのは辛かつた。

自分が逃げるのを許さないとしながらも、それでも歌姫は逃げるように、悟から早足で離れる。それを悟は、引き留めず、無言で見送った。



「……………聞いているだろう、七海」

「……貴方にはすべてお見通し、ですか」

ガズツ！ と破壊音が響く。歌姫が去っていった方向だ。悔しき、悲しき、怒り、ありとあらゆる負の感情に任せて、壁を殴ったのだろう。準1級術師である彼女の腕力での殴打は、それだけの破壊力を持つ。

その逆方向の陰から姿を現したのは、七海健人だ。ちよつとした用があつて東京校に来ていたところ、たまたま先ほどの場面に出くわしたのである。

「目隠しをしてもお見通しだよーん」  
「そうですか」

悟はおどけて見せるが、七海は「いつも通り」の塩対応をする。

だが、悟からは、「いつも通り」には見えなかった。

「歌姫はさ、成宮を『殺した』と思ってるらしいよ」  
「ですが、私は、成宮さんに命を救われています」

歌姫が咲来を殺した。これはある意味での、冷酷なまでの真実だ。

だが、同じ理論で、歌姫が、七海を救ったともいえる。

そして、それを認めるならば——七海は、その意味でも、そして本来の意味でも、睨来を「殺した」ことになる。

もし、彼が油断していなかったら。

もし、もつと下調べをしていたら。

もし、何があつても手を出さないよう事前に言っていたら。

もし、見かねて励ますというようなことをせず落ち込ませたままにして人助けのモチベーションを下げていたら。

もし——七海がもつと強かったら。

咲来は今も、生きていたかもしれない。

七海もまた、咲来を「殺した」。しかも、彼の場合は、その手で直接殺してもいる。

歌姫がああしたから。ああしなかったから。たまたまこうなったから。もし七海がこうだったら。少し状況が違ったら。たまたま呪霊が集まったから。呪物の性質がそうだったから。

あの日からずっと、事実とI Fが、理由と結果が、「因果と言う『呪い』」が、頭の中を「廻って」いる。

「呪術師ってさ、後悔だらけだよね」

悟の口からどう励ましたところで、歌姫も七海も、変わることはない。

だから悟は、ただそれだけ言って、次の仕事のために、その場を去る。これから、か

なり遠方への出張だ。いきなり入ったそれにはどろりとしたねばついた悪意や陰謀を感じるが、あくまで予感でしかないため、逆らうことはできない。

ポケットに両手をつ突っ込み、歩きながら、悟は、それでも笑う。

呪術師は、理想通りなんかありえない。生きるどころか、死体が残るだけでも御の世界。

だからこそ、呪術師は、常に後悔の連続だ。

そして今回の事件で背負った後悔も——二人なら、きつと乗り越えられる。

悟はそう信じているから、二人を励まさなかつた。

——この数日後、悟が高専入学を許した虎杖悠二が「死ぬ」。

——その時に悟は、歌姫や七海が背負ったような後悔を、深く味わうことになるのは、また別の話だ。





「うーん、残念。上手くいかなかったね」

時は少しさかのぼり、咲来の死の翌日。

南国の自然豊かなビーチ「のような場所」で、頭に縫い目がある男と、一つ目で頭が火山のようになっていている呪霊が、パラソルの下で並びながら会話していた。

「だから言っただろう、夏油。上手くいったら不思議なぐらいだ」

胡散臭い笑みを浮かべる縫い目の——夏油と呼ばれている——男に、呪霊が心底呆れ果てながらしゃべりかける。

この呪霊の名は漏瑚。人が大地に抱く崇拜と敬意、そして恐れから生まれた、強大な呪霊だ。

夏油と呼ばれた男の作戦は、あまりにも滅茶苦茶だった。

計画の目的は、「咲来を取り込んだ《獅子蟲》を手に入れる」こと。

《獅子蟲》の性質に目を付けた夏油は、自身の術式《呪霊操術》を活かして、一つの作戦を立てた。

咲来は呪力が少ないゆえに真価を發揮できなかったが、その術式《爆散》は強力だ。

そこで、今は呪物になり果てていたがかつての特級呪霊であった《獅子蟲》の性質に目をつけたのである。

学校に安置されていた《獅子蟲》の封印を破って呪霊を大量に呼び寄せさせる。咲来たちが集まり大量の呪霊との防衛戦が始まったら、タイミングを見て手持ちの2級以上の呪霊に《獅子蟲》を食わせ、そして《獅子蟲》に咲来を食わせる。特級呪霊の呪力をもって《爆散》を振るえば、強力で凶悪な火力と破壊力を誇るだろう。そしてその場

にいるであろう他の呪術師と戦わせて吸収させてさらに術式を得た直後、闘いで消耗しているところを狙って夏油が戦闘を仕掛けて、支配下に置く。今回生き残った術師・七海健人の持つ術式は使いにくいのが、格上を喰うことができる破壊力を持つ。そんな彼を取り込むことが出来たら、それもまた良い。

通常の呪霊には無い知性と狡猾さを持つ特級呪霊が、特級たる呪力で、圧倒的な破壊力と格下を確実に倒せる《爆散》と、格上を狩ることができる《とおかくしゅほう十劃呪法》を振るう。さらにはそれ以上に色々とりこんで成長する余地もあり、領域展開まで使える。漏瑚ほどとはいかないが、同じような生まれの花御に匹敵する力を持つ、強力な手駒になるはずだった。

だが結局、それは失敗した。あまりにも不確定要素が多すぎる計画だったのだ。実際その無茶苦茶さは、事前に話した漏瑚や花御、そしてあまり口出ししない真人からすらも、そうとう馬鹿にされた。

例えば、漏瑚が提案した作戦は以下の通りだ。

《獅子蟲》の封印を破るや否や即座に手持ちの呪霊に《獅子蟲》を食わせ、覚醒させる。そしてその場で倒して手駒にして、あとはこつそりと咲来を取り込ませ、その後どんどん秘密裏に呪術師を取り込ませる。

こちらの方が、派手な動きで呪術師に感知されることもなく、確実かつ安全に、目的

が達成できる。

こんな提案を事前に受けていたのに、それでも夏油は自身の計画を執行し、そしてその見事に大失敗した。

1級以下の雑魚とはいえ、呼び寄せられる呪霊たちに紛れ込ませていた手駒はそれらの数が減り、強大な戦力になり得た《獅子蟲》は完全に祓われた。失った手駒も、強力な攻撃力を持つ巨人型呪霊と、術式こそ持たないが多量の呪力と巨体を生かしたフィジカルが魅力のウツボ頭呪霊はそこそこ痛い。幸い、この二体へ隠蔽術式をかけさせた呪霊は健在だが、夏油自身がそばに隠れてリアルタイムで《呪霊操術》で仕事したにも関わらず成果は得られなかった。

漏瑚は、まさしく馬鹿を見る目——人間と違って一つ目だが——で、夏油を見下す。そんな漏瑚に、夏油は苦笑しながら、手をひらひらとさせて話の続きをする。

「成宮咲来なんてさ、正直、『どうでもいい』んだよ」

笑い話でもするかのように朗らかに、それでいてその顔には、酷薄は笑みが浮かんでいた。

「手駒にするのは、できればいいな、程度にしかないんだ」

学校一つが崩れ去り、大きな事件となった、あの戦いと咲来の死。彼によって仕込まれた地獄の舞台は、彼にとっては、あくまでも「サブ」でしかない。

「あれはしよせん、  
宿<sup>虎</sup>儼<sup>杖</sup>の器<sup>悠</sup>の計画<sup>二</sup>を遂行<sup>一</sup>するための陽動でしかないんだからね」

同時間、様々な場所で、大小の呪霊に関する事件が起きていた。各所で、残酷な事件や死が、引き起こされた。

咲来と七海の《獅子蟲》をめぐる戦いは——その一つでしかない。

その全ては、虎杖悠二に、両面宿儺の指を食わせるための、目くらましと足止めだったのである。

そのせいで、五条悟を筆頭としたほか呪術師の増援は遅れ、伏黒恵は単独で戦わざるを得ず、劣勢になり、悠二は指を喰った。



一人の善良な「元呪術師」の女子高生が凄惨な死にざまを迎え、学校一つが崩壊し、関係者の心に深い傷を残した、《獅子蟲》をめぐる戦い。

それは、夏油の体を操る「ナニカ」が立てた長い長い計画の始まりの、そのおまけにしか過ぎなかったのである。

真夏の南国。この、この世ならざる異界に渦巻く陰謀は、夜の闇が明るく見えるほどに、どす黒い。

しかし、そんな世界もまた——領域の性質上、どこまでも突き抜けるような、気持ちの良い晴天だった。

## 設定・解説・裏話等

このページでは、キャラや術式の設定やその裏話など、この二次創作について色々考えていたことを書きます。設定だけ考えたが本編に反映されなかったものもあります。

本編ネタバレの他、本編以上に原作のネタバレもありますし、読後感を失いたくない方は読まない、または時間を置いてから読むことを推奨します。

また、先述の通り、本編のネタバレを当然含みますので、本編読了後に読むことを強くお勧めします。

### (1) 製作動機

一言で言えば、「推しを曇らせたいと思ったから」です。

ツイッターなんかでは、二次創作で「推しを曇らせたい」という人がたまにいます。

僕は、「否定はしないけど、曇らせることは目的・動機にはならないかなあ」でした。でし「た」。

気になったのでアニメの『呪術廻戦』を見たところすっかりはまって、それと同時に

初めて、「推しを曇らせたい」という感情が湧いてきました。

本編とここまできを読んでくだされば分かると思いますが、推しは七海と三輪です。

そういうわけで二人を曇らせるために、三月ぐらいから構想を始めました。

本編のクライマックスが六月の話なので、六月中に投稿開始できてよかったです。す。

## (2) 製作の経緯

今回は人生で初めて、最終話を最初に書きました。

最終目標が「推しを曇らせる」だったため、その結果を先に書くことで、そこまでの過程を書くのが楽になると思ったからです。

前作『マジカル・ジョーカー』と違い、今回は話数も少ない短編にする予定だったので、道筋が立てやすいのもあると思います。

(3) キャラ紹介

本編に関するあれこれや、そのキャラに対する感想なども書いていきます。

☆成宮咲来なりみやさくら

年齢・16歳（誕生日は決めてないですが、なんとなく11月ぐらいの感覚です）

出身地・広島

経歴・一般公立中学校↓呪術高専京都校（1年8月中退）↓一般私立高校（1年9月  
転校）↓死亡（2年6月）

趣味・人助け、テレビ鑑賞、一応広島カープのファン

特技・利きジュース

好きなもの・ジューシーなフルーツ全般

苦手なもの・アボカド

ストレス・トラウマ

術式・《爆散》

ステータス（ファンブック風）

呪術センス7

座学 7

運動神経 3

身長・150cm 台半ば

本作のオリジナルキャラクターで、主人公。

「推しを曇らせる」ためにあらゆる設定を考えたため、主人公なのに物語目的としてはサ  
ブ的存在です。とはいえ、書いていくうちにだんだん気に入ってきました。

術式は《爆散》。

呪力が固まっているもの（呪霊、呪力の球、構築術式での生成物など）があつたら、そ  
の呪力同士の結びつきをなくして、ただの無秩序な呪力の粒子にする術式。その効果と  
して、分子同士の結びつきが緩んで体積が増える気化・蒸発のように、呪力の体積が急  
激に増えることで、水蒸気爆発と同じ仕組みの爆発が起こる。

拡張術式は《陽白光》。術式や生得領域、領域展開をただの呪力にして破壊する。

呪力・呪霊・術式と言う存在の根幹に関わる、根本的な術式。呪力の仕組みと言う世  
界法則に触れる、結構すごいもの。故に両面宿儺や縞素は、過去に見たことない術式と

言うこともあってそこそこ興味を示しますが、似た

術式は見たことあることと、応用範囲が狭くて彼らレベルでの実用性はないため、がつつり興味は示さないぐらいです。

イメージとしては、人間の負の感情によって生まれた呪力と言う闇を、光で打ち消すような感じ。呪力や呪霊や負の感情の嫌なところを闇落ちするまで味わった夏油（本物）は、多分咲来の術式を知ったら、乙骨・里香カッパル並みに執着すると思います。こうやって書くこと滅茶苦茶凄そうですが、まあ実際は本編程度の使い様しかありません。

火力としては、真依の弾丸爆発でメカ丸のジャブのような砲撃、五寸釘爆弾がメカ丸のちよつと本気出した砲撃、トンネルでの暴走時は与幸吉の《チャーージ2年ミラクルキヤノン「二重大被砲」》ぐらいのイメージ。実は一瞬だけ特級クラスの火力を発揮していました。

ただし、それは発生するエネルギー全体の話で、メカ丸・幸吉の攻撃は指向性を持った攻撃（エネルギーのほとんどが攻撃対象に向かう）なのに対し、《爆散》はあくまでも爆発（ほとんどエネルギーが対象に向かわない）であるため、実質威力は比べると相当低いです。雑魚を一気に倒す、内部で爆発させる、または離れたところからの大量爆殺など、実は虐殺・テロ・呪詛師向きの術式ですね。真に1級上位クラスの呪力をもっていたらその危険度から特級認定されるでしょう。

いわば「ぼくのかんがえたさいきょうのじゅっしき」。ただし、推しを曇らせるために、従来の性能を抑えることで、まあまあ程度の強さにしませんでした。

察している方はいると思いますが、もろに、『魔法科高校の劣等生』の、『爆裂』『分解』『マテリアル・バースト』です。前作『マジカル・ジョーカー』を書くにあたって約四年間もこれらの魔法と正面から向き合っていたので、オリジナル術式もそつちに吸い寄せられました。

性格は、気弱、穏やか、お人よし、自己犠牲、時と場合によって押しが強い、仲が良くなるほとんどの少し言葉が強くなる、といった感じ。

呪術師としてはイカれていない性格。人助け大好きすぎる少女のは異常と言えば異常ですが、呪術師には向いてないですね。

ちなみに、こんな性格になった生い立ちは、特に考えてないです。虎杖悠二と目的意識は似ていますが、実際そこまで似ていませんね。強いて言えば、保育園とかで友達に言われた「ありがとう」が嬉しかったとか、家のお手伝いをして両親にお礼を言われながら撫でてもらったのが嬉しかったとか、そんなありふれた理由だと思えます。



趣味のテレビ鑑賞は、がつつり見るといふか、暇なときにテレビつけて適当にチャンネル回して見る、というタイプ。今時珍しいテレビっ子ではありませんが、鼻肩番組とかはあまりありません。ドラマ、アニメ、ニュース、バラエティ、音楽番組、全部見ます。大みそかは紅白派。

両親は、言つてしまえば、エリート階級。二人とも有名私大卒で一流ホワイト企業に入社し、職場結婚。咲来が中学進学したあたりでどちらもフリーランスに近い形態で仕事をしているため、引越しなどは割と簡単にできて、それでいて高収入。夫婦仲は円満で、どちらも性格は常識的で心優しい。こんな環境で育ったら、まあ咲来みたいな子になつてもおかしくはないよね、つて感じ。

ただ仕事自体は充実しているが中々忙しく、幼いころから咲来を一人にしがちでした。あんな性格なので仕事に疲れて帰ってきたら咲来が家事を大体終わらせている、ということも多く、その分、短い時間に咲来にたっぷり愛情を注ぎました。ちなみに咲来本人はさほど寂しいとは思つておらず、「人助け」を咎められなくてちようどよいと思つていました。親の心子知らず。

本編では冗長になるので書きませんでした。当然、咲来の死は霞・七海クラスに悲

しんでいます。七海が自らの責任だと伊地知たちの制止を聞かずに、咲來の死について自ら説明しに行きました。両親二人は色々思うところはありますが、七海を責めるのは娘が望んでいないということで、号泣しながらも罵倒したりはしませんでした。それがむしろ逆に七海を苦しめてるわけですが……。

咲來の死後は、二人とも鬱になり、呪術界から払われた多額の補償金を少しづつ使いながら、どこか田舎に引越して、細々と仕事して生活することになります。二度娘が大きく傷つき死んだことで、もはや生きる気力は二人ともありませんが、「相手を支えてあげないと」という愛が生きる支えになっています。

ちなみに、咲來の遺体は、十劃呪法＋黒閃＋半身が《獅子蟲》に食われていた、と状況が重なって、骨や肉片すら残っておらず、お墓には遺骨などは入っていません。

もし《獅子蟲》との戦いで生き残り、乗り越えた先での七海への恋愛感情は、まあ、なしいとはいえない、ぐらいでしょう。

ここまで話したものの、七海と霞を曇らせるべく死んでもらうために生まれた(酷い)ので、「もし生き残ったら」は想像しにくいですね。中退しなかったら京都百鬼夜行で死ぬでしょうし、《獅子蟲》戦を生き残って復帰しても交流戦で中途半端に勘が働いたせ

いで真人に殺されるでしょうし、そこを乗り越えても渋谷事変で宿儺の領域に巻き込まれて死ぬと思います。

中退後の12月、東京と京都で百鬼夜行があつた際、咲来が住んでる神奈川某所周辺からは呪術師が減り呪霊が活発になつたので、あのクリスマスはてんでこ舞いでした。後日、これが最悪の呪詛師によつて起こされた事件と知り、恐怖からトラウマがフラッシュバックして、正月は寝込んで過ごす羽目になりました。

こんなことやっているもんだから、監視している呪術界は扱いに困っていた様子。

### ステータス解説。

呪術センス7。呪力のポテンシャルは高く、2級と準1級の間ぐらいで、8相当。ただ呪力への感性や理解度が低く、自分の術式の理解深度も浅いため、応用や拡張や呪力操作は上手ではなく、6相当。総合して7。1級呪霊も一瞬で祓いましたが、土壇場での火事場力があつたのと、プレゼント呪具や高田ちゃんの補助があつたからです。プレゼント呪具が無限に使えるなら1級、使えないなら2級、全くなしなら準2級がせいぜ

いと言った感じ。

座学7。三輪霞と同じぐらい。元々5、5か6ぐらいだったのですが、東堂に教わって7ぐらいになりました。

運動神経3。クソザコ。呪力なしの場合は、同年代女子平均ぐらい。呪力有術式無呪具無なら、4級呪霊と格闘戦が互角に成り立つ程度。一般人の中に混じって呪力有でやったら、そりゃあ目立つわなって感じ。ただし身体能力が上がるだけで運動センスが上がるわけではないため、体育でやる球技の類は身体能力のギリ押しでやっていただけで、そこまですましくはないです。

呪具を用いた戦闘で才能を発揮します。真希さん（高い身体能力でいろんな武器を達人クラスに振るえる）とは違ったベクトルで、状況に応じて多様な呪具を適切に使いこなすタイプ。

戦闘能力としては、「術式込みで七海と共闘して絆を深める程度の強さはあるが、基本的に弱く、それでいて七海の命の危機を何回も助けることができる。最後は死ぬしかない弱さ」という点を意識して色々設定を考えました。

名前の由来は、なんとなく大人しそうで可愛らしい名前ってことでフィーリング。西宮桃と全ての字が対称になるのは完全に偶然で、紛らわしいので変えようと後から考え

たものの、そのころには自分の中でこの名前が馴染んでしまったので、変えませんでした。あと、ナルミヤ・ナリミヤどっちなのか、サキ・サクラどっちなのか、分かりにくいのも反省点。長編ならまだしもこの作品は短編・中編程度なので、読者にオリジナルキャラが浸透しにくく、紛らわしい漢字を使うべきではなかったかもしれませぬ。

身長は低め。西宮桃程小さくはないけど、長身の真依や霞と並ぶとちんちくりん。スタイルも顔も結構よいが、呪術師はみんな顔が良すぎるのでその中に並ぶと埋もれます。

顔とスタイルがそこそこ良くて、低身長で可愛らしく、誰にでも優しく、よく助けてくれるため、中学と転校後高校では結構モテます。ただし、助けられた側は尊敬や感謝の念を持つことが多く、どちらかといえば頼られている、の面が強いです。そんなわけで浮いた話はなく、本人はモテているとは思っていないでしょう。

ちなみに、なぜか異性からよりも同性からの方がモテます。

死因については、表向きには、「嫌な予感がしてあの夜に学校に向かい、爆発の瞬間、

近くを通りかかった一般人を助けて代わりに自分が犠牲になって死亡した」ということになっており、校内だけではなく、地元の英雄になっています。ただしマスメディアの取材や葬儀などは両親が望んでいなかったため、呪術界のバックアップもあって、家族がいろいろ苦労することはなかったでしょう。

当初は、『断章のグリム』とクロスオーバーして、七海・霞と共闘するものの最後の最後に《異端》（呪霊を生み出しまくる、呪詛師と呪霊の間みたいな感じ）に堕ちてしまい二人に殺してもらおう、という流れで構想スタートしたのですが、色々難しく断念しました。

### ☆獅子蟲

・特級呪霊↓特級呪物↓特級呪霊↓死亡

・術式《吞害》<sup>どんがい</sup>

・領域展開・《蠕蝨蝕猊肚》<sup>ぜんしゆんしよくけいと</sup>

咲来を共闘させて七海に情を抱かせ、咲来を取り込んで苦しませて七海を困らせ、咲来に七海を助けられて七海に感謝させ、咲来を殺させて七海を曇らせる。そんな欲張りセツトを実現してくれた今作のMVP。

寄生虫や食害や庚申講など、虫への恐怖全般が蓄積して生まれた、いわば虫の総合自然呪霊。生まれとしては漏瑚・花御・陀良に近いです。蝗GUYの兄弟・親戚みたいなもの。

生まれ持つての性質上、独力でパワーは発揮できません。呪霊に取り込まれることで真価を発揮し、宿主をどんどん切り替えて、ある程度のレベルになったら、今度は呪霊や呪術師をいっぱい取り込んで、覚醒していきます。

身体は、羽虫が大量に集まったかのような黒い靄という見せかけの体と、現実次元には基本現れず見せかけの体で覆われて呪術次元に隠れている本体、という構成。エヴァンゲリオンの使徒・レリエルの、デリラックの海という外面と、コアという本体、みたいな感じ？ ですかね？

術式は、取り込んだ呪霊や術師の術式や知識を扱うことができる《吞害》<sup>どんがい</sup>。元々術式だけだったのですが、江戸時代の喋り方を再現できないため、急遽咲来の知識を取り込

んで現代語で喋ってもらえるように、知識も吸収できるようにしました。ただ術式解説のプロセスなどを踏むために、あくまで「一部知識」と設定。ライブ感で設定を付け加えるとこんなことになります。ネーミングモデルは、食害。

領域展開は《蠕蠢蝕猊肚》。仏教に詳しくないので、仏教用語要素を加えつつ字面も発音も格好よいもの、と考えるのは死ぬほど難しく、領域展開をする流れに決めたことを何度も後悔しました。でもこれがないと霞の簡易領域は生きないし……。

仏教用語要素は「猊」。獅子を意味して、修行がノってきた僧はまるで獅子のように勢いがある（獅子奮迅）という話から。仏や高僧は獅子に例えられ、それらが座る場所は「猊座」と呼ばれるし、敬称は「猊下」となります。こうなると、仏教そのものが獅子で例えられるため、「獅子身中の虫」のたとえ話は本当に上手ですね。昔の宗教者は賢いです。

展開時の印は考えてません。詳しくないのと、後から本編で出た印に被ったら格好悪いからです。

本編で使った未完成の領域は、完成度で言ったら、八十八橋時の伏黒の少し上ぐらい。

強さ。



漏瑚・渋谷真人≧獅子蟲（咲来・七海捕食）＜花御・陀良（羽化）＞獅子蟲（咲来捕食）  
 ≧領域展開前真人＜七海健人＞八十八橋呪霊＜獅子蟲（1級呪霊食べられる）＞少年院呪  
 霊、ぐらいの感じです。

こうやって見ると漏瑚は本当強いですね……。

## ☆トンネルの呪霊

### 1級。

地元の反対を押し切って寺社を潰してトンネル工事をしたら事故が起きて作業員一人が死亡したという事実が、怪談として伝わって、それが集積して呪霊になりました。

怪談の内容は、「寺を潰して工事した結果、崇りで事故が起き、作業員一人が孤独に長時間閉じ込められた。救助されたとき、すでにこと切れていて、その顔は恐怖と苦痛と怒りで歪んでいた。それ以来、寺が鎮めていた霊と重なって、トンネルに怨霊として出没する」というもの。

この生まれが性質として影響しています。

体のつくりは、「昔のトンネル工事」のステレオイメージの合成。プラスチックヘルメットとツルハシを同時に使う時期が史実にあつたかは定かではありません。

生まれ持つての縛りは、トンネルから出られないことと、犠牲者は一人であること。

縛りで得られた強さは、トンネル内での強い隠密能力（入り口までカバーしきれないので残穢が見える）、圧倒的フィジカル、範囲なら特級に届きうる術式。

本来は知能もそこそありますが、咲来たちと遭遇した時は初撃を防がれたことで全員纏めて相手せざるを得ず、縛り違反となつて知能が大幅に低下しました。

咲来たちを瀕死に追い込み、咲来を暴走させ、咲来たち四人を曇らせるために色々設定しました。

ちなみに、寺を潰したのと死亡事故が起きたのは事実ですが、寺はもともと廃寺になつていたので祟りなんか起きませんし、死亡事故も長時間孤独に閉じ込められたのではなく即死です。怪談がおどろおどろしくなつているのは、トンネル工事反対派によるネガティブキャンペーンの成果でした。つまり、この事件もまた、人間の過剰な悪意に

よって起こされたものです。

(4) 原作キャラの原作からの変化

・七海建人

この出来事がきっかけで原作よりちよつと強くなっています。

あと咲来に一生いろいろと感情を抱き続けているので、性格やシチュエーションがよく似ている虎杖との共闘をきっかけに、彼にも原作よりも思い入れが強くなります。

渋谷事変で「後は頼みます」するときの走馬灯には、多分灰原と並ぶぐらい咲来が思い浮かんでるでしょう。

・京都校メンバー

咲来の意志に報いるためにより修行をするので、全体的に原作よりちよつと強くなっています。

あと咲来の仇が特級呪物なので、それを飲み込んで生きている虎杖悠二へのヘイトはすさまじいですが、交流会を通じて彼の性格を知ると、咲来を重ねて逆に全員好感度が

原作よりも高くなります。

特に人助けと言う動機の部分で、加茂は地味に咲来を気にかけていたので、悠二への好感度の上げ幅はすごいことになるでしょう。

霞は原作と違ってストレスが「なんにも」と言うことにはならず、咲来を思い出しては胸を痛めてたまに泣いています。

真依は「自分を承認してくれる術式を持つ人」が死んだので、原作並みかそれ以上にやさぐれて自己肯定感が低くなっているでしょう。

メカ丸は、咲来の死をきっかけに「みんながいつ死ぬか分からない」と思って、急いで健康な体を得るべく、偽夏油一味により協力するようになります。咲来を殺したのが彼らだとは知らずに。

(5) どこまでが偽夏油の作戦だったか

《獅子蟲》の情報が隠されてた↓関わっている。いつか呪霊を操作できる何かの手段が見つければ、何かに使えるかもしれないと、加茂憲倫時代に加茂家由来という権力を使つてさりげなく禁書に設定。のちに身体を入れ替えつつ上層部に取り入って色々した

《獅子蟲》が魔除けとして学校に置いてある↓関わっている。外部においておけば手出ししやすいため。1から10まで関わっている虎杖・宿儺と違って、いつか使うかも程度の理由で一応そうしておいた。体を入れ替えて上層部にそれとなく促して配置した。

咲来の誕生と生得術式↓関わっていない

歌姫と遭遇し入学↓関わっていない

トンネル事件の発生や咲来がそこに派遣されたこと↓関わっていない

中退した咲来が《獅子蟲》の安置されてる学校に転校↓ほぼ関わっていない。《獅子蟲》を置く↓学長が呪術関係者↓咲来が受け入れられやすい、という偶然のバタフライエフェクト。

わずかに《獅子蟲》の封印が緩んでいた↓関わっている。というか犯人。咲来がこの学校に転校してきた段階で、悠二に指を飲ませる計画の囷にするついでに戦力増強になると考えた

《獅子蟲》の封印が解けた↓まんま犯人

(6) 終わりに

ツイッターでのリプ、マシユマロ、活動報告や本作のコメント欄などで、質問や感想を常に歓迎しております。

また、明日からは、「もし咲来が《獅子蟲》との戦いを生き残って高専に復帰し、交流会に同行したら」という話を投稿する予定ですので、そちらもよろしければどうぞ。

呪霊が一杯湧いてくるし1級呪霊もいる↓《獅子蟲》の誘引呪力の範囲が広大と言うのもありますが、中には相当数、操っている呪霊もいます

七海と霞を全力で曇らせる本編の展開を考えるにあたって、「いやあこれ全部を偶然で済ますのはご都合主義の権化だよなあ」と思って、急遽全ての黒幕として最後にすべのヘイトを持っていつてもらいました。読後感最悪だったと思います。

## じゅじゅさんぽ・もしまた日が昇ったら1

「その……戻ってきました！」

髪をポニーテールに結び、ワンピース型の真っ黒な制服姿の成宮咲来が、言いにくそうに頭を下げる。

それを見ながら京都校の学長である楽巖寺は、長いあごひげを撫でながら、好々爺風に笑う。だがその分厚い瞼と眉に隠れた目線は、ナイフのように鋭かった。

（離れていたはずなのに、力が増しておる……）

咲来が自主退学をした時。呪術師として適性がある人格かどうかは別として、強力で珍しい術式と術師に珍しい善良な性格の彼女が呪術界を去ってしまったのは惜しいと感じてはいたが、一方で、所詮は一回生——関西風の一年生——の4級術師だったのは、大きな痛手ではないとも感じていた。

だが、今の咲来はどうだろう。

トンネルへの任務に赴く数日前が、事件前に見た最後の姿だ。事件後は、自主退学の書類を提出しに来て真に中退の意志を確認するための面接をした時。

前者はまだまだ未熟で、後者は心が折れた弱者だった。

しかし今の睽来は、一年以上しつかり呪術師としてやってきた二回生達に劣らないほどの力を備えているように感じられた。

(儂の老眼が悪化していなければ、思い込みを加味しても、大きく成長しているな)

睽来が再び呪術高専に戻ってきた。

そのきっかけとなった事件の報告書は、にわかには信じられないものだった。

——睽来が転校した先の私立高校には、呪霊の発生を抑えるために、封印された特級呪物《獅子蟲》が置かれていた。

だが、先日、その封印が原因不明ながらいきなり解けてしまう。

睽来は、調査に来ていた1級術師・七海建人と協力して《獅子蟲》防衛戦を戦い、霞たちから貰ったプレゼントを活かして、準1級以上を含む数多の呪霊を祓った。

だが、ついに少しの隙を突かれて呪霊に食われ、《獅子蟲》の復活を許してしまう。

その直後、復活した《獅子蟲》に食われそうになる寸前で、自身の目の前で呪力を《爆散》させて己を吹き飛ばし、回避にしろうじて成功。

その後、次々現れる呪霊を取り込みながら力を増していく《獅子蟲》相手に、七海に協力して戦う。

役割は、《爆散》の特性を生かして、集まってくる大量の呪霊の掃除だ。

《獅子蟲》の餌を無くしつつ、敵の数を減らすことで、七海が戦いやすいようにする。



そしてその激闘を制し、特級呪霊《獅子蟲》の討伐に成功した。

……およそ、4級術師の状態で中退した女の子が成しえる仕事ではないはず。

だが、現に、捏造した様子のない報告書が上がってきた。事実として受け止めるほかない。

そういうわけで、事前に成しえた偉業の報告書を見たせいで、「強くなっている」という前提を持たざるを得ない。

そんな色眼鏡をかけた状態で、以前と違って伊達眼鏡をつけた咲来と、対面することになった。

自分がそうした多少の思い込みがあることを加味しても——目の前にいる咲来は、以前とは見違えるように、強くなっているように思えた。

(……何はともあれ強くなっているなら大歓迎じゃな)

しかもそれで、呪術界に戻ってきてくれた。

大きな試練を乗り越えて、心身共に成長し、また「人助け」のために、真にやりがいを見出して、再スタートを切る。

そんな決断をしてくれた彼女を、歓迎しない理由はなかった。

だが。

「して、事前に聞いてはおるが………呪術師には、なるつもりはないと?」

「……その、はい」

咲来が気まずそうに返事をする。

ここがネックだった。

結局のところ咲来は、未だにあの時のトラウマを乗り越え切れていない。より大きな試練を生き残ったが、いや、その試練が重なったからこそ、命を懸けた戦いへの恐怖は、未だ彼女の心を縛り付けているままなのだ。

「ふむ………」

呪術師になるつもりはないのに、なぜ戻ってきたのか。

——咲来は将来、補助監督になるために、戻ってきた。

呪力を生かして人助けをすることにやりがいを見出したが、戦うのは怖い。

そこで、呪力を生かして、かつ非常事態以外は戦わずに仲間や世の中に貢献できる、補

助監督になることを選んだ。

それが、あの《獅子蟲》をめぐる戦いを通して得た、咲来の将来の夢なのだ。

「……………よかろう」

たつぷり十数秒の沈黙。その末に、楽巖寺は、それを了承した。

呪術師になってくれないのは残念だ。

だが、気弱で人見知りしがちではあるが、真面目で常識を備えた善人で、地味な仕事

や作業もさほど苦しめないタイプの彼女が補助監督になるというのは、頼もしい限りである。それに、最悪自分でちよつとした呪術師並みに戦える補助監督と言うのは、非常に貴重な上にありがたい。術式の特性も考えれば、呪術師に主目的の呪霊へ集中してもらうために、雑魚呪霊を露払いするという仕事も期待できる。

「ありがとうございます！」

咲来は、パツと笑顔の花を咲かせて、深々と頭を下げた。

——こうして晴れて、咲来は、一度去った呪術高専へと、新しい夢をかなえるために戻ってきた。

——自分一人のために「補助監督コース」が新設されるのを知った彼女が恐縮しすぎ

て涙目になるのは、ここから数日後のことだった。



「東京、ですか？」

夏がさらに本格的になってきたころ。

単位は全く足りていないが、一般高校で教科の単位を十分すぎるほど取っていたことと、一般人だったところにボランティアで数多の呪術案件を独力で解決し、また《獅子蟲》をめぐる戦いで活躍したことを踏まえて、特例で二回生となった咲来は、少し上ずった声で、オウム返しめいた質問をした。

「ああ、この夏に、東京の姉妹校と交流戦をやるんだ。その打ち合わせのために、学長について行ってほしいんだ」

戻ってきてくれた可愛い生徒の純粋な反応を見て思わず頬を緩めながら、歌姫は説明する。

呪術高専は東京と京都にあり、毎年夏に、互いに切磋琢磨するべく、交流会を行っている。当然呪術師同士なので、その交流は過激な試合になるわけだが。

「学長と、その秘書として三輪が行く。成宮も、去年の交流会の時はもういなくて、向こうと面識ないからな。顔を見せてやってほしいんだ」

それならば、確かに理屈としては通っている。

「分かりました！ ぜひ行きたいです！」

咲来は意気揚々と返事をした。その顔は明るく、興奮からかわずかに紅潮している。歌姫にはわかる。これは、東京校に行くのが楽しみなわけではない。

おそらく、咲来の頭の中には、スカイツリーや上野動物園や原宿が浮かんでいるだろう。そしてその予想は、大正解だった。

だが、それは、急に収まる。

咲来の脳に、ある疑問が浮かんできた。

「その、戻ってきたばかりで呪術関連の単位とかそれなりにギリギリなんですけど……大丈夫なんですか？」

遠慮がちに、上目遣いで問いかけてくる。伊達眼鏡越しの視線は、今は逸らしていない。

歌姫にはわかる。問いかけは「大丈夫なんですか」だが、実際は、「本当の目的は何で

すか」という問いだろう。

大きな試練を乗り越えて、こういった面でも、呪術師として成長しているようだ。喜ばしい一方で、今は少し煩わしい。

歌姫は深くため息をつき、観念したように、口を開く。

「……………東堂と真依もついていくことになってるんだ」

「……………あ、はい」

それは確かに、霞と学長だけだと、ストレスで胃に穴があきそうな案件だ。

あの二人は、間違いなく、先方に迷惑をかける。

——楽しい東京観光には、  
ならなさそうだ。





東京校についてからは案の定、楽巖寺の命令で、霞と学長とは離れて、勝手に動き始めた真依と東堂に同行することになった。

「その、二人とも……あんまり変なことしないでくださいね?」

先輩である東堂が含まれているので、真依に対しても敬語になる。

「あら、私がそんなトラブル起こしそうに見えるかしら」

「うん」

相変わらずセクシーで不敵な質問に、咲来は何のためらいもなく即答した。

「ずいぶんと凶太くなつたわね……」

そんなあまりにも遠慮がない反応に、真依は怯む。咲来は気弱で人見知りしがちだが、真に仲良くなつた相手には、たまに毒が強く遠慮がないこともあるのだ。

「俺は別に、いつも通りだが?」

「そのいつも通りが厄介だつて言ってるのよ……」

一方東堂は、なんのこともだか分かっていない。思わず真依が咲来の味方に付いて、額を抑える。こんなことを言っているが、正しい世界線では、真依も相応のことをやっているのは余談である。

「なんでこつちいるんですか？ 禪院先輩」

そんなこんなで、自販機で飲み物を買っていた二人と邂逅する。

事前に話を聞いていた通りの、今年入ってきた一年生の二人だ。不思議な髪形のハンサムな男の子・伏黒恵と、茶髪が似合うあか抜けた雰囲気の子・釘崎野薔薇。

（やっぱ東京の子おしゃれだなー）

それを見て、咲来は呑気な感想を抱く。ただし、野薔薇がお洒落なのは事実だが、彼女は「東京の子」ではないのだが。

「いやだなあ、伏黒君。それじゃあ真希と区別付かないわ。真依、って呼んで？」

そんな咲来の目の前では、真依が恵に話しかけている。すごくセクシーだ。そんなじよそこらの男の子ならこれで顔を赤くするだろうが——恵は無反応である。

（東京の子って遊び慣れてるのかなあ）

あの顔ならば、女の子相手に遊べそうだ。

そんな、全く事実と異なる伏黒恵像が咲来の中で出来上がってしまった。

「……いつらが乙骨と三年の代打の一年生、ね」

「え、三年生もなんですか？」

そんな中、東堂の何気ない言葉に、咲来は思わず反応する。海外留学中らしい二年生の特級術師・乙骨の代打とは聞いていたが、三年生も不在とは聞いていない。

「知らないの？ 三年生の稱は、去年の百鬼夜行の時に京都にいて、偉い人たちをぶん殴って停学中なのよ」

「え、ええ……」

真依の解説に、咲来は戸惑った。

テレビのイメージ通り、東京の不良は一味違うらしい。

「またも全く違う人物像が出来る——ここまでお察しの通り咲来は田舎者の性格だ——中、どうやら真依や東堂と面識あるらしい伏黒が、口を開いた。」

「それで、そちらの方はどなたですか？ 見たところ、高専の生徒の様ですが」

彼の視線は、咲来の方を向いている。それを受けて、咲来は慌てて自己紹介した。

「あ、えつと、二年生の成宮咲来です。学長についてくるよう言われてここまで来ました。よろしく願います！」

「ぺこつ、と勢いよく頭を下げて礼をする。それを見て、恵は戸惑った。」

(常識人っぽいぞ!?)

明らかにやばそうな東堂と、イヤミ満点の真依と一緒にいるから、てつきりやばいやつだと思っていた。

だが、この自己紹介を見て、恵は確信する。常識人だ。

しかも、年下であるというのに、敬語だしとても畏まっている。態度からして人見知りの気もありそうで、つくづく呪術師らしからぬ性格だ。

「おい、アタシをほっぽって話進めんな。で、結局何の用なの?」

野薔薇がそこに割り込んでくる。とんでもなくガラが悪いので、咲来が即座に東京の凄い不良認定——これはあまり間違っていない——する中、東堂が口を開いた。

「お前らが乙骨の代わり足り得るのか、確かめに来たんだ」

「私は違うわよ」

「あ、私はその、最近戻ってきたので顔見せです……」

真依は呆れ、咲来は自分の目的を補足する。真依は悠二関連で煽り倒すつもりだったが、事前に咲来に止められていたので我慢した。すでに色々噛み合っていないくて恵と野薔薇はげんなりする中、東堂は構わず、上着を脱ぐ捨てながら、恵に問いかけた。

「どんな女がタイプだ!？」

(は、始まったー！！！！)

一年生二人がぼかんとする中、咲来は頭を抱える。これだからこの先輩は……。

なんて考えている暇はない。咲来は即座に準備していたスケッチブックを、東堂からは見えないよう、伏黒に示す。

『とりあえず、事情は聴かないで、「身長とお尻が大きい子」って答えて!!!』

常識人だと思っていた咲来から必死にとんでもない指示が飛び出してきたせいで評価をガクツつと下げた恵は、イマイチ事情は掴めないが、そちらを無視して、答えた。

「別に、好みとかありませんよ。その人に揺るがない人間性があれば」

そのあまりにも格好良い返事を聞いて、真依は何を思ったか、楽しそうに笑う。

だが、そんな姿は、恵と野薔薇の目に入らない。

それよりも、もつとド派手なアクションを起こした人物が、すぐ横にいたからだ。

「真依ちゃんと釘崎さん、早く先生か強い人呼んできてー！ー！ー！ー！！  
てー！ー！ー！ー！！」  
伏黒君は逃げ

スケッチブックを叩きつけながら、あらん限りに叫ぶ咲来の姿。

この後に起こった出来事を思い出して、恵と野薔薇は、こう振り返る。  
成宮咲来は、めつちや常識人だった、と。





結局デカイ騒ぎを東堂が起こし、咲来が慌てふためいて誰か先生を呼びに行っている間に真依と野薔薇まで私闘をはじめ、早々に面倒ごとの気配を察して姿を消した——そのくせ最強の呪術師とのツーショットはちゃっかり撮っていた——親友・霞もなしに、東京校の面々にペコペコ頭を下げることになった。

パンダ——誰もパンダについて説明してくれなくて戸惑った——と、狗巻——おにぎりの具しか喋らない理由を誰も説明してくれなかった——には驚かれ、真希——真依のお姉ちゃんと同じく綺麗な人——からは「真依にいじめられてないか」と心配される一幕もあったりしたが。

「え、高田ちゃんの手握手会ですか!？」

東堂に誘われた咲来は、東京観光をしようとしていたことなど忘れ、顔を輝かせた。

「咲来、高田ちゃん? というののファンだったの? もしかしてオタク?」

真依が、常識人だと思っていた親友がまさかの東堂と同じ趣味を持っていたことに絶望しながら、問いかける。

「うーん、ファンといえばファンかな」

そんな咲来の返答は、曖昧だ。

「強いて言えば、命の恩人？」

「東堂のバカが感染ったのかしら……」

そしてそれに続く回答に、絶望を深める。

だが、咲来としては、これは偽らざる本音だ。

——あの夜。

高田ちゃんのプロ意識と常識にとらわれない発想が、咲来と七海の命を救ったのだ。

そんな人と会えるならば、ぜひ会いたい。

というわけで、東堂と咲来、そして多数決に敗北してしぶしぶ着いてくる羽目になっ

た真依の三人は、握手会会場に向かう。

先に向かった東堂と真依が神フアンサで骨抜きにされるのを見た後、わずかに緊張し

ながら、咲来はスペースへと進む。

「わっ、また女の子だあ。初めましてだよね？」

「は、はい！ はじめまひて！」

緊張で思いつきり噛みながら、咲来は勢いよく頭を下げる。昼間の恵・野薔薇への自

己紹介の時の非ではない緊張だ。

「ふふ、リラックスして、おてて出して？」

「はいー」

促され、両手を差し出す。

そんな咲来の両手を、高田ちゃんの、アイドルと言うには大きめの柔らかい手が、優しく包んだ。

「……さっきの女の子とお友達なんだよね？」

「……はい、すつごく大事な、友達です」

当初は嫌われ、命を預け合って戦ってからは仲良くなり、ずっと気にかけてくれた、大事な親友。

先ほどまでの緊張が嘘のように、芯が強い様子になった咲来に少し驚きながら、高田ちゃんは、耳元で優しく、言葉を紡ぐ。

「……さっきの子とはまた違う、頑張り屋さんの手」

撫でられたのは、最近できたペンダコ。痛む箇所のはずなのに、撫でられて、むしろ痛みが和らぐように感じる。

——今日の昼に起きた事件程ではないが、高専に戻ってきてから、大変だった。

補助監督は数多の業務を抱える。その卵とはいえ、覚えることややることは多かった。毎日何時間もペンを握って、ペンダコが出来てしまったのだ。

胸が高鳴る。そこまで、分かってくれるのか。



この日から高田ちゃんは、咲来にとって、命の恩人であつ「推し」になつた。

## じゅじゅさんぽ・もしまた日が昇ったら2

それから時が過ぎ、九月の中頃。

ついに姉妹校交流会の日がやってきた。

京都校のメンバーが石段を上がっていくと、そこには、東京校のメンバーが勢ぞろいしている。

「菓子折り出せゴリアー！ 八つ橋、葛切り、そばぼうろ!!」

そして開口一番、なにやら以前にも増して不機嫌な野薔薇が、お土産を要求してくる。当然、交流会とは言いつつもバチバチの真剣勝負をしてきた相手だ。そんなのに渡すお土産など、持ってくるはずがない。ましてや互いに呪術師であり、そのような気づかひや常識は持ち合わせていなかった。ちなみに持ち合わせているはずの霞は、家に仕送りをしているため、金を持ち合わせていない。

そういうわけで野薔薇は、旅行の目論見も、お土産も手に入れることができない——はずだった。

「えっと、こちらで満足してもらえるか分からないですが……」

ずらりと並んだ京都校メンバーの後ろから、身長が低めの気弱そうな眼鏡の女の子・

咲来が出てきて、大きな紙袋を渡す。その袋のデザインは、まさしく「京都」とでもいうべき、上品な十二単風の柄だ。

「おい、まじかよ、お土産まで用意するのか」

「ありえねえ、乙骨ですらあそこまで気が利かねえぞ」

「しゃげ……」

東京校二年生の三人がそれを見て、理不尽なことにドン引きする。

「もはや、毒でも盛っているのか。はたまた嫌がらせみたいなのクソお土産でも持つてきたのだろうか。」

いや、呪術師ならばあれに呪いを籠めているのが一番ふさわしいかもしれない。贈答品を相手が受けとることを「儀式」として、「受け取った」を呪いを受け入れる「了承」とみなす、非常に陰湿な呪いの手法だ。

「おほほー！ 何よあんな気が利くわね！」

「みつともない……」

喜び勇んで乱暴に開封する野薔薇と、それが猿に見えて仕方なく、死ぬほど恥ずかしくて赤面する恵。なるほど、彼が苦勞人ポジションだな、と霞は理解した。

「ぶぶ漬けとかだったたりして」

「ハハハ」

その短い間に、パンダと狗巻は、一番もってもらいたい予想を口にする。

毒を盛っていたり、呪いを籠めていたり、クソお土産だったりの線もあるが、考えてみれば、相手は京都人。ここで「ぶぶ漬け」の意味を込めて、高級お茶漬けセットでも出す可能性が、非常に高い。そして呪術師らしくもある。

「うおおおおおおお!!!」

野薔薇がお土産を掲げる。

それは、お土産の定番・和菓子有名店の生八つ橋詰め合わせだった。

東京校一同が唾然とする中、野薔薇はさらに開封していく。

葛切りこそなかったが、定番のそばぼうろは当然として、近年人気沸騰の和風バームクーヘンや、乾燥抹茶セット、真空パックの京野菜まである。さらにお土産内容は京都に留まらず、そのお隣の大阪名物粉ものセットや、渋いことに奈良の千枚漬けまであった。

京都の人気お土産に、さらに近畿圏の他府県のお土産まで持つてくる。とんでもない気の利きようだった。

「あんたサイッコーよ！ やっぱ京都の人って『粋』なのよね!!!」

「すみません、ありがとうございます」

「お前いいやつだな。どうだ、東京校に編入しないか？」



「以前から思っていたけど、お前は聖人だ。何か東京でほしいものはあるか？　なんでもやるぞ」

「いくら、明太子、すじこ!!!」

現金なもので、剣呑な雰囲気でおよそ歓迎しているとは言い難かったのに、一気に空気が和らいだ。とはいえそれは、咲来にだけしか向けられていないし、他京都校メンバーのことはガン無視である。

他のメンバーにこんな常識があるわけない。咲来の独断で、このお土産が選ばれたのだ。

それを、東京校のメンバーが、察したのである。

パンダから「なんでも」と言われたので、顔を輝かせながら抱き着かせてもらって頬ずりしている咲来に、京都校のメンバーは、呆れ（真依、桃、歌姫）、冷めた（東堂、メカ丸）、無関心（加茂）、羨ましそう（霞）、とそれぞれ個性的な視線を向けている。

「全く、そんなお土産なんかいらないうって言ったのに……ご機嫌取りなんかしてどうするのよ」

呆れ目線代表の真依が、ため息をつきながら呟く。

パンダのモフモフに抱き着いて上機嫌だった咲来が一転、口をとがらせて反論した。

「真依ちゃんと東堂先輩が迷惑をかけたからいけないでしょー!」

そう、咲来だって、いくら使うタイミングが微妙にない給料が入ってくるとはいえ、わざわざ自腹を切ってこんなにそろえるつもりはなかった。お土産と言うのは高価なものなのだ。用意するとしても、本来なら、せいぜい八つ橋セツトぐらいだろう。

だが以前訪ねた際、真依と東堂がとんでもない迷惑をかけたのだ。このお土産は、そのお詫びの意味合いが強いのである。

「お、お詫びまでする心がある、だと……」

「呪いじゃなくて天使か？」

「アナゴ……」

呪術師としてあまりにも異質。驚きのあまり、若干三馬鹿めいた反応を、二年生の三人はしてしまった。

「んで、あの馬鹿は？」

「悟は遅刻だぞ」

「誰も馬鹿って先生の事言っていないですけど」

なんて会話もあったところで、噂をすれば影と言うべきか、馬鹿が現れた。

「おつまた〜！」

変な目隠しをした長身が、金属製の箱を台車に乗せて、ガラガラうるさい音をたてながら走ってくる。

それを見て、最強術師にお目見えしたミーハーな霞は喜び、咲来は歌姫の影に隠れた。そして渡される、海外出張のお土産だという、とある部族のお守り。毛糸でできた、なんだか力の抜ける人形だ。およそ、咲来が渡したものは釣り合わないいらなさである。

そして東京校のメンバーから冷めた目線を向けられる中、そちらへのお土産だという大きな箱が、ついに開いた。

「はい、おっぱっぴー！」

『……………』

この瞬間、残暑厳しい東京校の温暖化は、確かに解決したと言っても良いのかもしれない。

それぐらい、空気が冷え込んだ。

京都校はお土産に夢中、東京校は冷めている。

死んだはずの宿儺の器・虎杖悠二は、針の筵に晒されていた。

(あの子が、虎杖悠二君かあ)

そんな彼を咲来は、気づかれないように、横目で観察していた。



「で、君はミーティングにはいかないの？」

時間が経ち。

各校の参加者と学長が、それぞれ分かれてミーティングをする中。

悟と歌姫が話し合っているところに、付き添いとして咲来が同行していた。

「えっと、はい……」

歌姫の影に隠れながら、咲来はややおびえた様子で肯定する。

「その、私は二か月前まで中退していて、それにすごく弱いし、コースとしても戦闘はしない補助監督コースなので……人数差の都合で、補欠なんです」

「ふーん、なるほどねえ」

その事情は、悟も大体わかっている。一度中退したのに戻ってきたというのは過去にないことだから、彼にしては珍しく覚えていたのだ。

ちなみに、悠二が合流したので補欠は咲来だけになったが、本来は人数差二人の予定だったため、団体戦は霞が、個人戦は真依が、交代で出るようになっていた。

「で、なんでそんな僕に怯えてんの？」

真に彼が気になるのはそこだ。

咲来は、彼が現れてからずっと、歌姫の影に隠れている。はつきりと、怯えていた。

(似たような性格っぽいあの変わった髪色の子はツーショットまで求めて来たのになあ)

正直、身に覚えがない。今日が初対面のはずだ。

「そ、その……………歌姫先生や学長や、ナナ……………ンツ、学長から、とんでもない人だと聞いていたので……………」

「お前の馬鹿が感染しそうだから守ってやってるんだ。ほらそれ以上口を開くな」

咲来が説明を終えると同時、歌姫がシッシと悟を追っ払う。咲来をここに連れてきたのは、あくまでも補助監督になるための経験として、教員同士のやり取りを見てもらうためだ。悟がいても連れてきたのは、苦渋の決断である。

「なーんだよ、ひどくなーい?」

「自分の行動を全部振り返ってからものを言え!!!」

「あ、あはは……………」

この人は、東堂先輩と同じタイプの様だ。

口喧嘩——歌姫が一方的に怒鳴っているだけだが——を始めた二人を見て、咲来は困ったように苦笑する。

なんだか、仲が良さそうだ。

「——それでさ、成宮」



「ひゃ、ひゃい!？」

そこで突然、真剣みを増した低い声で、水を向けられる。

「ちよつと今から二人きりで話せるかい？」

「え、えつと」

「こら五条、いったい何するつもりだ」

戸惑う咲来の前に歌姫が立ちはだかつて遮る。普段は頼りになる歌姫先生の背中のはずだが、しかしこの男を前にしては、どうにも、心細く感じた。

「特級呪物防衛戦の話、って言えばわかるかな？」

「それは——!」

歌姫が声を出し、咲来は声が出ない。

わざわざ咲来に特級呪物なんて言う雲の上の話を持ち掛けるということとは。

間違いない。

《獅子蟲》の件についてだ。

「……大丈夫か、成宮」

「はい、大丈夫です」

さすがに断るわけにはいかない。歌姫が気づかわし気に確認してくる。それに咲来は、先ほどまでの怯えが嘘みたい、はつきりと返事をした。

「わかった。私は離れるけど傍に入るから、なんか変なことされそうになったら、迷わず大声出すんだぞ」

「歌姫は僕の事なんだと思ってるの？」

「特級バカ」

やっぱり、仲が良さそうだ。

割と本気で嫌っている感もあるが、こうも素をさらけ出している歌姫は珍しい。きつと、話に聞くほど悪い人ではないのだろう。

咲来は少し安心して、悟と二人きりで向き合うことにした。

「まず確認したいんだけどさ、君、本当に成宮咲来？」

「え、あ、はい」

あまりにも唐突すぎる質問だった。哲学の話でもない限り、ここは「はい」と答えざるを得ない。

その返事を受けて、悟は首をかしげながら、角度を変えて咲来の顔を見つめる。目隠し越しだというのに、服どころか、皮や筋肉の奥、骨や内臓、果ては魂までもが見透かされているかのように感じた。

「俄かに信じられないなあ。去年は、もつとはるかに弱かったのに。まあ今も弱いけど」

「それはまあ、否定できませんが……」

悪い人ではないが、そんな言葉が使われてる時点でそこそこ悪い人である。

真依がそんなようなことを言っていたのを思い出すほどの、直球の罵倒だ。

「実はさ、去年の五月くらいだったかな？ 君が入学したばかりのころ、一回見てるんだよね」

「え、そうなんですか？」

以前から自分のことを知っていたのは確かだろうが、てつきり書類上の話かと思っていた。

「まー、君は俗にいう、『いい子』ってやつなんだろうね。人から好かれると思うよ。でもさ、呪術師って、『イカれて』いないと長続きしないし、早死にするんだよね。その点で言うると君は、実力も性格も、まるで足りなかった」

「……前半は別として、後半はあっていますね」

自分が「いい子」かはさておき。性格も実力も、呪術師にまるで向いていないのは、自覚している。だからこそ、あのトンネルで死にかけて心が折れて、そしてあの夜の学校でも何度も死にかけたのだ。

「でもさー、今見ると、ドーも違うんだよねえ。呪力もまあ、最低限はあるし、なんだか頭のネジも一本二本飛んだみたいに見えるよ」

あまりにも口が悪い。

咲来は不快感よりも居心地の悪さを感じながらも、この文脈では、もしかしてさほど馬鹿にされていないのでは、と思いい直す。

実力も性格も向いていなかったのに、実力も最低限ついていてさらに呪術師らしい性格に近づいている。

そう言いたいのだろう。

「どつちがきつかけだろうなあ。トンネル？ 《獅子蟲》？ それともどつちも？」

あまりにも無遠慮。この二つの出来事は、咲来の心に未だに深い傷を残している。ズカズカと人のデリケートなところに気にせず土足で踏み込んでくる様は、傍若無人の言葉がよく似合っていた。

「……わかりません」

少し悩んで絞り出した答えは、曖昧なもの。

実際、その二つの出来事は咲来にとって大きなものになっているが、一方で、具体的にどうなったかというのは、自分ではわからなかった。

「ふーん、あつそう。ま、いいや」

彼の中では何か解決したらしい。悟はそこで話題を変える。

「それでさー、悠二についてどう思った？」

「……はい？」

その話題転換は、あまりにも唐突だった。

訳が分からない。

だが、「この自分に聞いてきた」ということは、何かすでに察しているのは確かだ。

「その、宿儺の器？　っていうのだとは聞いています。特級呪物を飲み込んでも大丈夫

とかなんとか。……殉職したとは聞いていたんですが、生きていたんですね」

「ふーん、で、どう思うって聞いてんだけど」

「えーっと……」

どこまで見透かされているのか。

咲来は冷や汗を垂らしながら、ひとまず、素直な第一印象を答えた。

「えっと、釘崎さんとかもそうですけど、東京の子は髪色が派手だなあ、って」

直後、気まずい沈黙が流れる。

悟はポカンとして、咲来はどうなるのかと緊張している。

そんな時間が、数秒。

「あっはっはっは、何それ！ あはははははは!!!」

そんな沈黙を破ったのは、悟の大笑이었다。

「確かにそうだね！ あははははは!!!」

その様子を見て、咲来は戸惑う。誤魔化せた、のだろうか。それにしたって、ここま

で笑われる理由が分からない。何のツボにはまったのだろうか。

「ちなみに、悠二も野薔薇も東北出身の、いわば田舎者だよ。なんなら悠二は、ああ見えて地毛」

「ええええええええええ!!」

咲来は驚きのあまり、素つ頓狂な大声を出した。それに反応した歌姫が部屋に飛び込んで拳を構えたが、二人の様子を見て、すごすごと戻っていく。

あれで東北出身？ あれで地毛？

山陰・山陽地方では指折りの都会（自称）である広島出身の咲来としては、そのあか抜け具合にびっくりした。そして悠二の二色ヘアが地毛であることもびっくりである。

「ま、僕からすれば、えっと、京都のいい子そうな子、えーっと」

「霞ちゃんですか？」

「そう！ その子の方が地毛変わってるけどね」

「た、確かに……」

一瞬で仲良くなったし、それからすぐに慣れたので、あまり違和感を感じなかった。言われてみれば相当珍しい。人間の髪の毛どころか、動物の毛すら、自然にあんな鮮やかな水色や青色になることはそうそうないだろう。考えるほど、まるでアニメの住人



だった。

「ま、それは置いておくとして。もう別に隠さなくていいよ。七海から全部聞いているんでしょ？」

「……知ってたんですか……」

「まあ、君に話したよって七海から聞いていたしね」

「どうやら、からかわれていたらしい。」

咲来は疲労感を覚えてがっくりと肩を落としながらも、安心する。

——あの出来事以来、七海とは、頻繁に連絡を取り合っていた。

もっぱらメッセージは咲来から送るし、七海からの返事も簡素なもの。それでも、むしろそこが七海らしいし、そう悪くは思われていないことを知っているので、遠慮せず

やり取りをしていた。

その中で、つい先日。

珍しく向こうから電話で話そうと言われて、ドキドキしながら応じたら聞かされたのが、悠二の話だった。

悠二が高専に入学した経緯と、表向きは殉職したこと。そして色々あつて生き返つて裏でこっそり活動していたこと。それに七海が協力したことと、《獅子蟲》以上の特級呪霊がかかわった事件の顛末。悠二の人となり。それと、良かったら仲良くしてあげてほしいというお願い。

おそらく歌姫や学長クラスですら知り得ない超重要機密のオンパレードに押しつぶされそうになったが、何はともあれ、七海からの珍しいお願いだ。内容も結局のところは「仲良くしてください」だけなので、聞いたことを秘密にすれば良いだけで、前向きにとらえていた。

「どうやら七海つたら、あの時のことで相当君の事気に入ったみたいでさ。結構、君のこと話してくるんだよね」

「そうですか？ えへへへ……」

咲来は照れながら笑う。

思ったよりも憎からず思われているようだ。

考えてみれば、七海から聞く悟の話も、とんでもない人だというのが大半だったが、その端々には親しさも感じられた。悟から極秘に頼まれるということは、仲が良いのだから。

それなら、警戒する必要はない。

「それで、さっきの質問についてですけれど」

先ほどまでと違って穏やかに。

咲来は柔らかく笑いながら、悠二をどう思っているか、正直に答えた。

「明るくて、いい人そうだな、つて思いますよ」

そんな当たり障りのない評価が、悟にとっては、とても嬉しかった。

こんな穏やかな会話が為されているのと同時刻。悠二の人となりを知らない京都校のミーティングで、暗殺計画が練られていたのは、皮肉な話である。



「みんな、頑張れー」

ついに姉妹校交流戦が開幕し、一回戦である団体戦、「チキチキ呪霊討伐猛レース」が始まった。

不参加者である咲来は、歌姫たち大人組と一緒に、バックヤードで呑気に観戦である。不相応なふかふかの椅子は心地よいが、なんだか心地悪くもあつた。

皆が頑張っている中で一人観戦と言うのは、中々に気が引ける。3級呪霊を沢山狩るのが有利と言うゲーム性から見ても、咲来にそこそこ適性があるゲームだ。とはいえ、対人要素もあるこれは、咲来の術式は向かない。開始直前に霞から、相手メンバーの大きな能力を聴いたうえで相談され、二言三言役に立つか立たないか分からないアドバイスをした程度しか貢献できていないので、せめて応援はしっかりすることにした。

急に訓示を求められたせいでグダグダなことしか言えず落ち込んでいる歌姫を慰めながら、協力者らしい冥冥の術式によるリアルタイムカメラで、戦況を確認する。

両校、開始直後はまとまって行動している。ただ一人を除いて。

『よおおおし！ 全員いるな！ まとめてかかってこい!!!』

「東堂先輩、相変わらずエキサイトしてる……」

へにや、と苦笑いが漏れる。実に東堂らしい単独行動だ。

それに対する東京校の対応はスムーズ。悠二が単独で東堂に一撃を入れた間に、バランスよく二組に分かれた。

「え、虎杖君が東堂先輩を一人で!?!」

思わず声が出る。

七海から聞く限りでは、少なくとも自分よりは強いのは知っているが、それでも一年生が東堂とタイマンで渡り合えるわけがない。下手をすれば大怪我だ。

「心配しなくてもいいよー。呪力なしの殴り合いなら、葵より強いから」

「ええ……」

悟の言うことは、およそ信じられない。

咲来からすれば、東堂の身体能力は、呪力抜きでも化け物だ。呪力有の二年生女子三

人がかりで挑んでも、呪力なしでボコボコにされる。そんな彼を上回る身体能力を持つ人間が、この世にいるとは思えなかった。

「歌姫先生、私もやつぱり、体力とか鍛えた方がいいんですかね」

「あー、結局フィジカルが全ての基礎だからな」

咲来が見るに、呪術師として強い人は、そもそも身体能力が高い。あの華奢で可愛らしいお人形さんみたいな桃も、2級術師であるだけあって、体格差で大きく勝るはずの真依や霞より運動能力がある。真依はまだしも、霞なんかは近接ファイターなのに、空中からの陽動・偵察・遠距離攻撃が役割の桃が勝つのは、身体能力がいかに重要かを物語る。

その点で言うと、咲来は実に弱い。京都校メンバーの中での身体能力勝負は常に圧倒的ぶりだし、先の様子を見るに、東京校のメンバー全員にも完敗するだろう。一般人の中だったら無意識の呪力強化で無双していたが、この世界では、咲来はあまりにも貧弱なのである。

さて、そうこうしているうちに、試合は展開していく。

カメラ<sup>カラス</sup>追いかけるのは、散って言った東京校メンバーの動向だ。画面には、咲来が最も気になる、京都校メンバーや悠二が全然映らない。

「あ、あの、すみません！ 京都校のみんなって映せますか？」



遠慮がちに、カメラ係である冥冥に問いかける。

「すまないね、お嬢ちゃん。動物は気まぐれだからさ」

「あ、はい……無理を言つてごめんさい」

「気にしてないよ」

「いくら積んだの？ おじーちゃん？」

「なんのことか？」

初対面の子供からのお願いでも、冥冥は余裕の笑みを浮かべるだけ。そんな会話の裏で、楽巖寺と悟が何か剣呑な雰囲気を出しているが、いまいちよく分からなかった。

あんな見た目だが楽巖寺は真面目だ、軽薄な悟とはソリが合わないのかもしれない。

そんな勘違いをしつつ、画面に目を戻す。なんやかんや冥冥が気を利かせてくれたみたいで、京都校のメンバーが映り始めた。

位置関係からして、ひとまず一人減らそうと未知の戦力である悠二に全員でかかったらしい。今それぞれ散っているのは、おそらく東堂がタイマンを望んで、仲間割れでも始めたのだろう。信じられないことに、東堂と悠二は、互角に戦っていた。それとんだか、東堂が嬉しそうだ。対等な相手と珍しく戦えて、ハイになっているのかもしれない。東堂の存在しない記憶については、知る由もなかった。

「あ、霞ちゃんが戦ってる！ 相手は……真依ちゃんのお姉ちゃんかあ」

咲来は身を乗り出す。二人はすぐには戦わず、何やらお互いに向き合いながら会話をしていた。霞の表情が暗いのがとても気になるが、すぐに気を持ち直した様子だ。

真依の話を聞くに、真希は4級術師。呪力が無く、呪具に頼って呪霊を祓っているらしい。雑魚、ととんでもない言い様だった。

「真依ちゃんのお姉ちゃん……真希さんって、どんな方なんですか？」

とはいえ、真依の様子からして、姉のことを憎んでいる。ただ憎しみだけとは思えないが、それはともかく憎んでいるのは確かで、そんな相手への真依の評価は、当てにならない。少なくとも人に話す分には、相当強がつて悪口を言うだろう。長い付き合いなので、そこはよくわかっていた。

だから、確認する。聞いた相手は、悟と夜蛾学長だ。

「結構強いよ。呪力はないけど、それが天与呪縛になって、すごい身体能力なんだ。等級は禪院家に妨害されて4級だけど、最低でも2級レベルはあるね」

「え、それじゃあ……」

悟の回答に、咲来は顔を青くする。

霞はシン・陰流こそ習得しているが、術式は持っていない。対人間同士の肉弾戦となればシン・陰流はあまり効果がなく、純粋な体力勝負となる。

そんな彼女に、呪力なしで2級呪霊を簡単に祓えるという真希がマッチングした。未

だ3級術師の霞では、およそ勝ち目がない。

(霞ちゃん、頑張れ！)

咲来は両手を組んで、ギョツと目をつむりながら応援する。

——霞の家は、酷く貧乏だ。

中学生の段階で闇アルバイトをして家計を助け、中学を卒業したら風俗で春を売るほかない。そんなところに、呪力があつたことを理由に師範にスカウトされて、学生身分でありながら中々の給料が出る呪術師になった。

そんな彼女は、出世欲や名誉欲や権力欲こそないが、等級が上がることを望んでいる。等級によって、給料が大きく違うからだ。

この交流戦は、権力者や教員などの目に留まる良い機会となる。ここで活躍して等級を上げたいから、霞は珍しくとても張り切っていたのだ。

咲来としては、そんな健気な親友には、ぜひ活躍してもらって、等級が上がって欲しい。

だが、そんな霞の前に立ちはだかったのが、天与呪縛によるフィジカルギフトの真希である。

「あ、あー、頑張って、頑張って！」

周囲の大人の目など気にせず、咲来は身を乗り出して応援する。これまた冥冥が気を

利かせてくれたみたいで、カラスも迫真のカメラワークで演出してくれていた。

その戦いは予想通り、一方的だった。元々白兵戦主体とはいえ防御型と言うこともあり、防戦一方。虎の子のシン・陰流を使っても一瞬で姿勢を崩され、投げ技を決められ、あげくに刀を奪われた。

「あー……」

完敗。はつきりいって、良いところなど全くなかった。真希の咬ませにしか見ええない。しかも武器となる刀を奪われるという最悪の失態だ。意識こそあるが、これでは戦うこともできないだろう。実質リタイアだ。

画面の中で真っ白に燃え尽きて棒立ちになっている。

その隣の画面でも、動きがあった。

メカ丸とパンダ、人外同士の戦いが佳境を迎えていたのだ。

非常にもつたいないことに立派な寺社仏閣を破壊しながら、両者は暴れまわっていた。そこに、一瞬の隙を突いたメカ丸が、パンダの脇腹に、細く収束させた衝撃波を放つ。それによってパンダは、ビクンツ、と一瞬体を跳ねさせ——そのまま力が抜けて、だらりと垂れ下がった。

とりあえず、メカ丸は勝ったようだ。

「……それで、あのパンダさんっていったい何なんですか？」

「呪骸じゃよ。夜蛾が生み出した、自由意志と知能を持つ突然変異呪骸じゃ」

答えてくれたのは、その親である夜蛾ではなく、楽巖寺学長だ。

「え、すごいですね！ それって、何人も作ったら、とつても強くないですか!？」

今の映像を見るに、あのパンダはメカ丸とほぼ同格だ。等級は2級らしい。つまり、2級ないしは準1級の術師を、人工的に生産できるということである。呪術師の人手不足が一挙に解決しそうだ。

そんな咲来の明るい反応とは裏腹に、大人組はなんか反応が薄いし、なんなら少し剣呑な雰囲気すらなっている。

何か悪いこと言っただろうか。咲来は冷や汗を流しながら、周囲の反応を伺った。

「……残念だが、さっき言った通り、パンダは突然変異なんだ。もう一度作れと言われても、どうやればいいのか皆目見当がつかん」

「あ、そうなんですか、はい、すみません……」

深い深いため息を吐くように、夜蛾学長が説明してくれる。ただこれだけのことがなんでこんな雰囲気を作るのか分からないが、咲来は頭を下げて、画面に向き直った。

「……え？」

そこには、倒れたはずのパンダがピンピンしていて、メカ丸が倒れ伏している映像が流れていた。

咲来は訳が分からず、目が点になる。一体、少し目を離れた間に、何があったのだろうか。

「呪骸つてき、活動のための核があるんだ。メカ丸はそこを狙ったんだろうね。だけど、それがデコイで、パンダは無事だったんだろうね」

「……………東京の人つてすごいですね…………」

「パンダは人じゃないけどね」

咲来は頭を抱える。これで京都サイドは二人戦闘不能だ。頼りの東堂は悠二との戦いに夢中で、全く競技をするつもりがない。

それ以外の様子も、順調とは言い難かった。

不良っぽいガラの悪い一年生・野薔薇が、なんと三年生で2級術師である桃を相手にギリギリのところまで追い詰めた。結局は潜伏していた真依による異次元の狙撃によつて勝ちましたが、桃の消耗は大きい。そしてその真依も、因縁があるらしい姉との一対一が始まった。親友のことを信じてあげたいが、先ほどの霞の戦いを見るに、虎の子の《構築術式》を上手く決めないと勝ち目がないだろう。

そして頼りの加茂は、屋内で恵相手に楽しそうに、かつ有利に立ち回っている。なんか恵の方はげんなりしているが、加茂の天然でも発動しているのだろうか。そしてそんなことを考えているうちに、《構築術式》の手札を切つてもなお、真依が敗北した。銃

弾を至近距離で掴むとは何事だろうか。

そして気になるのが、狗巻の動向だ。

先ほどパンダがメカ丸の懐を漁って奪ったスマートホンが、彼の手に握られている。

そして彼が操作すると同時に、自分のスマートホンを手に取ったのが――霞だ。

『はい、役立たず三輪です』

『眠れ』

勝負あつたな。悟がニツと笑い、歌姫が残念そうに溜息をつく。

『あー、えつと……いたずら電話、ですよね?』

だが、画面の中の霞が寝ることはなかった。

狗巻は少し驚いて目を見開くが、即座にスマートホンの電源を切り、恵の式神である犬を伴って、あらかじめ場所を見定めておいた霞の元へ、細い体のわりに俊足で急行する。その気配を感じ取ったのか、霞はワタワタとしながらも、中々の逃げ足で逃走していった。

「霞ちゃん、あんまり意味なかったね……」

大人組が驚く中、咲来だけは、残念そうに溜息をついて呟いた。

「おい成宮、あれはなんなんだ？」

何か訳知りらしい彼女に、隣の歌姫が問いかける。

狗巻の《呪言》は強力で、一番似た音声データに変換されているだけに過ぎないはずの電話越しですら効果を発揮する。パンダがメカ丸のスマートホンを貰ったのは、これを京都校メンバーに行うためだ。誰がリタイアしたかは競技の性質上分かりにくくなっており、仲間からの通話で油断しやすいのを狙っているのである。



「えっと、始まる前に霞ちゃんからアドバイスを求められて……狗巻君が電話越しでも呪えるんだったら、電話出る時も耳を呪力で覆った方がいいかもって言ったんです」

京都校のメンバーは、一番等級が高い上にその活躍と強みが高名な狗巻を最も警戒していた。東京校メンバーの資料でも一番詳しくまとまっていたので、咲来はその可能性を、ポツとその場で思いついたのだ。

「まあでも……霞ちゃん、刀取られちゃったし、あまり意味ないですよね……」

咲来は嘆息する。

確かにそうだ。歌姫は、未来の補助監督として頼もしい閃きを發揮した咲来に感心しつつも、そこは残念に思った。

がんばれ三輪。個人戦で挽回しろ。

そんなことを脳内で口走ったその時。

——どの呪霊が祓われたかを示す札が、一斉に赤く燃えた

## じゅじゅさんぽ・もしまた日が昇ったら3

未登録の呪力によって祓われても、札は赤く燃える。

生徒の動向をおおむね追っているクラスカメラは、何も捉えていない。ついでにいうと、札が燃えたのと同時に、その半分からの反応が消えた。

つまり、外部からの侵入者の可能性が高かった。

東京校と言う場の責任者である夜蛾は天元の所へ、現場で戦力となる悟と歌姫と楽蔵寺は生徒の方へ、上空からの状況把握が可能である冥冥はこの場に残って様々な報告をする。そう決まった。

「あ、あの、私は!?!」

「成宮はここで待っていてくれ。冥冥から離れるなよ」

咲来も慌てて何かしようとするが、歌姫になだめられる。

「——っ、分かりました……」

居ても立っても居られない咲来は何か言い返そうとするが、意図するところは察していたので、悔しそうにしながらも、素直に引っ込んで椅子に座りなおす。

(私って、結局何もできないままなんだな……)

悟たちが出払った後、咲来は椅子の上でしゃがみ、嘆息した。人助けが生きがいがだが、弱いがゆえに、何もできない。

みんなが心配だ。この広範囲にいる呪霊一気に影響を及ぼしたとなると、侵入者はかなりの手練れだろう。今流れている映像では、建物を越えるほどの巨大な木の根が暴れまわっていた。さらには妙な気配の《帳》が、じわじわと空から広がってきている。

あれだけ大暴れしながらあのレベルの《帳》を張るのは不可能だ。つまり、咲来では到底及ばないレベルの侵入者が、最低でも二人いるということである。

今もまだ、居ても立っても居られない。

残弾を半分ほど使い、《構築術式》も吐き出して、そのあげく敗北した真依。意識はあるが、体力も呪力も残弾も心許ないだろう。

肝心の刀を奪われた霞。今の彼女は、逃げ回るのが精いっぱいのはずだ。

パンダに負けてボロボロのメカ丸。あれが本体と言うわけではないが、かなり高価なもののはずだし、その残骸を放置するというのは気が気でない。

桃もまた、意識はあるしまだ余力はあるが、だいぶ消耗もしている。

大丈夫そうだと言えるのは加茂と東堂と東堂ぐらいだが、今の映像を見るに、あの木の根は規模が大きすぎて、加茂では太刀打ちできなさそうだ。狗巻や恵と一緒に主戦場にいるらしく、心配である。

「ふむ、《帳》が降りきっているのに、カラスたちとの接続が途切れないな」

冥冥が不思議そうにしている。とはいえ、驚いてはいない。睨来でもわかる程なのだから、1級術師らしい彼女は、あの《帳》が特殊なのは察していたのだろう。

「……外から呪術的に干渉できる《帳》、ですか？　なんでわざわざそんなこと……」

「《縛り》だろうね。一部効果を弱める代わりに、何か強化されてる部分もあるんだろう」

「《帳》つて、そんなことまでできるんですか？」

「相当の手練れじゃないと無理だけどね。将来補助監督になるなら《帳》張るのも仕事だろうし、捕まえたらやり方聞いておくといいだろう。なんなら、お嬢ちゃんも拷問に参加するかい？」

「……」

突如現れた残酷な言葉に、睨来は絶句する。

だが、別世界のようなことには感じない。だからこそ、背中に氷の棒を入れられたように、ゾツとした。

そう、呪術師の世界には、人権なんてもはや関係ない。そのようなことは行われるだろうし、さらにはそうした戦闘以外の事やそれに関わる仕事は——補助監督の分野だ。

警察の取り調べすら無理そうな睨来に、その想像は、刺激が強すぎた。

「おや、驚かせてしまったね。冗談さ。『いきなり』そこまで過激なことはしないさ」「いきなり」でなければするということである。睽来の恐怖は和らぐことなく、おびえたように震えるだけだ。

そんな中、悟から連絡が入る。どうやら、「悟以外の全人類が入れる」という効果のようだ。全人類合わせてようやく釣り合う悟の規格外さが目立つが、何はともあれ、《帳》の効果には納得した。

「……………なんでわざわざ、そんなことを？」

途端、湧き上がるのは、疑念。

心配だからチラチラ画面を見てしまうため思考に集中できないが、臆気ながらも、それはだんだんと形になっていく。

「ん？ 五条悟は最強の術師だ。それがいるって分かっているなら、それだけは絶対に防ぎたいはずだがね？」

冥冥が睽来の眩きに反応する。相変わらず不敵な笑みを浮かべたままだが、試しているような様子はない。単純に、疑問に思ったようだ。

「えーっと、その……………なんていうか、目的が分からないんです」

自分でも固まっていないが、なんとか形にしていく。こういった、情報から推測を組み立てて術師をサポートするのも、補助監督の仕事なのだ。

「まず、五条先生だけを入れさせない《帳》を使うってことは、先生がいるって分かっているんですよね？ それなら、そんな時に犯行をするってことが、そもそもおかしいんです。五条先生は、先日まで海外出張に行っていたんですよね？ こんなことするなら、そのタイミングでやるのが普通だと思うんですよ」

「なるほどね。そもそも呪術の世界にも呪術師にも、ましてやこんなことする連中になんて『普通』が通じるとは思えないけど、一理ある」

「それに、いくら集まるのが生徒とは言っても、呪術師です。学長と歌姫先生と言う戦力も東京校に増えている状況でもあります。……この交流会のタイミングで仕掛けること自体が、不自然なんではないですか？」

「とはいえ、睨来が現状思いつくのはここまで。」

「単なる理屈が通じない狂人——呪霊とは得てしてそういうものだ——の可能性も否定できない。結局のところ、「分からないということがあった」の段階で止まってしまおう。これがお勉強ならそこから学習していけばいいが、こと緊急事態の対応となると、それでは何も無いのと変わらない。」

「ふむ、となると、発想を変える必要があるね。例えば、生徒とはいえ戦力になる呪術師、と見るのではなく、呪術師とはいえ生徒、として見れば？」

「……それなら、競技フィールドで暴れるのは理に適っています。生徒を攫って人質に

するか、それこそ……」、拷問にかけて情報を抜き出すとか」

「相手が合理的だと仮定するとそれも不自然だね。一人でいるところを狙うのが一番のはずだ」

「なら……守るべき生徒が集まっている場所であえて暴れることで、先生たちの目をあそこに集中させてる、とか？」

「考えられるのはそれだろうね」

どの段階かは分からないが、冥冥はいつの間にか自分を飛び越して、その一番あり得そうな可能性にたどり着いていたらしい。1級術師でかつ知的なクールビューティーと言う第一印象は、間違いではなかった。

「……陽動なら筋が通りますね。五条先生が現場に乗り込めば全部すぐに解決してしまいます。だから、先生だけをはじく《帳》にしたんでしょう」

「だとしたら、陽動の目的は何だろうね？」

冥冥の質問に、咲来は答えられない。余裕の笑みを崩していないが、彼女もそこから先はお手上げの様子だ。

「さういえば、さつき夜蛾学長がおっしゃってた『天元様』ってなんですか？」

「さういえば、数か月前まで中退していたんだってね。知らないのも無理はない」

咲来は委縮する。自分の選択に間違いはないと思っっているが、中退の出入りと言うの



は、やはり居心地が悪かった。

「すべてが特級機密だから私の口からは言えないけど、そうだね……高専全体を覆う境界を単体で維持している、呪術師と神様の中間みたいなものさね。数多の設備の扉をラダムに移動させて、侵入者が目的地にたどり着けないようにしているのさ」

「……………呪術って何でもありませんね」

「二人一人の術式すら、解釈の拡大次第で拡張術式が出来上がるんだ。常識に縛られないのが大事だよ」

そう言っつて、冥冥は急に、フツ、と笑う。

「私としたことが喋りすぎたね。ここから先は授業料が必要だよ」

「えっと、いくらぐらいですか？」

「4級術師なら年収ぐらいかね？」

「……やめておきます」

関係ない話は金をとるといふのなら、話を元に戻すに限る。いまいち使い道がなくてとりあえず半分は両親に預けているが、お土産のせいで今は懐が寒いのだ。

「それで、夜蛾学長がその神様みたいなものところに向かったということは、とても重要なんですよね？ それを狙い、とか？」

「だとしたら無謀だね。高専が攻められたとなつたら、そこがなんなら生徒の命よりも

一番重要だから、真っ先に固められる。それに、天元様の結界はとにかく厄介で、そこにたどり着くのはまず無理だ」

ならば、賊の目的は達成できないだろう。咲来は一安心する。これ以上話しかけて冥の邪魔をするのはやめておこうと、咲来はまた残ったカラスが頑張つて映す映像へと視線を戻した。

オーバーオールの巨漢と楽巖寺学長が戦っていて、白い人型の呪霊は恵と真希を追い詰めている。だが、間に合うタイミングで、そこに東堂と悠二が向かっていた。

「……………特級呪霊、か」

ゾツ、と、心の奥底から、暗い記憶が湧き上がってくる。

通いなれはじめた学校の、いつも見ることはない夜の姿。

その校庭での、数多の呪霊との戦い。

そして、蘇つた特級呪霊《獅子蟲》。

かろうじて生き残つたが、あと半歩間違っていたら、ここに咲来はいなかっただろう。雲の上の存在だった1級術師の七海ですら、命からがら祓つたのだ。およそ、彼女に理解しうる戦いではなかった。

今、悠二と向き合い始めたあの呪霊。

先ほどの巨大な木の根の攻撃からわかる。

あれは特級だ。しかも、《獅子蟲》とは格が違う。

その確信が出来上がっていくうちに、顔面から血の気が引いていく。

親友や先輩、東京校の人たちは、無事だろうか。

「おやお嬢ちゃん、もうおしやべりはお終いかい？」

「ふえっ!!」

そんな中、いきなり後ろから声をかけられ、咲来は、ビクン、と跳ね上がり、素つ頓狂な悲鳴を上げた。

「そ、その、えと、お仕事の邪魔をしちゃいけないと思つて……」

「何、この程度は片手間でできるさ。そんなこと気にしないで、もう少し興味深いおしやべりをしようじゃないか」

冥冥の顔には優しい笑みが浮かんでいる。だが、その目は、気づかいだとか慈しみだとか、そういった光を宿していない。好奇心と欲で、ギラギラと光っている。それを見た瞬間、優しい笑みすら、獰猛な唾に見えた。味方のはずなのに、咲来は本能的に恐怖を抱いてしまう。

「そ、その、なんかありますっけ……?」

「賊の目的の話さ。特級呪霊と呪詛師が徒党を組んでいる。これは異常事態だよ?」

確かに。

心配とトラウマばかりが先行して、そのことに気が付かなかった。

呪霊は、人間の負の感情から生まれたがゆえに、人間が嫌いで、人間を見下している。組むことなどありえないだろう。やるとしたら、洗脳か利用だ。

一方、呪詛師の方も、呪術を私欲のための犯罪に使う極悪人ばかりだが、呪霊と組むとなると少数派だ。呪詛師の中でも飛び切りの悪か、はたまたよほどの餌をぶら下げられている。

そして、そんな連中だが、実力は折り紙付き。立ち回りからしても、浅慮さは感じられない。

「天元様が目的ならただの馬鹿でお終いだが、それなら想定する意味は薄い。それよりも、もっと危険な目的を想定するべきだろうね?」

冥冥に言われてハツとする。確かにそうなのだ。先ほどのところで止まれば、それこそ、何も考えてないのと同じなのである。

「……天元様のところにたどり着く手立てがあるなら、そちらが本命のはずです。あの特級呪霊と同格かそれ以上の敵が、今、こちら側に侵入すると見て間違いありません?」

「だろうね。私をここに残したのは、それを想定して、お嬢ちゃんを守るためでもあるだろう。ボーナスが楽しみだ」

あの一瞬でそこまで考えられるとは、さすが先生たちだ。カラスの目の向こうで奮闘する姿を見ながら、その姿に改めて敬意を感じる。

「……………それとも、天元様が目的かもしれない、というのも囿で、別の物を盗もうとしている、とか？」

聞いたことがある。高専には、呪物などの危険なもの、古文書や呪具など貴重なものが多く所蔵・保管されている。それを盗みに来た、というのは、ありえなくはない。

「ほう？ それなら確かに、天元様よりは楽だろうね。とはいえそれらも、天元様の結界で嚴重に守られてはいるが」

「倉庫番みたいなのもいるんですよ？ 洗脳やスパイでの誘導の可能性はありますか？」

「かもしれないね」

「あとは……………そう、発信機とか。一度外部に持ち出された呪具に発信機をつければ、天元様の、位置をころろ変える結界に対抗できます」

「可能性はいくらでも考えられるねえ」

結局、ここで手詰まりだ。

今この場だけでは、情報が足りない。

そうこうしているうちに戦いは進んでいき、今は特級呪霊を東堂と悠二が二人がかり

で相手している。歌姫と真依・野薔薇は合流できそうで、桃がメカ丸や加茂や狗巻を回収しゆつくりながらも離脱できそうだ。特級呪霊に殴られ大けがを負った恵と、それをかばって木の根のようなものを植え付けられた真希も、パンダに回収された。

「———そうだ、霞ちゃんは!？」

咲来は立ち上がり、画面にかぶりつく。

どこを見ても、霞はいない。

特級呪霊と最初に交戦したのは狗巻だ。そして彼が逃げた先に恵と加茂がいて、そこに真希が合流。最後に東堂と悠二が現れた。それ以外のメンバーも、動向が伺えてい

る。  
だが——最初に交戦した狗巻に追いかけられていた、つまり、近くにいた霞が、行方不明なのだ。

「……………カラスを一匹、その子を探すためだけに回そう」

冥冥もすぐに察して対応する。金で雇われている身として、契約内容にある生徒の安全第一は鉄則だ。手元の端末を何やら操作していることから、先ほどから報告は口頭での会話ではなくあの端末を使っているようだ。咲来と相談できたのは、これが理由だろう。

「霞ちゃん……………」

祈るように、画面を、じっ、と見ながら、手を組む。

呪力も術式も持っているのに、力がない。

今この瞬間の咲来は、無力な一般人も同然だ。

大事な親友一人すら、その安否すら確かめられない。全部、他人に任せるしかない。

(……七海さん……)

ふと、一人の男の顔が浮かんだ。

数か月前に出会い、一緒に戦い、学校と咲来を救ってくれた、大人の1級術師。

不安からか、この場にいないはずなのに、頼りにしている人の顔が、つい浮かんでしまふ。

(七海さんなら、こんな時、どうしますか?)

決まっている。自ら助けに行くだろう。それをするだけの、責任と実力がある。

だが、咲来のことは止めるはずだ。彼女にはその責任も実力も立場も権利も、何もかもが、ない。

画面の中。悠二が、特級呪霊に打撃を叩き込む。黒い光が迸った。

あの時、《獅子蟲》に止めを刺した時の七海と同じだ。

《黒閃》。打撃と呪力衝突の誤差がほぼゼロになることで、爆発的に威力が増幅する現象。七海はその連続記録を持っていて、悠二もまた、画面の中で連続している。

七海と悠二は、つぎはぎ顔の、人語を解する人型の特級呪霊と交戦したらしい。呪術の極致である《領域展開》を使うほど強力で、互いがいなければ間違ひなく死んでいった、と言っていた。それを話す七海の声は、気のせいではなかったら、わずかに興奮していた。

七海は悠二を気にかけている。

そんな悠二は今、七海と同じ、咲来では到底及びもつかない領域で戦っているのだ。

不思議な感情が渦巻く。まだ話したこともない悠二に、何か黒い感情が湧き上がってきた。

咲来は、それを自覚していない。

代わりに、悠二について話す七海の声が、脳内で何度も反復された。

魂を改造して身体を作り変える恐ろしい術式を持った特級呪霊。その呪霊に騙され利用されていた少年と友情を結んだ悠二。そして決別と死闘。

宿讎の器・悠二と、一人の少年。少年が呪詛師に身を落として全校生徒・教員を呪い、一部を殺した事件。それはいじめとその意図的な放置と言う文脈があったが、最終的なきつかけは、彼を女手一つで育てた母親が、呪い殺されたからだという。その呪いの方法が、《宿讎の指》を傍に放置しておくというものだった。

あとから考えると、全てが繋がっている。



少年の母親を呪い殺したのは、彼を利用していた特級呪霊だ。そして少年を呪詛師に落として暴れさせ、学校での事件を起こす。

それに使われた《宿儺の指》は、七海が回収して、高専の上層部に渡したと言っていた。

ではその指は、どこに保管してある？

「——っ!？」

咲来は急に立ち上がり、駆けだす。だが、先回りしていた冥冥に止められた。

「どこにいくんだい？ トイレはもう少し我慢しておくれ」

「呪霊の目的が分かったかもしれない」

「……それは興味深いな。でも、一旦腰を落ち着けて話そうじゃないか」

促され、咲来は座り、すぐに話し始める。

「実はさつき事情があつて五条先生と二人きりで面談しました。そこで、虎杖君が今月、人語を話す特級呪霊と交戦した話も聞きました」

「深いことは聞かないでおこう」

嘘をついているのは、一瞬で見破られている。だが気にしない。今はそれどころではない。

「そこで、その特級呪霊が、《宿儺の指》を利用したんです。その指は高専に回収されました」

「ほう?」

「もし、その時の特級呪霊と、今襲ってきている特級呪霊たちが仲間だとしたら! あつちで暴れているのは陽動で——指につけた『マーキング』を追えば、きっと、その指を取り返せるんです!」

「……………なるほど」

冥冥から笑みが消え、顔つきが深刻になる。

「お嬢ちゃんは知らないだろうが、高専が保管する危険な呪物は、『忌庫』という専用の倉庫に保管してある。指もそこにしまつてあるだろうね」

「!?! だとしたら!?!」

「ああ。——他の危険な呪物すらも、盗まれる危険がある」

事態は深刻だ。一刻も早く、向かつて止めなければならぬ。今この事実を知つて動けるのは、咲来たちだけだ。

「早くいきましよう!」

咲来は冥冥の手を取って、立ち上がらせようとする。

だが彼女は、動こうとしなかった。

「……お嬢ちゃん、一つ言っておこう。本来なら金をとりたいが、その賢さと愚かさに免じて特別サービスだ」

先ほどまでのやさしきは、完全に消えている。

決して荒れているわけではない。至極冷静な声音。

だが、それを聞いただけで咲来は、金縛りにあつたように動けなくなつた。

「一つ。契約にない危険なことは、私はしたくない。金も貰つてないしね」

立ちすくむ咲来に、冥冥が立ち上がって近づき、顔を寄せてくる。

その顔には、もう笑みは全く浮かんでいない。

「二つ。仮にそちらが本命だとしたら、特級クラスがいるのは間違いない。今の私は手札が少なくてね、勝てるとは思えない。それは4級で補欠のお嬢ちゃんもおんなじさ」

「つ———！」

咲来の呼吸が止まる。

焦りや使命感は、もはや消えていた。

感じるのは、ただただ恐怖。

冥冥から放たれるプレッシャーは、矮小な咲来を、完全に飲み込んでいた。

「……ふつ、ま、別に、どうしても無駄死にしたいなら止めはしないさ。ただ、そうだね。ここはひとつ、私を『助ける』と思って、一緒にいてくれないかい？ 君を死なせたらボーナスが減るし、説得して生かしたとなったら、庵あたりが弾んでくれそうだ」

数秒後、冥冥が笑うと同時に、プレッシャーが緩む。

だが、咲来の呼吸は、まだ荒くなっていた。息が止まっていたのは数秒のはずなのに、プレッシャーの残滓が、まだ喉を絞り上げているのだ。

「は、はひっ」

咲来の口から出た返事は、ずいぶんと情けないものになっていた。

(さて、どうしたもんかねえ……)

そんな咲来に構わず、冥冥は思案する。

咲来が画面から目をそらした先ほどまでの間に、彼女が使役するカラスが、いまいち信じられない映像を捉えていたのを、横目で見えていた。

普通なら伝えるべきだろう。

だがこの少女は、臆病で気弱な割に、先ほどの通り、無鉄砲なところもある。これを知らせてしまったら、何をしでかすか分からない。

(早くしろ、五条悟)

戦いに巻き込まれてどんどん減っていくカラスの、たった二匹の生き残りの片方が、

《帳》を破るのに苦戦している悟を映す。

そして先ほど衝撃的な映像を映したカラスは、街頭人物を追いかけている途中で戦いの流れ弾に巻き込まれ、もうその命を散らして、映像を届けてはくれなかった。

†††

虎杖悠二による五発の《黒閃》。

東堂による特級呪具を用いた弱点への一撃。

その他、数多の強力な打撃。

これだけの攻撃を加えてもなお、白い人型の特級呪霊は、未だ倒れる様子が出なかった。  
(タフだな)

東堂は信頼できる中学からの大親友・虎杖悠二——マイブラザー——そのような事実はない——と並んで退治しながら、内心で、呪霊の強さに舌を巻く。

以前京都で相手にした特級とは比べ物にならない。当然火力も戦術も術式も比ではないが、そのタフさは特にとびぬけているように感じられた。



その呪霊は今、左手を地面につけて、その肩に生えた、巨大な花を咲かせていた。

周囲の木々が、草花が、無残にも枯れ果てていく。

『私の左腕は、植物の命を奪い、呪力へと変換する。それは私へ吸収されず、この《供花》が全てを食らう』

《供花》なる、一つ目がついた美しくも禍々しい大輪の花が、光を蓄える。

莫大な呪力だ。

(植物が呪力を持たないと言っても、その「命」を大量に生贄に捧げれば、これほどになるのか!?)

悠二と自分の位置、教師陣が間に合うかどうか、どれほどの時間であの呪力を放つことができるようになるのか。一瞬で状況を整理して作戦を練りながら、東堂は驚愕する。

彼は知らない。

確かに、たかが植物と言えど、その命を大量に呪力へ変換すれば、中々のものになる。だが、これほど一瞬で、周囲一帯を消し炭に出来そうな呪力にはならない。

特級呪霊——《花御》は、全人類が普遍的かつ本能的に持つ大自然への畏敬が呪霊となったものだ。植物と自然を愛する。故に、生きていくだけで環境を破壊し尽くす人間を滅ぼそうとしている。

そんな彼女が、何よりも大切な植物の命を、呪力に変えているのだ。

それは強力な《縛り》となって、強大な力を生み出す。

「東堂！」

「来るな！」

《あなたたちならば、これを躲すのは容易いでしょう。ならば！》

東堂が宿讎の器を止めるが、ここまで近づけば、射程圏内だ。

背中側で身体を操作し、見えないように、生やした木の根で手の形を作り——印を結ぶ。

『領域展開・《朶頤光海》』

（《領域展開》だと!? まさかそこまでだとは!）

無二の大親友・悠二を突き飛ばして範囲外にのがれさせることはできた。だが、自分は逃げ切れず、領域に飲み込まれてしまう。

確かに《領域展開》ならば、あの一撃を当てることができるだろう。

なにせ、その領域内ならば、術式は、もれなく「必中」となる。

これでは、位置を入れ替える《不義遊戯》も意味がない。

『さあ、死して賢者となりなさい!』

数回の《黒閃》、弱点への特級呪具による攻撃、数多の攻撃。それに加えて《領域展開》まで使ったことで、《花御》は体力も呪力も、ほぼ消費している。

それでもここで、この目の前の男は殺しきることができた。

傲岸不遜だが、賢い男なのだろう。

そんな彼が、これ以上自然破壊する人間の味方をするという罪を重ねてしまわないためにも。

ここで殺して、賢者にしてあげるべきだ。

(愚者である、私と違って)

木々と草花を枯らして一撃の呪力攻撃にする。

こんな自分の、なんと愚かなことか。

彼女はむき出しの歯を噛みしめながら、その呪力を放った。

そして領域も術式も、  
全てが消え去った。

「役立たず三輪、ただいま参上です！」

自身と東堂の間に、取るに足らないと思っていた青髪の少女、三輪霞が、いつの間にか現れていた。

その腰には、少し短くて装飾過多だがしつかりとした日本刀が差されていて、それに手を添えている。居合の構えだ。

シン・陰流《簡易領域》。

《領域展開》を無効化することができ、弱者のための領域だ。

よく見れば、領域が消えているのは、霞を中心としたその半径数メートルほどに過ぎない。その外側には、《花御》の領域が広がっている。

「あ、あのー、東堂先輩？ その、何も考えず突っ込んだはいいんですけど、私これ以上何もできなくて……」

「とはいえ俺も動けん。この領域そのものから抜け出さないことにはな。時間稼ぎにし





強大な呪力が一帯から消え、それを圧倒的に超える呪力が現れた。

『なっ!』

即座に空を見る。

いつの間にか《帳》は晴れている。

そして上空には、こちらを見下ろし見下す、一つの影。

(五条悟!?)

潮時だ。

「あれ？ 助かった!？」

目の前の小娘一人殺せないことを悔やみながら、即座に木の根を生やして隠れて撤退する。

もし五条悟が現れた場合に備えて、この撤退は練習してきた。

「巻き込まれるぞ!」

「ぎゃああああああ!!!」

木の根から見えた隙間、東堂が命の恩人であるはずの霞の首根っこを雑に掴み、引って張って離れていく。

最強の術師の攻撃を受けてかろうじて生き残った《花御》は、この時ほど、自分の術式に感謝したことはなかった。



競技フィールドのほうが一着落着して、冥冥と咲来の提案で、悟たちが忌庫に向かうと、そこには、変わり果てた忌庫番の姿があり、代わりに、宿讎の指と《呪胎九相図》が消えていた。

死体の状況からして、先日七海と悠二が接敵した人型特級呪霊の仕業で間違いない。

やはり森の方は陽動で、こちらが本命だったのだ。

これと同時に、人語を話し《領域展開》を使う、最低三体の未登録特級呪霊と呪詛師が手を組んでいることが確定した。

「はあ〜」

だが、それについて話し合うのは大人たちの仕事だ。

咲来と霞は、二人で並んでベッドに寝転びながら、心身共に疲れ果てているからか、深いため息をついた。

あんな事件があった日の夜。とりあえず当初の予定通り、京都校の生徒は、東京校の生徒寮を間借りして宿泊することになった。とはいえ部屋数は足りず、基本は二人部屋となる。

咲来と霞がペアで、真依と桃もペア。ただし真依は、「真希あんなもつと同じ屋根の下なんてごめんよ」などと言って、一人で近所の高級ホテルに泊まっている。

また東堂が一人部屋で、加茂とメカ丸がペアだ。東堂とペアになる組み合わせが出ないようにしたのは、全人類にとって英断だろう。

そうして、咲来と霞は寝間着に着替え、今から寝ようとしているのだ。ベッドとは別に布団も用意されているが、せっかくお泊りと言うことで、仲良く同じベッドである。こんなことを気兼ねなくできる機会がまたあることは、お互いにとって幸せなことだった。

(全くもう、霞ちゃんつたら無茶をして！)

間抜け顔で布団に体を預ける隣の霞の手を、八つ当たりがてら、そして存在がそこにいると確かめる意味でも、力を籠めて握る。

後から話を引いて、血の気が引いた。

森の中を逃げ回っていた霞は、パンダに抱えられた恵と真希に合流。そこで特級呪霊が侵入して暴れていると聞き、強力な術式や《領域展開》の可能性を考えると心配になり、恵が影に収納していた刀型呪具を拝借して、悠二たちを助けに向かった。ここまでを、どうやら冥冥のクラスが捉えていたらしい。

あまりにも広範囲で暴れまわるので全然追いつけなかったが、《領域展開》でとんでもない呪力攻撃をしている瞬間にギリギリ間に合い、咲来の伊達眼鏡と同じ仕組みの携帯呪具に込めた不完全な《簡易領域》を使って外側を中和しつつ侵入し、その中で刀と

本人による《簡易領域》で、東堂を守った。

考えなしに突っ込んだせいで危うく死体がもう一つ増えるところだった、というのは、東堂の談だ。だが彼にしては珍しく、出会った当初からつまらないやつ扱いだった霞を、真つすぐに褒めて感謝していた。プレゼントが高田ちゃんの高貴な握手会特別ツーショットチケットだったのは、彼ができる最大級のお礼なのだろう。霞としては嬉しくないが。

今もまだ、霞が生きているかどうか、不安になってしまふ。

特級呪霊。それが使う《領域展開》に、真正面から突っ込んだ。

特級呪霊と言えれば思い出されるのが、あの夜の校舎の戦いだ。

《獅子蟲》。その恐ろしさは、今でも体と心に沁みついている。あれこそが、尺度の斜め上に外れた存在・特級だ。

しかも、今日霞が相対したのは、特級呪霊の中でも飛び切り強力なモノらしい。過去の記録の中でも異例だそうだ。

そんなのと対峙して、生きていられるはずがない。

それでも大切な親友はこうして、生きてくれた。

(よかった……)

ただそのことが、咲来には、幸せだった。

「……………ねえ、咲来」

「ん、なあに？」

そんな霞が、いつもとは違う、細い声で、名前を呼んできた。

咲来が握るのを緩めた代わりに、霞の方が、ぎゅつ、と、すぎるように、強く握ってくる。その手はいつの間にかひどく汗ばんでいるが血の気が引いたように冷たく、そして震えている。

「私、生きていますよすよね？」

「……………うん、いるよ」

「怖かった、怖かったです」

「うん、そうだね。霞ちゃんは、頑張ったよ」

そう、霞も、怖かったのだ。

逃げたかっただろう。放っておきたかっただろう。東堂先輩なら大丈夫と目を逸らしたかっただろう。自分は弱いからと言いつつ、訳がなかっただろう。

きっと彼女が死ねば、彼女が呪術師をやっている理由である家族は、悲しむし、もつと苦しくなる。

それでも霞は、助けることを選んだ。

「咲来、咲来……………」



「なあに？」

霞が寝返りを打ち、両手で離さないように、咲来のペンダコがありつつも柔らかかな手を掴む。そんな、刀を幾度も握ってマメができている綺麗な手を、咲来もまた両手で包み込んで返事をする。

「咲来が特級呪霊と戦った時も、同じ気持ちだったんでしょか」

「……………」

咲来はとつさに、この問いかけに、返事ができなかつた。

それほどにあの出来事は、心の深い影を落としている。

だがこの時は、それが理由で答えられたわけではなかつた。

「私、真依のお姉ちゃんや伏黒君から話を聞いた時、一緒に逃げようと思ったんです。でも、ふと、咲来のことを思い出して……………」

そう、霞の行動は——あの夜の、無謀な咲来の行動と、重なっていたのだ。

あの時の顛末は詳細な報告書として、歌姫を筆頭に、京都校の全員が見ている。復帰をして再会した時、無茶をして、と散々に責められながらも、歓迎されたのは良い思い出だ。

『助ける』って、すごく大変なんですわね……………」

そのことは、きっと咲来よりも、霞の方が分かっている。

一年近く離れてつい最近復帰したばかりの半端者よりも、彼女は、家族のために、ずっと自らを犠牲にして危険な仕事をしてきたのだから。

「私は、たったあれだけのことで、もう、こんななつちやいました……。咲来はすごいです。何十体もの呪霊を同時に倒して祓って、特級呪霊を祓うのにも貢献して……」

「うーん、そうかなあ。今日の霞ちゃんの方が絶対すごいと思うよ？」

特級呪霊と対峙したとはいえ、状況が全然違う。

数多の呪霊との連戦の後の、さらなる呪霊の波に襲われながらの特級呪霊との戦い。だが、あの時飛び込んだのは、戦える戦力が「七海だけ」だったから、という面がある。今日の出来事のように、他にいくらでも頼れる人がいたら、咲来は飛び込まなかったかもしれない。

特級呪霊と対峙して仲間を助けた。確かに対峙したのは一瞬だ。だが、究極の呪術である《領域展開》に飛び込むという最大級の危険を冒したし、同じ特級でもその強大さは《獅子蟲》とは比べ物にならない。

「……………ふふっ」

「あははははははっ！」

そうして二人は、目から涙をこぼしながら、笑った。

隣の部屋の桃に迷惑かもしれない。だが、そんなことを気にせず、笑いあった。比べることなんかではない。

どっちも危険だし、どっちも大変だったし、どっちもすごいことをした。今、こうして生きて話せて笑えているのだから、それで良いのだ。

「さ、寝ましようか！」

「そうだね」

部屋の明かりは消してある。

一人ではやや広いが二人では狭く感じるベッド。

お互いが無事であることを確認するように、お互いにすがるように、お互いを讃えるように、お互いに慰め合うように、お互いの無事を確認するように。

二人は無意識に、抱きしめ合って寝ていた。

## じゅじゅさんぽ・もしまた日が昇ったら4

(こんにちは、役立たず成宮です！)

思わず親友の口癖めいたものを真似してしまう。

襲撃事件から一日たった昨日の時点で、今のこの展開は決まっていたはずなのに、未だに理解が追い付かない。

——東堂の意見がきつかけで、交流会は中止にならなかつた。そういうわけで二回戦に当たる個人戦が行われるはずだった。

メカ丸の機体が再起不能のため、個人戦には咲来が出ることになる。術式の都合上、手合わせにはほぼ使えないため、咲来だけは術式無しで戦うほかない。つまり、例えるならば、武器を持った軍人相手に素人が素手で戦うようなものだった。

何秒持てば頑張ったと言えるかなあ、なんて絶望していた彼女だったが、そこに、予定調和を狂わせる存在が現れた。

『僕、ルーティーンって嫌いなんだよねえ』

そういうわけで、咲来たちは、いつの間にか用意されていたユニフォームに身を包み、野球に興じていた。

## 京都校チーム

1 番・三輪霞      セカンド兼シヨート

2 番・西宮桃      外野

3 番・加茂憲紀      ピッチャー

4 番・東堂葵      キヤッチャー

5 番・禪院真依      ファースト

6 番・成宮咲来      サード

互いにメンバーが六人しかいない。そこで、外野は一人である代わりに呪術に使用が認められ、内野はセカンドとシヨートを兼任することになっている。

京都校チームの布陣は厳しい。一番運動能力に優れる東堂がピッチャーをやるべきだが誰もその球を受け止められないため、盗塁を刺すためにもキヤッチャーに。

代わりにピッチャーは細身とはいえ男子の加茂が任されることになった。

外野は、術式で空を飛べて、三次元的広範囲へ機動性抜群の桃が担当。

咲来と真依は呪術なしの運動能力がクソザコのため、素人野球では内野の中でも一番仕事がないサードに咲来が、打球は飛んできにくいが捕球をする場面が多い真依が

ファースト。

そしてその二人をカバーすべく、女子にしては瞬発力が高い霞が、セカンド兼ショートの二人をサポートする。

### 東京校チーム

1番・狗巻棘 ショート兼セカンド

2番・禪院真希 ピッチャー

3番・伏黒恵 外野

4番・パンダ ファースト

5番・釘崎野薔薇 サード

6番・虎杖悠二 キャッチャー

一方こちらは人材が豊富。一番運動神経が低い野薔薇ですら、京都校で内野の要として頼りにされている霞と同程度だ。仕事が少ないサードを任される。

ピッチャーには圧倒的に優れた運動神経と、道具の扱い、つまりコントロールに優れる真希が選ばれ、反射神経と瞬時の判断能力が高くまた真希の速球を受け止められる上に強肩の悠二が選ばれた。

外野は数多の式神で何人分もの働きができる恵が、セカンド兼ショートは瞬発力に優れる狗巻が、そしてファーストは体格に優れ上方方向に逸れた送球も取りやすいパンダが、それぞれ担当する。

「……………やる前から諦めてたら話になりませんよ!」

「霞ちゃん、表情がすでに諦めてるよ?」

はつきり言って、こんなの勝負にならない。

外野以外術式が禁止されており、身体能力に圧倒的な差がある。咲来と真希を交換しても京都校が勝つのは難しいだろう。

そういうわけで暗黙の了解として、京都校側はピジターにもかかわらず、有利な後攻を貰うことになった。

「プレイボール!」

全ての元凶であるバカ目隠しが元気に試合開始を宣言する。今日はサンングラスのようだ。

『1番・セカンド兼ショート、狗巻君』

急遽グラウンドに設けられた球場に、今朝咲来が録音させられたウグイス嬢ボイスが流れる。こうして自分で聞くに恥ずかしいが、特に桃と歌姫からは、聞き取りやすくかわい声と評判だった。それが余計に恥ずかしいのは余談である。



「よっしやー、しまつていくわよー!」

監督役の歌姫がベンチから大声を出す。熱心な西武ライオンズファンの彼女は、すっかりエキサイトしていた。ちなみにテレビっ子であり広島出身である咲来は当然広島東洋カープファンだが、さほど真剣なわけではなく、ルールを知っている程度だ。

それとかなりどうでもよい話だが、この年は西武も広島も好調であり、日本シリーズで当たることが予想される。つまり、歌姫と咲来の鼻負対決と言うわけだ。

……なお西武はソフトバンクにクライマックスシリーズで敗れ、広島も日本シリーズでソフトバンクに負けるのだが、それこそ余談であろう。

「いくらー!」

『狗巻棘』

昨日ぐらいから伏黒恵の視線がやけに冷たいが、身に覚えがない。

咲来のお土産で一番気に入ったのは、「焼きサバ、サケ、いくら」とのこと。』

見た目通り俊足でもある彼は、一番バッテリーにふさわしい。バントもあり得るだろう。

だが加茂として負けるわけにはいかない。呪術に関係あるとは思えないが、それでも勝負には常に本気で挑んでこそ、常に勝者でなければならぬ加茂家の次期当主なのである。

「ストライク、バッターアウト！」

「おかか……」

「ナイピ——！」

「ナイスピッチー」

東堂の思考の隙を的確に突いたりリードと加茂の意外なコントロールによって、狗巻は三振に倒れた。エキサイトしている歌姫と、善人である咲来と霞が、加茂を讃える。ちなみに他の仲間も、そんなことしてくれるわけがなかった。

『2番・ピッチャー、真希さん』

ウグイス嬢の読み上げも本人に配慮して、禪院姉妹は下の名前にしてある。これは録音時の咲来のアドリブだ。

『禪院真希』

高専入学したぐらいから妹が少し明るくなって嬉しいが、一方で少し寂しく感じている。

お気に入りのお土産は粉ものセット』

さて、要警戒対象だ。

パワーだけなら東堂のリードでどうとでも騙せるが、彼女は反射神経や動体視力も抜群で、身体コントロールもずば抜けている。プロの球ですらクリーンヒットさせかねな

い。

(ここはクレバーに行くか)

東堂とて勝負から逃げたいわけではないが、あくまでも試合が重要。内角、ストライクゾーンからボール一つ分外れたところへ集中させる。ここは歩かせてもかまわない。

「ふん！」

だが、それも彼女には通じない。二球目には迷わず一振りして、ボールはものすごい勢いで飛んでいった。グラウンドどころか、広いナゴヤドーム——まだバンテリンドームではない——でもホームラン確定だろう。

「まずはいってーん」

悠々と、当たり前だと言わんばかりに胸を張って、ダイヤモンドへと足を踏み出す。

「アウトー！」

外野が空を飛べる魔女っ子・桃でなければの話だが。

「ああああああ!!!」

ダイヤモンド上の真希とベンチの虎杖の声が重なる。どうやらすっかり忘れていたようだ。

『3番・外野、伏黒君』

『伏黒恵』

後から、あの白い特級呪霊の言うことよりも、狗巻の言うことの方がよっぽどわけわからなないと気づいてしまった。

気に入ったお土産は、千枚漬け』

ちなみに恵はサードの睨来を狙ってゴロを転がしたが、わずかに内側に外れて霞に捕球され、一塁アウトとなった。



『1番・セカンド兼ショート、三輪さん』

『三輪霞』

高専入学後しばらくと、ここ二か月ぐらいは、お肌の調子が良い。

誰も気づいていないが、理由は咲来が自腹で毎晩用意している各種フルーツ』  
真希の投球を、打てるはずもなかった。

『2番・外野、西宮さん』

『西宮桃』

野球歴2光年。

「ここ一年ぐらい、任務中の後ろが妙に寂しい。』

「よしっ！」

以外にも運動神経が良い桃は、真希の速球を芯でとらえた、打球は、レフト方向の深いところへと突き刺さる。式神《玉犬》は捕球力こそ強いが、一度落としてしまえば送球ができない。大チャンスだ。

「これなら三塁いけるぞ！」

「了解！」

歌姫の指示を聞き、桃はダイヤモンドを爆走する。

——バッテリーボックス左側、三塁へと直接。

「アウトー」

「え？　なんで？」

「西宮——!!! 昨日映像見せただろ!!!」

野球はルールが複雑であるため、昨日のうちに、歌姫が個人的西武ライオンズ名試合セレクションを見せながら解説したのだ。

桃は、歌姫の熱いうんちくとプロ野球特有のテンポの悪さのせいで、早々に寝落ちしていたのだが。

『昨日あれだけ解説したのにナ』

ブチギレて立ち上がる歌姫の横には、壊れたメイン機体の代わりに急遽派遣されたミニメカ丸が座って、溜息を吐いていた。専門用語だらけの教師とは思えない分かりにくい解説を逐一翻訳したのも彼であるが、その努力は無駄だったようだ。

『メカ丸』

人生で二番目にやりたいことは、新劇場版エヴァンゲリヲンの最終回を見ること。

男子の中では咲来と一番よく話す。理由は、咲来から霞のことをそれとなく聞きため』

『3番・ピッチャー、加茂君』

『加茂憲紀』

TOEICのスコアを伸ばすために勉強中だが、ノー勉の東堂に完敗して地味に



シヨック。

『咲来に渡そうとしていた当初の伊達眼鏡は、シヨッキングピンクだった』  
「加茂ー！ 振らなきや当たたらねーぞ！」

自分からキャッチャーに嘔きにいつて三振とは前代未聞である。

†  
†  
†

『4番・ファースト、パンダ君』

『パンダ』

睨来に抱き着かれてモフモフされているときは流石に照れ臭かった。

美味しかったお土産は、八つ橋』

そのパワーを存分に活かしたフルスイングは、見事に三回、空を切った。

「東堂のリードがいやらしすぎるだろ。なんであれで賢いんだよ、反則か?」

「おかか……」

パンダと狗巻が口を尖らせながらベンチでしょんぼりする。

「全く、おにぎり先輩もパンダ先輩も、学びつちゅーもんがないわね。東北のマー君ことこの私がいつちよかましたるわ!」

『5番・サード、釘崎さん』

『釘崎野薔薇』

お土産のやり取りの後、さらにながつついて食べていたので「餌付けされた猿」と口々に罵られた。

一番好きなお土産はバームクーヘン』

「東北のマー君ってそれまんまマー君だろ」

「しかもピッチャーじゃん」

仲間からの冷たい煽りに苛立った結果、見事に配球に引つかかって三振した。

『6番・キャッチャー、虎杖君』

『虎杖悠二』

咲来の存在は、五条と七海から聞いてはいた。

彼女への第一印象は、「東京校のみんなに俺よりも歓迎されててズルい」

その圧倒的な身体能力により、真希をも超えるホームラン性の当たりだ。桃も間に合  
いそうにない。

「よっしゃー、今度こそ一点！」

虎杖は喜び跳ねまわりながら、一塁へと向かい始めた。

桃が箒で起こした突風により打球の軌道が変わり、そのままファールゾーンへと切れ  
ていく。

「……………え？」

真つ白な炭と化した悠二は、その後、棒立ちで三振した。

†  
†  
†

『4番・キャッチャー、東堂君』

『東堂葵』

この前の握手会を境に、高田ちゃんの番組を咲来や真依が一緒に見てくれるようになった。

それを見た桃は「二人に馬鹿が感染しちゃった……!」と、絶望で呪いに転じかけた。藤浪を越える真希の剛速球が、顔面に突き刺さる。

「ナイピー」(パンダ)

「おかかー」(狗巻)

「ナイツピー」(野薔薇)

「ナイスピッチー」(恵)

「ワン!」(玉犬)

「ナイツピー」(加茂)

「ナイピー」(真依)

「ナイピー」(歌姫)

「ナイスピッチー!」(桃)

「な、ないぴー!」(霞)

「え、えつと、その………な、ナイスピッチー?」(咲来)

「成宮先輩まで?!?!?!」

東堂の嫌われように、悠二は腰を抜かした。

『5番・ファースト、真依さん』

『禪院真依』

入学以来、姉や禪院家のことを考える時間が減って、ストレスも減った。

咲来退学後しばらくは酷く荒れていたが、最近は逆に不気味なほど上機嫌』

「全く、か弱い乙女にこんな野蛮なもの持たせるなんて」

手に持った金属バットをため息をつきながら眺めたのち、バッターボックスに入る前に素振りをする。呪力を使っていない彼女のそれは、恐ろしくへっぴり腰だった。

(右手と左手の上下が逆だけど大丈夫かな……)

キャッチャー・悠二の内心の心配は、三振と言う形で現実となった。

『え、これ自分で呼ぶんですか？ あ、はい。ンツ、ンンツ、6番・サード、成宮さん』

「ちよつとー！　なんでそこまで入ってるんですかー!!!」

ぶかぶかのヘルメットと似合わないバットを持ちながら、咲来は顔を真っ赤にして抗



議する。しかもさらに恥ずかしいことに、自分の名前を読み上げるのが一番最後だっただけあって、一番読み方がキマっている。

「ごつめーん、カットし忘れてた」

「もー!!!」

「絶対わざとだな」

マウンド上の真希が、球審の馬鹿を冷ややかに見下ろす。

『成宮咲来』

実はお土産のラインナップには、フルーツ風味の葛切りも入っていた。

なお、行きの新幹線で誘惑に負け、開封して食べてしまった模様』

当然、三振。



真希の速球と東堂のリードが優れているのに対し打者はみな素人だったせいかたこ  
焼きが並び、結局悠二がソロホームランを打ってそれが決勝点となった塩試合の後。

京都校メンバーはそのまま帰るといっわけではなく、名目上は交流会なので、ちよつとした合同お食事が寮の食堂で開かれていた。いつもは各校で固まって「交流とは」という形になるのだが、東堂が悠二にゴリゴリに絡み、東京校二年生が咲来にゴリゴリに絡んだ結果、各所で自然と交流が生まれ始めていた。

だが、そんな時間を過ごせるのは生徒たちのみ。大人たちは、交流会を踏まえた生徒評価や先日の襲撃・強盗についての会議など、やることが多い。

「ふーん、成宮がそんなことをねえ。確かにやりそうだな」

「分かってくれるかい？　そういうわけで、可愛い生徒が無茶したのを止めてあげたんだ。当然弾んでくれるね？」

「はいはいわかったわよ、全く、金の亡者め」

だが、真面目な話は学長二人や情報を集めた補助監督たちがやっているので、歌姫と冥冥は早々に雑談を始めていた。

内容は、先日の咲来についてだ。

「はー、成宮は、臆病な癖に無鉄砲なところもあるからな」

「多少無鉄砲なぐらいじゃないと、呪術師は務まらないからねえ。早死にするけど」

時にはどんな危険な場面でも、身を挺して戦わなければならないのが呪術師だ。故に、蛮勇ともいえる勇気も時には必要である。ただしそんな善性を持つ呪術師は、早々

に殉職するのも通例だが。

「あいつはもう呪術師じゃなくて、補助監督コースだよ。無鉄砲はむしろ敵だ」

歌姫の物言いは厳しい。元々粗野な口調ではあるが、彼女の、咲来が無鉄砲に対する評価は特に辛口だった。

「おや、ずいぶんかわいがってるじゃないか」

咲来の経歴については、冥冥も聞いていたので知っている。あんなことがあれば、歌姫が過保護な厳しいのも仕方なからう。

「ま、長生きするかは別として。あの子は中々勘が良かったねえ。真面目そうだし、頭も回るし、最低限雑魚相手なら戦えるし、中々使える補助監督になるんじゃないかい？」  
相変わらず不敵な笑みを浮かべながら、冥冥は歌姫を励ました。

「……………ずいぶん、成宮を気に入ってるみたいだな」

「おや、そう見えるかい？」

だが歌姫は、今言ったことの方が気になっていた。

金が絡むことを除けば、冥冥は他者に無関心でドライだ。多少情に厚い面も無きにしても非ずと言えなくもないが、初対面の「取るに足らない」子どもについて、ここまで話してくるのは珍しい。

「……………そうだね、まあほら、あの見た目と態度が小動物みたいで可愛いじゃないか。ほど

ほどに賢くて、そのくせおバカだしね。妹として可愛がってもいいかもね」

咲来をなんとなく気に入っているというのは、冥冥自身、自覚している。あの時はらしくもなく話しすぎていたし、今も彼女について話していると、少しだけ楽しい。

「お前に小動物みたいって言われると、なんだか縁起悪いな……」

歌姫は——悟と話している時の次ぐらいに——ひどくげんなりとした顔をしている。

小動物カラスを使役し、弟を利用し、時にその命すら投げ捨てさせる。そんな呪術師にこんな評価を下されるとは、咲来も中々厄介なのに目をつけられたようだ。

「呪いなんて、縁起悪くてナンボだろう?」

この女に口で勝てそうにはないな。

呪術でも勝てそうにない歌姫は、ため息をつきながら、そう思った。



「すみません、ちよつといいですか？」

「ふえっ!?! な、なん、ですか?」

大人たちが、度合こそ違えど真面目な話をしている頃。生徒たちは、各々思い思いに、お食事会を楽しんでいた。

そんな中、東堂がパンダや恵にも絡み始めて代わりに解放された悠二が、少し疲れた顔をしながらも、隅っこで目隠し利きフルーツジュースを全問正解して狗巻とパンダにドン引きされている咲来に声をかけた。

「お、なんだ虎杖ナンパか?」

「は? 風穴開けるわよ?」

「お前らは俺を何だと思ってるんだっ!」

その様子を見た野薔薇が煽り、野薔薇と強炭酸コーラ一気飲み対決をしていた真依が拳銃を取り出す。

ちなみに京都校のほぼ全員は、交流会を通して、悠二のことを「宿讎の器」ではなく、「東堂に絡まれてる哀れな善人」と思っているのは余談である。

それはともかくとして、ナンパと思われるのも無理はない話だ。何せ悠二は、少し人気がないところで話そうとしていたのだから。

咲来としてもいきなり話しかけられたからびっくりしただけで、悠二にどうこうされる心配はしていない。特に迷うことなく、その誘いに乗った。

寮の食堂から離れた、屋外のベンチ。そこに二人は、並んで座る。

二人とも、視線は合わせない。視線は、どちらも夕暮れを向いていた。

この空だけは、広島も京都も神奈川も東京も変わらない。

「それで、お話って?」

「その、ナナミン、あー、七海さんから、成宮先輩の事聞いたんすけど」

「あー、なるほど」

七海の方から咲来に、悠二と仲良くしてくれ、とわざわざ連絡を入れたのだ。悠二の方にも、咲来の話をしていても不思議ではない。それはおそらく、宿儻の器として恐れられるであろう悠二への配慮だろう。

「その、一回、呪術師やめてたんすよね? それなのに、ナナミン助けるために、たくさんの呪霊と戦ったって聞いて、すげえなって思ってた」

「虎杖君も大体同じ事やってません?」

対して話したこともない恵や同好会の先輩を助けるために、初めて存在を知った呪霊



と戦い、《宿儺の指》を飲み込んだ。そのあげく死刑にされそうになるし、任務で一度死ぬし、裏任務でも七海と協力の上で特級呪霊と交戦、そして今回も東堂と協力して特級呪霊と真正面から戦った。

大体同じ事、とは、咲来が彼を恐縮させてしまわないよう、低めの表現をしたに過ぎない。はつきり言えば、はるかにすごいことをしている。

昨晚、霞と比べてたのとはわけが違う。その危険度も、貢献度も、強さも、回数も、何もかもが格が違った。

「……そうなんすかね？ ……それで、先輩の動機が、『人助け』だって聞いて」

「なんか改めて人から言われると恥ずかしいけど……はい、その通りです」

未だに、自分に「人助け」なんて大層なことができるとは思っていない。それをできるだけの、知識も、力も、能力も、経験も、何もかもが足りない。おとといも、結局は何もできなかった。

それでも。「人助け」はしたい。だから今は、じつくりと、自分にできることを少しずつやっけていくしかない。

「俺もその、呪術師になったのは半分成り行きみたいなものなんすが、人を助きたい、つていうのもあつて」

悠二が天を仰ぐ。その顔にはこれといって表情が浮かんでいないが、何だか、悩んで

いるように見えた。

「別に、元々そういうのがあつたわけじゃないんすよ。伏黒に会う直前ぐらいに、じいちゃんか亡くなつて……その時に、大勢の人を助ける、たくさんの人に囲まれて死ぬつて……。それがきつかけつすね」

「えーつと、その……」

想像の五十倍ぐらい重い話をされて、咲来は戸惑う。彼が何を考えて話しているのか分からなかつた。

ただ、間違いなく、彼は今、何か迷っているのだろう。

多分、人助け云々については、もう迷っていない。

ただその道中で起こる、または起こつた何か、彼の心に闇を落としているのだろう。自分に、その悩みは解決できなさそうだ。

ここでもやはり、悠二のことは助けられない。咲来は、どこまでも無力だつた。

「……そうなんだ。私とは、違うんだね」  
だから。

せめて、その悩みを共有してあげたい。

悠二が少し驚いた顔で、ほんのり微笑む咲来の顔を見つめる。

後輩である自分にすら使っていた敬語が、崩れていた。

「私はね、『人助け』が好きな理由、特にないんだ」

「え、マジすか?」

「うん。本当に、なんのきっかけもなく、ただ好きなだけ。……もしかしたら何かあったのかも知れないけど、特別なことはなかったと思う」

癖で浅く腰かけていたベンチの、後ろ側の空いたスペースに後ろ手をついて、空を見上げる。夕日はだんだんと沈み、夜へと近づいていく。

「お礼もされたらそれはそれで嬉しいんだけど、別になくても大丈夫で……『人助け』そのものが好きだったんだよね。だから、小さいころから、周りで悪いこととしてた呪霊とかを、一人で祓ってたりして」

「……………成宮先輩だけは常識人だと思ってたんすけどね…………」

「なんかとんでもない誤解が生まれようとしてる気がする…………」

悠二が顔をゆがめて頭を抱えた。咲来も自分がとんでもないことをしていた自覚はあるのだが、小さな子供が自分だけが見える悪いお化けを自分だけが持っている力で倒せるとなれば、勘違いしてそんなことしていても仕方ないだろう、という自己弁護もある。「そんな中で歌姫先生に会って、スカウトされて…………。そうだなあ、後から考えると、『人助け』だけが、なった理由じゃないんだと思う。自分だけが持っている特別な力だって、自惚れていたんじゃないかな」

自嘲するように笑う。悠二が何か慰めようとして慌てているのが分かるが、もうこれは自分の中で乗り越えた問題だ。気を遣わせる前に、話を進めることにした。

「そんな状態で任務なんかいったら、まあ、痛い目にあうよね。入学してから四か月くらいで、予想外の1級呪霊との戦いになってね……………私、呪力を暴走させちゃって、霞ちゃんや真依ちゃん、桃先輩を、死なせかけちゃったんだ」

悠二が絶句する。

咲来の術式は、詳しい仕組みこそ聞いてないから分からないが、爆発させる術式なのは知っていた。それが暴走したとなれば、いつたい、どれほどの被害が出るのだろうか。『人助け』なんて言っていたのに、みんなのことは助けられなかったし、それどころか大怪我までさせちゃって。それにもう、戦うのが怖くなつて……………それで、高専を辞めたんだ」

中退した経緯までは聞いていなかった。自分も編入してから、もうすぐ四か月が経つ。咲来その経験は、自分のせいで人が死んだし、救うこともできなかった、悠二の経験に比べたら、きつと些細なものなのだろう。だがそれより、同じような経験が原因で中退したということが、やはり心に重くのしかかる。

「で、それからもうすぐ一年つてところで、七海さんとの事件があつて……………それで、やっぱり、みんなを助けたいって思つて、高専に戻つてきたんだ。……………戦うのはまだ怖い

ら、補助監督コースだけどね」

補助監督は、呪術師を志して入学し卒業したものの、実力が足りなかった者がなる仕事である、という実情もある。別に補助監督と言う仕事が卑しいとは全く思っていないが、それでも、命をかけて頑張っている呪術師に、申し訳ないという気持ちはある。

そんな、自嘲気味の咲来に。

悠二は、二人の人間が重なって見えた。

一人は、似たような経歴を持つ七海。

もう一人は——生きていることを秘匿にしている間に仕事見学をさせて貰った、伊地知だ。

「……………俺は、すげえって、思いますよ、補助監督。俺自身、まだまだ弱いんですけど、どうやら、戦う力はあるみたいで。だから、呪術師やれる面もあるんす。それに比べて……………戦う自信がないのに、呪術に関わって、仕事してるんすから」

思い浮かべるのは、後部座席から見た、弱弱しいが頼もしくも見えた、伊地知の背中だ。

「呪術師が気兼ねなく仕事できるのも、補助監督のおかげなんすよ。だから……………先輩の事、俺は尊敬します」

自分の思っていることが、言語化できているとは言い難い。

それでもなんとか、伝えたいことは伝えられたのではないか。

言いたいことをいきなり言い出した悠二を、咲来はポカン、と見る。

「……………ふふつ、ありがとね」

ただ、励ましてくれてるのは分かった。

少しでも悩みを共有しようと自分のことを話したのに、逆に励まされてしまうとは。

「ははっ」

それに釣られ、緊張していた悠二も笑う。その笑顔は緩くて柔らかく、見た目とは逆の、彼の人の好きが感じられた。

そうして二人は、しばらく笑いあった。

「さ、じゃあ戻ろうか」

「そうっすね」

いつの間にか、夕日はすっかり沈んで暗くなっている。そろそろ戻らなければならぬ。

七海を介してつながった、人助けのために呪術師になった二人。

全く縁もゆかりもなかったが、この会話で、互いの中にあつた壁は、だいぶなくなつていた。

少し距離が近くなって戻った二人を見て野薔薇や東京校の二年生が囁し立て、桃と真

依が目を尖らせて悠二に武器を突きつけ、霞と咲来でそれをなだめる。

こんな楽しい時間を送れたのは、間違いなく、咲来と悠二が積み重ねてきた人助けがあつたからだ。

これからも、こんな時間が続けばいい。

二人とも、そう思った。

虎杖悠二の身体を支配した両面宿儺の《領域展開》によって成宮咲来が死ぬのは、こ

の一月と少し後のことである。

無残に切り刻まれた咲来の死体の傍には、そこに込められた術式が役に立たなかった伊達眼鏡が、細切れになって転がっていた。